
ソウケンと呼ばれた親子

タリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウケンと呼ばれた親子

【Nコード】

N0865W

【作者名】

タリ

【あらすじ】

蒼犬と呼ばれる凄腕で無茶苦茶な男が、ある日女の子を拾った。その女の子は特殊な能力の持ち主で・・・

蒼犬はテンプレな感じの元現代人

ただしその辺を全て謎にしたまま話が進んでいきますので、展開がまだるっこしいという方には読みづらくかもしれません。初作品ですので非常に読みづらいと思いますが、ヒマを潰す手伝いになれば幸いです。

出会い

雪が降っている・・・

雪自体は特に珍しいものでは無いだろう。

地球という世界、その中の日本という国に住んでいた「彼」にとっても、それは特に気になることではなかった。

・・・身も凍るような寒さは別としての話だが。

その寒い雪の中に一人の少女がいた。

まるで隠れるように路地裏の角で、座り込んで目立たないようにしている。

雑多なものが散らばり、樽や荷物を入れる大きな木箱が無秩序に置かれているその場所で、「彼」は少女をじっと見ていた・・・

彼女も同様に、「彼」を見ている。

・・・どのくらい二人がそうしていたのか。

一瞬、一秒、一分、一時間・・・

そのどれもが彼等は感じられ、その全てが彼等の感じたものとは違うのだろう。

先に動いたのは「彼」だった。

「彼」は裾が擦りきれボロボロになったような黒いマントを羽織い、そのマントの上からでもはつきりと輪郭がわかるほどの重厚な鎧、

恐らくは全身鎧フルプレートを着けているのだろう。

兜はマントと同じ黒い色で、狼とも犬とも言えるような形をしている。

目の周りや、牙のような模様の部分に金色のラインが複雑に模様を描きながら走っている。

「彼」は黒いマントから、兜と同じように黒く、金色の複雑な模様が入ったガントレットを装着した手を出し、その手のひらを少女に向けて言葉を放った。

「・・・来るか？」

短い言葉。

放つ直前に大きく息を吸ってから放ったあたり、「彼」も緊張したのかもしれない。

残念ながら、「彼」の兜はフルフェイス型であり、表情を読み取れないために真相は「彼」にしかわからない。

放たれた言葉は、手に落ちた雪が溶けて消えるように儚く終わり、少女に聞こえたかどうかすらわからない。

二人の間に再び沈黙が訪れる。

「・・・うん」

手のひらに落ちた雪は溶けて消えてしまう。

だが溶けた雪が水になって残るように、彼女の言葉ははつきりと、しかし今にもこぼれ落ちるかのように危なげに、「彼」の耳に届いた。

「彼」は少女に近づき、マントを少し広げて少女が入るスペースを作る。

少女は隠れるようにそこに入り、「彼」の黒く金色の模様が入った鎧を掴む。

寄り添うように続く足跡が二つ、雪の上に存在を主張しては新たな雪に埋もれていった・・・

「彼」について1

ギルド、と呼ばれる集まりがある。

冒険者ギルド、商人ギルド、魔法ギルドなどの種類はあるが、一般的にギルドと言えば冒険者ギルドのことを言う。

内容は簡単に言えば所謂「何でも屋」だろう。

どこかの誰かが自分では解決できない、解決しづらい、単純に面倒くさい等といった理由から、誰かにやらせたい仕事があったとする。力の強い誰かに、その仕事に向いている能力のある誰かに、単純にやる気があるだけの誰かでもいいが、そんな人達に仕事をまかせたい。

しかし仕事のたびにその「誰か」を探していたのでは、時間もかかるしいちいち交渉するのも面倒だ。

そこで冒険者ギルドが間にたち、依頼者には仲介料を支払わせる代わりに人材の提供を。
冒険者には収入と名声の代わりに、時には命をかけた仕事を提供する。

それが冒険者ギルドである。

その冒険者ギルドも世界中に存在するほどに需要を増し、いまや世界になくてはならないもの一つとなっている。

「彼」も冒険者側としてギルドに所属しているが、今回の主役は「彼」ではなく、「彼」のことを調べている一人の人間の話だ。

彼の名は・・・

「初めまして、私の名前はアルドラ・バステアと申します。さ、さ、まずは一杯どうぞ。」

短く揃えた赤い髪をオールバックにし、人の良さそうな笑顔を彫りの深い顔に張り付けた彼はアルドラと名乗った。

決して涼しいとは言えない気温で、人が多い酒場はさらに熱気がこもっている。

彼はそんな中で、いつそ暑苦しいとも言えるような茶色のスーツをぴっちりと着ている。

よくいるような中年のメタボが気になりはじめる体型だが、普通の粋を逸脱しない程度だ。

驚くべきはそんな格好の彼が汗ひとつ流さず、実に涼しげな表情をしていることだろうか・・・

そして彼に酒を進められたのは、冒険者なのであろう。

ボサボサの髪の毛は茶色で、気を使っているとはとても言えないヘアスタイル。

青銅製らしい鎧は、動きやすさを重視した軽鎧といわれるタイプだ。腰に差してある長剣は使い込まれた・・・というよりも、メンテナンスを怠っていると言われたほうが納得できる状態だ。

「おう、悪いね旦那」

そう言いながら目の前に置かれた酒を手にとる。

「しかし「ヤツ」について、ねえ・・・。」

そう切り出して冒険者は「彼」について語り始めた。

「まあまず「ヤツ」の話をするなら性格からだろうな」

そう言いながら酒を一口飲んで話を続ける。

「まず無口だ、一言二言しか話さねえ。言葉より態度で示すって感じの野郎だな。

そんなもって傍若無人だ、とにかく無茶苦茶だぜ。

気に入らねえってだけの理由で潰された組織は10や20じゃすまねえ。

・・・ま、そういった組織はかならず黒い噂つつーかよ、わかるだろ？そういうヤツラばかりだけだよ。」

そう言いながらまた一口を飲み、何かを思い出すようにつつむいてしまう。

「かくいう俺もよ、そういった組織に縁があつて・・・おつと組織側じゃねえぞ？

潰してくれつつー依頼があつたから受けたただけだ、正式なもんじゃねえけどよ。」

冒険者の男は酔いが回り始めたのだろう、聞いてもいないのに過去の体験を話してくる。

「俺たちやあよ、十分な証拠を集めたうえで組織に乗り込んでいったのさ。

当然強いヤツラがこっちにはいたし、相手がどんなヤツラでも相手できると思ってた。

だがよ！信じられるか！？蓋を開けてみたら相手は10人や20人なんて数じゃねえんだ！50人は最低でもいたぜ！

対してこっちは10人だ、数の暴力にや勝てねえ。

こっちの情報も漏れてたしよ、こりゃ死んだかなって思ったね。」

そこで彼は残りの酒を一気に煽るようにして飲み干した。

「そのときだ！」

酒の入ったコップをドンツと勢いよくテーブルに叩きつけ、彼は顔をしかめながら一気に話しはじめる。

「あいつがでてきたのさ！あの「蒼犬」あおいぬの野郎が！

しかも入ってきた場所がよ！壁をぶち抜いてきやがったんだぜ！？壁にやあ当然強固な防御魔法がかけてあったし、オレらは壁破壊が無理だと判断したから正面きって行ったんだ！

わかるか！？宮廷魔導師が最大威力の大魔法ぶっぱなしてやっと壊れるような壁をだぜ！？」

ぜえぜえと息を切らしながら一気に言い切る。

その顔は苦々しいというか恨めしいというか、尊敬と侮蔑が入り交じった複雑な表情だ。

「な、なるほど。それは確かに凄いというか、呆れてしまいますな。」

冒険者の話に相槌をうちながら、アルドラは酒のお代わりを注文する。

すぐに酒が来るが、冒険者は飲み干す勢いでそれを煽る。

「その後はすぐ終わっちまった。
なんてったって相手はそれだけ強力な壁をぶち抜く野郎だ、数に意味なんて無かった。」

そして残りの酒を再び一気に飲み干す。

「だがよ！」

そして再びドンツという音がする。

彼は肝心な話をするときには毎回これをやるのだろうか？とアルドラはどうでもいいことを考えてしまう。

「組織をぶつつぶしてくれたしよ！俺たちも命は助かったけどよ！？何も全員ぶつ殺さなくても！いやせめて俺たちが追ってた組織のトップぐらいはよ！？」

おかげで俺たちや肝心な部分がパアだぜ！？

兵士どもを倒したのもほとんど「蒼犬」だから手柄も無しだぜ！？拳げ句にあいつがそこに来た理由が・・・っ！俺たちに言ったセリフが・・・っ！」

そこで言葉を一度切り、立ち上がらんばかりの勢いで捲し立てていた彼は、ストンツと音が聞こえそうなほど脱力しながら椅子に座り直す。

そして語った言葉は・・・

「・・・オレの財布は？」だぜ・・・」

沈黙が二人を包む、回りは騒がしいのに、そこだけ音が反射でもしているのかというくらいに・・・

「・・・えつと？」

さすがにアルドラも予想外だったらしい、理解が追いつかずに硬直している。

「・・・「野郎」はな、財布をスられたんだとよ・・・
それを追っかけてきて、スリ野郎がその建物に入った「らしい」から突っ込んできて、「たまたま」最初に目が合ったヤツが気に入くない顔だったから、とりあえず全員ぶっ飛ばしたんだとよ・・・」

「・・・アルドラは開いた口が塞がらないとはこの状態だと言わんばかりに呆れた表情をしていた。」

「彼」について2

「「彼」の話？」

そう口にするのは美女という言葉が似合う女性だった。

淡い栗色の髪をストレートに伸ばし、大きな瞳から覗く青い瞳を際立たせる。

整った顔はどこか誘惑的であり、濡れた唇が男性の本能を刺激する。

「変わった殿方ですわね、わざわざお金を払ってそんなことを聞くなんて・・・

私は決して安い値段ではありませんのに」

まるで自分自身が商品であるかのような口振りに、普通であつたらいぶかしむのであろう。

しかし彼女は所謂娼婦であり、この場においてはそれも当然であつた。

「あなたとお話するにはこれが一番かと思ひまして。

娼館ならお金さえ払えば、一時的とはいえあなたと私だけの時間ですからね。

それに・・・、娼婦を拘束して支払い無し、ではあなたの面子もあるでしょう？」

そう語つたのはアルドラ・バステアという人物だ。

短く揃えた髪をオールバックに整え、茶色のスーツを着たメタボが気になる体型の中年男性だ。

「確かに・・・ね
ですが娼婦を前にして何も手を出されなかった、というのも面子にかかわるのですか？」

彼女の言うことも最もである、ある意味で魅力が無かったと宣言されてしまったようなものだ。

「そういうことでしたらお相手させていただきましたよ。
ただしお話が終わったあとで、ですがね。」

人の良さそうな顔を掘りの深い顔に張り付け、あくまでも話を優先させる姿勢を取る。
その目は誘惑に負けるほどの弱さなど、微塵もつかうことはできない。

「・・・まあいいわ。
そうですね、「彼」については色々聞いていますけれども、私が・・・いえ私達が知っている「彼」はずいぶん違いますわ。」

そういいながら彼女は飲み物をさりげなく用意する。
高級娼婦はお客様に不快感を与えないように、普段の気遣いまでしっかり教え込まれる。

そういう意味で彼女はよく教育されているようだ。

「私達が「彼」と会ったのは、まだ私達が奴隷同然だったころ。
当時は娼館の主が酷い・・・とても酷い人でした、生きている意味がわからなくなるくらいに・・・ね。」

そういつて遠くを見るような目をするが、その動作さえも艶めかしい。

目の前にいるのがアルドラでなければ、本能に忠実に従ってしまったらう。

「この街が隣国に攻め落とされた日に、館主は私達を部屋に閉じ込めたまま逃げましたわ。

助かったのはたまたまお客さんの相手で外にいた子達だけ、その子達も結局助かったのは一握り。」

少し下にうつむき、悲しげに語る表情。

目尻に溜まる涙、潤む瞳、ひとつひとつが男性の本能を刺激する魅惑の美貌。

まさに彼女は娼婦なのだ、しかも嫌々やらされているのではなく、プライドを持ってやっているタイプの。

「・・・私達は殺されるか、犯されて殺されるか。そう思って脅えていたときでしたわ。

「彼」が現れて、全ての状況をひっくり返してしまったんです。」

そう話す彼女の様子は、子供がヒーローもののテレビを見ているかのように目を輝かせている。

その姿は娼婦のそれではなく、純粋な子供のように見えてしまう。

「・・・「彼」が現れてからは一方的でしたわ。

街中に響いていた声は「蒼犬^{あおいぬ}」と叫び、数秒ほどでその声が消えてしまう・・・

何度も同じように聞こえて、急に静かになって・・・」

彼女は目の輝きをさらに増して話す。

「私達の部屋のドアを、破壊して入ってきたんですわ。」

思わずありえない、と思っしまいましたわ。
だってそのドアには、お客の中にいた偉い魔導師が嚴重に魔法をかけていたんですもの。」

子供のような彼女の話聞きながら、アルドラはまたか、とどうしても思っってしまう。

「魔法で防御されたドアを破壊する・・・、いったいどれほどの強さだと言っのでしょうか。」

思わずアルドラは口に出してしまっていた。

相手の話を聞いている時は横槍を決していれない、というルールに近いものを持つアルドラにしては珍しいことだ。

「そうですね。私達は直接戦っているところを見たわけではありませんので、お答えできませんわ。」

自分の状態に気づいたのだろう、子供から大人へ。輝く瞳は艶を秘めたものへと一瞬で变化する。

「その後が一番思い出深いですわね、「彼」に対するイメージはそこで9割決まっしまいましたわ。」

その後・・・と聞いて、アルドラは嫌な予感を覚える。

そして、その予感は的中してしまうのだらうとも思っってしまう。

「・・・オレの飯は？」ですわ。」

「・・・はい？」

予想していたにも関わらず、またもや呆気にとられてしまう。

音を反射する見えない壁がまたもやアルドラを包む。

「これは後で知った話ですが、「彼」はたまたま戦闘中のこの街に立ち寄り、たまたま食事を約束してくれた食事係の方がこっちのほうに逃げてきて、この館に入った「ような気がする」から、とりあえず館の周りの邪魔な人を倒していただけだそうですね。」

それ以来、彼女達の間では「食いしん坊」というイメージが定着してしまい、「彼」が「蒼犬」だと気づくのに大変な時間を要したらしい・・・

「彼」について3（前書き）

蒼犬についての語りはこれで終わりです

「彼」について3

「あゝ あ！？「ヤツ」について話せだあ！？」

いきなり立ち上がりながら荒い言葉使いをするのは冒険者・・・というより盗賊と言ったほうが似合いそうな、騎士の鎧を纏った巨漢の男だった。

鼻息を荒くしながら鬼のような形相でこちらを睨み付け、緑の髪を逆立てている・・・

いや髪型はもともとそういう状態だったのだが、今の状態ではさらに逆立っているように見える。

「あの「野郎」の話なんざしたくもねえ！帰りやがれ！」

「まあまあ、悪いようにはしませんので。

あ、これは差し入れですので皆さんでどうぞ。」

そういつて酒と高そうな菓子を差し出した男はアルドラだった。

暑い季節だというのに茶色のスーツをびっちり着て、汗ひとつ流さないでいる。

目の前の男は暑さのせいなのか怒りのせいなのか、汗をたらだら流しているというのに。

「・・・ちっ！少しだけだぞ！」

そう言いながら彼は警備兵の詰所、その奥に入っていく。

信じがたいことに彼は騎士なのだ。街を守る警備兵、しかも部隊長

という立場についている。

見た目は巨漢でひげ面の熊かと間違っような顔立ちだと言っのに・

・

奥のテーブルと椅子がある部屋に通され、ドカッという音がしそっ
なほどの（実際にした）勢いで椅子に座る。

その際に椅子から軋む音が聞こえたのは空耳では無いだろう。

「・・・最近「野郎」のことを調べてるヤツがいるって聞いてたが・
・・テメエだったか。

俺に何を聞きてえんだ？」

鋭い視線がアルドラに向けられるが、掘りの深い顔に人の良さそっ
な笑顔をはりつけたままで彼は臆することなく話し始める。

「・・・「彼」はなかなか破天荒な人物のようすな。

それも自分勝手に、勘違いも多く、何より強い。

・・・信じがたいほどに。」

顔は笑顔のままで、雰囲気だけが真剣なものに変わる。

「・・・そうだな、強い。強すぎる。

騎士団を総動員しても勝てるところが想像できねえ・・・。」

「・・・「彼」は何者で、何をしようとしていて、何のために生き
てきたのか。

私はそれを知りたいのですよ、「彼」の「根本」とも言える部分を
ね。」

巨漢の騎士は眼光をさらに鋭くし、熊が獲物を狙っようにアルドラ
を睨む。

今の彼を見た人は、彼のことを冒険者でも盗賊でも騎士でも無いと言っただろう。

・・・熊と答えるにちがいない。

「・・・・・・・・俺が第一発見者・・・・ってことくらいわかって聞いてんだろっな？」

「当然です。」

熊と中年のにらみ合い、端から見たら今にも食われそうなアルドラはしかし、熊以上に真剣な顔をして答える。（といっても笑顔だが）

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

にらみ合いが続き、根負けしたのは熊、もとい巨漢の騎士だった。

「・・・・・・・・俺が最初に「野郎」を見たのは・・・・もう5前になるか。」

巨漢の騎士は思い出すようにぼつりぼつりと話し始めた。

「最初に見たときはたまげたなあ、人間とは思えねえスピードとパワーでドラゴンをぶっ飛ばしてたんだからよ。ありゃ誰だってびびるぜ。」

こっちはそのドラゴンを調査して追い払う任務だったのに、結局倒しちまうんだから更に驚きだ。

見た目は今と大差なかったぜ、鎧は蒼だったけどよ。」

巨漢の熊・・・ではなく騎士の話を、アルドラは聞きのがすまいと静かに聞いている。

「ドラゴンを倒したらこっちに気づいてよお、ここはどこだ？」とか言いやがる。自分がどこにいるかもわかんねえヤツがドラゴンを倒すなんて話は聞いたこともねえ。」

「彼」に関する話はそんな話ばかりだ、と思っても口には出さないアルドラ。しかし目は口ほどにものを言う。彼からは呆れた雰囲気伝わってくる。

「こつちとしちゃありがてえヤツだからよ、街まで連れてきてやったさ。」

今思えばそれが間違いだった！あいつはあの場でぶつ殺しとくべきだった！」

グルル・・・と唸り声が聞こえそうな表情で語っているが、その顔はもはや熊でさえ逃げ出しそうな勢いだ。

「殺しておけば！姫様に会わなかった！姫様が惚れたりしなかったっ！姫様がフラれたりしなかったっ！！姫様が涙なんて流さなかったっ！！！！」

「・・・は？」

「だから！あいつはドラゴン退治の褒美で！会ったの！国王と姫様に！」

そんで惚れちゃったの！姫様がっ！あの「野郎」に！！しっかつもっ！！！！

あつの「野郎」はあああああああ！！！！」

怒りが沸点に達したのだろう、無駄に気迫とか気合いとかなんかその辺の色んなものを放出しながら怒りの咆哮をあげる熊。その咆哮で空気が震えているのは気のせい……とも言えないほどに強烈なものだ。まさに魂の叫び……。

「フリやがった！

姫様を！

「好みじゃない」とか言いやがった！

姫様だぞ！？

100人いたら100人が振り向くどころか崇めちまうような絶世の美女だぞ！？！？

あああのやあああああ！！！！」

……その後暴れだした熊を止めるために、騎士団が派遣されたという……。

「彼」について3（後書き）

次回からは現在編・・・と見せかけてまだまだ読み切りが続きます

双犬（ふたついぬ）

「ソウケンだ！ソウケンが突っ込んでくるぞ！」

そう叫んだのは軽鎧を身につけた若い兵士だった。

荒野の真ん中で叫んでも、普段ならなんの意味も無い。

そう、普段なら・・・である。

「なっ！ヤツらがあっちについてたのか！」

クソッ！読み方はなんだ！？」

「^{ふたついぬ}双犬だ！！！」

双犬と言った瞬間に、読み方を聞いた人物の顔は青くなった。

そして本来なら上官に連絡し、指示を待つという規律を破り、すぐさまに命令を下す。

「撤退だ！！！」

命令を下し、自身も退却を始める。

そして一人が動けば、周りの数人が動く、そしてその周りが動く、さらに周りが・・・

そう、この荒野には大勢の人間がいる。

最初の男と読み方を聞いた男は、その大勢のなかの一人にすぎない。

そして双犬と呼ばれる「二人組」を挟んで反対側には、やはり大勢の人間がいる。

そう、この荒野は戦場だった。

場所は変わり、先ほどの男達の上官がいる野営テント。

そこでまさにその上官は、部下からの報告に頭を抱えていた。

「よりによつて「双犬」とはな、ふたつるぎ「双剣」とあおいぬ「蒼犬」を同時に相手しては勝ち目は無い……か。」

国のお偉いさんには責任を問われるだろうが、兵を無駄死にさせるわけにもいかない。

それもたつた二人にやられたとあつては、今まで死んできたものに顔向けできない。

彼はそう言いたげな顔で、苦々しい表情のまま撤退命令を出そうとしていた。

「しょ……將軍殿！報告いたします！」

いままさに撤退の命令をだそうかとした時に、伝令の兵士が飛び込んでくる。

兵士は息を整えることもせず、報告を始める。

「ソ……ソウケン……、ソウケンに突っ込んで行つた部隊が！足止めに成功しています！」

「なんだと！？どこの部隊だ！？」

將軍と呼ばれた男は驚愕する。

彼が知る限りでソウケンを止められる存在など、伝説級の強さを持つ魔物くらいしか心当たりが無いからだ。

「ハッ！傭兵チームの一つであります！

チーム名は「地獄の番犬」^{ケルベロス}！」

「愛犬家」アレックス率いる傭兵チームです！！」

「アレックスだと！？ヤツらは今回後方支援だろう！なぜ最前線にいるんだ！」

「地獄の番犬」の「愛犬家」アレックスといえば有名な冒険者だ。無類の強さをほこり、頭も非常にいい、見た目もワイルド系の惚れ惚れするような男で、まさに完璧超人である。

しかし世の中完璧な存在などいないわけで、ある欠点のほうを通り名になってしまっている残念なイケメンなのだ。

「愛犬家」が示す通り、アレックスは無類の犬好きであり、たとえ魔物であろうとも犬型かそれに近いものを可愛がろうとしてしまう。その結果大概は惨事になってしまうのだが、見かねて仲間が助けようと相手を殺してしまうと、鬼のような形相で暴れまくる。

暴れなければ落ち込む、落ち込みすぎて「ダメだ、死のう」とまで言い出す。

それほどに犬好きな彼が、「蒼犬」と呼ばれる「彼」を気にしないわけがなかった。

過去に幾度も挑み、幾度も負け、それでもなお立ち上がる。

命が危険になったことも何度もある、だが彼は「愛犬家」なのだ。

その度に「俺は死なん！この世に犬がいるかぎり！！」といって立ち上がるほどの「愛犬家」なのだ。

「どうしてこう「犬」と名が付く奴らは勝手なのだ！
ええい仕方ない！」

將軍は悪態をつきながらも指示を始める。

「前線三番隊と支援三番隊！それに魔法部隊の二番隊で「地獄の番犬」を援護しろ！」

残りは部隊を再編成！「地獄の番犬」と「双犬」を中心に左右に展開！

ヤツらより前に出ないように前線を維持して迎え撃て！」

素早くて確に、なおかつ間違いなく指示をしていく。それは決して金や権力ではなく、実力で將軍という立場に着いた事実を証明するかのようなだった。

だからこそ彼は、このあと起こる事態に心底呆れてしまう。

「ほ！報告！」

將軍！逃げてください！

「蒼犬」が大魔法を！」

報告を受けた彼はあわてて天幕を出て戦場を見る。

そこにあつたのは天を貫く光だった。

位置から考えても「彼」が光の発生源と見て間違いない。

そして光は彼の天幕まで余裕を持って到達できるほどの巨大さだった・・・

やがてその光は剣が振り下ろされるように、ゆっくりとはあるが

しっかりと、雲を切り裂き大地に穴を開けんと迫ってくる。

抵抗の言葉すら無意味に思えるその光景は、破壊という言葉を使うには美しすぎた。

美しい光が迫ってくるのを見て、将軍は思わず笑ってしまう。

「ハハハ・・・、無茶苦茶だ・・・」

双剣（ふたつつるぎ）（前書き）

気がついたらお気に入り登録していただいた方がいらっしやいました・・・

こんな駄文でも登録していただけてありがたいことです

楽しんでいただけたらと思います

続きをどうぞ

双剣（ふたつつるぎ）

まさに廃墟と言わんばかりにボロボロの廃墟があった。

いつもならば周辺を荒らす盗賊団のねぐらになっている廃墟。

いつもならば戦利品を勘定している場所。

いつもなら酒を飲んでだらしている場所。

いつもならさらってきた人間を閉じ込めておく場所。

いま、それらの場所には誰もいない。

そうなった原因は廃墟の建物の前、人が踏み鳴らして草が広場のようになった場所に「いた」。

複数の男が青い髪的女性に襲いかかる。

文字で書くと限りなく卑猥のだが、男達にとっては笑い話にもならない。

なぜなら・・・

「ぎゃあああっ！」

「ぐっ・・・はっ・・・」「馬鹿な・・・」

男達は瞬く間に斬られてその命を手放すことになってしまった。

彼らを切り裂いたのは青いロングの髪を肩まで伸ばした女性の、その両手に一本づつ持たれた剣であった。

人を殺したというのに彼女の表情は特に変わらず、それを証明するかのように両手にある剣も血が付着すらしておらず、鋼鉄の輝きを放っている。

表情の変わらない顔から黒い目が覗いているが、その黒目の部分のまわりには虹色の輝きがあった。

細身で一般的な長剣よりもやや短く、取り回しを重視しているのであろうその2本の剣。

その剣こそが彼女の名を表す、即ち・・・

「なんつで「ふたつぬぎ双剣」がこんなとこにいやがるんだ！」

おそらくリーダーなのであろう男がそう叫ぶ。

・・・叫ぶが返事が帰ってくることは無い。

なぜなら彼の仲間は、さきほど切り捨てられた男達で最後だったのだから。

顔面蒼白になっている彼は何故かフツと笑い、口を開く。

「へ・・・、へへ・・・

いいさ畜生、やってやる。

どうせ盗賊なんざやってればいつかはこうなったんだ！

「親子」揃ってむかつ・・・」

彼の言葉が最後まで続くことは無かった。

目にも止まらぬ速さで剣が振られ、血が付くよりも早く彼の顔を横に両断したからだ。

怒声をあげる表情のまま固まり、やがて斬られた部分から顔がズルりと滑り落ちる。

それを切っ掛けに体から力が抜け、男は地に倒れる。

「・・・息が臭い」

誰に向けてでもなく彼女は呟き、誰かが返事をすることもなく、一つの盗賊団の歴史は幕を閉じた。

場所は変わり大きな街の中、冒険者ギルドの建物に「双剣」と呼ばれた女は来ていた。

壊滅した盗賊団には懸賞金がかかっており、その代金を受け取りに来たのだ。

「お待ちせしましたっ！これが今回の報酬金ですっ！」

元氣いっぱい明るい声で話す女性はギルドの職員だ。

金髪をポニーテールにして男ウケがよさそうな顔立ちをしている。

「・・・ありがとう」

「相変わらず懸賞金クエストは受けてくれないんですね、今回は臨時チームが明日には出発する予定だったんですよ？」

言葉少ない「双剣」に対して普通に話しかけているのは、それだけ「双剣」がよくくる馴染みだということだ。
もちろん職員の性格もあるのだろうが。

「クエストボード見ないから・・・」

「あなた「達」はほんとに冒険者ですかっ!？」

もはやいつもの光景になりつつあるやり取りなのだが、「双剣」は律儀にコクンと頷いて肯定している。

そのやり取りはこのギルドによく来るものならいつもの光景なのだが、今日に限ってはその「いつもの光景」に割って入るもの達がいるた。

「おいおいおい!？」

なんだその大金はよお？

嬢ちゃん誰かの代理で受け取りに来たのかい!？
だったら俺が渡しといてやるから貸してみな!」

スキンヘッドにぎよろりとした目の剣士風男が話しかけてくる。

回りには魔導師風の男、弓を携えた男が寄り添い、ニヤニヤと馬鹿にした笑みを浮かべている。

「・・・私のお金」

「はあああ!？」

おい聞いたかよ!こんな嬢ちゃんがこんな大金もらえるクエストこなしたってよ!？」

ダハハ!なかなか面白えジョークだ!」

品のない笑い方に合わせるように後ろの二人も笑う。
だが笑っているのが彼らだけだと気づくことはなかった。

回りはひそひそ話を始めているが、彼らの耳には届いていない。

「・・・おい、誰だあの馬鹿は」

「ああ、確か西のほうでちょっと有名なヤツらだ。
ただしガラの悪さで、な。」

「最近ここにきたってことかよ・・・、ご愁傷さまだな」

「おい、いいのかよ？ 助けないと死ぬぞ。」

あいつら殺されそうなツラだし・・・」

「おいおい、馬鹿言うなよ。」

ソウケンに殺されるってことは悪いヤツってことだろ？

そうじゃなきゃ何があっても死にやしねえよ。

手出すだけ無駄だ。」

・・・主にスキンヘッドの男達が心配されていた。

彼らも決して弱いチームではないし、ガラの悪さだけで有名になったチームではない。

むしろガラの悪ささえなければ・・・とまで言われる残念なチームなのだが、今回ばかりは相手が悪かった。

「・・・ッ!!」

それに気づいたのは弓を持った彼だけだった。

咄嗟に半歩ほど身を退き、そしてそれが全く間に合っていなかったことに驚愕し、冷や汗が流れる。

「ダハハ！！どうした嬢ちゃん！怖くて動けねえか！？
安心になって！金さえよこしゃあ何にもしねえからよ！」

言葉を言い終わると同時に弓の男はまたそれを見る。今度は意識していたからか、さきほどよりははつきり見えた。
だがそれを自分がかわせるとはとても思えない。
彼の顔はすでに蒼白で、汗がだらだらと吹き出している。

そして一瞬見えたその結果が出始める。

ブチツという音がして、スキンヘッドの男の鎧が鈍い音を伴って床に落ちる。

「ああ？いかれちまったかあ？最近メンテしてなかったからなあ。」

続いて弓を持った男の弓の弦がピンツとピアノをひいたときのような音をたてて切れる。

「・・・」

弓の男は汗をかいたまま動かない、動けない。

「お前もメンテ不足か？珍しいな、お前がメンテしていないとは」

違う、と言う前に再びそれが見えた。

思わず体が強張ってしまい、口を開いたまま情けない顔をしてしまう。

そして今度は魔導師がつけていたネックレスが床に落ちる。

「・・・なんだ？」

さすがに不穩に思っただけらしい魔導師が口にする。
そしてさきほどから黙っている「嬢ちゃん」のほうをじっと観察する。

唐突に弓の男は叫んだ。

「あぶなっ・・・！」

「・・・っ！！！」

魔導師の男もそれに気づいたらしく、弓の男が声を出していなかったら死んでいたかもしれないと理解する。

回りからフォローが入ったのはそんな時だった。

「よお、兄ちゃん達！」

そのへんにしといたほうがいいぜ！？

ハゲの兄ちゃんは特にな！」

「そいつの剣が見えてねえみてえだしよ！」

それじゃ死んだのも気づかないぜ！」

「おいおい、「双剣」の剣が見えるヤツなんて世の中にどんだけだと思ってるんだ？」

「ちげえねえ！」

ドツと笑いが起こるが、「双剣」という言葉を聞いて三人の顔がひきつる。

「ふ・・・「双剣」・・・？」

「その目・・・虹色の魔眼・・・？「万物の才能」・・・！？」

「・・・マジで？」

上から弓男

魔導師

ハゲである。

「マジで」

回りが一斉に頷くのと同時に「双剣」が動く。

・・・ほんの数分後には武器も鎧も無惨に切り刻まれ、土下座で詫びを入れている三人の冒険者がいるのだった。

「よかったな兄ちゃん達、殺されなかったってこたあそれほど悪いヤツらじゃねえんだな？」

「まあみんな通る道だ！生き残った以上は同じ拠点の仲間だ！仲良くやろうぜ！」

「ちげえねえ！」

終わりがあれば始まりがある。

一つの盗賊団が歴史を閉じたこの日に、一つの冒険者チームの歴史が始まった。

彼らのチームは後に素晴らしい功績を残し、ギルドに名を残すほど有名になる

今の彼らにその影を見ることはできないが、彼らの伝説は間違いないからこの日から始まった。

・・・だがそれはまた別の話。

学園と蒼犬

万物の才能

非常に魅力的な言葉であろうその言葉は、この物語の舞台になっている世界において、一つの先天的な能力として確かに存在した。

その能力をもつものは虹色の魔眼と呼ばれる、日本人でいえば黒目にあたる部分の周囲が虹色の輝きをした目を持っている。

もちろんそんな人物がほいほ生まれ来るわけは無いが、生まれ変わりでもしてるのでは無いかと言うほどに正確に、一人ずつこの世に存在する。

ただしこの世界の歴史上、同時期に二人の魔眼持ちがいた、という時期は存在しないが・・・。

そして大概の魔眼持ちは幼少の時期に良い意味でも悪い意味でも目立つ。

そして人を嫌うか、あるいは回りの人間が保護するか、あるいは人知れず悪用され、ほとんど人前に出ないで人生を終える場合が多い。

ゆえにそれだけの頻度で魔眼持ちが生まれる、という事実すら一般的には知られていない。

そしてその「万物の才能」を宿した「娘」を持つ「彼」は、今ある場所に来ていた。

「・・・来たぞ」

「ノックぐらいせんか」

黒い犬のような形状に金の複雑な模様が入った兜をつけた男と、白髪に埋め尽くされたいかにも偉いです！といった服装のじいさんが、これまた偉い人がいそうな部屋で話している。

ここは魔法学園と呼ばれる施設であり、じいさんは学園長という見た目に違わぬ偉い人であった。

相手の男はもちろん「蒼犬^{あおいぬ}」である。

「ちょっと待つとれ、こう見えて意外と書類仕事が多くての」

「・・・確かに意外だ」

「待て、どういう意味じゃ」

「・・・茶飲みが仕事かと」

「いや確かにいっつも飲んでるけど・・・」

軽口をたたきながらも学園長は手を止めない、まるで口と手が別の生き物のように書類を片付けていく。

「ほい終わりじゃ。」

とりあえずソファーに座・・・ってるか。

なんちゅーかもーちよい礼儀とかないんかのう・・・」

「・・・必要か？」

いやいらん、と自分から言っておいて即座に否定する学園長。
彼らの付き合いは短くは無い、「彼」がこんな態度なのはいつものことなのである。

「さて、本題からちゃっちゃんと話そうかの。」

「アリサ」は元気か？」

「アリサ」と口にした瞬間に「蒼犬」の雰囲気が変わる。良い方にと加える必要があるが。

「・・・ああ」

「彼」は言葉は少ないが、空気というか雰囲気で感情がすぐにわかる。

もちろん長い付き合いがあればこそではあるが、二人にはそれくらいの付き合いがある。

そしてその態度を見て、学園長も笑顔になる。

「そうかそうか、元気でやっとなるならいいんじゃない。」

ワシも久しぶりに会いたいのお。」

「彼」につられたのか、学園長も顔をにこやかにしながらそう語る。

「お主らが「災害級特別討伐対象」に指定されてからはなかなか会う機会も無かったしのう、なんつったかの？アルドラとかいう若いのが取材に来たこともあったのう。」

アルドラ・バステア

「蒼犬」のことを調べて回っている、現代風に言うならジャーナリ

ストだ。

ただし学園長が知らなかったことからわかるように、有名な人物では無い。

むしろどんな著作物があるかさえ定かでは無い謎の人物なのだが、この世界において物書きにはそういう人物が多いため、さして気になる存在ではない。

「・・・知らない」

「ま、そんなことはどうでもよい。

それより「アリサ」じゃ。

例の話は考えてくれたかの？」

「・・・入学か」

例の話とはつまりこの学園への入学についてだった、それはつまり「双剣^{ふたつるぎ}」こと「アリサ」が学生になるという事を意味している。

この学園は決して簡単に入学できるものではないし、お金も支払う必要がある、その額も決して安いとは言えない。

なにより才能が無い、と判断された場合には相手が誰であれ入学を拒否される。

しかしそれらの条件を満たしたものにとっては、卒業後どんな道を選ぶにしてもエリートコースが待っているという、人生の花道へ続く入り口なのだ。

当然そんな学園の倍率は異常に高い、素質が無いものを除いたとしてもまだまだ高い。

当然学園側の人間から推薦があれば、入学率ははねあがる、学園長からの推薦ともなればもはや内定と言っても過言ではない。

人によっては喉から手が出るほどに、それこそ財産を売り払ってで

も手に入りたいものなのだが・・・

「・・・気が乗らないな」

一蹴されてしまう。

「お主もわかっておると思うが・・・、いやお主だからこそと言えるな。」

「あの子」は魔眼持ち、そしてその能力は非常に高い。しかしこのままでは「アリサ」は・・・」

「・・・ただの道具になる」

学園長が良いよんだ部分を「蒼犬」が続ける、気を使って言わなかった学園長としては呆氣にとられた感じた。

「・・・だから気が乗らない・・・としか言っていない」

それはつまり気は乗らないが必要性は理解しているということであり、「アリサ」のことを思えばこそ自分の感情を抑えるべきだと考えている・・・ということだ。

だがそれをいまの会話から理解できるのは学園長くらい付き合いのある人間だけなのだが。

「悲しいことだが、このままでは昔お主が言った通りじゃ。」

戦う術のみを覚え、お主のためだけに動き、お主以外の事に頭を使わぬ。

それが嫌だからワシに相談したんじゃないかったか？」

もちろん「蒼犬」が一度にこんなことをすべて語ることは無いのだが、そういったやり取りがあったのは事実だ。

「・・・学園が気に入らない」

「ホッホッホッ。学園長に向かって言うか。」

「・・・気持ちはわからんでも無いがなあ。」

どうにも今の学園はエリート指向が強いからのう、そこに「万物の才能」とくれば普通の学園生活というのは無理じゃろうな。」

だが、と続ける学園長の顔は真剣そのものだ。

その表情は「アリサ」のことを真剣に考え、将来のことを思っているのがはつきりわかる。

「普通とは平均じゃ、個人において普通などありえない。」

そして成長とは普通ではない体験の中でこそ起こる。楽しいことも、辛いことも、嬉しいことも、悲しいことも、苦しみも、快楽も、憎しみも、愛情も、何もかもが成長の礎になる。

・・・そしてそれらの全てが、学園生活で巡り会える可能性が高い。

「

一気に言い切る学園長だが、「蒼犬」に踏み切らせるにはもう一歩足りない。

そしてその一歩を埋めるのに苦労するというのを学園長は理解している。

だがその苦勞をしてでも踏み切らせる必要があると、学園長の顔が物語っている。

この状態の学園長を諦めさせることは苦労するというのを「蒼犬」は理解している。

にらみ合いが続き、先に口を開いたのは「蒼犬」だった。

「・・・条件がある」

「条件？」

「蒼犬」の気配が一気に冷たくなる、「彼」が戦闘に入るときに纏う気配であり、周囲にいる人間は気温が下がったかのような錯覚さえ覚える強烈な気配だ。

その状態で行う動作は、ただの声でさえ相手の感情を揺さぶり、恐怖という本能を思い出させる。

恐怖を言葉に乗せて彼は解き放つ。

「・・・月に一度は会わせろ」

「勝手に会ってろ！！！！」

スパーンと素晴らしくいい音をさせた会心のツッコミが決まった瞬間だった。

出会いまでの道

「彼女」は祝福されてこの世に産まれた

「彼女」は祝福されるべくしてこの世に産まれた。

「彼女」は祝福をもって歓迎されるべきだ

「彼女」はあらゆるものに祝福されるべきだ

「彼女」は虹色の輝きを目に宿していた

「彼女」が目を開けたとき、まず両親をその目に捉えた
そのとき両親は「彼女」の目の輝きを捉えた。

両親は「彼女」を祝福をもって歓迎した

やがて両親の仲間がやってきて、虹色の輝きを知った
両親の仲間もまた、祝福をもって歓迎した

やがて村中の人間が「彼女」を知り、全ての人間が祝福した
人間だけではない

あらゆる動物が祝福した

あらゆる植物が祝福した
あらゆる精霊が祝福した
大気や大地でさえもが、彼女を祝福し、歓迎した

やがて五年が経ち、「彼女」は愛らしく育った

虹色の輝きが彼女を支え、「彼女」は神童と呼ばれた

やがて十年が経ち、「彼女」は美しく育った

その美しさは周辺の村に伝わり、大きな街に伝わり、やがて王国にまで伝わった

「虹色の目を持つ絶世の美女」として・・・

それは一人の貴族の耳に入り、貴族は「彼女」のもとへとやってくる

そして貴族は「彼女」の美しさに心奪われ、「彼女」に愛を捧げ、求婚する

だがそれが受け入れられることはなかった

貴族はさまざまな贈り物をした

花束や宝石に始まり、ドレス・装飾品、果ては豪邸を建ててプレゼントするとまで言い出した

だが「彼女」はその全てを受け取ることはなかったし、貴族の愛を受け入れることも無かった

貴族は「彼女」に問う

「何故我が愛を受け入れてはくれぬのか？」

「彼女」は十歳とは思えぬはっきりした声で答えた

「だってあなたの愛はあなたのご両親のお金で得たものだから。あなた自身の力で得たもの以外は私にとって愛の証になりはしない」

貴族は「彼女」の言葉で自らの愚かさに気づく

自分はなんと浅はかであったのかと、なんと愚かであったのかと、「彼女」を含めた世の中の女性をどれだけ見くびっていたのかと

貴族は「彼女」の前から姿を消した

そして貴族は一つの決心をする

いつか「彼女」に認められるほどに強い自分になろうと
自らの力で様々なものを手に入れられる存在になろうと

「彼女」にこの世で最高の贈り物を、自らの手で掴み渡そうと

貴族は家督も私財も全て捨て、家を飛び出した

愛のために全てを捨てて生きていく決心をしたのだ

そして一年後

貴族は死体で発見される

死因も原因も不明、なぜそんな場所で死んでいたのかさえわからない
これに怒ったのは貴族の両親であった

両親はあらゆる手を使い、息子の死んだ理由を探った

部下に調べさせた

ギルドに依頼も出した

直接出向いて話を聞きに行ったりもした

だが両親が理由を知ることがはついに出来なかった

そんなときにある情報が両親に届く

貴族が死んだのは、ある女性が原因なのだと

その女性は貴族が惚れていたのを疎ましく思い、彼に無理難題を押し付けたのだと

まさに無理難題であるその条件は人には到底叶えられるものではないのだと

貴族はその難題を果たすべくあの場に向かい、そして命を落としたのだと

貴族は彼女に殺されたようなものだ

その女性は、目に虹色の輝きを持つ女性なのだ・・・

両親は怒った

我を忘れるほどに怒った

誰がその情報をくれたかもすでに覚えていない

両親は「彼女」をどうやって苦しめるか、どんな罰を与えるか、それ以外に考えることはなかった

やがて「彼女」の村に、王国の神官と名乗る集団が訪れた

神官は言う

「我らは国王の命により虹色の輝きを探しに参った。

国王自ら祝福を与えたいとお話だ。

国王は多忙ゆえにご足労願いたい。」

国王自らの祝福に、村の人間達はすぐさま「彼女」を送り出した。

「彼女」も国王の話を無下にはすまいと、すぐさま村を発った

だが・・・、そう「だが」と続いてしまう

神官たちは貴族の両親が送った者達で、「彼女」を苦しめるための一手であつた

「彼女」が向かったのは王国ではなく、地獄だつた・・・

やがて「彼女」は野盗に襲われてしまう

神官達はやられたフリを、あるいは逃げ出し、「彼女」を置き去りにしてしまう

野盗に捕まつた「彼女」は奴隷に身を落としてしまう

虹色の輝きをもつた「彼女」は非常に高い値段が付いたが、それでもと言う人間は後をたたなかつた

やがて彼女を買い取られた

買った人間は他でもない

貴族の両親だつた

「彼女」は使用人の一人として働かされることになったが、それらが本当の地獄だつた

貴族の両親は「彼女」をいじめた
肉体的にも精神的にも

たとえ心が壊れようと「彼女」はいじめ続けられただろう

純潔を汚されることが無かったのは奇跡といっても良い

その後二年に渡り、いじめは続いた

体も心もボロボロになり、虹色の輝きと祝福の恩恵によってギリギリの精神状態を保ってはいたが、限界が来ていたある日のことだった

その日はたまたま屋敷の人が少なかった、なんでも有名な人が来るらしく、そちらに人手を割いているようだった

今日はあまり殴られないで済む等と思っていたが、ふとあることに「彼女」は気づいた

今なら逃げられる・・・

彼女は逃げ出した、精霊が、動物が、植物が「彼女」を助けた
虹色の輝きが逃げる方法を理解し、助けた

彼女は屋敷を抜け出し、外へと飛び出す

外は雪が降っていた・・・

ボロボロになった布切れを纏っているだけの「彼女」にはつらい寒さだったが、そんなことを気にしている余裕はなかった

屋敷の中では「彼女」がいなくなったことに気づき始める頃だ
いつ追手が来るかわからない。

戦う術を知らない彼女は、追手に捕まったらどうしようもない

「彼女」は雪の中を歩き出した

大通りにはたくさんの人がいた、みんな誰かに向かって何かを叫んでいる

奴隷の自分が出ていってはい目立ってしまうが、気になってしまった
「彼女」はこっそりと大通りを見る

見たものは、たくさんの騎士達が揃って歩き、その後ろからゆつくり動く屋根のない馬車に乗った、ごてごての悪趣味なほど輝く装飾のついた服を着た、豚のような男だった

彼女はその光景を見て理解する

ああ、これがこの世界なんだ

私達はある豚に支配されているんだ

私達は豚に逆らえないんだ

例えばここを抜け出しても、一生あの豚に怯えて生きていくしかないんだ

「彼女」が人生を諦めかけたとき、一陣の風が吹いた

金の模様をした黒い犬が、大通りを駆け抜けていた

騎士達を吹き飛ばし、重力など存在しないかのように高く跳躍し、豚の前に着地する

犬は豚と何かを話しているようだが聞き取れない
豚がひどく焦っているのだけはわかったが、何をしているのかまっ
たくわからない

そして

豚は犬に殴り飛ばされた

豚は馬車から吹っ飛び、地面を転がり気絶する

周りは静寂が広がり、誰もが何が起こったか理解しようとしている
だが「彼女」は追手が近くにいるのを見つけたため、この後何があ
ったかは知らない

「彼女」は先ほどの光景を思い出しながら逃げる

「凄い、凄い凄い！」

世の中にはあんな人がいるのだと理解する

世の中には権力に屈しない人がいるのだと理解する

世の中にはあんなに強い力を持った人がいるのだと理解する

知りたい、世界を知りたい、「彼」のことを知りたい

そのためには捕まるわけにはいかない

逃げ切って見せる、この街から、あの豚から、私の人生を狂わせた
この場所から

「彼女」は雑多なものが転がる路地裏に逃げ込んでいた。
裸足で走り回ったせいで、足からは血が出ている
体力ももう無い。

回復するまでこのまま隠れてやり過ごすしかない・・・

そう考え、できるだけ身を小さくして縮こまっていた

不意に足音が近寄ってくる、雪を踏みしめる音が聞こえ、こちらに
向かってきている

もう動けない

最悪は自殺するしかないかと覚悟を決め、足音のするほうをじっと
見つめる

建物の影から、足音の主が現れる

（・・・あつ、・・・この人・・・）

現れた男は、豚を殴り飛ばした犬だった。

出会いからの道

(・・・あつ、・・・この人・・・)

雪の降る街で、建物の影から現れたのは黒い二足歩行の犬だった

正確には黒いマントを羽織り、黒い鎧を着けた、恐らくは男だった
なぜ「恐らくは」と付くのかと言えば、頭をすっぽりと覆うフルフ
エイス型の兜をつけており、顔が見えないからだ

体格や身長から考えて「恐らくは」男なのだ

そのフルフェイス型の兜は犬とも狼とも言える形状をしており、目
のまわりや牙に見える細工の部分に、金色のラインが複雑な模様を
描きながら走っている

(豚を吹っ飛ばした人だ・・・、凄く強い人・・・)

「彼女」は先ほどの光景を思い出す

数に怯えることなく突き進む彼を
力に負けることなく前に進む彼を
権力に屈することなく立ち上がる彼を

だが、とも思う

なぜ彼がここにいいのか？

自分を助けに来るなんて都合が良すぎる考えだ

「彼」と「彼女」はまだ話したことも無いのだから

「彼」が貴族に雇われて「彼女」を探していた、そのほうがまだ説得力がある

「彼」の真実を見抜こうとして「彼女」はじつと「彼」を見つめる

・・・どのくらい二人がそうしていたのか。

一瞬、一秒、一分、一時間・・・

そのどれもが「彼女達」は感じられ、その全てが「彼女達」の感じたものとは違うのだろう

「彼女」はやがて、「彼」自体ではなく、「彼」の目を見ていた

(・・・きれい)

「彼女」が見た「彼」の目はとても澄んでいた

先ほどの豚や、貴族の両親などとは違う

どこかで見たことのある瞳

(・・・そっか、あの人だ・・・、私を愛してるってたあの人・・・)

かつて「彼女」に愛を捧げ、様々な贈り物をして、最後にはいなくなってしまう彼

彼が最後に見せた何かを決めたような顔

そのときの目が今の「彼」の目と同じなのだと「彼女」は気づく

（きつと「彼」は悪い人じゃない・・・、何より私は「彼」のことを知りたいと思ったばかりじゃないの！）

自分の気持ちを確認した「彼女」は、自分の気持ちを伝えるべく口を開けようとする

しかし開いた口が音を出すことは無かった
先に別の場所から音が聞こえてきたからだ

「・・・来るか？」

「彼」は一瞬息を吸い込んでからそう言った

「彼女」は一瞬何を言われたのか理解できなかった

短く放たれた言葉はもはや「彼」が言ったのかどうかすらわからない
もしかしたら「彼女」の希望が幻聴として聞こえただけなのかも知れない

だが、そう「だが」と続けるべきなのだ

「彼女」にとってその言葉は幻聴として聞こえそうなほどの意味を持つ言葉なのだから

まるで心を見透かされたように「彼女」の魂に放たれた言葉なのだから

「彼女」はゆつくりと「彼」に向けて、はつきりと言った

「・・・うん」

「彼」は「彼女」に近づき、マントを少し広げて「彼女」が入るスペースを作る

「彼女」は隠れるようにそこに入り、「彼」の黒く金色の模様が入った鎧を掴む

寄り添うように続く足跡が二つ、雪の上に存在を主張しては新たな雪に埋もれていった・・・

「彼女」は泣いていた、追手にバレないように声を殺して泣いていた。

「彼女」の虹色に輝く目からぼろぼろと大粒の涙が流れ落ちる

「・・・泣いてもかまわん」

「彼」はそう言う

「・・・で・・・うえぐ・・・でもっ・・・追手・・・すん・・・ぎちゃう・・・」

そう「彼」に話す「彼女」は、感情の堤防が決壊寸前であるのは一目瞭然だ

その「彼女」に対して、彼は笑って言った

「・・・俺がブツ飛ばす」

フルフェイスの兜のせいで表情などわかるはずがない
だが「彼女」はこのとき、「彼」が笑っていると確信できた
言葉以外で伝わる何かを、言葉にできない何かを、確実に感じたのだ

「彼女」の堤防は決壊し、大きな声で泣き出した
周りも見えないほどに涙を流し、追手が何人かこちらに向かってき
ているのも見えていない

何かを叫びながら追手が近寄るが、「彼女」には自分の泣き声しか
聞こえていない

追手が「彼女」を捕まえようと手を伸ばす

伸ばした瞬間にキンツという甲高い金属音が聞こえた

音に遅れて地面の雪が舞い上がる

舞い上がった雪がさらに一瞬遅れて赤く染まってゆく

雪が赤く染まりはじめてから何かが空に舞い上がる

何かとは何であつたのか、追手が伸ばした手であつたのだろう
残念ながら今空に舞い上がっているのは無数にあり、どれがそれで
あつたのか等、すでにわからない

周りの追手たちが何かを言っている

さすがに人の死を見た「彼女」は泣き止んでいた

「彼」に手を引かれて、街の出口を目指して走り出す

途中何度も追手が襲ってきたが、「彼」の前に10秒と立っていないものはいない

走って、走って、走った

街の出口が見えるところまで走った

出口は閉じられ、太い丸太を重ねた門は、剣でどうにかできるようには見えない

だがそれでも「二人」は走り続けた

「彼」に手を引かれる「彼女」は、心配などしていない

「彼」なら大丈夫だと、なんとかかしてくれと、なんでもできると信用できたから

いつしか「彼女」は笑っていた

人の死を笑っているのではない、気が狂っているのではない

「彼女」は嬉しかった、喜んでいて、未来に希望を見つけていた

あの扉の向こうに望んだ世界がある、あの扉を開けてくれる人がいる、扉を越えて一緒にいてくれる人がいる

「彼女」の顔は美しかった

その笑顔こそが、かつて「彼女」を愛した貴族が求めた笑顔だった

「彼女」は運命が変わったあの日から、初めての美しい笑顔で走る

「・・・行くぞっ！」

「彼女」を見て、「彼」が言う

「彼」を見て、「彼女」は答える

「・・・うんっ！」

「彼」は手を前に突きだし、魔法を唱える

光が複雑な模様を描き、宙に魔方陣が浮かぶ

それはすでに失われた魔法、「彼」だけが使える古代魔法

「爆炎！エクスブロージョン！！！」

「彼」が魔法の発動キ―を言った瞬間、魔方陣が赤く染まる

「彼」の前方の空間が、高熱によって歪んで見える

屋気楼を発生させるほどの膨大な熱量が、特定のベクトルを持って飛び出そうとしている

魔方陣が一際明るく輝いた瞬間、「彼」の前方に向けてその高熱が解き放たれる

空間が大爆発を起こし、人も、建物も、何もかもが燃えて吹き飛ん

でいく

動かすことができるとは思えなかった扉でさえも、まるで紙で出来ているかのように吹き飛んでいく

炎の雪崩のようなそれは、無慈悲なまでに何もかも飲み込んでいく

後に残ったのは「彼女」の希望だけだった

何もなくなった街の出口は、「彼女」を外へ導いているように見える

再び「二人」は走り出す

もう誰も邪魔をすることは出来ない

「彼女」は再び泣き出した

悲しくて、ではない

嬉しくて、である

美しい笑顔に涙を重ねた「彼女」の顔は、最高に輝いていた

「蒼犬」「双剣」「双犬」

ソウケンと呼ばれる親子の物語は、こうして幕を開けた

望んだ世界の生き方

「戦い方を教えて」

ここは草原

周りは足首にも届かない、短い草しか生えていない

草原は広く、ずっと先には湖が見える

湖の向こうには森が見える

森の向こうには山が見える

つまるところ、しばらくは歩き続けるしかないような場所

それも何時間、なんてレベルではなく、何日間、下手をすれば何週間というほどに時間がかかりそうな草原

そんな草原のど真ん中で「彼女」は「彼」にそう言った

「・・・それから名前も教えて・・・」

名前すら知らない「彼」は、全身が黒づくめの全身鎧とマント姿で、犬のような見た目の兜を被っている

金色のラインが黒い見た目にアクセントを与えている

「・・・グラハルトだ」

「彼」は自分のことをそう名乗った

「私は」

「・・・知っている、アリサだ」

名乗ろうとしたアリサはグラハルトの言葉に驚く

名乗っていないのに知っているハズが無い、それまでのアリサは屋敷に軟禁されていたようなものだから、偶然知ったというのも考えにくい

思わずアリサは聞いてしまう

「どうして知ってるの？私達初対面のはずよね？」

グラハルトは少し困ったような顔で（兜で見えないが）彼女に答えを返す

「・・・特殊能力だ」

「・・・そう」

そんなバカなとアリサは思ったが、あまり話したくない部分なのだろうと判断して無理に聞き出そうとはしないことにする

「・・・戦いは教えられない」

「・・・そう・・・」

否定の言葉に彼女は目に見えて落胆する

戦う術を知らなければいつまた同じ状況になるかわからない、次も同じように助かるとは限らない、自分で自分を守るだけの力はなんとしても手に入れない

だからこそその落胆も大きかった

「・・・だから盗め」

アリサはハツとする

グラハルトは教えないと言ったのではない
教えられないと言ったのだ

それは教え方を知らないと言い替えても良い
教え方がわからないからそれを伝えることができない、だが彼の戦
い方を見て自分なりに学ぶのは構わないということなのかと理解する

「・・・だったらお願いがあるんだけど」

「・・・言ってみる」

「見えるように戦ってください」

そう、彼は強すぎた

そして速すぎた

彼の剣速は常人には捉えられないほど速い

世の中にはそれを捉えられる達人もいるにはいるのだが、素人のア
リサにとっては見えるわけがない

何が起こったかもわからないのでは盗みようもない、いくら虹色の
輝きを持っていようとそれは覆せないことだった

「・・・まずは見る訓練だな」

だが一蹴されてしまう

最初の訓練が「見る」こと、しかも達人レベルのそれをというのは、いきなり高いハードルであった

アリスはさっきとは別の意味で落胆してしまうが、教えられないと言われた以上はやるしかないと言頭を切り替える

「頑張る」

それは決意

飾らない決意の言葉は時に相手の魂に響く

グラハルトの魂に響いたかどうかはわからないが、彼女自身の魂には響いた

言葉にすることでより強く心が決まる

アリスがグラハルトの剣速を捉えるようになったのは、この日から一ヶ月が経った頃だった

剣速を捉えるようになってからは、グラハルトと模擬戦をするようになった

最初こそ動けなかったが、そこは虹色の輝き、万物の才能である

どうすれば体が反応できるようになるか？体のどこを鍛えればいいのか？自分は彼相手にどう動けばいいのか？

万物の才能はその能力を遺憾なく発揮し、模擬戦をするたびにどんどん強くなっていく

剣速を捉えるようになってから一ヶ月もする頃には、一端の冒険者と同レベル程度まで成長していた

ある日の模擬戦が転機になった

「・・・二刀流か」

アリサは両手に一本づつ剣を持ち、グラハルトの前で構えている

「そう、二刀流。

足りない力は手数でカバー」

この日までの模擬戦からの経験で、アリサはどう頑張っても力でグラハルトに勝つことはできないと思っていた

何せ両手で思いっきり振った剣を片手で防いってしまうほどの力をグラハルトは持っているのだ

男と女ならそのくらいありえそうだが、微動だにしないようではそ

んなレベルではないことくらい気付く

今のアリサはその辺の魔物程度なら一刀両断であるだけに尚更だ

彼は両手でも片手でも使えるバスタードソードというタイプの剣を使っているので、盾は持っていない

単純に二本あれば、彼の防御は剣一本だからもう一本が当たるのでは？

倒せないまでもいいところまで行けるのではないかという判断だ

この日は結局何もなかったのだが、アリサは何かを感じ取った
手応えを感じることが何度かあった

もう少しこのスタイルでやってみようと考え、改善点を探し始める
そんなときに珍しく彼のほうから話しかけてきた

「・・・剣に振り回され過ぎだ」

珍しい助言にアリサは目を丸くする

驚いてしまって彼の言葉を理解できないでいると、彼のほうから続
けてきた

「・・・力で無理矢理振り回すな・・・逆効果だ」

驚きがおさまってくると急に彼の助言が頭に入ってくる

二刀流の最大の利点は手数とバリエーションの多さだ
だが片手で扱う分だけ融通が利きづらい

例えば両手で一本を扱えば、力で振り回すことも難しくない
そうでなくても、振った剣を片手を軸にもう片方の手でひねること
で、剣の勢いを殺すことなく再び切り返すことができる

片方で一本ずつ扱う以上、そういった扱い方がやりづらい
二本になったから一本より強い、というわけにはいかないのが二刀
流の難しさなのだ

今のアリサは力で無理矢理剣を振り回し、剣の重さが中途半端に強
くなったアリサの力で加速され、振った方向に体を持っていかれて
しまう

それを制するために重心をずらし、足腰で一瞬踏ん張る
その一瞬が体に負担をかけ、やがて蓄積されていき、一瞬の踏ん張
りが一瞬でなくなり、いつしか致命的な隙になる

事実今の模擬戦では、一瞬ではなくなっていた踏ん張りの瞬間を狙
われて負けている

「・・・力で抵抗するな、・・・力を乗せて加速し続ける」

唐突にアリサは答えを見つけた

虹色の輝きが言葉を理解し、意味を理解し、そこから応用を思いつ
き、急速に戦闘スタイルを組み立てていく

それに必要な鍛え方も、どんな力が必要なのかも、そのスタイルで
彼に通用するかどうかもシミュレーションしていく

「・・・何か掴めたか？」

グラハルトの言葉にアリサはハッとしてしまう
どうやらかなり考えこんでいたようだ

だが彼の問いかけには確信を持って答えられる

「うん、掴んだ

明日はあなたに勝つ」

それを聞いてグラハルトは笑ってしまふ、もちろん兜で見えないので笑った気がする、と言ったほうが正しいのだが

「・・・気を付けよう」

この日、後に「双剣^{ふたつめき}」と呼ばれる少女が誕生した

しかし「双剣」が「蒼犬^{あおいぬ}」と呼ばれる彼に勝ったことはいまだに無い

帰郷

アリサが二刀流になってからは、戦闘能力は飛躍的に上昇していた。元々「万物の才能」と呼ばれる虹色の魔眼を持っているのだから、その成長速度は凄まじい。

1を聞いて10を知る、という良い見本だ。

言葉少ないグラハルトの助言からの確に意味を理解し、自分なりに応用していく。

まるでスポンジが水を吸うように・・・なんていうレベルではないのだ。

吸った水を何倍にもしてついでに氷にして出してくるような感じで成長していく。

今の時点でアリサの相手をできるのは、グラハルトを除けば冒険者ギルドのベテランクラス以上でないと話にならない。

ここまで来るとグラハルトは、ギルドの依頼にアリサを同行させるようになった。

もともとかなり強い部類のグラハルトが受けるような依頼は、ギルドの中でもかなり難易度が高い依頼が多く、それまでのアリサを同行させるには力不足だった。

だが今の彼女は、瞬間的とはいえグラハルトを越える剣速を出す。

流れるような連続攻撃は美しささえ感じさせる

魔法こそ使えないがそれを補ってあまりある強さを手に入れていた
そのおかげでグラハルトの仕事にもうまく対応し、むしろグラハルトができない（というかやらない）部分を補っていくことで、異常と言えるほどに高い依頼達成率をだしていた

グラハルトは当然のように厄介事に巻き込まれる（むしろ自分から無自覚で突っ込んでいく）ということもあり、その辺の対応に慣れてしまったというのもあるが・・・

依頼はグラハルトの知り合いという人物達と一緒にいくこともあった
彼らからアリサの話が広まっていき、アリサはちょっとした有名人名人になっていく
ちなみに知り合いの中には学園長も含まれているが、それは今語る話ではない

「蒼犬」と行動を共にする少女ということで、そこそ有名になってきたある日のこと

「・・・そろそろ帰るか？」

グラハルトはアリサに唐突にそう切り出してきた

その日は依頼で、山にいる魔物を討伐しに行く途中だった

まだ山にさえ着いていないのに帰るとは何事かと思い、アリサは聞き返す

「もう？出発したばかりだけど？」

「・・・山じゃない、・・・アリサの故郷だ」

そういえば一度も帰っていないな、と思い出す

思えば運命が狂ったあの日から、今まで毎日が必死だった

故郷のことを忘れた訳ではないが、帰るという選択肢は奴隷時代に諦めていた

諦めさせられた、と言ったほうが正しいが・・・

「・・・あの山を越えれば一日で着く」

依頼は受注した日から数えて十日間が今回の期限だ
いつもの二人なら山に着くまで一日、魔物を討伐して山を降りるまで一日、山から街に戻るまで一日だ

何事もなければ三日で終わる、ならば七日間も猶予がある
移動を考えても往復で二日ならば五日間はいられる

久しぶりの故郷に思い出しながら、アリサは呟いた

「・・・うん、・・・帰りたい」

「・・・決まりだな」

グラハルトは声にこそ出さないが、優しい人間だとアリサはわかっていた

今回の依頼だって普段の彼ならば気にも留めない難易度の低い依頼なのだ

もちろん「彼にとって」であって、全体で見ると難易度が高いほうではあるが

わざわざそんな依頼を選んだうえに、期限が十日間もあるものをわざと選んだということは、最初からそういつつもりだったということだ

彼の優しさを感じつつ、懐かしの故郷に思いを馳せる

そのあとのグラハルトは早かった

山に着くなり魔物を探すために登り始め、いつもならアリサに何体か任せて戦うのだが、見敵必殺と言わんばかりに片っ端から片付けていく

結局依頼自体は一日で終わり、山で休んで二日目には故郷を目指して進んでいた

グラハルトが暴れすぎたせいで山道の一部が崩れていたというハプニングこそあったが、それ以外は問題なく故郷の近くまで進むあと一時間も歩けば村が見えるだろうと言うところで、グラハルトが口を開いた

「・・・もつと早く・・・来るべきだったんだがな」

それを聞いてアリサはふと、グラハルトから感じる雰囲気気づくそれは悲しみというか寂しさのようなもの

そして申し訳ないような謝りたいようなものも一緒に感じる

（ああそうか、私はこのままただの村人として生きていくこともできるんだ・・・）

そう思っていると、アリサは何か違和感を感じる

村人として生きていくという自分の考えではなく

もつと何か直接的な、良くないことが起こっているときのような不安な違和感

グラハルトも感じたようだ

「・・・急ぐぞ」

「うん」

二人は駆け出し、村が見える筈の小高い崖まで走る

崖の上から辺りを見渡す

何もない

魔物が暴れているわけではない

軍隊がいるわけでもない

さしあたって何かの脅威があるわけでもない

だが違和感が消えることは無く、むしろ違和感の正体をはっきりと
わかってしまった

何もない

それはつまり

有るはずの村さえ無いということだった

災害級特別討伐対象1（前書き）

毎度読んでいただきありがとうございます

気がつけば累計PVも四桁を超え、お気に入り登録までしていただいた方もいらつしやって感動でございます
この場を借りてお礼を言わせていただきます

ありがとうございます！

さてタイトルからわかるかもしれませんが、ここからしばらく連話となります

ただでさえ説明が少ない話ですので、読者の皆様には申し訳ありませんがわかりづらいかと思えます
しかしそれでも読んでいただける方々に更なる感謝を、そして貴重なお時間を私の話に割いていただいた分だけ精進していこうと思っております

今後とも「ソウケン」をよろしく願います

災害級特別討伐対象1

特別討伐対象というリストが冒険者ギルドには存在している

ギルドの中でもベテラン以上にしか閲覧できず、一般人や普通の冒険者には情報を渡すことさえ犯罪になるほどの極秘事項だ

内容は簡単

人間・亜人間・魔物・精霊あらゆる存在を問わず、存在そのものが危険であると判断される存在のリストだ

そのリストに乗っているのは例えば山のように巨大なドラゴンであったり、殺した相手を取り込んで巨大化していくゾンビが巨大化しすぎたものであったり、無差別に周囲を破壊する暴走した雷の精霊であったり

相手の規模や想定される被害によって、災害級や国家級等の名称が着く

なぜそんな話をしているかと聞かれるならば、この日がその災害級特別討伐対象がリストに追加される切っ掛けの日だからだと答えることができる

その切っ掛けとは・・・

「・・・何もない」

そこは廃村だった

廃村となつてまだそんなに経っていないのかもしれない
家々は焼けてはいるものの、まだ家としての形を残していて雨を凌ぐくらいはできそうだ

田畑はたくさんの人に踏み荒らされたのかも知れない
動物よけの柵がところどころ残っていて、かろうじてそこに畑があったらしいことがわかる

草は生え放題だし、人がいる感じもしない

ほんの数年前までここに村があり、人が住んでいたと言われてもすぐに信じることはできない

住んでいた本人以外には・・・

「・・・なんにも・・・無くなっちゃった・・・」

アリサの顔は今にも泣き出しそうだ

冒険者としての美しく凛々しい顔はなりを潜め、まるで大切なぬいぐるみが無くした少女のような顔をしている

そんな彼女に声をかける人がいた

「おい、あんたらこんなとこで何しとる」

そう言つて近づく男はアリサを見て驚く

正確にはアリサの目を見て、なのだが

「ア・・・アリサか!？」

「もしかして・・・アラドさん？」

アラドと呼ばれた男はシワの刻まれた顔をくしゃくしゃにして、涙を流し始める

「アリサっ！無事で良かった！俺はもう心配で心配で・・・」

涙をばろばろ流しながら話す男は情けない顔をしている

普通にしていればちよいワルオヤジ風のいい男なのだが・・・、パンツエッタ・ジローラ そっくりな見た目であることを追記しておく

「おじさん・・・」

「そいつは誰だ？」

いきなりギロツという音が聞こえそうなほどの鋭い目付きでグラハルトを睨む

今にも噛みつきそうな顔をしているが、グラハルトは別段何もしない

「・・・」

「おじさん、彼は私を助けてくれた人よ
今日までずっと守ってくれたの」

それを聞いたアラドは姿勢をピンと正して綺麗な90度の礼をする

「あざーっしたーっ！ー!!」

「・・・」

グラハルトはふいつと明後日の方向を向いてしまう
アリサはそれが照れているという事に気づいた

しかしそんなことを楽しんでいる場合でもない、何故村が無くなったのか、彼にしか聞けないのだろうか

「おじさん、一体何があつたの？」

アラドは苦虫を噛み潰したような表情をして、絞り出すように声を出した

「・・・とりあえず向こうに行こう」

そう言つて村の奥を指差して歩き始めた

そこは墓場だった

墓といっても簡素なもので、盛り上がった土の上に様々な品物が置いてある

おそらくは生前の本人達のものであろうそれらは、剣もあれば指輪もある

それを見るアラドの目は涙で滲んでいる

「アリサが出発したあとにな・・・」

アラドは何があつたかを話し始める、顔は苦しそうに歪んでいる
それだけで何があつたか想像できそうだ

アリサもグラハルトも黙って聞くことにしたようだ

「ありやアリサが出発してから一週間ぐらいたつたところだつたな
迎えに来た神官どもがまた来たんだ、アリサが拐われたつてな

・・・色々あつたがそんなときは別に何もしないで帰つたさ
こんななんつちまつたのは・・・一年前くれえだなあ」

一年前と聞いてアリサはまさかと思う、グラハルトに連れられて逃げ出したのはちょうど一年前だ

「・・・アリサがある貴族の命を狙つたつて話で騎士団が派遣されてきたんだ

生まれ故郷のここに隠れてるんだろつてな
意味がわからねえ、こっちはやつとアリサの誘拐から立ち直つてきたころだつてのによ」

そこまで聞いてグラハルトは地面に何かを描き出す
話を邪魔するつもりは無いようだが、話を聞いているとは思えない態度だ

「・・・グラハルト？」

「・・・それだけ聞けば十分だ」

アリサが問いかけるが、グラハルトはそれだけ言っただけ黙々と作業を再開する

「……続けるぞ？」

つつてもそつから先は見ての通りだ、奴らはこつちの言い分なんか聞きやしなかった

話せば嘘を言うなと殺され、黙れば隠すなと殺される、逃げれば王に逆らう反逆者として殺される……

「……最後にみんな殺されちまったよ……」

話をしている間アラドはずっと拳を握っていた、力を込めすぎて血が出ている

「酷い……」

アリサは口を両手で抑え、目に涙をいっばいに浮かべている

「……ごめん、ごめんねアラドさん

私が逃げたりしなければ……、私があのまま死んでれば……っ
！？」

突如として周囲に眩い光が溢れる、その光は地面から出ているようだった

気づけばグラハルトが目の前にいた
彼は口を開く

「……その先を口にしたらブツ飛ばす」

いつになく真剣な雰囲気は彼はそう言う

「・・・行くぞ」

「・・・うん」

どこに、とは聞かない

聞く必要がない

グラハルトに対する思いはあの日から変わっていないのだから

彼は「なんでも出来る」のだから・・・

そして彼ならきつと、行く場所は「あの場所」のはずだから

「待て！頼む！行く前に教えてくれ！

アリサ！お前は・・・っ！」

アラドが叫ぶが、最後まで言い切ることは出来なかった

なぜなら聞こうとして見たアリサの顔が、見たことが無いほどに美しい笑顔だったから

その笑顔を見ただけでアラドは彼女を信じられる

例え本当に誰かの命を狙ったとしても、命をかけて彼女を守ると誓う

「行ってきます！」

アリサがそう言った瞬間、光は一層輝きを増す

グラハルトが魔法の発動キーを言う

「転移！ワープゲート……！」

アリサは迷いを吹っ切った、彼のためにも吹っ切る必要があった

自分が死んでいればよかったと言うのなら、自分を助けたグラハルトを侮辱することになってしまう

命を救ってもらい、戦いを教えてもらい、生きる術を教えてもらい、教えてもらってばかりであるというのに、このうえ彼を侮辱することなどではしない

例え自分のせいで誰かが死んだとしても、今生きている自分を否定してはいけない

簡単に吹っ切れるわけではないが、少なくともその事実を背負って生きていかなくてはならない

弱い自分の心に渴を入れ、アリサは目を開く

そこはあの日と同じように雪が降っていた

見覚えのある道の向こうには、見覚えのある建物がある

昔と同じ景色、同じ空気、恐らく屋敷のなかには昔と同じ人が昔と同じように生活しているのだろう

アリサは一步踏み出す

昔と違うこともある
アリサは強くなった

さらに一步踏み出す

アリサには頼れる仲間ができた

さらに一步、もう一步、だんだん早歩きになってゆく

アリサには自ら戦う理由ができた

早歩きは加速し、ほとんど駆け出している

これは自分を守る戦いではなく、相手を殺すための戦いだ

さらに加速し、全力で疾走する

「私は今日、復讐する！」

災害級特別討伐対象1（後書き）

どうだったでしょうか？

この一連の話において、アリサとグラハルトの関係・二人が特別討伐対象となった理由・意外なあの人との関係が明らかになっていきます

相変わらず設定の説明等や女の子成分・そもそも名前付きのキャラがほとんどありませんが、お付き合いいただければ感謝でございます

災害級特別討伐対象2

寒々しい雪の中を疾走する二つの影があった

片方は犬のような兜を着けた重装備の男

もう片方は青い髪で虹色の魔眼を美しい顔から覗かせる、剣を二本構えた女

向かう先は豪華な屋敷

鉄格子で組まれた門は固く閉じられていて、二人の侵入を拒もうと立ちはだかる

二人は門が見えていないかのように走り続ける

女は言葉と共に二本の剣を振るう

「私は今日、復讐する！」

彼女の剣は目に見えない速度で何度も振るわれる

門は抵抗の意思がなかったかのように呆気なく細切れになっていく

二人は門を抜け、屋敷まで続く庭を駆け抜けていく

「蒼犬だと!？」

屋敷の中の部屋、執務室なのだろうその部屋で屋敷の主は叫んだ

「なんで蒼犬が来るんだ!？私が一体何をした!？」

彼は貴族という枠組みの中にあつて、なかなか有能な人物であつた他の貴族といさかいを起こすでもなく、権力に固執するでもなく、ひたすらに必要なことを必要なだけやる

何もなければ平穩無事な余生を送れるはずだつた

心当たりがあるとすれば一つだけあるにはあるが、しかし「蒼犬」が動くほどに重大な内容とは思えない

「旦那様、今はとにかくお逃げください。

相手が相手です、数分とせずにごここまで来るでしょう。

「蒼犬」は探索系の魔法を持っていませんので、ここに来るまで多少時間が稼げるはずです」

執事らしき男に促され、貴族は部屋を出ようとす

「蒼犬」がくるまで片付けていた仕事も、財産でさえも何一つ持とつとせずに扉へ向かう

執事がなかなか手が込んだ職人の技を感じさせる扉に手をかけ、

主人の歩みを邪魔することなく自然に開く

部屋を出てまずどこに向かおうかと考えていた貴族は、扉の前で待ち構えていた女性を見て驚愕する

「な・・・っ！貴様はっ！なぜ貴様が・・・っ！」

その少し前、アリサとグラハルトは扉の前で待ち構えていた

周りの状況を見る限りでは、突入からわりとすぐにここに到達したようだ

「・・・入らんのか？」

グラハルトがアリサに訪ねるが、彼女は首を横に振るだけで言葉を返そうとはしない

何かを待っているようにも見えるが、待っている相手は屋敷の主人というわけではないようだ

突然執務室の扉が僅かな蝶番の擦れる音を出しながら実にスムーズに開く

扉の向こうから出てきた男は二人、片方は館の主人なのだろう
貴族らしい上等な素材を使った服を着ているが、それだけでなく
宝石も装飾もほとんどない、実用性と最低限の美観を持たせただけの服であり、所謂貴族というイメージからは若干外れている

もう片方は恐らく執事なのであろう、黒い燕尾服をちょっと質をよくしたような服を着ている

歳は以外と若いようだ、30歳前後といったところだろう

だが何より彼の印象を決めたのは、彼の口元に張り付いている三日月に見えるほど歪んだ笑顔だった

「な・・・っ！貴様はっ！なぜ貴様が・・・っ！」

アリサを見た瞬間に主人は叫ぶが、アリサもグラハルトでさえもが「気づいて」しまった

だがそれを顔に出さずにアリサは続ける

「お久しぶりです、「ご主人様」

・・・今日は復讐をさせていただきに参りました」

「ふ・・・復讐だと・・・っ！」

あれは元はいえは貴様のほうに原因があつたではないか！
追手を出さなかっただけでもありがたいと思え！」

「・・・私が狙われるのはかまわない、仕方ない

例え真実が歪んでいようと、彼を死なせた原因は私だから・・・」

でも、と続けるアリサだが、その目はすでに館の主人を見てはいない

主人の傍らで、三日月のような笑顔を顔に張り付けた男を睨んでいる

「・・・私の家族を、仲間を、村のみんなを殺したのは許せない」

それを聞いて驚いたのは他でもない、館の主人だ
目を見開き、真実を探すようにアリサを凝視する

「ま・・・待て、何の話だ？村とは貴様のいた村のことか？
殺したとは何の話だ！？」

主人は明らかに狼狽えている

理由は難しくない

目の前に「蒼犬」がいるからだ

少女一人いじめたくらいで「蒼犬」に睨まれるのはおかしいと主人
は思っていた

だが村一つ潰したとなれば話は別だ

理由はわからないが「蒼犬」とはそういう人物なのだから

まるで正義が鎧を着ているのではないかと言うほどに悪にぶつかり、
そして必ずそれを圧倒的な力で壊滅させる

ただし公には知られていない悪にもぶつかっていくうえに、タイミ
ングや事後処理・周囲の被害といったものを全て無視して行動する
ため、一般的には無茶苦茶な人物と認識されている

だが一部のそういった内容を理解している人間にとつての「蒼犬」
とは恐怖の対象であり、彼の近くで自分の罪を暴露されるなど自殺
行為に等しい

ゆえに主人は自分の罪を確認しようと必死になっているが、アリサ
もグラハルトもすでに主人を見ていないという事実気づけていない

主人が狼狽えているのを見て、執事はおもむろに語り始める

「・・・ご主人様、もはやこれ以上逃げることは無駄でしょう。」

ここは潔く全て話しましょう、「蒼犬」の前には嘘など何の意味も無いではありませんか」

三日月を張り付けた執事はますますその笑みを深めながらそう語る

「何の話だ？ワシは知らんぞ！？」

主人はもはや何がなんだかわからないといった状況だ

執事はそんな主人を無視して話し始める

「我が主は確かに罪を犯しました。

あなたの・・・アリサの村を襲撃させました

使った者達はどこの誰とも知れぬ盗賊どもですが、今となってはどこにいるかもわからぬ蛮族どもです

理由は・・・行方もわからぬアリサへの憂さ晴らしと、アリサに苦痛を味あわせるため

自分と同じ気持ちをわからせるためです」

「何を・・・？何を言っているんだ・・・？」

「主人は全て殺せとおっしゃいました・・・

平民の命など何百人集まろうと貴族一人の命の代わりにはならぬと・

・

私は・・・」

さらに話している執事を見て主人は気づいてしまった、嵌められたと

この執事は最初からこういうつもりだったのだ

アリサが「蒼犬」に拾われたことも知っていたのだ

私を嵌めるために、この日のために自分に仕えていたのだ

「・・・もういい・・・」

ガツクリと頂垂れながら主人は床に膝を着く

「・・・もういい、・・・私がやった・・・、私が・・・」

もはや自暴自棄になり、生きることを諦めようとした時、凜とした美しい声が通る

「よくない」

主人が顔をあげると、アリサが真っ直ぐに見つめていた
思わず見惚れてしまうその顔からは、万物の才能の証である虹色の輝きを放つ目が見えた

「・・・よくない、あなたは愛のために生きてただけだから
愛のために自分ができる全てを使っただけだから
結果が歪んでしまったのはあなたのせいではないから
・・・だから、諦めるのはよくない」

「・・・黒幕は貴様だな」

アリサの言葉を引き取り、「蒼犬」が一步前に歩み出る
その方向にいるのは執事のほうだ

「黒幕？なんのことでしょう？私はただ主の言うと・・・」

キンツと甲高い金属音が聞こえた
それが剣を振った音だと気づくことは普通の人間にはできない
そう「普通」の人間には、だ

執事は紙一重でその斬撃を避けていた

紙一重といってもギリギリ避けたというより、あえてその程度しか避けなかったという雰囲気だ

「ハッ！「蒼犬」も大したことねえな、そんな早さなら世の中ごまんというぜ」

執事は戦闘状態に入ったようで、口調が荒くなる
恐らくこれが素の口調なのだろう

執事は髪の色も目の色も顔の形も体つきさえもが変化していく、ざわざわと闇色の霧のようなものが体を覆い、覆われた部分からどんどん変化していく

「・・・魔族・・・じゃないな、・・・闇魔法か？」

やがて赤い髪をオールバックにし、彫りの深い顔にニヤニヤ顔を張り付けた男が現れる

身長はすらりと高く、引き締まった体は無駄な肉のないバランスのとれた姿だ

闇は背中に集まり、上等な燕尾服と一体化してコウモリの翼のようになっている

「ハッハッハッ！魔族の祖先にして闇魔法を人間に教えてやった存在だよ！

光栄に思いな！この大悪魔「アルドラ・バステア」様が直々に相手をしてやる！」

そう言つて大悪魔と名乗った男は構える

「蒼犬」は冷気に近い殺気を放ち応じる

世界トップレベルの戦闘が始まった・・・

災害級特別討伐対象3

戦いは唐突に始まった

甲高い金属音が連続で響き、大悪魔と名乗ったアルドラの姿がぶれる、そしてアルドラの周囲が一瞬で幾つもの傷が出来ていく

「ハハハッ！人間にしちゃなかなかはええけどな！俺様には届かねえ！」

アルドラはいまだに姿がぶれているが、それが高速で剣を避けていると気づけるものは恐らくそう多くはいない

「・・・一つ聞こう」

甲高い金属音を響かせながらグラハルトが話す

「あん？」

ぶれながらアルドラは答える

二人にとってこのくらいはまだ様子見なのだろう
会話する余裕があるどころか、アルドラにいたってはお手玉くらいやりだしそつだ

「・・・なぜこんなことをした？」

「なぜ？悪魔が人を騙すのに理由がいるのかよ？」

アルドラは三日月を顔に張り付けてそう言う

その顔は端から見ればまさに悪魔と言えるのだろうが、グラハルトとアリサは言い知れぬ何かを感じ取った

「・・・これほどの強さ・・・小細工の必要は無い」

グラハルトは何かが何かはわかっていないが、確かな違和感を感じ
とる

「・・・だとしても、話す必要はねえよなあ？
そつたる蒼犬ううう！」

瞬間アルドラが手を前に出し、一瞬手が光ったかと思うと次の瞬間
に壁が吹き飛んだ

「チツ、かわしたか
てめえも回避能力だけは高いみてえだなあ」

「・・・一緒にしないでもらおう」

「ご主人様、逃げますよ」
「ア・・・アリサ・・・私は・・・一体何を・・・？」

もはやパニックになって何がなんだかわからなくなっているのは館
の主人だ

アリスは早々に自分では役に立たないと判断し、周囲のフロアにまわっている

「説明はあとにしましょう、下手をすれば館ごと吹き飛びます」

そう言った瞬間、戦っている二人の間にあった壁が吹き飛んだ

「・・・あなりたくなければ急いで」

主人は顔を痙攣させるしかなかった・・・

常人には見えないほどの速度で斬撃と恐らく魔法らしい攻撃が飛び交う

その攻撃は嵐のように周囲を破壊し、爆発のように全てを吹き飛ばしていく

「そろそろ飽きてきた、死ねよ蒼犬」

そう言つてアルドラは一度大きく引き下がる
移動した先で両手を前に突きだし、何かを呟いた

「消える！ダークウェイブ！！」

一瞬アルドラの周囲に魔方陣が展開され、その魔方陣の外側に黒い炎のような動きをする物質が発生する

すぐに燃え上がるかのごとく巨大になっていき、触れるものを粉々に削り取っていく

「ハハハッ！闇に物質で対抗する術は無い！
塵になっちまいな！」

全てを粉碎する闇

人に対抗できるとは思えない圧倒的な威圧感と質量を持ったその攻撃は、屋敷の半分を巻き込んでグラハルトを飲み込んだ

「ハッ！かの蒼犬も悪魔にやかなわなかったみてえだな・・・
興醒めだぜ」

アルドラが冷めた瞳でグラハルトがいた場所を見る

と言っても屋敷は文字通り半壊しており、いた場所というよりいたらしい場所、というのが正しいが

ガラツと屋敷だった残骸が崩れ、そこからグラハルトが立ち上がる

「・・・いい魔法だ、・・・相手の足場を崩す魔法か」

しれっと言つてのける

アルドラは青筋を浮かべているが、同時にありえないと驚愕している

彼の放った魔法は闇魔法の中では中クラスといったところだが、人間と違い悪魔が放つそれは人間レベルで抗う術は無いと言ってもいいそれこそ神が残した伝説級のアイテムや、魔法を極めた人間が持てる技術と魔力の全てを使ってやっと防げるようなレベルなのだ

それを彼は耐えただけでなく、本気で足場を崩す魔法だと思ってい

るほどにしかダメージを負っていない

そんなことが可能なのはアルドラより上位の悪魔、魔王や魔神と呼ばれる存在しかありえない

「・・・今度はこちらの番だな」

グラハルトはそう言う手を出し、何かを呟いた

その呟きにアルドラはさらに驚く

（バカな！エンシャント・ルーン言語だと！？人間達とはつくの昔に失伝したハズだぞ！？）

グラハルトの手には魔方阵が浮かび上がる、そして彼の前方に蜃気楼が見えるほどの熱気が発生した

「爆炎！エクスプロージョン！！」

魔方阵が一際赤く輝き、空間が突然大爆発を起こす
炎の雪崩があらゆるものを焼きながら吹き飛ばしていく

「こっのっおおお！！」

アルドラは闇を体の前に集め、それを盾にしている
だがその盾も端から霞に変わり、どんどん小さくなっていく

炎が過ぎ去ったあとで残っていたのは、服が所々焦げたアルドラだけだった

建物自体は言うまでもなく全壊、残っているのは瓦礫だけである

（馬鹿な！なんで人間がエンシャント・スペルを使えるんだ！？）

アルドラの頭は理解が追い付かない

「なん・・・っで！」

アルドラは全身から魔力を解き放ち、彼が使える最強の魔法を使う

「なんで！この俺様が！」

彼の周囲が闇色の透明なドームに包まれ、その中心にいる彼の手に圧縮されていく

「人間！なんかに！」

圧縮された闇は握りこぶし大にまで小さくなり、見るだけで恐怖という言葉を思い浮かべるような気配を放っている

「ビビんなきゃならねえんだあああああああ！！！」

彼はそれを前に押し出すようにして、最強最悪の一撃を放つキークワードを唱えた

「消滅！インフィニット・アビス！！！」

圧縮された闇が解き放たれる

元のサイズに戻るように広がっていくそれは、触れるものを粉碎し、塵にまで分解していく

まるでブラックホールのような闇がどんどん巨大化していく様子は、まさしく恐怖

人間には立ち向かうことはおろか、その理を知ることさえ許されない絶対の死

だがその絶対の死を前にあってグラハルトは、脅えるでも諦めるでもなく、淡々と対抗手段をとった

「形態変化！デイベインナイト！！」

そう言った瞬間、彼を包み込むように魔方陣が幾つも展開される
複雑に絡み合った魔方陣は立体感を持ち、球形の一つの魔方陣として完成する

魔方陣が完成すると次は彼自身が変化を始める

黒かった鎧は白く、ボロボロだったマントは新品のように綺麗になり、白い生地に金色のラインが犬を象ったような紋章を描く

そして立体型魔方陣がその形を変化させ、逆三角形を描いたかと思うと目映い光を放つ

次の瞬間には逆三角形の巨大な盾が出現した

中心には背中と同じ犬の紋章があり、その周囲を複雑な模様をした金色のラインが走っている

その巨大さは、屈んだグラハルトの全身を隠しきるほどに大きい

グラハルトはその盾を目の前に構えて半身になり、肩を盾に押し付けている

そして対抗手段のキーワードを言った

「絶対防御！デバイドシールド！！」

瞬間

グラハルトの前に薄い膜が展開される
その膜は境界線のように横に広がり、高さはゆづに10メートルを
越える

闇が広がり、膜とぶつかった

「この国ごと！消えちまええええ！」

アルドラは自分の放った闇が視界を塞いでいるため、グラハルトに
起こった変化がわかっていない

だからこそ彼は気づけなかった

グラハルトが展開した膜は防御魔法ではないということに

彼が使っているのは「切断」の魔法だ

それも「空間の切断」なのだ

切り離された空間は完全に干渉できない別空間とほぼ同じ

闇は膜にぶつかった場所から先に進むことはなかった

そしてグラハルトは、次の一手を放つ

「聖剣！デバインウェイブ！！」

盾と反対側の手に持っている剣も彼と同様に変化していた

片手でも両手でも使えるバスタードソードは、以前は刀身の先端は両刃で、真ん中ほどから半分無くなったような形状で片刃だった

今は全て両刃で刀身は幅広型になっており、中心は透き通ったクリスタルのような物質でできていて、重量を感じさせる

本来なら両手剣であろうその剣を片手で振り下ろし、キーワードを唱えた

空間が切られたかのように空中に白い軌跡が出現し、前方に向かって光が溢れている

何かが爆発する直前のようなそれは、少ししてから突然その力を解き放った

神聖さを表現するような半透明で緋色の光の帯が、斬られた空間から爆発するような速度で飛び出す

干渉できないはずの膜を貫通し、闇を切り裂きまっすぐにアルドラへ向かっていく

切り裂かれた闇から突然光の攻撃が飛んできたため、魔法の制御に集中していたアルドラはもろに食らってしまう

「がっ・・・っ！」

そして闇の向こうに無傷で立っている「蒼犬」だったはずの白い騎士を見て、彼は絶望に近いものを感じる

（デイベインナイトだと・・・、なんてこった・・・
あいつルーンナイトだったのかよ・・・）

「・・・クソが・・・」

アルドラは体を肩から斜めに切断され、人間なら即死する状態にあつてまだ生きていた

だがそれだけだ

捨て台詞を言う暇もなく、アルドラは意識を失った・・・

災害級特別討伐対象4

グラハルトとアルドラの決着がつく少し前

具体的に言うならアルドラがダークウェイブという名の魔法で、屋敷を半壊させるあたり

屋敷に謎の二人が入って行ったという通報を受けた騎士団が屋敷の前に詰め寄っていた

だがそこから先に進もうとしない
いや、正確には進むことができない

なぜなら騎士団の先頭で、一人の少女が立ちふさがっていたから

「貴様！なぜ我らの邪魔をする！」

そう一人の騎士が言った瞬間、アルドラの魔法が屋敷の半分を吹き飛ばす

ほとんどの騎士は啞然とした顔で、何が起こったかわからないといった感じだ

「足手まといよ、あれをあなたたちは止められるの？」

・・・少なくとも私を倒せないなら、行くだけ無駄」

アリサの回りには何人かの騎士が倒れている

アリサを倒して無理矢理通ろうとした結果だ

誰一人として死んでいないあたり、どれだけレベル差があるのかわかるというものだ

それがわかっているから騎士達も無理に進もうとはしない

「貴様こそわかっているのか!？」

我々の邪魔をするということは国の邪魔をするということだ!

国家反逆罪で指名手配されても文句は言えんと言つことだぞ!」

言い切った瞬間、グラハルトを越えることができる凄まじい剣速でアリサが剣を振った

今しがた話していた騎士の男は何をしたのかわからないといった表情でアリサを見る、自分の鎧の繋ぎ目に使っている金具が斬られたと気づいたのは、その鎧が地に落ちてからだった

「・・・ッ!」

アリサは冷ややかな視線を送りながら、淡々と話す

「・・・あなたがするべきなのは、ここに入ることじゃない
そこにいる屋敷の住人達を安全な場所に送ることよ」

アリサが視線をすぐ横に向ける

そこにはかつてアリサの後ろにあった屋敷の主人と、その家族と使用人が脅えるように座り込んでいた

グラハルトとアルドラの戦いが終わったようだ
グラハルトはいつの間にか白い鎧に変化しており、神々しい波動で

アルドラを真つ二つに斬った

体が二つに分かれても生きているあたりさすが悪魔といったところだ

「終わったようだな」

そう話しかけてきたのは先ほどの騎士だ

どうやら彼は偉い立場らしい

屋敷の人間を部下にまかせて、彼は戦いをずっと見ていた

「・・・ありえない戦いだっただ・・・な」

そう聞いてアリサはフツと笑ってしまう

そして彼の言葉を否定する言葉を放つ

「普通よ、彼にとってはね」

そう言っただけでアリサは駆け出す

騎士の男はその言葉に目を見開き、何かを言おうとしたようだが間に合わなかった

「・・・ッ！」

アルドラは目を覚ました

切断されたはずの半身はつながっており、服だけが斬られた事実を

証明している

「・・・なんで治療したんだ、蒼犬」

そう呼び掛けた先にいたのは、いまだに白く変化した鎧のままのグラハルトだった

「・・・それとも白犬とでも呼ぶか？」

「・・・好きにしろ」

クツクツクと笑うアルドラだが、グラハルトは別段気にした様子でもないようだ

殺気を放ちながらグラハルトはアルドラに言う

「・・・聞きたいことがある」

「・・・もう殺気は出さなくてもいい、俺はお前に勝てねえ
逃げるつもりもねえし、聞きたいことは話す

・・・今は、だけどな」

彼がそう言い終わると同時に、アリサが到着する

「・・・」

冷やかな視線を送るアリサだが、彼女と目が合ったアルドラはおもむろに語り始める

「どっから話すか

まずは虹色の輝きの真実からか？」

アルドラはそう言って切り出した

「虹色の輝きが万物の才能・・・まあ間違っちゃいねえんだけどよ分かりやすく言っちゃまうと進化の種つてとこだな

今いる魔王とか魔神つてのはみんな昔魔眼持ちを利用したヤツがほとんどだ

わかるか？

自分が教えたことを即座に理解してそれ以上のものを作り出すんだ

・・・戦いに限った話じゃねえ、道具・戦略・芸術なんでもだ上手く使えば一段高みへ登れる、いや一段なんてレベルじゃねえ、ただの下級悪魔から魔神まで登り詰めたヤツだっているからな

・・・俺は虹色の輝きが欲しかったんだ・・・」

一気に話しはじめるアルドラ

時折アリサを見るが、その顔はまるで宝物を見るようであり、眩しくて直視できないとばかりにすぐに目を逸らす

それが気になりながらもグラハルトは気になっていたことを尋ねる

「・・・さっきの質問だ

・・・なぜこんな小細工をした？」

屋敷を吹き飛ばし、最後に放った魔法は本当に国を滅ぼせそうなほどの力を持っているアルドラが、たかが人間の女一人に手をかけすぎている

力づくでどうとでもできるはずのアルドラがわざわざこんな遠回りをしているのが腑に落ちていなかった

「虹色の輝きは世界に祝福される、世界に嫌われてる俺達悪魔は直接干渉できないのさ」

動物も植物も運でさえも味方だからな、敵に廻っちまうとあらゆる方面から妨害が来て近づくことさえできねえ
こうやって目の前にいるだけでも奇跡みてえなもんなんだぜ？

・・・唯一人間だけが干渉できる存在なんだ」

「・・・そんな理由で・・・村のみんなをつ！」

アリサは怒りに身をまかせ、剣をアルドラに向かって降り下ろした
剣がアルドラに触れたとき、ガキンツと生身に当たったとは思えない音を出し、逆に振った剣のほう折れてしまう

「・・・た・・・助かった？」

驚いていたのはアルドラのほうだ

何せ世界に祝福された存在と嫌われた存在だ
何かしらの祝福が働いて殺されると、少なくとも刃が通ると思っていただけに、「普通」の状況に戸惑ってしまったのだ

しかしすぐに冷静に戻り、話の続きを始める

「・・・言つとくがな、全部を俺が仕組んだわけじゃねえぞ？
悪魔だったって運命まで操ることはできねえ

俺がやったのはアリサがこの屋敷に来るようにデマを話したのと、
アリサの村に騎士団を派遣させるように屋敷の主人に話しただけだ」

グラハルトはまたしても何か違和感を感じる
アルドラが嘘を吐いている、という感じではない

アルドラが黒幕ではないような、アルドラでさえも何かに利用されたような、アルドラの影に隠れた何者かの存在を嗅ぎとる

「・・・貴族の息子については何か知っているか？」

「ああ、あいつか

死因とかつて聞かれてもわかんねえぞ？

悪魔はんなことに興味ねえからな

ただあいつはなかなか良いタイミングで死んでくれたよな

こつちとしちゃアリスに直接近づくことなく、しかし俺の意思である程度干渉できる距離を確保できたんだ」

違和感はますます大きくなった

アリスも怒りが鎮まって来たのだろう

同じ違和感を感じたようで、怪訝な表情でアルドラを見つめている

「・・・なぜ村のみんなを殺したの？」

話しかけられたアルドラはビクツと体を震わせる

悪魔にとって虹色の輝きとはそれほどまでに恐ろしいものなのかと思ってしまうほどに恐れている

「・・・さっき言った通り、騎士団を派遣するようには言っただし、

話が進みやすいように小細工はした

だが・・・俺は殺せとは言ってない

そもそも今まで執事のフリしてたんだ、たかが執事にそこまで命令できねえ

誰が命令したかわからねえが、お陰様で上手く利用させてもらえたよ
村人が殺された時点で主人に全部擦り付けて、アリスに救いの手を・・・
って予定だったんだ」

第三者がアルドラさえ利用して計画を建てたと確信するには、グラハルトにとって十分すぎた

誰かが後ろにいる

「もともと一年前だつて俺はアリサを助ける予定だつたんだぜ？

あんどきや俺がアリサを嵌めた形になつちまつたからな、助けに行こうとしても邪魔がはいつちまう

もうなりふり構つてるヒマはねえかと思えばお偉いさんが町に来るそつちを執事として相手してればアリサはもう逃げ出しちまつた」

「・・・助ける？」

「何度も言つてんだろ、悪魔は虹色の輝きに干渉できねえ

言い換えるなら、悪魔から何かすることはできないが、虹色の輝きからなら一方的に干渉できるんだ

逆に言うなら、虹色の輝きに仲間だと認められればその後は自由だ虹色の輝きが仲間だと思つてる限りいくらでも干渉できる

敵として会えば死を、味方として会えば確実な進歩を与える俺はアリサに味方と認識される必要があつたんだよ・・・」

アルドラはふう、と息を吐いた

この状況ではもう味方と認識されるのは絶望的、次の魔眼が生まれるまで大人しくしていようと諦めたようだ

「なるほどな」

不意にそう言つて近づいてきたのは、先程アリサと話していた騎士だった

「三人とも死んでもらう」

そう言った瞬間、三人を囲むように巨大な魔方陣が５つ重なりあつて出現する

強力な捕縛魔法が発動し、三人に襲いかかった

災害級特別討伐対象5

「・・・っ！」

「きゃああ！」

「があああああ！」

三人に強力な捕縛魔法が使われた

その魔法は大型の魔獣に対して使うもので、弱い魔獣や人間相手に使うと、拘束力が強すぎて相手を潰してしまう強力な魔法だ

複数人による使用で発動する魔法であるこれが使われたということは、周りには何人もの人間がいるということを示している
それも「敵意」を持った人間が、である

「・・・悪いが命令なんでな・・・」

騎士の男がそう話し、拘束されている三人を見る

（対大型魔獣用の拘束結界魔法だど！？

俺はともかく人間に使う魔法じゃねえぞ！

やべえ、抜け出すのに時間がかかる！）

アルドラは焦っていた

グラハルトとの戦いで消耗しているとはいえ、人間程度の魔法で死んだりすることはない

だがそれは彼が悪魔だからであって、生身の人間であるグラハルトとアリサにはかなりキツイハズだ

（・・・蒼犬は大丈夫みてえだな）

見ればグラハルトは多少屈んではいるものの、明らかに抵抗している自分と同じく時間をかければ突破できるだろう

問題はアリサだ

（ヤバイ・・・

拘束系の魔法くらったのは初めてか・・・
クソッ！間に合うか？）

アリサのほうは明らかにキツイようだ
地面に押さえつけられているように座り込み、両手を使ってやっと上半身を起こしているような状態だ
その状態も全身を圧縮されるように押さえつけるこの魔法の中では、あまり長く耐えることはできないだろう

アルドラが焦って魔法の突破をしようとしている時に、新しい声が現れて意識を逸らされる

「ブヒヤヒヤヒヤ！とうとう捕まえたぞ蒼犬！」

そこにいたのは豚だった

正確には太った豚に似ている人間なのだが、あまりに体型が丸く、あまりに顔が醜いため、豚が豪華な服を着て二足歩行しているようにしか見えない

「ブヒヤヒヤ！一年前からずっと探していたぞ！
ついに魔眼の娘が手にはいる日が来た！
ブヒヤヒヤヒヤ！今日は笑いが止まらんわ！」

笑い方が豚の鳴き声に聞こえるのは気のせいではない、本当に歩く豚のような人間だった

「・・・貴様だな？」

グラハルトは豚に向かって問いかける

「ブヒヤヒヤ！ああそうさ！話は騎士団長に持たせた魔道具で聞いている！

貴族の息子を殺したのも！魔眼の村を潰したのも！執事の陰謀に手を貸してやったのも全てワシじゃ！

ブヒヤヒヤヒヤ！」

「なんっ！？・・・ですっ！？・・・って!？」

アリサは怒りに震え、拘束魔法に抵抗しはじめる

普通ならもはや全身の骨が折れていてもおかしくないほどの圧力の中で、である

「ブヒヤヒヤ！無駄無駄！おい！魔法部隊！」

豚が命令すると、圧力が強くなる

「うああっ！」

気づけば周りには大勢の人間がいる

騎士団とは違う鎧や、魔導師のような格好の人間もいる
おそらく豚の手下なのだろう

「ブヒヤヒヤ！やつと魔眼が手にはいるのう！
安心するがいい！お主の目はワシがしっかりと使ってやるからのう
！」

目を使う、と聞いてアルドラは疑問を口にした

「目を使う？

意味がわかんねえ、目なんか奪って何の意味があるんだ？」

豚は醜い声をさらに醜い音にして笑い始めた

「ブヒヤヒヤヒヤ！お主悪魔のくせに知らんのか？

ブヒヤヒヤヒヤ！

虹色の魔眼は文字通り魔眼じゃ！

目こそが力の源なのじゃ！目を奪えば魔眼持ちはただの人！
じゃあその目を他の誰かに埋め込んだらどうなるか・・・、簡単な
話じゃ！」

アルドラは啞然とする

斬新なアイディアだからではなく、豚は頭の中身まで豚だったかと
呆れて啞然としているのだ

魔眼は証明のようなものにすぎない

祝福を与えられた副作用と言ってもいい

魔眼があるから力があるのではなく、力があるから魔眼が表れるのだ

だが例えそれを言ったとしてもこの豚は信用などしないだろう

「ブヒヤヒヤヒヤ！触れもしない悪魔どもでは思いつきもしなかったか？

ブヒヤヒヤヒヤ！

ガキの目ではワシに入らんからなあ、成長するまで待っていてやつたが頃合いじゃ！

蒼犬にも一年前の恨みをきっちり晴らす必要もあるしのう！」

アリサはその言葉を聞いて唐突に思い出す

こいつは屋敷を抜け出した日に、大通りでブツ飛ばされたあの豚だなぜか思い出した途端、安心してしまう

その安心は恐らく、近くでわずかに屈んでいるだけのグラハルトがいるからだろう

一年前と同じように、ブツ飛ばされるシーンしか想像できない

「・・・十分だ」

その期待に答えるように、グラハルトは動いた

彼の鎧は発光し、盾も剣も淡い光を出し始める

何かの呪文のような言葉を唱えると、三人の周囲に白い光で描かれた魔方陣が表れる

「解呪！オールデイスペル！！」

魔法のキーワードを言った瞬間、彼を中心にして淡い光が一気に弾ける

風のように優しくふわりと周囲に広がっていく

そして唐突に、バキバキとガラスを砕くような音が聞こえた

パキーンと完全に割れた音が響いたとき、音がした場所にたっていたのは、何もなかったように立っている拘束されていたハズの三人だった

「・・・アリサ、・・・お前が殺れ」

アリサは次の瞬間に飛び出していた

一番近くにいる騎士団長の彼に近より、彼の剣を奪おうとする

彼は咄嗟に構え、剣を抜きやすいように少しだけ鞘から指で押し出した

だが

彼はもう片方の手を「動かさなかった」・・・

「やれ」

短く聞こえたその言葉は、アリサにだけはつきりと聞こえた

騎士団長から剣を奪い、彼が疑われることが無いように肩からタックルを入れて突き飛ばす

妙に軽い衝撃を感じながら、アリサの体格ではありえないほど騎士

団長は吹き飛んだ

「ブヒヤツ!?ま、魔法部隊!」

豚が叫びに応じて、魔導師たちが動こうとする

「させるかよ!」

後ろからアルドラが援護する

闇が彼の周囲に集まり、いくつもの球体になっていく

「貫け!ダークアロー!!」

闇魔法の初級だが、詠唱がほとんど必要なく、使い手の能力に応じて何本も矢を発生させられる魔法を放つ

当然悪魔であるアルドラが放つそれは、一発一発がとんでもない破壊力を持っている

しかも数が人間ではありえないほど大量に出現する、その数は実に20本

普通の魔導師が同じ威力の矢を打つなら1本で全ての魔力を使いきると言えばどれだけ凄まじいかわかるだろう

当然その矢は防御など無関係に魔導師達を貫き、アリサの進む道を開いていく

だが一人だけ、矢を逸らして完全に回避した人物がいた

「貫け!ファイアアロー!!」

アルドラの半分ほどの威力の矢が2本生み出され、アリサに向かって放たれる

「バカ！避ける！」

アルドラはそう叫んだ

なにせアリサは矢が見えていないかのように走り続けている
走るアリサの側面から、魔法の矢が襲いかかる

「聖剣！デイベインウェイブ！！」

突如、神々しい緋色の光の帯がアリサと矢の間に入り込む
矢は帯にぶつかり、消滅した

「蒼犬か！」

魔導師の男はそう言ってグラハルトのいた場所を見る

「いた」場所を見たのが間違いだった

彼はすでにその場所を離れ、上空高く飛び上がり、次の攻撃を準備していた

「閃光剣！フラッシュブラスター！！」

彼は本来両手で扱うのだろうその剣を天高く掲げ、魔法のキーワードを唱える

彼の剣が眩く輝き、一瞬あとには大量の光の矢が飛び出す
一つ一つは大した威力ではないが、数が大量で、今もまだまだ発生している

光の矢は周囲を破壊し、誰もが自分を守るだけで精一杯だ

「チツ！さすがだな

まあいい、あの豚野郎だけでも・・・ッ！？」

光の矢から身を守っていた魔導師は、自分の後ろを見て驚愕した

空中で魔法を打ち続けているハズのグラハルトが目の前にいたからだ

彼の手には、見たことがない美しい煌めきをした、刀身が少し短めの剣を持っている

「・・・邪魔だ」

（ダメだ、速すぎる・・・！）

魔導師はアルドラと同じように斬られ、同じように体が二つにわかれた

「ブ・・・ブヒャ！ブヒャアアアアア！！」

そのすぐあと、豚の鳴き声が聞こえた

災害級特別討伐対象6

「ブヒヤアアアア！」

たす！助ける！誰か助けるんじゃないあ！」

豚が醜い姿で地面に転げ回っている

「・・・誰か？周りに誰がいるのかしら？」

そう言っただけで豚に歩み寄るのはアリサだ

冷静に見えるその顔は、これから人を殺すとは思えないほど美しい

「ブヒヤ！」

おおお前！ワシを助けるんじゃない！」

金ならいくらでもやる！そうじゃ！お主の目を買ってやろう！

いくらならいいんじゃない？」

一生遊んで暮らせる金を払ってやるぞ！」

「・・・そうね・・・じゃあ」

アリサの反応に助かったと豚は安心する

自分の金と権力を使えば言うことを聞かないものなどいない

王族でさえ自分には簡単に意見できないのだから、こんな小娘が自分の言うことを聞かないハズがない

何かを勘違いしていた豚はそう思っていた

自分の腕が無くなっていることに気づくまでは

「ブヒヤ？ヒヤ！ヒヤアアアアアア！！？」

腕が無くなった豚を見てアリサは先ほどの続きを話す

「まずは人間の言葉を覚えてもらいたいわね、豚語で何を言われてもわからないわ」

豚が這いずり回りながらアリサに向けて抵抗の言葉を言い始める

「ブヒヤツ！おおお主らが何をしたかわかってるのかああ！

ワシに手を出すとは！貴様らは指名手配だ！

特別討伐対象にしてやってもいいんだぞ！

ブヒヤアアア！痛い痛い痛い痛い！

イヤなら早く助けるこのマヌケがあ！」

「・・・ふむ」

唐突にグラハルトが表れる

彼の手に持つ剣は、両手で扱わずの幅広の剣に戻っていた

「特別討伐対象ねえ・・・」

気づけばアルドラも近くに来ている

さきほどまでいた騎士団や豚の手下で立っているものはいないようだ

「悪魔はもともと指定されてっからな、今更なんにも意味ねえな」

アルドラはそう話す

そもそも単体で屋敷を吹き飛ばせる時点で、指定されていないのがおかしい話だ

お前はどんなだと言いたげにアルドラはグラハルトのほうを見る

「・・・豚語はわからん」

アリサと同じ対応に、思わず彼女は笑ってしまう

（・・・ああ、やっぱりこの人と一緒にいてよかった
・・・それとも私が影響されたのかな？）

グラハルトは何の感情も読み取れないフルフェイスの兜から、豚を値踏みするようにじっと見ている

「・・・どうしたの？」

グラハルトの視線が気になり、アリサが訪ねる

「・・・俺には殺せないな」

グラハルトが漏らすようにポツリと呟く

アリサはその言葉に心底驚いてしまう

彼は正義が鎧を着ているような人物だから、悪が服を着て豚の皮を被ったようなこの男を殺せないという話はかなりショックだった

「・・・だから、・・・アリサが決める」

グラハルトが殺すような人物は大概悪人だが「例外」がある

悪人に見えない人物や、巧妙に隠している人物でさえも、彼にとつては意味がない

悪であるか否かだけしかない

少なくともアリサはそう思っていたが、例外があつたことを思い出す

過去に二度

一度目は今回と同じく明らかな悪人が死ななかったこと

二度目は罪という意味さえ知らない十歳の子供を殺したことだ

いまだに共通点はわからないが、今回も恐らく「例外」なのだろう。
・

そう思うと急に殺気が薄れていく

今ではないいつか、どこかで彼と再び会うのだろう

そのときに敵か味方かはわからない

グラハルトが殺さないと言うならば、きっとこの豚は何かの役目をするのだろう

「……今は……殺さない……」

絞り出すように、自分に言い聞かせるようにアリサは言う

「……でも……次は……無い!」

言葉を言いきると、騎士団長から奪った剣を地面に突き刺す

豚を睨み、すぐに振り替えてその場を離れる

「・・・運が良ければ生き残る」

グラハルトは誰に言うでもなくそう言い残し、アリサのほうに歩いていく

「だそうだが、利用されたのはムカつくが、まあ俺が気づかなかったのが間抜けってことで殺さないでやるよ」

アルドラもそう言って離れる

豚はいまだにもがいているが、助けてくれる人物は周りにはいなかった

「ブヒヤ・・・ブヒヤア・・・！」

許さんぞ蒼犬・・・！

あの女も、悪魔も、全員許さんぞ・・・！」

「なあ、蒼犬」

唐突にアルドラはグラハルトにそう声をかけた

「・・・なんだ」

「お前いつたいなんなんだ？」

失伝したエンシャント・ルーン言語にルーンスペル、武器を瞬時に出したのは空間魔法の「倉庫」^{アーカイブ}だろ？

おまけにディバインナイト・・・いやルーンナイトか、まあそんな

職業^{クラス}に着いてるなんて普通じゃねえぞ
お前さんほんとに人間かよ？」

グラハルトは明らかに不機嫌になる
どうやら彼にとって聞かれたくない部分だったらしい
だがその不機嫌も、アリサからの視線を感じて緩んでしまう
アリサはそれを見てから口を開いた

「・・・もしかして」

グラハルトというよりアルドラに向かって言っているようだ

「・・・グラハルトって普通じゃなかったの・・・？」

ガクーンと両膝を地につけ、両手も地面につけて所謂OTZの形になるアルドラ

「わかるだろ・・・、悪魔と単体でガチ合える時点でわかってくれ・
・
俺が普通みてーじゃねーか・・・」

アリサはグラハルトが強い部類の人間だとは思っていたようだが、
あくまでも人間に可能な範囲の中の「強い」だと思っていた
もちろん最強の座を争うような強さだとは理解していたが、人間の
範囲を逸脱しているとは思っていなかったようだ

グラハルトは頂垂れているアルドラと、驚いた表情のアリサを横目に話す

「・・・俺からは話せん、・・・自分で調べる」

アリサはあまり興味が無いようだがアルドラが食いつく

「話せない？話したくないんじゃないか？」

「……っていうかそれ調べてわかることなのかよ？」

「……それも話せん、……そういう話は全てな」

チツと短く舌打ちするが、どうやら彼の興味はアリサからグラハルトに移ったようだ

「そういうことなら調べ尽くしてやる、お前が生まれた時間まで調べてやる

なんならお前が覚えてねえことも調べてやるから、聞きてえことがあつたら言っておきな」

軽口を叩くアルドラだが、真剣にそう思っているようだ
顔はニヤついているが目が笑っていない

「……ノーコメントだ」

「のーこめんと？どういう意味だそりゃ？」

グラハルトは完全に黙りこむ

話す気はないということらしい

「……アリサ」

急に呼び掛けられてアリサはビクツとしてしまう

今まで一緒にいた自分にとっての第二の親とも呼べる存在が、実は

全く得体の知れない人物だったということに軽くショックを受けていたのだ

「・・・えっと、なに？」

おずおずとそう訪ねるが、グラハルトは気にしていないようだ

「・・・お前はどつする？」

後ろではアルドラが何かブツブツと唸っているが、二人にはまるで聞こえないようだった

「・・・私は・・・」

アリサは迷う

もう戻る場所も無くなったというのに迷う

選択肢など一つしかないのに、それを選択するという行為に迷う

自分はなぜ剣を握ったのか？

自分はなぜ戦うことを選んだのか？

自分はなぜここまで来たのか？

違うやり方があった筈

違う道があった筈

違う居場所があった筈

自分がここまで来たのは・・・

違う道を選ばなかったのは・・・

「親がいなくても生きていけるように手配する、一生不幸が起こら

ないように守ってくれるヤツも紹介する

・・・お前が普通を望むならそうしてやれる」

グラハルトは迷いなくそう言った

いつもなら言う前に必ずはい、一度考えるための間が無い

きつとこの言葉を言うまでにたくさん考えたんだろう、考えて考えて選んだ言葉なんだろう

言ってしまったことを後悔しているのだろう、言わなければアリサに他の選択肢は無かった筈だから

アリサはそれをわかっていた

グラハルトの顔は兜に隠れて見えない

だが彼の雰囲気は明らかに後悔と、悲しみが混ざったような状態だからアリサは言った

「普通なんていらない、私が普通じゃないのは私自身が一番わかってるわ」

凜とした声が響き、確かな決意が感じられる

「守ってくれる人なんていらない、私は強くなったし、まだまだ強くなりたいから」

その声にはもう迷いなど感じられない
最初から選択肢は一つしかなかった
それを選んだだけだ

「・・・それに、親ならいるわ・・・そうでしょ？」

いつのまにかアルドラまで話をじっと聞いている

グラハルトはアリサの答えを聞いたたびに、目に見えて雰囲気明るくなっていくのがわかる

アリサはそれを感じて、クスツと笑いをこぼしながら最後の言葉を言った

「お父さん」

この後、結局生き残った豚によって三つの特別討伐対象が追加される

蒼犬・グラハルト

双剣・アリサ

悪魔・アルドラ

三つとも特別討伐対象としては最高ランク、世界そのものを破壊しかねない存在として「災害級」の名をつけられることになった・・・

入学まで（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます

累計PVは5000を超え、毎日100人近い方々が覗いていただける日々感謝しております

今回の話で個人的な一区切りと考えております

皆様の暇潰しの手伝いになれば幸いです

入学まで

「全然わからん！」

「・・・残念だったな」

そんな会話をしているのはアルドラとグラハルトだった

片や魔族と呼ばれる種族の祖先であり、闇魔法を人間に教えた開祖

片やその悪魔を平気で倒せる人間の枠を逸脱した超人間

二人の会話はその存在感を全て無視した、街の酒場で話すような切り出しで始まった

実際に街の酒場で話しているのだから間違いではないのだが・・・

「骨折り損だぜ

人間界どころか魔界に天界、命を賭けて魂界まで行ってきたつてのによ！」

ちなみに魔界は悪魔達が住む世界で、天界は天使や神と言われるような存在の住む世界、魂界はどちらでもない存在がいる世界だ
彼らが今いるこの世界と、それぞれの世界の間には空間の壁があり、物理的に干渉できず、しかるべき手段以外での世界間移動は不可能になっている

「五年前を境にしてプツリ詳細がなくなっちまう！

どこを探しても影も形もねえってのさすがに参った！

逆にここまで来ると、いきなり現れたつてのが現実的に感じられる

ぜ！」

「……」

アルドラはそう捲し立てるが、蒼犬は特に何も言わない

調べている対象である本人に言う台詞ではないのであるが、それほどに情報が集まらないということなのだろう

そんなことは気にならないとばかりに、蒼犬は話を促す

「……で？」

短い、彼なりに考えた結果の単語だ

余計なことを言って話をこじらせたりしない

単刀直入に用件だけを聞こうというスタンスなのだが、いささか短すぎると感じるのは決して気のせいではない

「ああ、そうそう

アリサが魔法学校の入学できる歳になっただろ？

万物の才能なら拒否されるわけねえってか歓迎されるだろうと思つてよ

どうすんのかなと思って聞いてみたかったのよ」

「……わざわざ呼び出してそれか」

「そりゃな

俺はアリサの味方になりてえんだ、アリサの動向くらいは知っておきてえ」

「・・・」

実際にはすでにアリサへの興味は薄れている
彼の興味は目の前にいる蒼犬に移ったからだ
とはいえ味方として判断されればそれはそれで有利に働くので、気を配ることを忘れない程度には気にしている

だがグラハルトはそんなことを気にして黙っているわけでは無かった

「・・・決めかねている」

アルドラは眉をピクツと動かし、驚いた様子で聞き返す

「なんでよ？魔法学校といやぁエリートに登竜門だろ？

アリサほどの実力と才能がありやあ道なんて選り放題だぞ
なによりあそこなら魔法が習得できるじゃねーか」

今の時点でアリサは無類の強さを誇る、もちろんこの二人を除いて
での話だが・・・

だがもちろん弱点もある

それが魔法だ

アリサは現在魔法が使えない

もちろん使い方がわからないわけは無いが、使える種類が極端に少ない

しかも本人が強いがために、魔法を使うより直接攻撃したほうが早い
という悪循環なのだ

主に使うのは照明代わりや火種を生み出すなどの低級魔法、しかも
攻撃系はほとんどなく補助系ばかりだ

魔法学校では、その名の通り魔法を教えている
前衛志望や官僚を目指している人間でも、一定レベル以上の魔法は
必ず習得しているくらいだ

グラハルトやアルドラが教えてもいいのだが、アルドラの闇魔法は
非常に危険が伴う

もし万物の才能で中途半端に強力な魔法を発動させて暴走でもしよ
うものなら、アリサ自身が危険になってしまう

グラハルトに至ってはそもそも教えられない、と以前に言っていま
っている

事実グラハルトでは細かい説明や詠唱の意味など全てすっ飛ばすの
で、とても教師として優秀とは言えない

「・・・重要性はわかっている」

グラハルトとしては魔法以外にも気にしたいところがあるのだが、
それを言葉にしないのが彼らしいといったところか

「・・・あれか？悪い虫が寄ってこないか心配だったか？」

「・・・」

「もしくはあれか？学生のうちに近づいておいて、利用しようとする
ヤツがいなかったことか？」

「・・・」

「ああ！あとはあれか！仲間ができちゃって離れ離れになるのがイ

「ヤか!？」

「・・・ッ!!!!」

最後の一言を言った瞬間、グラハルトから強烈な殺気が放たれた。その気配は冷気と錯覚するほどに強く、何が起ったかわかっていない者でさえも咄嗟に「死」という言葉が頭に浮かぶ。

「・・・親バカめ」

そんなグラハルトを気にせず、アルドラは話を続けた。

「なんにしても、アリサにとって不利になることはねえ。今後どうするにしても、アリサにとつちや魔法が使えて損はねえし、考えようによつちや対人関係の勉強にもなる。なんなら教師として俺が潜入してやろうか？」

「・・・それはいらん」

「そりゃ残念だ」

まあ利用してくるヤツもいるだろうが、どんな手を使ってくるかわかる機会にもなる。

男にしたってアリサほどの顔ならいまままでごまんと寄ってきてただろ？

最後のは・・・まあ騙されたんでない限り諦めるんだな」

アルドラとしては入学を薦めるようだ。

彼の思惑はわからないが、何かの策略や利用しようとしているわけではなく、単純にアリサのことを思っているの発言のようだった。

「あとはアリサ次第ってところはあるが・・・、まあ直接聞いても断りそうだな

お前さんが言うなら行くってくらいはありえそうだがよ」

グラハルトは考えることを止めた

彼なりに考えたことを実行に移すのだろう

「・・・金は置いていく」

そう言っただけでグラハルトは立ち上がり、酒場の出口へ向かおうとするアルドラはグラハルトが背を向けてから声をかけた

「魔法学校で、今ある噂が広まってる」

出ていこうとしたグラハルトは足を止めた

「・・・異世界から来た学生がいるってな」

「・・・」

グラハルトは振り返らずに酒場を出ていった

「・・・というわけだ」

場所は変わり、グラハルトとアリサが泊まっている宿屋の一室
男女が同じ部屋に泊まればいろいろ問題が起こりそうだが、義理と

はいえ親子なので問題ない
グラハルトも親として一緒に行動しているので、今まで一度もそう
いったことにはなっていない

しかし親子の会話としてはいささか短すぎる言葉にアリサは顔をしかめる

「つまり学校に行けってことでいいの？」

そう言われてグラハルトはどこからともなく書類の束を取り出す
ドサツとテーブルに置くが、結構な厚さと種類がある

「・・・必要な書類だ、・・・学園長の推薦書もある」

言われてアリサは書類を軽く確認する
入学願書、学園資料、入学の手引き、試験内容、試験会場案内、推
薦書等々・・・

「理由を聞いても？」

アリサとしては急に言われた話なので、考える時間が欲しかった
今まで通りの生活をこれからも当たり前前に続けていく、冒険者とし
て世界中を旅していくと思っただけに頭が追いついていないのだ

「・・・色々ある、・・・一番は・・・経験だな」

「色々経験してこいつてこと？」

アリサの確認にグラハルトは頷く

グラハルトの短い発言の意図を正確に読み取れるのは、長く共に生活してきたからこそだ

だからこそ、アリサはグラハルトが思いつきでこんなことを言い出したりしないことを知っている

グラハルトが言うからには、何かしら考えてのことなのだろう

だったら迷う必要は無い

何かさせたいことがあるならグラハルトは言ってくれる

言わないならそれはアリサが考えることに意味がある、考えて行動したことそれ事態に意味があるのだ

だからアリサは言った

「いつから？」

「・・・半年後だ」

入学まで（後書き）

お疲れさまでした、ここまで読んでいただきありがとうございます

これにて第一章とでも言うべき一つの区切りとなります

携帯投稿なので章の編集ができませんが、そういう感じなんだと思っただければ・・・

次回からはアリサの学園編になります

蒼犬さんはほとんど出てきません（笑）

今後も読みづらい書き方が続くと思いますが、それでも読んでいただける方々には感謝でございます

今後もしろしくお願いいたします

入学試験1（前書き）

アリサの学園編スタートでございます

なぜ学園物に手を出した、という意見は受け付けません・・・

入学試験 1

魔法学校

そこは将来のエリートを育成する学校

そこでは学生であっても、一般人からすれば英雄のような存在である
冒険者であれば学校出身というだけで勧誘されるほどだし、政治に
関わるものであれば学生のうちから味方につけるべき相手だ

騎士団に入れば将来の団長・副団長、才能があれば將軍クラスが約
束されたような存在なのだ

当然そんな学校なので、入学の条件は異常に厳しい
入学したらしたで、ついてこれない人間を甘やかしたりしない

しかしそんな現実を知って尚、入学したがる人間は非常に多い

年齢制限がないとはいえ、毎年定員の十倍近い人が集まる
貴族王族はもちろん、有名な冒険者の子供や知り合いなども集まり、
その付き添いで来る人間も多数いるために、試験の時期になると
んでもない人数が集まる

当然それを狙って商売魂を発揮する連中も集まるので、試験が近く
なるとそのへんのお祭りよりよっぽど盛況な状態になる

そんな大量の人間がいるなかで、試験会場に向かって真っ直ぐ歩く
二人組がいた

周りの人間はほとんどが気にも止めずに自分の用事を済ませようとしているが、時折何人かの人間は二人を見て「ソウケン」と呟く

本人達はそれに気づいてはいるが、気にすることなく真っ直ぐに歩いている

「すごい数の人、話には聞いてたけど見ると聞くとでは大違いね」

そう言ったのはアリサだ

めでたく16才を超え、入学の最低条件である年齢という課題をクリアした

見た目はほとんど変わっていないが、「可愛い」から「綺麗」と呼ばれるまでの変化の途中のような、この時期特有の美しい顔立ちをしている

薄い青の髪を肩まで伸ばし、目から覗く虹色の輝きは、彼女の美しさの引き立て役に思えるほどにしか存在を主張していない

「・・・もつと経験するさ」

そう言ったのはグラハルトだ

相変わらず黒に金の装飾が入った全身鎧と兜をつけており、表情がわからない

二人はその後特に会話をするでもなく、試験会場へと進んでいった

「・・・餞別をやる」

グラハルトは試験会場が見えてきたあたりで、唐突にそう言った

アリサはグラハルトから直接ものをもらったことなど数えるほどしかない

基本的に自分で倒した相手のものを売るなり、工房等で加工してもらう

さすがに食事や宿代などはグラハルトが用意するが、それ以外においては自分でやるのが基本であった

なのでグラハルトのこの発言はかなり珍しい

アリサは思わずクスツと笑みをこぼしてしまう

「フツ、どうしたの急に？そんなに心配？」

グラハルトは相変わらず表情が見えないが、きつと兜の下は照れているのだろう

明後日の方向を向いてアリサを見ようとしな

「・・・これだ」

そう言ったグラハルトの両手には、いつの間にか一本づつ剣が握られていた

アリサはその剣をじっと見つめ、自分の剣と見比べる

アリスが持っている剣は、決して強力なものではない
そのへんの武器屋でも稀に出回るような、業物より若干劣るか？と
いう程度のものだ
自分で集めた材料で、工房で自分専用加工してもらった一品物で
はあるが・・・

それと比べて、目の前の二振りの剣は明らかに業物だった

普通の長剣よりも短めの刀身は、細身でありながらも華奢には見え
ない

滑らかな表面は、油を塗っているかのように艶やかな輝きの鉄色を
している

両刃で何の飾り気も無い刀身の真ん中を、細長い小指ほどの太さの
溝が走っており、その溝の中には英語で文字が書かれていた

「なんて書いてあるの？」

アリスは見たことの無い文字を指差しながら訪ねる

「・・・Growth、・・・成長という意味だ」
グロウス

アリスは剣をじっと見つめて呟いた

「綺麗・・・」

「・・・剣の名前でもある、・・・俺の願い・・・でもある」

実はこの剣

グラハルトが持つ知識と技術と材料とコネクションを最大限使った、

業物なんてレベルを遥かに超えた一品だった

武器としての強さはもちろん、秘められた特殊能力は一流の冒険者でさえ喉から手が出るほど魅力的な効果がある

アリサはそこまで理解しているわけではないが、自分の剣と比べて明らかにレベルの高い剣を見て、グラハルトがどれだけ心配しているかわかってしまう

「フフツ、お父さんありがとう」

「・・・」

グラハルトはやはり照れているようだ

顔が明後日の方向を向いたままである

むしろそのまま歩いていてつまづかないのか心配になってしまいが、結局つまづくことなく試験会場までそのままだった

試験会場は街ほどではないにせよ、人がごった返していた

明らかな冒険者風の者もいるし、魔導師と思われる者もいる、中にはどう見ても戦闘なんてできなさそうな金ぴかの服を着たヤツもいる

（金ぴかのヤツはあの豚と同類ね・・・）

などと内心呟きながらアリサは会場を見回していた

「・・・あっちだ」

グラハルトはそう言って歩き始めた
アリサは観察を止め、グラハルトについていく
その先にあつたのはどうやら受付のようだ

「・・・頼む」

受付につくなりグラハルトはそう言うが、その単語だけで何を言いたいかわかる者は少ない
案の定受付の女性はきょとした顔をしているが、目の前の人物が蒼犬だと気づいたようで、驚いた表情になる

アリサはあわてて言い直した

「すみません、受験生は私です
おと・・・彼は付き添いです」

そう言つてアリサは受験願書と推薦書を渡す
受付の女性はすぐに復帰し、人の良さそうな顔で仕事を再開するが、推薦書の内容を見て再び驚いた顔になる

「・・・あの？大丈夫ですか？」

受付の女性はハツとなって復帰したが、その顔は上手く笑顔を作れていない

口角がヒクつき、悪役が嫌な笑いをしているようだ

その後受験票を渡され、指示があるまで周辺で待機となった

「僕を誰だと思っているんだ！」

無粋な声が響き、待機時間に緊張が走った

入学試験1（後書き）

お疲れさまでした

しばらくは入学試験が続きます
蒼犬の出番はしばらくありません（笑）

入学試験2

「僕を誰だと思っているんだ！」

試験会場に響いた無粋な声の発生源は、茶髪をぼつちゃんがりにした貴族らしいぼつちゃんだった

相手は金髪を肩まで流し、両サイドから三つ編みにした髪を後ろで纏めている女性だ

こちらも貴族なのだろう

身に付けているのは鎧なのだが、軽鎧の鉄色に金色で貴族が好みそうな模様の装飾がされている

腰に挿した長剣も気品を感じさせる装飾がされているが、それは決して見た目だけでなく、確かな性能のうえにされていることがわかる素晴らしい剣だ

対してぼつちゃんのほうは同じような模様だが、緑色の生地できた服にズボン

同じく緑色の下地に金色の装飾の鞘に収まった長剣を挿しているだがその剣が放つ気配は、相対する女性のものとは比べるべくもないほどに弱々しい

彼女はそれがわかっていているようで、強気に反論しはじめる

「ええ、聞いていましたわ

なんでも「蒼犬」から推薦を受けたらしいですわね？」

蒼犬という単語を聞いて本人はそちらに顔を向ける

当然その娘もそちらを見るが、二人とも話そのものより会話してい

る人物のほうに気がなつたようだ

「・・・見覚えのある顔だな」

「泣き虫レディ？」

二人の喧きは聞こえるハズもなく、当人たちは言い争いを続けている

「ハッ！わかつてるじゃないか！

その通りだ！その証拠に見るがいい！これが「蒼犬」がくれた剣だ
！」

そう言つて彼は剣を抜き放ち、それを天高く掲げてこれ見よがしに見せつける

相對する彼女はそれを見てフツと鼻で笑つた

「貴様！何がおかしい！この剣を笑うということは「蒼犬」を笑う
という意味だぞ！わかつているのか！」

ぼっちゃんはさらに激昂する

彼女はそれに臆することなく、淡々と話始めた

「そんなナマクラを「蒼犬」が授けた？バカ言わないでくださる？
彼が「捨てた」ものを「拾つた」て言うならまだ信じてあげますわ
第一魔法学校の推薦は職員以外で出すことはできませんわ
そんなことも知らないんですの？」

ぼっちゃんはその言葉を待っていましたとばかりにニヤリとして、

馬鹿にするような声で反論する

「おやおや、剣の良し悪しもわからないようでは剣を見せても意味が無いなあ？」

それに推薦のことくらい知っているさ！だが何事にも例外は存在する！

そして「蒼犬」といえば例外の塊のような存在だろう！？」

女性はぐつと言葉を詰まらせる

そう言われてしまうとその通りであるし、職員に聞けば確實だが試験の直前とあつては職員も忙しくて確認している暇は無いだろう

してやったりという顔をしているぼっちゃんを前に、女性は目尻に涙を浮かべてしまう

「また泣くのね、泣き虫レディ」

唐突にそう声かけられた

全員が声のしたほうを振り返る中で、女性だけが口答える
もはや条件反射に近いレベルでの反応に、彼女自身誰に向かって言おうとしているのか気付かない

「うるさいわね！泣き虫って言わないで！いつも言ってるじゃないのアリ・・・サ・・・アリサ！？」

言いながら気づいた彼女は思わず言い直してしまう

ゆっくりと振り返りながら声がしたほうを見ると、すぐに声の主が見つかった

なにせ人だかりが左右に割れて二人の間に障害物がなかったのだから

「な！・・・ななな！なんであなたが！ここにいらっしゃるのです！？それに後ろにいるのは！？」

「・・・昔と変わらん」

グラハルトはそう言うが、アリサはレディと呼ばれた女性の、ある部分を自分のそれと見比べてから呟いた

「・・・変わった部分もある、っていうか変わりすぎ・・・」

はあ、とため息をついてしまう
だがそれも仕方ない

レディは女性らしい丸みを帯びたシルエツトだが、無駄な肉の付いていない引き締まった体をしている
だがそんな体つきでさえ気にならないほどに、胸にある母性の象徴がこれでもかと存在を主張している

軽鎧で圧迫されているせいでできている谷間が、その大きさを容易に想像させている

対してアリサは小さくは無い、決して小さくは無いのだが、所謂16歳相当というか発展途上というかなんというか・・・
とにかくレディとは比較にならないサイズであるだけに、どうしても落胆してしまう

胸を凝視されていると気づいたレディはバツと両手で胸を隠し、顔を赤くしながら話す

「こ・・・答えになってませんわ！
なんであなた達がこんなところにいるんですの！」

「・・・なんてって」

「私も受験するのよ」

「はあ？なんでいまさら・・・ってまさかまだ魔法が使えないんですの？」

その言葉にあざとく反応したのはぼっちゃんのほうだった

「ダハハハ！なんだお前！魔法も使えないのにこの学校に入るつもりか！

剣の見分けもつかない女に魔法が使えない女とはいいコンビだ！

ここは僕のようなエリートが入る学校なんだよ屑ども！

そう！蒼犬に選ばれた僕のようなエリートが！！！」

もはやレディは彼の存在を忘れかけていた

ああまだいたの？と言わんばかりの呆れ顔でため息を吐く

「・・・だそうですねよ？」

「お父さんあんな知り合いいたの？」

「・・・見覚えが無いな」

三人が三人とも呆れた表情で・・・、いや一人は兜で見えないので雰囲気だが、とにかく呆れている

「貴様ら！わかっているのか！蒼犬だぞ！？

災害級特別討伐対象の蒼犬が推薦したんだぞ！？
その僕を馬鹿にするということは蒼犬を馬鹿にするということなんだぞ！」

フーツフーツと息を切らしながらそう言い切ったぼっちゃんだが、目の前の本物を見て気付かないあたり相当な間抜けである

どうしたものかと三人が考えていたとき、どこからともなく声が響いた

「その推薦書なんじゃがのう」

その声は会場全体に響いているようだった

「不正が発覚したので無効とさせてもらうことになったんじゃ」

ほとんどの人間が声の発生源を探して周囲を見回しているが、こんなじいさんみたいな声を出しそうな人物は見つからない

「残念ながら今年は同じように推薦書を偽造するものが多かった、これから職員が一人一人に対応していくから心当たりがあるものは覚悟しておくがよい」

言い終わるが早いか職員が来るのが早いかというタイミングでぼっちゃんの前に一人の女性が表れた

「というわけよ、あなたの受験票は剥奪します」

だがぼっちゃんは最初から用意してたであろう台詞を放つ

「ハッ！馬鹿を言うな！

他のヤツらは知らんが僕のは本物だ
おまえらが知らなかったただけだろう？

蒼犬は連絡もろくにしない場合だって珍しくないんだからな」

よどみなく、しかしはつきりと断定した

しかし蒼犬のことをよく知る学園長が勤める学校だ

この手の対応はいままで何度もあった

彼女はいままで通りの話で彼に説明を始める

「ではあなたにもわかりやすいように説明させていただきましようか
あなたの場合、蒼犬が書いた推薦書があることが問題なのではありません

蒼犬が推薦書を書いた・・・いえ書けたことが問題なんです」

きょんとした顔をしているぼっちゃんは、何を言われているのか
理解できないようだ

「この程度の情報は彼を少し調べればすぐわかることですが・・・
彼が推薦書を書くことはありえませんが

それは書かないという意味ではなく、書けないんですよ

・・・はつきり言ってしまうと、彼は文字は読めますが書くことは
できないんです」

ぼっちゃんはまだ頭が追いついていないようだ、硬直したまま動か
ない

「つまり推薦書が本物かどうかというよりも、推薦書があるという
時点でそれは偽物なんです

・・・ちなみにあなたと同じような手口を使った方は過去にもたく

さんいしましたが、あなたのやり方が一番下手ですね」

ぼっちゃんは汗をだらだら流しながら話を聞いているが、もはや何を言われているのかさえわかっていないだろう
追いつきをかけたのはレディとアリサだった

「一応教えてあげますわ、さっきから目の前にいる彼が真正正銘の蒼犬ですわよ？」

「・・・ついでに言うならあなたが馬鹿にした私は彼の娘よ」

バタンッ

それを聞いて顔面蒼白になったぼっちゃんが、そのまま白眼をむいて気絶してしまった音がした

静かになった試験会場に再び声が響き渡る

「さて、諸君！」

今度はさっきと違い、全員が同じ方向を向いた

その方向には校舎の正面玄関があり、その玄関から一人の老人がゆつくりと歩いてきた

「長らく待たせたのう！これより魔法学校入学試験を開始する！！

!

入学試験2（後書き）

ちなみにアリサは読むのも書くのも出来ます

万物の才能があるので、ギルドの書類等を見ているうちに出来るようになった

蒼犬が読めるけど書けない理由は・・・、いつか本編で書くかと・・・
・多分、いや必ず・・・、うんがんばります・・・

閑話・アリサとレディ（前書き）

読まなくても問題はありません・・・無いよね？

多分無いはずですよ

閑話・アリサとレディ

レイディアント・クラス・フォルナス

一流貴族と呼ばれるには一步足りない、二流貴族フォルナス家の長女である

フォルナス家が二流といっても、あくまで立場上の意味である
代々フォルナス家の当主は、武勲を持って統治を行ってきた家系である

それゆえに書類仕事や貴族同士の付き合いといったものへの比率が下がってしまい、結果的に貴族の中での立場は下がってしまう

ただしその戦闘能力に関しては個人・団体を問わず非常に高い
ゆえに国の騎士団が派遣されてくるのを待つことなく、私設兵团や当主一人で荒事のほとんどを解決してしまう

そんな経緯もあって領民からは非常に支持を受けていたし、貴族の中でも戦闘に関しては頼りにされていた

レイディアントはそんなフォルナス家の長女として産まれた
後に弟が産まれたが、間には実に7年もの年の差があったため、当主としての英才教育が始まってしまっていた

4歳で剣を持たされ、才能を発揮した彼女は将来当主に相応しいと噂された

7歳のときに弟が産まれた
自分が弟を守るんだと思い、ますます剣の腕に磨きをかけた

10歳のとき、両親が魔法学校へ入学の予定を伝えてきた
だが彼女は弟や両親と離れるのは寂しかったがために、その話を断
った

剣の鍛練はかかさなかったが、その後はどこか空虚な気持ちのまま
月日が流れていった

そして14歳

運命の出会いが訪れる

その日は屋敷に客人が来ていた
屋敷の使用人達がなにやら浮き足立っている
レイディアントは客人が誰なのか気にはなったが、父が自分と呼ば
ないということは何か理由があるんだろうと思い、いつもの鍛練を
しようと中庭に向かう

剣を二、三度振り、いつも通りの感触なのを確かめてからまず素振
りを始める

それが終われば訓練用案山子に向かってさまざまなパターンで打ち
込みをしていく
やがて自分が戦うイメージが固まってくると、今度は敵をイメージ
してそれと戦っていく
イメージするのは父親だ

何もない空間に向かってまるで敵がいるかのように戦うレイディアント

端から見れば子供のチャンバラごっこなのだが、遊びというにはレベルが高すぎた

戦っている相手が見えるような錯覚を覚えるほどに、彼女の剣舞は生々しく、実用的な動きだった

・・・とはいえまだまだ子供であるがゆえに未熟者

次第にイメージは薄れ、強い相手とどう戦うか？よりも、どういう技が決まったら楽しいか？という方向に変化していく

次第にイメージの相手は弱くなり、錯覚するほどに流れが見えていた戦いは、もはや遊びのレベルまで落ちている

そんなことを続けていると、突然後方から声をかけられた

「・・・ねえ」

レイディアントはつとしてそちらに振り返る

見れば屋敷の中庭に出入りするドアは開いており、そこから一人の女性がこちらを覗いていた

「あなたは誰ですの？」

レイディアントは言うってから客人の連れかもしれないと思った
だがそれを確認する前に、レイディアントにとって痛い言葉が発せられた

「アリサ・・・」

それよりあなた、どうして中庭で踊ってるの？」

「なっ！踊りですって！？これは・・・っ！」

言いかけて思う

自分は何を考えていたのかを

「・・・もしかして戦い方の鍛練？」

・・・だとしたら実用性に欠けてるんじゃないかしら」

「ッ！」

凶星を射された

レイディアントは自分の悪い癖だとわかっている

わかってはいるが子供は子供

自分のやりたいことを優先してしまう

だからこそ飾りなく言われた言葉は彼女の心に響いた

響いた言葉は悔しさに変わり、やがて悲しみに変わり、彼女の目には涙がいっぱいに溢れてくる

「・・・泣き虫」

アリサが追い討ちをかけるようにそう言ったが、レイディアントはその言葉で逆に踏みとどまった

「泣いでなんがいゝまぜんわゝ！！！！」

明らかに泣いているがそれでも気丈に振る舞う

赤いルビーのような瞳からはぼろぼろと涙がしたたっている

「・・・やっぱり泣き虫」

アリサはさらに言うが、レイディアントはそれ以上涙の量が増えることはなかった

代わりにアリサに対する敵意がどんどん増えていく

「大体あなたはなんなんですよ!？」

いきなり現れて人の鍛練はけなすわ泣き虫呼ばわりするわ!

失礼ではありませんこと!？」

アリサは気づいたような顔をしてから、何かを考えるような顔に変化し、時間をかけてから口を開いた

「・・・冒険者?」

「なぜ疑問系ですか?」

むむむ、と唸りながらアリサは考えるが、しっくりくる答えが出なかったようだ

答えを諦めて話題を逸らす

「それより、鍛練なら相手してあげようか? 相手がいたほうがわかりやすいでしょ」

「望むところですわ!」

一も二もなくレイディアントは頷いた
雪辱を晴らすつもりなのだろうが、雰囲気や立ち振舞いからして、
相手にならないことはわかつている

しかしそれでも父や弱い魔獣を相手にするよりいい鍛練になるはず
だと思ったようだ

「・・・痛くても泣かないでね・・・？」

アリサは軽く挑発してみるが、レイディアントは思いつきりひつか
かる
怒りのままに突っ込んでくる

この流れでアリサはレイディアントのことを気に入ってしまった
子供らしい素直な態度に、アリサは感じるものがあつたようだ

二人の鍛練は長く続いた・・・

「そんでよお！その馬鹿に俺はこう言つたわけよ・・・」

「・・・待て」

「そう、待て！ってな！あいつ犬みてーに大人しく・・・なるわけ
ねーだろ！

ちげーよ俺が言つ・・・ん？」

フォルナス家の屋敷の廊下を歩く二人は、窓から見える中庭の景色に目を止めた

片方はフォルナス家現当主、ゲイル・イシュゲンスト・フォルナス
もう一人は冒険者の蒼犬ことグラハルトだった

「おおっ！我が愛娘のレディじゃないか、まだ鍛練してたとは気合
い入ってるな！さすが我が娘！」

ちなみに親バカである

「・・・アリサか」

グラハルトはアリサをじっと見つめている
その目の優しさは、仲のいい人物ならすぐわかるほどに穏やかだ

隣にいる当主のように

「我が娘は完璧にして天才だ！

・・・だがそのせいでちょっと友達が少なくてなあ

・・・お前らしばらくこっちにいるんだろ？

あの子の相手をしてやってくれないか？」

グラハルトはすぐには答えず、ゲイルを一瞬見てから再び中庭の二
人に目を向けた

「・・・なんなら指導してやってもいいぞ」

「ハッ！そりゃ嬉しいねえ

完璧な我が娘が歴代最強の当主になるってのも悪くない！」

ゲイルはグラハルトから提案してきたことに驚いたが、すぐに喜びの表情に変わる

蒼犬の強さは誰よりもわかっていづつもりだっただけに、この提案にはすぐに乗ってきた

「・・・お代は寢床とうまい飯がいいな」

「ハッハッハッ！」

相変わらずだな！

ついでに風呂もつけてやる！」

二人は話を切り上げ、中庭に目をやる

そこにはアリサに負けたらしいレディが、必死に涙を堪えながら再戦を申し込んでいた

この日から実に一ヶ月

グラハルトとアリサはフォルナス家に滞在した

その間レディがアリサに泣かされた回数は・・・

たくさんとだけ言っておこう

ちなみにレディは頑なに断っていた魔法学校への入学を即効で決めた

自分が井の中の蛙であったことに気づいたらしい

「・・・泣き虫レディ」

「泣き虫って言わないで！いつも言ってるでしょアリサ！」

閑話・アリサとレディ（後書き）

アリサとレディの出会いでした

時期的にはアリサが二刀流になって少ししたあと、帰郷するまでの空白期間にあったお話になります

入学試験3（前書き）

キャラ増えた、管理大変、めんどくせ

うん、5・7・5とかなにやってんだろう

そのうちキャラ表とか裏設定とかネタバレが無い程度に作ります、
主に自分のために・・・

入学試験3

学園長が試験開始を宣言した

「き・・・緊張しますわ・・・」

「どんな試験内容なんだろう？」

アリスとレディは試験のことを考えて緊張しているようだった

関係ないはずのグラハルトまで、普段より構えた雰囲気を出している

「試験内容は毎年変わるくらいは知っておるじゃろう！

去年は正直やりすぎた！！！

去年も受けた者には謝っておこう！すまん！！

大事なこともなでもう一度言っておく

すまん！！！！

それを踏まえて今年の第一試験は・・・」

そこまで言ってから間を空ける

それと同時に、不正の処理をしていたハズの教師達が集まっていく

「教師陣から証明書を奪うことじゃ！

制限時間は開始の合図から3時間！

ルールは相手を殺さなければ何でも有り！

奪った証明書を今ワシがいるこの場所に持ってくれば一次試験突破
じゃー！」

ざっとルールを説明すると、教師陣が両手に何かを持ってそれを掲

げた

そして一人の女性（よく見たらさっきぼっちゃんの相手をした人だった）が、よく通る声でさらに説明する

「私達が持つてる証明書には限りがあります

その枚数は一人20枚

参加する教師は十八名

よってこの場で一次試験を通過できるのは三百六十名となります！」

ちなみに会場はざっと千人以上の人間がいる

単純計算でも三丁四人に一人しか通過できない計算だ

それを悟ったらしい参加者は、皆一様に殺気だつてゆく
会場は一気に緊張感が高まり、今にも戦いが始まりそうだ

「もちろん教師陣も殺さない程度ですが抵抗します
一人で戦うか、仲間と戦うか、自分で決めてください」

仲間と戦えば当然勝率はあがるだろう

だが例えば20枚しか持つていない教師に三十人で向かったら？
余った十人は誰にするのか？どうやって十人を決めるのか？

しかし一人で戦って勝てるほど教師は弱くは無い

仲間を見極め、必要最低限の人数で全員に分配ができる相手を選ぶ
必要がある

実はこの試験はそれを試す試験だった

もちろんそれ以外の方法もあるので、合格さえすれば評価の対象になるが・・・

次第に受験者は周りの人間を見回し、値踏みを始める

隣のヤツは倒すべきか仲間にするべきか？

むしろ自分はどう見られているか？

うまく利用されやしないか？逆に利用できないか？

全員が疑心暗鬼になりかけている中で、全く意に介していない人物達がいた

ある人物はこう言った

「簡単じゃねえか！三百六十人になるまで潰しあって、三百六十人で教師をボコりやいい！」

別の人物はこう言った

「ふふふ、手に入れたヤツを倒せば楽だ・・・」

ある人物は

「俺が教師全員に勝てばいいんだな！」

だがそんな連中がいる中で、誰もがその声を聞き取った

「なんだ、簡単ね」

周囲の人間は一斉にそちらを振り向く

声の発生源はアリサだった

「甘く見ないほうがよろしくてよ

ここの教師は正に一騎当千と呼べる猛者ばかり

・・・ちなみに一番強いのは左から三番目の方ですわね
彼は・・・」

バサアッとマントを翻す音がレディの言葉を遮った

グラハルトが出口に向かおうとして、わざと音をたてたようだ

「・・・この分なら・・・大丈夫そうだな」

そう言ってグラハルトは出ていってしまう

レディを含めた近くの人間は、あまりの言葉に硬直している

その中でアリサは再びよく聞こえる声で話した

「・・・レディの分もとってきてあげる」

レディはアリサに向かって軽く笑いながら返す

「あら、それは助かりますわ

ではあなたの背中まかせていただこうかしら」

ニヤつく二人の美少女は今か今かと開始の合図を待つ

それを見ていたかのように、学園長は話し始めた

「準備は整ったようじゃな！

それでは！始めるぞい！

一次試験開始じゃ！！！」

言うと同時に学園長が空に向かって炎を飛ばす

炎は空高く昇っていき、パアンと小気味良い音をだして弾けた

開始の合図が弾けると同時に、アリサは誰よりも早く飛んだ

それは高くではなく、早く・鋭く・まるで矢のように人々の上を通
過していく

わき目もふらずにアリサから見て左から三番目の男、長剣を携えた、
金髪を短く清潔に揃えた美男子に突っ込む

「む！」

教師はそれに反応し、長剣で迎え撃つ

アリサは常人には見えない剣速で、グラハルトからもらった双剣「
グロウス」を何度も振り抜く

（軽い・・・しかも空気の抵抗を感じない
・・・何より自分の腕みたいに扱える！！）

「むっ！くっ！ぬう！」

アリサの剣を防いでいるあたりやはり教師は強かったようだ

だがアリサの手数に押されて反撃できない
なによりグロウスから伝わるありえないほど重い衝撃が、彼の行動
に制限をかけている

あと十分持てばいい方が、などと教師が考えていたときにそれは起
こった

「む！？」

アリサの背後から無数の氷の矢が飛んてくる

しかもその数が、普通では考えられないほど多い

このままでは自分とはかく彼女がまずいと思った教師は、ひとま
ず後ろに飛ばうとした

そして気づいた

アリサ自身が邪魔になって見えなかった部分には、氷の矢が「無い」
ことに

騙されたと思った時にはもう遅い

証明書が入れてあった袋は浅く切られ、中からひらりと落ちる証明書

アリサはそれを剣で突き刺し、氷の矢が無い範囲に飛び込む

「むむむ・・・」

教師は追いかけてようとしたが、すでに後ろに飛んでしまったうえに前方から氷の矢が飛んでくる

「ぬん!!」

気合い一喝

教師の周囲は一瞬空気が膨張し、爆発のように空気を弾き飛ばす

氷の矢は弾けた空気に巻き込まれ、教師の周囲にあったものは全て吹き飛ばす

先ほどの二人はと言えば・・・

「一次試験・・・」

「突破ですわ!!!」

「むう・・・」

「ホッホッホッ、おめでとう二人とも」

証明書はすでに学園長の手に渡り、二人の合格を許した後だった

まさかの速攻攻略に、受験者は誰もが呆気にとられていた

さきほどの自信ありげだった者達でさえ黙っている

やがて最初に復活したのは、「みんな倒す」と言っていた男だった

「喝！！！」

ビリビリと空気が震え、受験者はみな一斉に目を覚ます

まだ試験中であり、自分がいつ倒されてもおかしくない中で呆けている暇は無い

「すげえ！すげえすげえええええ！！」

気合いを入れた張本人はまだ叫んでいた

「すげえ！あんなヤツがいるなんてすげえ！
いよつつし！

気合い入ってきたあああああ！！」

やがて彼の周囲は凄まじい熱気が漂い始める
彼が暑苦しい性格ゆえの錯覚では決して無い

体は赤く変色し、髪は炎のように揺めき、口から蒸気のような白い
煙を吐き出し始める

「炎鬼族・マキア！いざ参る！！！！」

ある人は言った

「ブハハハハ！あの姉ちゃんやるじゃねえか！オレも目立たせてもらうぜ！！」

そう言つて彼は手に持っていた巨大な槌を大きく振り上げる

「おおおりやあああ！ツールハンマー！！！！」

彼の槌が地面に向かって降り下ろされ、接触する

瞬間、響いたのは爆音

まるで雷が落ちたかのように轟いたその音の発生源では、「本当に雷が落ちていた

地面は軽くへこみ、近くにいた受験者は吹っ飛び、一部が焼け焦げ、全員が感電して痺れていた

「ブハハ！雷撃のバスター！痺れてえヤツからかかってきな！」

ある人はこう言った

「参ったね、あんなに早くちや奪うスキも無い・・・ま、おかげで教師に向かうヤツが増えて助かったけど」

そういう彼の手には証明書が握られている

そして彼の隣ではなんとか教師といい勝負をしているグループがいる

どうやら盗んだようだ

「ふふ・・・、彼女達をうまく利用できれば、この 그레이 様が学園のトップになれる・・・ふふふ」

波乱の一次試験

ここで活躍した今の五人は、今後この学園でさらなる波乱を巻き起こしてゆく

だが彼らはまだ、スタート地点にも立っていない

入学試験3（後書き）

毎日100人近い方々が読んでいただいているようで感謝感謝の毎日でございます

今後も頑張つて少しでも読みやすくてできるようにしていきますので、
よろしく願いします

入学試験4（前書き）

さらに新キャラ追加です

どこかで見た名前の彼です

入学試験 4

「一次試験終了じゃ！」

学園長はそう宣言した

開始から実に2時間と少し

証明書の最後の1枚が提出され、三百六十名の合格者が揃った

「合格できなかったもの達もよくがんばった！」

実力不足・試験との相性、単純に運が悪かったものもいるじやろう
合格しなかった理由は自分でわかっておるはずじゃ！」

力をつけてまた来年挑戦してくることを楽しみに待っている！」

最後に通過した受験者は、教師に案内されて校内に入っていく

「では、この場にいるみなさんは解散となります

諦めない意思があるならまた来年会いましょう」

ぼっちゃんの相手をしていた女性教師がそう言って解散となった

「二次試験を〴〵始めますよ〴〵、静かに〴〵してください」

そう言ったのは先程の校庭にはいなかった教師だ

間延びした声を出す穏やかそうな人物で、クリーム色の髪をポニテールにした糸目の美男子だ

耳が尖っているのが特徴的だ、エルフなのだろう

「あゝ、二次試験の内容は属性のゝ理解とゝ応用力のゝ試験でゝす近くの人でもゝ知り合い同士でもいいのでゝ、六人組になってくださゝい」

ちなみに今いる場所は体育館のような場所だ

三百六十名が余裕を持って入れるどころか、半分に別れて模擬戦でもできそうなほどに広い

一般的な体育館の4つ分くらいだろうか

受験者は一次試験で活躍していた者達に、我先にと群がっていく
当然アリサとレディにも大量の受験者が群がる

「是非一緒に！」

「いや俺と！」

「俺なら確実に役に立つから俺と！」

だが二人はすると人の波をかわし、目ぼしい人物を探していく

「レディ、誰かいい人知ってる？」

「そうですね・・・」

あそこの暑苦しい赤毛の人は炎鬼族のマキアと言って、かなり強い
ですわね

あっちの豪快に笑ってる槌使いは雷撃のバスター、こっちもかなり

の使い手ですわ

あ、あそこにいるのは・・・」

レディは次々と目ぼしい候補者を列挙していく

話を聞けばアリサも聞いたことのある名前がちらほら出てくる

しかしそういった人物はみな人に囲まれていて、近づくだけでも重労働だ

「お嬢さんがた」

不意に後ろから声をかけられ、二人は振り向く

そこにいたのは一次試験で教師から証明書を盗んで合格した 그레이 という男だった

「初めまして、 그레이・ティンカーと言います」

そこにいたのは胸当てのような鎧の上からフードつきのローブを纏い、顔を半分隠した男だった

黄緑色の髪がローブの端から出ている程度に長く、その髪に隠れて顔がよく見えない

「アリサ・・・です」

「初めまして「謀略」の 그레이 殿、 レイディアント・クラス・フォルナス、 フォルナス家が長女にございますわ」

レディの返答に 그레이 が驚く

「これは驚いた、私をご存じでしたか
目立たないようにしていたつもりなのですが・・・、参りましたね」

レディは油断なくグレイを見つめ、ちらりとアリサに視線をやった
アリサはグレイをじっと見つめ、彼を見極めたように話しかける

「一緒に受けましょう、あなたもそのつもりだったんでしょ？」

あまりにも呆気なく言うので、あれこれと説得を考えていたグレイ
は硬直してしまう

レディはさも当然といった顔で、特に驚いてはいないようだ

「あなたが言うなら大丈夫なんでしょね
よろしく願いしますわ、グレイ様」

レディはそう言って、グレイに顔を近づける
美女の急な接近に戸惑うグレイだが、レディが彼の肝を冷やす言葉を
を耳元で呟いた

「・・・彼女を一方的に利用しようと思わないほうがいいですよ
？」

そしてレディはすつと離れ、冷や汗を流しているグレイに続けて言
った

「私がいる限りそんなことはさせませんけど」

二人のやり取りを見ていたアリサは怪訝な表情だ

「何の話してるの？」

「フフ、何でもありませんわ」

グレイはレディとアリサを交互に見てから呟く

「一方的に・・・か

こちらから協力すれば大丈夫かな？
となるとさしあたってできることは・・・」

そう呟いたグレイは何人かを見る

「仲間の確保かな」

「マジで！わかった！すぐ行く！！」

そう言ったのは炎鬼族・マキア
願ってもない誘いにすぐさま頷く

「ブハハ！こっちとしても願ったり叶ったりだ！
よろこんで付き合っぜ！」

そう言ったのは雷撃のバスター
彼としてもそれを願っていたようだ

「あと一人か・・・」

グレイはそう言って会場を歩き回っている

アリサ達とは別行動をとり、仲間をスカウトしているのだ

炎鬼族のマキア、雷撃のバスカーを速攻でスカウトできたあたり、
「謀略」と言われるだけの实力はあるようだ

あと一人はどうするかと悩んでいると、アリサ達が誰かに声をかけているのが目に入る

近寄ってどんな人物か見てみる

「あら、グレイ様
もう終わったんですの？」

「ああ、二人は確保できましたよ
その人は？」

そう言って二人の視線が目の前の人物に移る

茶色の髪を短めで、ワイルド系にセットされている
意思の強そうな目は青く、澄んだ色をしている

身長は高くもなく低くもなく、グレイと同じくらいだ
身に付けているのは軽鎧だが、追加装甲が多く付いていて頑丈そうだ
何より大きな盾と、それに似つかわしくない短剣を持っているのが

特徴的だ

「ど、どうも・・・
アレックスと言います」

彼自身はまさかのアリサから話しかけられたことで、かなり緊張しているようだった

第一印象は悪くない好青年なのだが、グレイは彼のことをまったく知らない

見た目は冒険者のようだが、マキアやバスカーのように名が知れた冒険者ではないようだ

多少なりとも活躍していれば自分が知らないはずは無いという自信もある

少なくともグレイは彼に関する情報を何一つ持っていない

「レイディアント殿、彼はどんな人物なんですか？」

「レディで結構ですわ、私もグレイと呼ばせていただきますので彼については・・・、何も知りませんわ
ついでに言えばアリサも初対面ですわ」

初対面ということは適当に選んだということだろうか
だったら彼より強そうな人物を何人か知っている

彼は断って別の人に声をかけたほうが良い
グレイはそう考え、早速実行しようとする

「彼がいい、彼じゃないと多分ダメ」

アリサがそう言った

グレイを真っ直ぐに見てそう言った

まるで心を読んだかのようなタイミングで言われてしまい、グレイは結局何も言えなくなってしまう

すると豪快な笑い声が聞こえてきた

「ブハハ！炎鬼族の兄ちゃんと一緒になら楽しそうだ！」

「ハッハッハッ！俺も雷撃と一緒になら心強いよ！」

バスカーとマキアが近づいてくる

「・・・確保した二人が来ましたよ
これで六人ですね」

「この二人を確保とは・・・さすがですわね、グレイ」

アリサは二人をジーっと見ているが、問題なかったようだ
短くよろしく、と言って挨拶をする

そのまま教師にパーティーメンバー表を出して待機になった

「はーい、時間切れ」

エルフの教師が宣言し、パーティーごとに集まっているのを見て頷く

「みなさんなかなか頑張りましたね」
「さつそく試験内容を説明しま」す」

受験者は生唾を飲み込む

パーティー前提の内容であるはずの試験なのだから、当然それなりに厳しい内容であるはずと予想できる

だが教師が話した内容は、全く違うものだった

「内容は簡単」

「パ」ーティ「」メンバー「」全員合わせて「」基本属性の「」魔法の矢が「」全て使えるパ「」ーティ「」を組めた人達が「」合格で「」す

あ「」、虚偽報告が無いように「」、簡単なテストは「」しますからね「」」

つまりこれもまた、仲間を見極めるテストだった

焦ったのはとにかく頭数だけ揃えたパーティーと、実力だけで集まったパーティーだ

魔法が使えないのはアリサだけではない、生粋の前衛として生きてきた者達も受験している

そういうメンバーが多いパーティーは、この内容に愕然とした

アリサ達は「」

「おいおい「」「」俺は雷意外は風しか使えねえぞ」

「いいじゃないか、俺は火以外はまるでダメだ」

「私は火・風・闇は使えますが、それ以外は初歩も使えませんね」

「私は水・雷・光の魔法の矢なら使えますわ」

「・・・となると地属性が足りないですわね」

上からバ斯卡ー・マキア・グレイ・レディである

レディはアリサをちらっと見てみた

「・・・私は全部使えないわよ？」

「ですわよね・・・」

となると・・・」

全員の視線が茶髪の彼、アレックスに向いていく

「えっと・・・、魔法の矢なら一応全種類使えます」

・・・アレックスが仲間であつたと心底安心するパーティーメン
バーであつた

入学試験4（後書き）

というわけでアレックス登場です

彼と蒼犬との話もそのうちに・・・

入学試験5

二次試験はアレックスの活躍により、問題なく終わった

特定の属性以外には破壊できない案山子を、全員で破壊するという内容であったが、アレックスは全種類を使えるのですぐに終わった

（それにしても・・・）

グレイは不思議な感覚だった

自分でさえ知らなかったアレックスという存在を、まるで試験の内容を知っていたかのように的確に見つけ出したアリサ

否定しようとした自分を抑え込む発言といい、自分も含めた優秀な人材が引き寄せられるように集まる不思議といい、アリサにはただならぬ何かを感じる

じつと彼女を見つめ、やがて彼はアリサの目を見る

（・・・？）

何か普通と違う違和感がある

黒目は珍しいがないわけじゃない

顔は綺麗だが顔だけの女なら他にもいる

一体何が違うのかと考えていると、アリサがこちらを見つめていることに気づいた

（・・・虹色・・・魔眼！？）

グレイはアリサの黒目の周囲に、虹色の輝きがあるのことに気づいた

（彼女は祝福された者！？万物の才能を持った存在！

・・・これは参った、・・・鳥を掴んだつもりでドラゴンを掴んでいたとは・・・）

万物の才能とはすなわちあらゆる存在に祝福された者のことだ

あらゆる者に祝福されるということは、あらゆる者が味方をするということ

動物も、植物も、精霊も、大気や大地、運でさえもが彼女の味方だ

それに気づいたグレイは驚きで動けなくなってしまう

それに気づいたレディが話しかけた

「気づきましたのね？」

さっき私が言った意味もおわかりになりました？」

「・・・ふふ、精々「敵」だと思われないように頑張りますよ」

グレイとレディはそのまま三次試験の会場まで黙って歩いていった

三次試験の会場は校舎の奥に広がる森の中らしく、エルフの教師が案内している

二次試験にて通過したのは結局二百名といったところだった

魔法の属性が揃わなかったパーティーはもちろんだが、単純に六人

パーティーにならなかったグループも以外と多かったようだ

最初が千人以上いたことから考えれば、ずいぶん減ったものだ

今年の定員が何人かはまだ公開されていないが、この中の半分程度しか合格しないだろうと誰もが予想していた

誰もが不安を抱えて歩く中で、三次試験会場である森の入口に到着した

「到着」

じゃー、あとはお願いします」

「ご苦勞様

ではちゃつちやと三次試験に移ろうかね」

そう言った教師は獣人のようだった

姿形こそ人間だが、犬歯が鋭く尖り、体の所々に虎のような縞模様が見える

筋骨隆々の体のうえには、黒と黄色のメッシュになったボサボサの髪が載っている

「三次試験の内容を説明するぞ！

内容はこの森の中にあるアイテムを取ってくること！

二次試験で組んだパーティーごとに行動してもらう！

持ってくるアイテムは各パーティーによって違うから注意しろ！

制限時間は無し！ただし先着九十名15パーティーが合格した時点で終了、その九十名が今回の合格者になる！」

怒声に近い野太い声が、一気に説明をする

どうやらこの三次試験が最後で、今回の合格枠は九十名らしい

さらに細かい捕捉が説明されていく

「どのような場合であっても、合格するまでに死者を出したパーティーは失格だ！同じく殺した場合も全員失格！

逆にアイテムを提出した時点で死者がいなければ、誰か一人が提出した時点で全員合格！

提出後に死者が出た場合でも欠員の補充は行わない！

なお、このパーティーは入学後も暫定的に利用する！できるだけ全員生き残るほうが懸命だぞ！」

やたらと死者についての説明が多いが、そんなに危険な内容なのかと受験者は緊張する

だから「それ」を考えている者達以外は気づかなかった
本当に危険なのは試験内容では無いということに・・・

「ではそれぞれのパーティーはリーダーを決めてくれ！
リーダーはここに集合！試験用アイテムを配布する！」

獣人の教師に言われて、各パーティーは話し始める

アリス達のパーティーは迷うことなくアリスで決まったようだ

「・・・なぜ私？」

アリサ自身は不満なようだが・・・

「じゃあ適当にその箱を持ってくれ、中には腕輪が6個と番号の書いたメモが入ってる

番号は俺に言ってくれ、対象アイテムを教える」

そう言っただけで教師が指差したほうを見ると、綺麗に箱が並んでいる

アリサはリーダー選定の速さから必然的に一番に選ぶことになった

(・・・これかな?)

適当に箱を一つ持ち、中身を確認する

真ん中に青い宝石が着いた腕輪が6個と7と書いてあるメモが入っていた

教師のもとに戻り、メモを渡す

「7か・・・、対象アイテムは・・・っと」

教師は資料を確認して、アイテム名を教える

「ふむ・・・、ついてるな

対象アイテムは初代学園長の墓石の欠片だ

近くに行けば腕輪の宝石が赤く変色していくからわかるはずだ
さっき言ったルール違反をすると碎けるから気を付けろ

他のパーティーが終わるまで待機していてくれ」

アリサは言われた通りに戻り、腕輪を配っていくついでに聞いた内容を話していく

「初代学園長の墓石？それだったら簡単ですわね」

話を聞いて最初に言ったのはレディだ

「レディ、どういう意味ですか？」

簡単と言ったレディに疑問をぶつけたのはグレイ

「いや、確かに簡単だぜ」

初代の墓つつたらあれだろ？なんつつたか？」

バスカーまでもが簡単、と言つのはさすがに驚いたようだ

「もったいぶらずに教えてくれよ！頭使うのは苦手なんだ・・・」

それでいいのかとツツコミが必要なセリフはマキアだ、学生になる
うという人物が言うセリフでは無い

「俺も聞いたことがありますよ、それ」

アレックスも控えめに答える、どうやらそこそ有名な話のようだ

「・・・先生も「ついてるな」って言ってた
どうということ？」

アリサも聞いた話を言ってみるが、全く検討がつかない

「だって初代の墓と言ったら・・・」

「シツ、始まるみたいですよ」

教師は最後のパーティーが腕輪を装着したのを見てから声を張り上げた

「全員準備はいいな！

そろそろ開始するぞ！」

緊張感が高まっていく中、不意にグレイは「それ」に気づいた

ごくりと生唾を飲み込み、仲間に危険を伝える

「みんな・・・開始と同時に全力で走るぞ・・・」

グレイのその言葉で全員が周りを確認する

そして全員が「それ」に気づいた

「そういうことか・・・、全員か？」

「ブハハ、思い付かなかったのは俺達だけみてえだな」

マキアとバスカーが言うが、顔はあまり緊張していない
冒険者あがりの彼らにとってはよくあることなのだろう

空気を知ってか知らずか、教師は試験を開始するために口を開く

「それじゃあ始めるぞ

三次試験・・・開始だ！」

開始の宣言が言われるやいなや、アリサ達以外のパーティーが一斉に戦闘を開始した

魔物と、ではなく隣にいた「人間」のパーティーと・・・

当然、アリサ達にもパーティーは襲いかかるが

「走れ！」

アリサ達は全員が森の中へ向けて走り出していた

グレイの発言により、全員がこの事態を予想し、走る準備をしていたからこそその迅速な行動だったが、気づかなければ誰かしらが被害に合っていたかもしれない

「ひゅ〜」

危機一髪だったなこりや、危ねえ危ねえ」

「参りましたね・・・」

これじゃあ試験中気を付けるのは、魔物ではなく人間ですね」

「とつとと合格すればいいさ！

簡単なんだろう？」

「そうですね、早く課題を済ませるのが一番安全そうですね」

「・・・どこを目指せばいいの？」

「初代の墓ですか、俺も見るのは初めてですが・・・
噂通りなら恐らくは・・・」

そう言つて話を知っている三人は森の前方、何もない暗闇の先を見る

「「「真の闇の中だ」ですわ」らしいです」

入学試験6（前書き）

気がついたら累計PVが一万件を越えていました（。□。；

みなさまに自分のこのような読みづらい説明少ないストーリーわかりづらい作品を読んでいただけるなんて感謝の限りでございます

あまり自分の作品を不出来だと言ってしまうと、読んでいただいている皆様に失礼にあたるかと思いますので、今後は毎日見ていただいている100人以上の方々のためにもあまり言わないようにしていきます

人物紹介は一万突破記念ということで作成中です、この「入学試験」が終わったら投稿しようかと・・・

それでは続きをどうぞ

入学試験 6

「真の闇の中？」

アリサはそう聞いた

「どういう意味ですかね？ただ真っ暗な場所に行けばいいんですか？」

続けて聞くのはグレイだ

「だったら簡単だな！

よし！走るぞ！」

すでに走っているのにそう言ったのはマキアだ

ちなみに今の三人はもちろん、答えを知っている三人も走っている
わりと全力失踪に近い速度なのだが、木々にぶつかることもなく、
会話する余裕があるようだ

「さすがにそんな簡単じゃねえ

が、間違っちゃいねえ」

バスカーが言う

とりあえず暗い場所には行くようだが、それで終わりというわけでもないようだ

「……つまり暗い場所で何かをすればいいってこと？」

アリサがまとめる

リーダーとしての能力を無自覚に発揮している様子に、レディがにやつきながら答える

「正解ですわ

どうすればいいかは知っていますから大丈夫として・・・問題は場所ですわね

普段ならともかく今の状況では、下手な場所ではまずいですわよ？」

現在、アリサ達以外のパーティーはほとんどが潰し合いをしている

今回の最終試験参加者は総勢二百十六名・36パーティーが残った
そして合格枠はその半分以下、九十名・15パーティーしか合格できない

しかもパーティー単位での合格となれば、個人としての力量が足りていても不合格となってしまう

その逆もまたありえるが・・・

そうになると、単純に頭数が多ければ試験内容から考えても有利にとが進む

数を増やせるルールではない以上、減らす方向に思考が向かうのは容易に想像できるだろう

特に優秀な個人を抱えるパーティーは、それだけで合格に近い位置にいると言える

優秀な個人がいないパーティーほど、早くこの考えに至り、早く実行に移した

つまり・・・

他パーティーの拘束だ

全てを拘束する必要がないこともまた拍車をかけた

単純計算で半分以下の数になるなら、1・2パーティーずつ拘束すれば済む

要は15パーティーが、安心して試験をこなすことができればよいのだ

アリサ達のパーティーは 그레이의危機察知により、一番にこの状況から脱出したとはいえ、依然として合格の第一候補なのだ
いつ同じ受験者から狙われてもおかしくない状況なのである

そのため全力で走り、安全な距離を稼ごうとしているわけだが・

・

「とにかくもつと奥まで進みましょう

幸い答えがわかっていようですから、安全な場所を見つけてからでも問題ないかと」

그레이はそう言いながらアリサを見る、リーダーの判断を仰ぐ……
という意思表示のようだ

「そうしましょう」

アリサはそう返し、さらに加速した

その瞬間にズドンっと思いがしたかと思うと、アリサは土埃をあげながらミサイルのような速度で走り始めた

「ちょー！」

「はや！」

「ほ・・・本気じゃなかったんですか・・・」

「俺全力なんですが・・・」

「相変わらず無茶苦茶ですわね・・・」

「『ぜー、ぜー』」

アリス達はしばらく進み、少し開けた広場のような場所で休憩していた

回りには今までと同じ森が広がっているが、一方だけに巨大な穴の空いた岩がある

その穴はとても大きく、横方向には人間が五人くらいなら余裕で並べるほど大きい

縦方向は少し背の高い者ならぶつかってしまいそうだが、どうやら地下に向かって続いているらしく、少し中に入ればかなり広くなるようだ

「ぜー、はー、ふう・・・」

と、とりあえずいい場所が見つかったんじゃないか？」

バスカーが息も切れ切れにそう言ったが、アリス以外のメンバーはまだ回復していないようで、座り込んだり両膝に手をついたり天を仰いだりして回復している

「はぁー、はぁー」

そ、そうですね・・・げほっ・・・
この洞窟なら・・・ふう・・・大丈夫そうですね・・・」

レディもやっとな回復してきたようだ

ちなみに深刻そうなのはグレイだ、顔が青いし先程からほとんど動いていない

持久力順位としては

アリサ 壁 バスカー レディ マキア アレックス

壁 グレイ

という順番になっている

「・・・グレイは鍛え方が足りないわね」

「「「いやいやいや」」」

レディ・バスカー・マキアが一斉につっこむ

アレックスは苦笑いしている

グレイは燃え尽きている

グレイが回復するのを待つて洞窟に入り、一行は「真の闇の中」が示す通り、入り口の光も差し込まない奥へと進んでいく

「灯火よ！トーチファイヤ！！」

「光よ！トーチライト！！」

「電光よ！トーチボルト！！」

全員が何かしらの属性の魔法を使い、灯りを灯す

アリサは魔法が使えないと聞いていたレディ以外は少なからず驚いていたが、彼女の強さなら直接攻撃したほうが早いという説明で納得していた

「確かにあんな速さで動かれちゃな・・・」

「中途半端な魔法だったら追い付きそうな速さだったしね・・・」

「・・・お父さんのほうが早い」

「「どんな親だよ」」

父親が誰か知っているレディは「確かに」などと言っているが、知らない四人にとってはアリサより早い人間というだけで脅威の存在のようだ

ちなみにグラハルトが本気で移動を行うと、空気の壁にぶつかる少し手前くらいの速度が出る

もちろん気軽にだせるわけではなく、色んな好条件と魔法による全力強化・保護がある状態で1秒ほどという話だが・・・

少なくともこの場にいる誰よりも早いことは間違いない

「・・・普通じゃない・・・らしい？」

「疑問系にしなくても普通ではありませんわよ」

この会話に反応したのは以外にもアレックスだった

どうやらアレックスはグラハルトとアリサのことを知っているらしい

「もしかして・・・お父さんって「蒼犬」のこと・・・だったりします？」

「ブハハ！アレックス！

そりゃ面白い冗談だ！

確かにアリサの親父さんが蒼犬だったらこの強さも納得だ！」

「ハッハッハッ！そうだぞアレックス！

確かに蒼犬だったら納得だ！だが蒼犬といたら災害級特別討伐対象だぞ？

連れがいるってのは聞いたことあるけど、確かそいつも討伐対象だったはず

こんなところにいるわけないだろう！」

「普通はそう考えますわよね・・・」

笑い話で終わりそうだった会話を続けたのはグレイだった
顔が笑っておらず、だらだらと汗をかいている

「いや待て」

口がひきつりながら、自分が言おうとしている言葉が信じられない

と言った表情をしている

「あ・・・蒼犬の連れは・・・青い髪をした女性っていう噂・・・聞いたことないか・・・？」

アレックスがさらに続けた

「ついでに言うなら双剣使って話もありますよ・・・？」

バスカーとマキアは笑いが止まり、そのままの顔で硬直してしまった

「・・・さらに言わせていただくなら、その連れは万物の才能持ちという噂もよく聞きますわね」

万物の才能と聞いた二人は汗を流し始める

その噂が正しいなら、その連れは目に虹色の輝きがあるはずだ

ギギギという音が聞こえそうなほどに硬くなった首をなんとか回した二人は、アリサの方をじっと見つめる

「・・・？」

不思議そうに顔を傾げるアリサのその姿は、美少女という言葉が似合う悩殺ポーズと言える威力を誇っている

・・・が、アリサを見つめる二人には、その効果を及ぼすことはできなかった

なぜなら二人はアリサの両目に輝く、虹色の輪を見つけてしまったからだ

「・・・マジで？」

「マジで」

「やっぱり・・・」

聞いたのはバスカーとマキア

答えたのはレディとグレイ

一人納得しているのがアレックス

「・・・何の話？」

話がわかっていないのがアリサだった・・・

入学試験6（後書き）

補足説明

アリサは有名になってきたという内容が以前ありましたが、この時点では名声だけならバスターやマキアのほうが上です
顔や容姿などもグラハルトと同レベルの仕事をする人やその周りの人物なら、「そう言えばそうだったね」程度の認知度です

彼女を見ただけで「双剣」だとわかる人はあまりいません

この辺は本編では説明しないと思いましたので記載しておきます

入学試験7

「まさか双剣ふたつるぎがアリサのことだったとは・・・」

マキアが言いながら洞窟を進んでいく

「ブハハ！言われてみりゃ納得だぜ！」

バスカーが頭の上に雷光の照明魔法を輝かせながらそれに続く

「私はアリサに会うまで筋肉ムキムキの男みたいな女性だと思ってましたよ」

グレイが周囲に気を配りながらさらに続く

その後ろにレディが続き、アリサとアレックスが一番後ろについている

「あ・・・あのアリサ・・・さん」

「アリサでいい

どうかしたの？」

先程からアレックスは挙動不審になり、何かを言おうとしては引っ込めるといふ作業を繰り返していた

やっこの思いで言ったかと思えば、アリサが返事をしたことで再び同じ作業に戻ってしまう

さきほどと違うのはアレックスの顔が真っ赤になっていることから

いだろうか？

「・・・あ・・・蒼犬さんに会わせてもらえない・・・かな？」

汗をだらだら流し、真っ赤に染まった顔でそう言うアレックスは、まるで告白しているかのように真剣な表情だ

それに対してアリサは涼やかな顔で返事をする

「試験が終わったら迎えに来てくれると思うわ」

それだけ言っただけで歩いていくアリサだが、アレックスが気合の入ったガッツポーズを決めているのを見て、思わず小さく笑ってしまう

「そんなに会いたいのか？」

「当たり前じゃないか！蒼犬と言ったら「おう！ここならいいんじゃないか？」む？」

アレックスが蒼犬について熱く語り出す直前に、バスカーがタイミング良く割り込んでくる

「確かにちょうどよさそうですね
ではここでやりましょうか」

レディも納得したようなので、アリサも確認しようと前に行く

「あ・・・」

何故か寂しい感覚に捕らわれたアレックスは、無意識に手を伸ばした
伸ばした手を見てから、何故手を伸ばしたのかわからず、掌をぐつ
と握りしめる

そして掌から前のほうへ視線を移した

そして移った視線の先には・・・「笑顔」のアリサがいた

「後でね」

短く言われた言葉はアレックス以外には届いていない

だがアレックスにとっては何よりもはつきりと聞こえた

今まで聞いたことがないほど甘い声、癒されるような優しい響き、
無条件で味方になりたいと思える魅力的な雰囲気

・・・アレックスはアリサの後ろ姿を見つめたまま、彼女の言葉を
何度も思い出していた

一行が到着したのは幅広い通路の壁に空いた横穴の中だった

穴の中に入ってみると、何もなかった広い空間があるだけで、不
自然なまでに起伏のないドーム状の場所だった

ここまで何もないと罫でもあるのではないかと疑ってしまうほどに
何もない

「ここは・・・？」

「こりゃあどうやら当たり引いたか？」

「みたいですわね、多分参拝用に作られた洞窟だったのかもしれない
せんわ」

「確かに魔物の気配がありませんでしたし、納得できる話ですね・
」

上から順にマキア・バスカー・レディ・アレックスである
グレイとアリサは何をするかわかっていないので、話を聞いている
だけだ

「で、何をすればいいんだ？」

同じくわかっていないマキアが聞く

「んや、難しいことじゃねえよ

とりあえず灯りを消してみようぜ、完全な暗闇にならねえと意味ね
えからな」

バスカーに促されてそれぞれの魔法を消していく
一つ、また一つと消える度に闇に近づき、最後の一つが消えると真
っ暗になる

周囲を確認することもできず、お互いがどこにいるかもわからない
ほどに暗い空間が広がっている

「これなら大丈夫ですわ、説明しますので聞いていただけますかしら」

レディが闇の中からそう言ったが、不思議なことにどこから声を出しているのかわからなかった

察知能力に長けているグレイやアリサでさえもが、今レディがどこにいるのか把握できない

「ここは既に初代の墓のすぐ近くですわ、特殊な魔法による条件付きの空間と考えていただければよろしいですわ」

レディの言葉をバスカーが引き継ぎ、相変わらずどこにいるかわからない声で話す

「さっきも言ったがやるこた難しくねえ

この状況の中である行動をすればいいだけだ

残念なことに成功しちまうと、別の場所に行っちまうから俺達は最後にやる」

「で？何をすればいいんだ？」

バスカーの言葉を受けてマキアが質問する

マキアも答えを知らない身であるので、何も見えないこの状況はそれなりにストレスなようだ

「バスカーさんも言っていますが、難しくは無いですよ

ただし本人の感覚による部分が大きいので、できない人は時間がかるかもしれません

・・・まあ俺も初めてなので自信はありませんが」

アレックスがマキアに答える
言い方から察するに、ここにいるメンバーなら問題ないということらしい

「あんまり焦らさないでください、他の受験者に見つからないうちに早く済ませましょう」

グレイの懸念も最もだった

他のパーティーが潰し合いをしているとはいえ、いつその状況が終わるかわからない

抜け出すパーティーもいるだろうし、早く終わるだけの強力なパーティーが揃う可能性もある

偶然彼らのパーティーが課題のために近くに来て、こちらを拘束しようとする可能性は無いわけではない

「そうですね

やることは魔力を手に集めて手探りで探す・・・それだけですわ」

「ただし簡単じゃねえ

気づいてると思うが、この場にいる限りお互いの居場所はわからねえしかも「それ」は魔力で覆った部分じゃねえと触っても感触がねえし、すり抜けちゃう」

「さらに厄介なことに「それ」はまだ墓では無いので、地面から生えているとは限らないんです

何もない空中にあるかもしれませんし、どんな形なのかも実はわかっていないんですよ」

答えを知っている三人が一気に説明する

要するにこの状況でだけ出現する「何か」を捕まえればいいらしい

「触ったら勝手に転移するからな、俺が一定時間ごとに声をかけるから返事してくれ」

説明が終わると全員が探し始めた

探し始めてから5分ほど

最初になくなったのはアリサだった
さすがと言うべきか、あらゆる存在が味方をするというのは伊達ではない

ただ、レディだけが嫌な感覚を感じ取っていた

「バスカー、嫌な予感がしますわ
悪いですけども先に行かせていただきますわ」

「ん？ああ、わかった
まあマキアは苦戦するだろうからな、向こうでゆっくり休んでくれや」

「助かりますわ」

そう言ったレディは探し始め、数分としないうちに探り当てたよう
で、すぐに声が聞こえなくなった

「嫌な予感・・・ね
何もなけりゃいいが、女の勘ってのは当たるからなあ・・・」

バスカーの呟きは未だに探し回っている三人に届くことなく、闇の中に溶けるように消えていった

「ふう、ここはどこかしら？」

転移したレディは、先程まで歩いていた洞窟と同じような通路に出ていた

「おかしいですわね・・・？前にお父様と来たときは墓石の前に出たはずなのですが・・・」

ちなみにレディの父親と現在の学園長は友人である

繋がりは蒼犬ことグラハルトを通じてなのだが、二人はグラハルトに苦勞をさせられた者同士ということで、非常に仲がいい

典型的な前衛型と、同じく典型的な後衛型というのも理由の一つである

余談だがレディの父親はアリサと違って完全に魔法が使えない、魔力が無いわけではないので様々なマジックアイテムを使っていたが、魔法が使えないという一点のみが原因で魔法学園の入学を断られたという経緯がある

閑話休題

そんな親を持つレディは何度か学園長とも会っているし、初代の墓も一度来ている

その時と今の状況との違いに戸惑いを感じ、嫌な予感ほさらに大きくなってしまう

瞬間

洞窟全体が揺れるような振動がレディを襲う

同時に魔物の咆哮らしい響きが洞窟内の奥から聞こえてくる

「っ！まさか・・・！」

レディは走りだし、魔物の咆哮らしい音が聞こえた方に向かう

「相変わらず！厄介事を！引き付けて！くれます！わね！」

最後の一言と同時に、洞窟の最奥部らしき場所の入り口に到着する中を見渡せば墓石がある、アリサがいる、できればそれだけで終わってほしかったとレディは思ってしまう

墓石とアリサ以外にその場にいたのは・・・

「GYAAAAAS!!」

轟く咆哮には圧倒的な存在感を含ませ、雑魚ならそれだけで逃げ出しそうな恐怖を感じさせる

太腕と足は人間の胴より太く、強力な力を秘めているのが見ただけで伝わってくる

指の先に輝く爪は重厚な雰囲気を感じだし、生半可な武器では返り討ちに会ったのが目に見えている

鱗に覆われた体は巨大で、アリサの身長は軽く3倍はある

巨大な体の上にある顔は長い首によってつながり、ズラリと凶悪そうな牙を見せつけるように半開きになっている

その半開きの口からは、炎の揺らめきが見えるのが特徴的だ

そこにいた存在の特徴を一言で言い表すならば・・・

「ド・・・ドラゴン・・・!？」

入学試験 8

アリサは暗闇の中で何かの存在を感じ取った

何かは何であつたのかはすでにわからないが、確かに存在を感じて近づいた

確かにそこに何かがあるのだが、触ることもできない

（・・・あ、魔力か）

やり方を思い出して改めて触れてみると、確かな感触と共に突然前方に穴が開いた

穴はすぐに広がり、やがて周囲の景色を写し出しながらアリサの周囲に広がっていった

「・・・墓・・・だ」

周囲は先程まで歩いていた洞窟と同じような景色をしているが、不思議なことに照明がいらぬほどに明るかった

そしてアリサの目の前には、一つの墓があつた・・・

墓といっても質素なもので、長方形の形をした板のような石が立っているだけだ

石の表面には色々と書かれているが、それが初代の墓だということはずぐにわかる

なぜなら、ただの板であるはずのその墓石からは、普通ではありえない程に魔力を放っていたのだから

「・・・これで課題は達成・・・かな？」

アリサは一人呟きながら、墓のぼろぼろになって、手で簡単に壊れそうな部分に触った

そう「触って」しまった

瞬間

アリサの頭の中に声が響く

（万物の才能よ）

アリサはどこかで聞いたような声を聞きながら、課題の欠片が取れたので腰につけたポーチにそれを突っ込む

（汝案ずることなかれ

汝は生きることそれ自体に意味がある

自らの生を否定するなかれ

自ら選んだ全てに意味がある

汝生きる限り迷いを抱く辛い人生を送るだろう

だが諦める必要はない

自分の行いが正義か悪かを考える必要はない

汝が行うことが正義だ）

頭に響く声を聞いてたアリサは笑っていた

何故ならそんなことはもう知っているから

そんなことはグラハルトが全て教えてくれたから

「世の中には正義も悪も無い・・・だよね、お父さん・・・」

ちなみにグラハルトはこの後に「殴りたいヤツか、殴らせたくないヤツしかない」と続けるのだが、アリサには上手く重要な部分だけが伝わっているようだった

呟いた言葉を受け取ったように、再び頭の中に声が響いた

（決して忘れてはならぬ

汝に起こる全ては試練だ

そして汝に起こる試練は決して優しくは無い

ゆえに信じよ

汝が生きてきた結果を

汝が手に入れてきた力を

汝が手に入れた仲間という宝を）

声がそう言っていると、墓石が形を変え始めた

急激な膨張を始め、まるで肉のように唸り蠢き、石だった表面は生き物の肌のように変わり、一つの形に変わっていく

中に浮かび上がったそれは、ドラゴンの形に変化すると、地震のような振動とともに地に降り立った

「GYAAAAAAS!!」

（汝試練を乗り越えよ）

「ド・・・ドラゴン・・・!？」

レディは目の前の光景を信じられないでいた

世界でも最強レベルの生物が目の前にいて、しかも明らかな戦闘態勢をとっているのだ

何よりも、アリサがそのドラゴンに対して立ち向かおうとしているのだから余計に信じられない

「アリサ！逃げますわよ！」

アリサはレディに気づいたが、言葉を聞いて首を振った

・・・横に

「なっ！なにを・・・」

レディが言い終わる前に、アリサはドラゴンに向かって駆け出していた

ドラゴンは口を大きく開き、今にも炎を吐き出そうとしているが、アリサは迷う素振りすら見せずに真っ直ぐ走る

「馬鹿っ！ああもう！」

レディは魔法を詠唱し、アリサとドラゴンの間に滑り込ませる

「水流よ！渦巻け逆巻け押し流せ！アクアトルネード！」

水系の中級魔法アクアトルネード

大量の水が竜巻のように回転しながら敵を巻き込み、水流による衝撃と圧迫を与える魔法だ

中級なだけあり、なかなかの威力を持つが、炎系に対して圧倒的な有利を誇るといのが最大の特徴だ

当然ドラゴンの炎を遮るように放たれたそれは、アリサに向かうはずの炎を全て遮る

「・・・フッ！」

アリサは飛び上がり、ドラゴンの顔の辺りの高さに至ると、両手に持ったグローブで切りかかった

細身の剣からはありえないほどの衝撃を伴い、ドラゴンに斬撃が襲いかかる

しかしその鱗は硬く、衝撃によってよろめきこそしたが、傷をつけるには至らない

「貫け！アイシクルアローー！！」

追い討ちをかけるようにレディが魔法を放つ

一次試験で使った氷の矢がドラゴンに襲いかかる

だがドラゴンはそれを確認し、大きく口を開く

「……………!!!」

瞬間

音にならない音が放たれる

大音量で発せられたその轟音は爆発のような破壊力を持ち、雷のよう
に一瞬で周囲に届く

放たれた氷の矢は爆音に吹き飛ばされ、巻き込みながらレディに跳
ね返ってきた

「……………ぐ……………うう」

だがレディは耳を抑えてうずくまり、とても対応できない
目の前に氷の矢が迫っていることにすら気づいていないのかもしれ
ない

「レディ!!!!!!」

アリサは叫ぶ

だがレディに声は届いていない

アリサ自身も少なくないダメージを受けているため、すぐに駆け出
すことができない

（それでも!）

アリサは無理矢理体を動かし、自分に出来る全力で飛ばうとする

「G A A A ! ! !」

だが飛び出す直前、ドラゴンが二人の間に立ち塞がり行く手を阻む
その間にも氷の矢はレディに迫り、今にも彼女を貫こうとしている

今のアリサでは、ドラゴンを退けつつレディを助けることは出来ない

レディが死ぬシーンを想像してしまう

だが・・・

「我が盾は完全無欠！シールドオブシールド！」

レディと氷の矢の間に誰かが入り込み、魔法の膜を出現させた

膜は二人を包むようにドーム状に広がり、氷の矢の侵入を防いでいる

氷の矢が無くなり、レディの前に立っている男は巨大な盾を持っていた

反対の手には盾に似つかわしくない短剣を携えている

「危機一髪・・・ですね」

そこにいたのはアレックスだった

「闇の波動よ！我が敵を押し潰せ、磨り潰せ、噛み砕け！ダークウエイブ！」

さらに闇の魔法が放たれ、ドラゴンに襲いかかる

アリサは見覚えのある魔法にまさかと思うが、知っているものとは威力も範囲も違いすぎた

「まさかウォードドラゴンとはね・・・
これは参りましたね」

魔法の発生源を見ると、そこには 그레이 がいた

魔法をくらったドラゴンを見て呆れた表情をしているが、それもそのはず、無傷で立ち上がるドラゴンは目に見えて怒気を放っているからだ

「ウォードドラゴン・・・
竜族の突撃兵ですか・・・、かなり手強い相手ですね・・・」

アレックスは立ち直りつつあるレディを庇いながら、油断なくドラゴンを見据えて呟く

「・・・倒せない相手じゃない」

アレックスがはっきりと口に出したことで、全員が再び臨戦態勢を取る

ドラゴンもそれを感じ取ったようで、明らかな戦闘体制をとり、体をやや前屈みに構え全員を見渡す

「来ますわ！」

レディが言つや否や、ドラゴンは猛烈な勢いで 그레이 に突進していく

その勢いは岩をも砕きそうなほどに早く、力強い

グレイはあまりの速さに反応できず、来るべき衝撃に備えて体を強張らせる

「盾よ！汝を支えるは魔神の腕なり！パワーシールド！」

誰よりも早く反応していたのはアレックスだった

ドラゴンとグレイの間に入り込み、その巨大な盾でもってドラゴンの突進を受け止める

「ぐううおおおおあああ！！！」

だが完全に止めることが出来たわけでは無いようであった
地面に足がめり込み、削りながらズリズリと後退していく
なにより盾を支えているアレックス自身が、顔中から脂汗を流し、
今にもドラゴンの勢いに負けそうだ

それを確認したアリサとレディが同時に飛び出し、ドラゴンの左右から仕掛ける

が、ドラゴンは口を大きく開き、爆発の咆哮を放とうとしていた

「まずっ・・・」

息を大きく吸い込み、今にも放たれようとしていた瞬間・・・

「どっせえええい！！！」

炎の塊がドラゴンに上から衝突し、開いた口を無理矢理閉じさせる小規模な爆発を起こしながらぶつかったそれは、ドラゴンから離れながら一言言った

「ドラゴンとは燃えるぜ！」

炎鬼と化し、全身を炎のように揺らめかせるマキアがそこにいた

「レディ！」

「アリサ！」

マキアの攻撃で怯んだ隙に、レディとアリサが一斉に攻撃を加える

片や衝撃を伴う無数の斬撃が

片や魔法を連続で放ちながら剣自体が魔力を帯びた斬撃が

「闇よ貫け！ダークアロー！！」

止めとばかりに 그레이가魔法の矢を放つ

魔力を収束させ、強力な威力を持たせた矢を一本だけ生み出す

高速で打ち出された矢はドラゴンの眉間に突き刺さり、浅くない傷をつけて霧散していく

ギリりと音がしそうな視線を 그레이に向けたドラゴンは、炎を吐き出すために上体を起こし、炎が溢れる口を開いた

「GOOOOA！！」

吐き出される炎は周囲を焼きながらグレイに迫る

「炎鬼族をなめるな！」

と言いながらマキアが炎に飛び込んだかと思うと、マキアが炎を吸収しはじめる

それに伴ってマキア自身が纏う熱気が上昇していく

「炎鬼流・爆炎衝撃！」

マキアは正拳突き of 構えから、寸分変わらず正拳を繰り出す

どこぞの海賊キングを目指す伸びる男の兄が使うような巨大な炎の拳が出現し、ドラゴンを飲み込むように突き進む

「ウォードドラゴンに火は効かない」ってことはわかってるよ！」・・・
・そうですか」

グレイの忠告を遮ったマキアは、ドラゴンのやや上方を見ていた
そこは先ほどマキアが突っ込んできたあたりだ

ドラゴンはニヤリとして見せ、突進しようとマキアを睨み付けてから力を溜める

そして突進のために足の力を解放した瞬間

「どっせえええい！！」

マキアと全く同じ掛け声でもって、バスカーが頭上から突撃してきた
得意とする雷撃の力と相まって、落雷の如く轟音を響かせ、ドラゴ

ンの頭に会心の一撃を加える

走り出す瞬間だったドラゴンは急激に加えられた予定外のベクトルによって、その勢いを残したまま盛大に転倒し、転がりながら壁に激突した

「ブハハ！ドラゴン退治たぁいい試験じゃねえか！

試験ってからにはこれくらいねえとな！」

起き上がるドラゴンを見据えながら、バスカーがゆっくりと歩き対峙する

それに合わせるように全員が集まり、同じようにドラゴンと対峙する

緊張の時間が流れ、その流れを断ち切るようにアリサが呟く

「・・・行こう」

その言葉を皮切りに、戦いは再開された

入学試験9

ウォードドラゴン
戦争竜

竜族の突撃兵として有名なドラゴンであり、その脅威度は他種族のそれを圧倒的に上回る

戦時においてはウォードドラゴンだけで戦争が終結してしまうこともままある

ドラゴンという存在はそれほどに畏怖すべき存在であり、戦時においてほとんどの人間が最初に目撃するであろうウォードドラゴンは、死の前兆と呼ばれるほどの存在である

ドラゴン自体の生態系がよくわかっていないこともあるが、ウォードドラゴンはどういうわけか戦争以外での目撃例が極端に少ない故に研究がほとんど進んでおらず、実際に戦った者達の話から「火系に強力な耐性がある」「異常に強力な防御能力を誇る」「爆発のような咆哮をする」といった程度の情報以外はほとんど存在しないそれはつまり対策がたてられていないということであり、倒す方法は対峙した者達が手探りで考えるしかないのだ

そういった経緯があることから、ウォードドラゴンは特別討伐対象とまではいかないが、ギルドにおいて常に出ている討伐報酬対象に常時・どこのギルドにおいても指定されている危険生物になっている

そのウォードドラゴンが今、実際に出現して暴れまわっていた

場所は変わり、三次試験が開始された森の入り口

その場所にはロープでぐるぐる巻きにされ、あるいは気絶し、あるいはよく意味のわからない魔法のようなもので拘束された受験生達
がいた

それとは逆に、意気揚々と座り込んでいる受験生達もいて、ある者は武勇伝を語り、ある者は拘束された者達を解放しはじめている
どうやらパーティー同士の戦闘は終結したようで、座り込んでいる
受験生はすでに通過したパーティーなのだろう

獣人の教師は毎年の光景であるとはいえ、涙まで流している合格者・
失格者を見て自然と微笑んでしまう

涙を流すほど喜んでいる合格者ならば、今後の生活でも挫けること
なく成長するだろうから

涙を流すほどに悔しがっている受験生ならば、さらに強くなって来
年こそ合格できるだろうから

微笑ましい光景を眺めていると、森の奥から不意に怒号が響いた

地鳴りのような、雪崩でも起きたかのような不気味な響き

受験生も気づいたようで、森の奥を全員が眺める

真つ暗な道が続くだけの森の奥からは、確かに地鳴りのような音が
聞こえるが、一向に正体はわからないまま時間が過ぎる

何かあったと判断した獣人の教師は通信用らしい魔道具を取りだし

（見た目は紐で繋がった三角形の石が二つあるだけ）、誰かに通信を始める

通信相手と繋がった直後に、森の奥から受験生らしいパーティーが現れ、衝撃の言葉を発した

「ド・・・ドドド、ドラゴンだ！ウォードドラゴンが森の奥に！！！」

・・・魔道具が地に落ち、沈黙の瞬間が訪れた

教師がドラゴンの出現を知る少し前
アリサ達は激闘を繰り広げていた

「外に出ちまったぞ！どうするよ！？」

バスカーが怒鳴りながらも、雷撃の名の通り雷を纏った鎚をドラゴンの頬に叩きつける

「どうもこうもない！

広場に行く前に倒すしかないだろう！」

グレイは答えるが、魔法の準備を中断することはない

「闇の波動よ！我が敵を押し潰せ、磨り潰せ、噛み砕け・・・っ！」

魔法を詠唱するグレイに向かって、体制を立て直したドラゴンがす

さまじい速度で突進してくる

「盾よ！汝を支えるは魔神の腕なり！パワーシールド！」

アレックスが割って入り、ドラゴンの突進に真っ向から衝突する

「・・・っ！ダークウェイブ！」

魔方阵が展開され、その外周から炎のように揺らめく闇が出現する

ドラゴンを飲み込み、周囲を粉碎しながら広がっていく

「他の受験生が巻き込まれないうちに！カタを！つける！しか！無い！」

マキアが言いながら打撃を繰り返す

炎鬼族の名の通り、マキアは火系以外の攻撃手段は直接攻撃しか持たない

故に炎のプレスから仲間を守る以外ではこうやって攪乱に徹しているだがそれも強靱な鱗の前にはほとんど意味を成していないようだった

「少なくとも！時間を稼げば異変を察知した教師達が来てくれるハズ！です！わ！」

同じく攪乱に回っているレディだが、こちらは剣に冷気を纏わせて攻撃しているようだった

魔法剣というのは非常に難易度が高く、術者が意識をし続けないとすぐに効果が切れてしまう高等技術なのだが、レディは効果を切らすことなく難無く振り回している

マキアと違ってこちらはそれなりに効果があるようで、煩わしそう

に時折ドラゴンがレディへと攻撃しようと振り向く
今もまたレディに向かって、爆音の咆哮をしようと構え・・・

「させない！」

上方からアリサの斬撃をくらう

斬撃と言ってもアリサの持つ双剣「グロウス」から放たれるそれは、
細身の剣からはありえないほどの衝撃を伴う
たった二度、片方一度づつ振っただけの斬撃は、意図も容易くドラ
ゴンを閉口させ、爆音を放つことを許さない

「・・・これだけやつても目に見えるダメージは無し・・・ですか、
いやはや参りましたね・・・」

그레이が呟いた通り、多少の傷は出来ているものの、動きを阻害す
るほどには至っていない

むしろ怒りによって動きが機敏になってきており、直線的な動きが
多いとはいえ、一つ一つの攻撃が小細工を許さないほどに早い

「・・・ふーっ」

アリサが呼吸を整え、静かにドラゴンを見据える

（・・・信じよう、お父さんがくれたこの剣なら・・・
グロウスならきつと貫ける・・・）

アリサは剣をちらりと見ると、まるで頷くようにグロウスが光を反
射した

「・・・よろしくね」

誰にでもなく呟いた言葉は誰にも届かず、ただアリサとグロウスにだけ響いた

ドラゴンは何かを感じとり、アリサに矛先を向けて突進していく

全員がドラゴンのいきなりの方向転換に戸惑い、対応が一瞬遅れた

「GYA A A S ! !」

「.....!! ! !」

瞬間

アリサから矢のような光がいくつも飛び出し、距離という概念を無視するようにドラゴンに突き刺さってゆく

強靱な鱗を貫き、鉄のような肉に刺さり、岩のような巨体に飲み込まれる

「ウー！ア！ア！アア！アアアア！」

次々に放たれる光はやがて狙いを外れ始め、ドラゴンを狙ったであろう光は検討違いの場所に突き刺さる

体を貫かれたドラゴンはバランスを崩しながらもアリサをしっかりと見据え、氣力を振り絞って突進を続ける

だがアリサは攻撃を止めない、止めるわけにはいかない
今こそ千載一遇のチャンス

同じ攻撃は恐らく二度と出せない
それほどに激しく消耗していく

「アリサア！」

レディが叫ぶ

奮闘虚しく

ドラゴンはアリサに激突した

土煙が舞い、アリサの攻撃が止まる

パーティーの誰もがアリサの死を覚悟し、悲しみに泣き崩れようとしていた

「・・・そんな・・・アリサ・・・」

レディががつくりと膝をつき、悲しみに涙を浮かべた時だった

「・・・壊れてない」

アレックスが気づいた

試験のために着けた腕輪

腕輪を着ける理由となったルール

腕輪の機能

腕輪に着いた宝石は赤く輝き、「砕ける」ことなく静かに佇んでいた

意味を理解したパーティーは、アリサがいた場所を見る

ドラゴンが突進した場所を見る

ドラゴンの鼻先を、アリサと衝突したであろう場所を見る

やがて土煙が晴れ、何が起こったかが判明する

土煙の中から片手が表れ、それがドラゴンの進行を遮っている

やがて姿を表した男は、片手でアリサを抱き抱え、片手でドラゴンを抑えるというなんとも英雄染みた姿で立っていた

その男はこの場にいる誰もが知り、誰もがその英雄染みた状態を納得できる人物だった

その場にいたのは・・・

「お父・・・さん・・・」

「蒼犬」ことグラハルトがそこに立っていた

入学試験 10

「お父・・・さん・・・」

英雄染みた状態で立っているのはグラハルトだった

恐るべきはドラゴンを片手で止めている圧倒的なパワーであろう

その突進に正面からぶつかり合っていたアレックスが一番に眩く

「ありえない・・・」

さらにグラハルトはその片手でドラゴンをつしりと固定し、思い切り足で蹴り飛ばした

「GA!？」

顎を真上に蹴り抜かれたドラゴンは、上体を仰け反らせながら後方に吹き飛んで行く

今度はアレックスだけでなく、それを見ていた全員が眩いた

「・・・ありえない・・・」

グラハルトは腕の中にいるアリサに視線を向けた

宝物を扱うような慎重な手つきで抱え、そのまま地面に横にさせる
慈しむような、それでいて成長した姿を嬉しく思うような雰囲気で
アリサの顔を覗きこむ

「お父さん・・・、まだ・・・できなかったみたい・・・」

アリサはグラハルトにそう言った
恐らくは先ほどの攻撃のことを言っているのだろう

「・・・まだ早い」

返すグラハルトの言葉は相変わらず短い
だが雰囲気を感じ取れるアリサにとっては、その言葉だけでも十分
だった

グラハルトから伝わる雰囲気は温かく、無理をするなど言いたいの
だろうというのが伝わってくるのだから・・・

「・・・手本を見せてやる」

そう言って立ち上がり、肩越しにドラゴンを睨み付ける

瞬間

周囲は冷気に包まれる

正確には冷気ではなく殺気

恐怖、という名の物質を直接ぶつけられたかのような圧倒的な殺気
気の弱いものならそれだけで気絶しそうになるほどの重圧

どこぞの海の盗賊キングを目指す人達が使う覇色の覇みたいな
ゲフンゲフン

「形態変化！デュエルナイト！！」

グラハルトの声とともに、魔方阵が幾重にも重なりながら球体の形
になっていく

やがて姿は変わり始め、黒だった鎧とマントは青く、蒼く、空の色
よりも暗く、海の色よりも黒く、深海のような青色に変化してゆく
金色のラインだけが美しい輝きを保ち、悪を連想しそうな青い姿に
正義の印象を与えている

鎧は簡素化されていき、重鎧だったそれはすでに軽鎧と言える

二の腕、太ももを覆っていた装甲は消え、胸こそ残っているが腹の
部分は無くなった

もはや面影はフルフェイスの兜しか無いが、その兜も下顎にあたる
部分が無くなり、口元が見えている

何よりの特徴として、持っていた剣が変化していた

バスタードソードは魔方阵と融合し、二つに別れていた

その形状は日本人なら誰もが見覚えがあり、男性なら一度は憧れたであろう伝統的な武器

二振りの日本刀だった

「なんじゃありゃあ？

あんな魔法見たことねえぞ」

遠巻きに見ていたバスカーが驚愕の声をあげる

だがその言葉に返事をできる者はこの場にいなかった

「独特な武器の二刀流・・・？蒼い鎧・・・？

もしかしてあれって・・・」

アレックスが独り言のように呟き、蒼犬の姿をじっと見つめる

「全盛期・・・いや、初期の蒼犬ですか

蒼犬が蒼犬と呼ばれる由縁ですね・・・」

グレイが言葉を続け、アレックスと同様に蒼犬を見つめる

「蒼犬・・・あれが・・・」

マキアはただ目の前の光景に啞然としている

何か思うところがあるようで、睨むような視線をグラハルトに向けている

「・・・少し離れましょう、彼が本気なら見境がなくなりますわ」

レディが唯一落ち着いているが、それは蒼犬以上にアリサのことが気になっているからだろう

蒼犬ではなくアリサのほうをじっと見ている

そのグラハルトはドラゴンを睨み続けていた

低く腰を落とし、両手を左右に開いている

刀身だけがドラゴンに切っ先を向けており、今にも飛んでいきそうな威圧感を放っている

緊張の時間が過ぎ、見ているだけのレディ達でさえ冷や汗を流し始める

誰かの汗が流れ落ち、音とも言えないほど小さい・・・小さすぎて聞こえないハズの音をたてた

ポトツ・・・

「G A A A R U U A A A ! ! !」

ドラゴンは目を見開き、意を決して突進した

「急ぐぞ！」

「わかつてまゝす」

「あなたの場合はわかつてなさそうなのよ！」

森の中を走り抜ける三人がいた

獣人の教師・エルフの教師・一次試験の時の女教師だ

木々が密集する森の中を危なげもなく、かなりのスピードで駆け抜けていく

「それにしてもウォードラゴンとは・・・、一体どうしてこんな場所？」

「さあ？」

まゝでも、心配はしないんじゃないですか？
彼がゝ行ってますしゝ」

「万が一ということもありえる

・・・とにかく急ごう、考えるのはあとだ」

三人は考えを中断し、先を急ぐ

馬なみの速度が出ているはずなのだが、三人は木にぶつかるところか、木が避けているのでは無いかと思うほどにスイスイ進んでいく

「見えた！あそこだ！」

ドラゴンの巨体を確認した三人はその場まで飛び込むように走り、その光景を目撃した

ドラゴンが蒼犬に向かって思い切り突進しているところだった

蒼犬は呟くように言葉を紡ぐ

呟いた言葉は普通であれば誰にも聞こえないような音量だった

だが何故か、その言葉はその場にいた全員が聞き取ることが出来た

「鬼神四刀流・・・」

途端に膨大な量の魔力が流れとなって周囲に吹きすさぶ

その場にいた人間は戸惑い、何が起きているのか理解さえできない

「人間」は・・・だ

魔力の暴風をものともせず、食い破らんとばかりにさらに突き進むドラゴンは見えてしまった

グラハルトの肩、肩甲骨の辺りから左右に一本づつ

都合四本の腕と、それぞれに剣を構えた姿

明らかに人間ではないその姿を見て、ドラゴンは初めて後悔した
相対した時点で逃げなかったことを・・・

「四刀鬼神光剣！！」

瞬き（まばたき）の間と書いて瞬間と呼ぶ

まさにその言葉が示す通り、瞬きを一度する間に無数の青白い光が飛び出す

アリサが放ったものと似ているが、より力強く、より早く、より多く、なにより正確にドラゴン目掛けて飛んで行く

光はドラゴンにぶつかり、突き刺さる等という生易しい結果で終わることは無かった

決るように肉も骨も全て吹き飛ばしていく

鉄のような硬さも、岩のような厚さも、物理的な攻撃の範囲も全て無視して貫かれる

わずか一步を進むことさえ許されず、ドラゴンは見る見るうちにその強靱な肉体を失い、抵抗という言葉を考える暇さえ与えられないわずか3秒、ドラゴンという巨大で強力だった存在はもはやいない残っているのは恐怖という感情を目に宿らせた、顔が半分吹き飛んでいる肉の塊だけだった……

「これが蒼犬さんですか」

「……瞬きの間に一人を殺し、それを見ている間に隊を潰す状況を確認している間に全滅させられる……」

「戦場で蒼犬を見たなら何を持っててもまず逃げる・・・か、有名なセリフだな

・・・冗談だと思ってたんだが」

三人の教師が目の前で起きた光景に言葉を漏らす

一騎当千と言われる彼らをもってしても、蒼犬の存在はとても信じられない相手のようだった

「うむ、確かに受け取ったぞ！合格じゃ！」

学園長がそう言って、アリサから課題のアイテムを受け取った

「うむ、以上を持って今回の定員15パーティー九十名が通過した！よって試験は終了とする！」

学園長の宣言により、通過者は一斉に声を張り上げる

「合格したものは気を引き締めよ！まだ出発点にたったばかりじゃ！合格できなかったものも気を引き締めよ！自らに足りなかったものをしっかりと見定めるのじゃ！」

・・・ま、それも明日からでいいからのう

今日はちゃちゃっと帰ってしっかりと休むといい
そんじゃ解散〜」

学園長の宣言に従い、各自がバラバラに散っていく

アリサ達はすぐには動かず、お互いの健闘を称えあっていた

それも長くは続かず、最後に「また明日」と言って別れていく

やがてアリサもグラハルトの元へ行き、宿へと歩き始めた・・・

「・・・合格おめでとう」

「うん、ありがと・・・」

それに・・・助けてくれてありがと・・・」

グラハルトは試験会場に向かっていた時と同じように、明後日の方
向を向いたまま歩いていった

以下余談

「そういえば、推薦書って意味なかったような気がするんだけど？」

「・・・筆記試験が免除される」

「筆記試験なんてあったんだ・・・」

「・・・バカほど推薦書を欲しがる」

「それってつまり偽造した人達は・・・」

「・・・頭の使い方を間違えたバカさ」

入学試験10（後書き）

お疲れ様でした

ここまで読んでいただけるとは感謝の限りでございます

この話にて第二章とも言うべき入学試験編は終了・・・と見せかけてもう少し話がつながります（笑）

もちろん携帯投稿なので章編集しておりませんが・・・

いずれパソコンから編集しないと・・・

読んでいただける皆様にはこの場を借りて感謝をさせていただきます

ありがとうございます

まだしばらくは話がストックしてありますので、お付き合いいただければ幸いです

蒼犬と愛犬家（前書き）

皆様いつも読んでいただきありがとうございます

内容をご覧いただく前に報告を一つさせていただきます

累計PVが1万5千件を突破いたしました！うひゃほひふはー！

毎日見ていただいている方々も日々増えていくのがとても嬉しいこと
とで毎日チェックしてまいります

お気に入り登録が増えるたびにドキドキが止まりません

えーそんなわけで設定や説明などに関する話を制作しようかと考えて
おりますのでお楽しみにしてください

また感想や意見やつまんねえよこの野郎、こうすればいいんだよ的な
話はいくらかでも受け付けておりますので、思いつくところありましたら
よろしく願います

治せる部分は頑張って治していきます

それでは本編をどうぞ

蒼犬と愛犬家

ある宿屋の一室

高級宿の高級な部屋らしい一室に、一人の男が姿見の鏡の前に立っていた

身長は180センチを軽く超えている

さらさらの髪の毛は白に近い銀髪で、肩まで伸びているが、決して不潔な印象は無い

目鼻立ちは異常に整っており、イケメンもイケメン、モデルや俳優なみに格好良く、西洋系と東洋系のいいところ取りをしたような顔立ちをしている

鎧の下に着るような体にぴっちりフィットした服を来ていて、筋肉質な体つきがはっきりとわかる

その体つきも、筋肉ムキムキマッチョというわけではなく、所謂細マッチョという見栄えするスタイルをしている

鏡で自分の姿を確認しながら、男は独り言を呟く

「・・・もう5年・・・か・・・

人生は何かするには短く、何もしないには長すぎる・・・か、誰の言葉だったかな」

男は鏡に移る自分を足元から上へとじっくり眺めていく

「この身体も・・・この顔も・・・さすがに慣れたな・・・」

身体の動きを確認するように、手を開いたり閉じたりしている鏡の中の自分を、まるで他人を見ているような目で見ている

ふうと溜め息を着いて視線を外し、ベッドへと向かい仰向けに寝転がる

そして中空を眺めながら、何かを見ているかのように視線を動かす

「残ったサブクエストは三つ・・・

死神の取引、初代学園長の遺産、異世界の学生・・・

あとはメインクエストだけか・・・」

視線はさらに動き、中空に見えない何かがあり、それを見ているような不思議な顔をしているが、そこに何かがあるのかは本人以外には見えない

そしてその場には、その動きを見ている存在は何もいなかった

「・・・手掛かりが見つかったとして・・・俺は・・・本当に・・・

」

彼が最後まで想いを言葉にすることはなかった

ドアがノックされ、誰かが部屋に来たようだ

「お父さん、起きてる？」

「悪いですね、無理にお願いしちゃって」

「別にいいよ、約束してたんだし」

宿の廊下をアリサと共にアレックスが歩いていた

二人とも鎧は着けておらず、着やすさを重視した服を着ている

アリサは鎧の下に着るぴっちりフィットする髪と似た青色のインナーの上にパーカーのようなグレーの上着、赤色で左右が長くなっているスカートをはいている

アレックスは同じくインナーを着ているが色が黒い

その上にグレーのポンチョのような肩掛けを身に付け、茶色のズボンははいている

二人ともかなりの美形なので、端から見ればデートでお泊まりに見えてしまうのだが、残念ながら二人は別の目的でここに来ていた

特に会話するでもなく、目的の場所に着く

「お父さん、起きてる?」

ドアをノックし、中の人物を呼び出す

数秒とせずに中から目的の人物が出てきた

「・・・どうした?」

中から銀髪の男が出てきてそう言った

先程までのインナーの上に青い法衣のような服を纏っている

ギル イギ のカ、ブレ ブーのジ のような服とっておく

「あれ、素顔でいるなんて珍しいね」

アリスは見慣れているというわけでも無いが何度も見た顔なので特に驚かない

「あ・・・蒼犬さんの素顔・・・？」

逆にアレックスはかなり驚いている

蒼犬は鎧姿こそ有名だが、素顔を知るものはほとんどいない
実は鎧が勝手に動いているんじゃないかという噂まであるほどだ

「は、初めまして蒼犬さん！アレックスと言います！今回の試験で
アリスさんと一緒に行動させていただきました！」

ワイルド系の見た目の割に礼儀正しいアレックスを見たグラハルト
は、ジーっとアレックスの目を見つめる

「・・・グラハルトだ、・・・そう呼べ」

「え？あ、はい！よ、よろしく願いします！グラハルトさん！」

場所は変わり、喫茶店の中に三人はいた

鎧姿でないグラハルトに加え、普段着のアリサとアレックスなので、特に目立つこともなく喫茶店の一画で話している

「……パラディン聖騎士か」

「はい、師匠が学園の入学を薦めてくれまして……
守るべき仲間がいてこそこのパラディンだと」

パラディン
聖騎士

盾を使った強力な防御能力を誇るクラスで、守りに徹すると難攻不落の要塞となる……。ように成長できるクラスだ

防御特化と言えば簡単なのだが、この世界においては魔法があるので、その戦闘スタイルは人によって大分変わる

防御と一口に言っても力と盾があればいいというわけではなく、どんな攻撃が来ていてどんな防ぎ方が適切なのかを理解できていなければ、ただの動物的に過ぎない

しかも魔法がある以上は、どんな魔法でどんな属性でどういう過程を通るのか、それらを踏まえて最適な対応が必要となる

必然的に魔法に対する知識が求められ、強くなればなるほどにその量が多くなっていく

そして知るということは使えるということになり、結果的に魔法による攻撃がパラディンの主力となる

アレックスが全属性の魔法の矢を使えた理由もここから来ている

そうだった経緯からして、パラディンのほとんどは魔法攻撃に魅せられる

ただでさえ奥深い魔法の領域で、しかも専門の魔導師でもないパラディンは得意な属性に集中していき、さらには元々戦士系であることも加わって、オリジナルの戦闘スタイルをそれぞれが作り上げていく

なので、一口にパラディンと言っても防御特化であるとは限らないし、前衛型・後衛型、得意な属性などによって一人一人が全く違うのだ

逆に防御特化しているアレックスは珍しいと言われてしまうほどである

・・・というのがグラハルトの知っている知識なのだが、実はこの世界のパラディンは、存在自体が珍しい

有名なパラディンなど両手で数えられるほどしかいないのだが、当然の如くグラハルトはそれを知らない

もちろんアリサも知らない（こっちはむしろクラスの存在自体よくわかっていない）

「・・・防御特化か、・・・茨の道だな」

「はい、ですが師匠の開いた道です
この道で生きていくつもりです」

「頑張ろうね」

世間話もそこそこに、本題を切り出すためにアレックスが身体を緊張させる

「そ、それですね・・・、グラハルトさんにお問い合わせがあるんですが・・・」

「・・・言ってみる」

「一つは、師匠に会って頂きたいんです

師匠が渡したいものがあるから、見かけたら言っておいてくれと」

「・・・名前は？」

「サリアです、聖騎士サリア・エルトリア」

「・・・あいつか」

グラハルトは思い出すように上を向きながら返事を返す

「・・・早めに行く」

「ありがとうございます
きっと師匠も喜びます」

「もう一つは？」

アリサに促されるが、アレックスは見るからに顔を赤くしていく

「えっと・・・握手・・・してください・・・」

「・・・」

無言で手を差し出すグラハルトに、アレックスはぱあっと喜んだ顔を
をする

その手を両手でがっしりと掴み、しきりに感謝している

「握手って・・・、っていうかどうしてそんなに会いたかったの？」

「いや実は、師匠がグラハルトさんのことをしょっちゅう話してくれててさ、話を聞いてるうちになんていうか・・・憧れちゃってね師匠がかなり強い人だっただけに、それより強いっていうグラハルトさんには是非とも会いたいと思ってたんだ
だからアリサに声をかけられて、もしかしてって思ったときは衝撃だったよ」

「ふゝん」

・・・

何故かそのあと微妙な空気が漂い、何も話さない時間が流れる

ふとアリサがアレックスのほうを見ると、何故か先程以上に顔を真っ赤にしていた

声をかけようとした時

「・・・まだあるのか」

「・・・はい、最後に一つだけ・・・」

明らかに緊張したアレックスを見ながら、グラハルトもアリサも次の言葉を待つ

アレックスは最後のお願いを言う覚悟を決めたようだ
全身を強張らせ、ちらりとアリサを見た後、真っ直ぐにグラハルトの目を見る

真つ赤になった顔、震える体、もはや周囲の喧騒など聞こえなくな
った耳

それでもはつきりと

聞き間違えが無いように大きな声で

何が起るかも覚悟したうえで、言った

運命を決定づけるその言葉は・・・

「娘さんを僕にください!!!!!!」

蒼犬と愛犬家（後書き）

というわけでした、チャンチャン

この話の一時間後にキャラ紹介を予約投稿してあります

グラハルト＋アリサ含む入学試験編の主要キャラ六人分ですが、時間に余裕があればご覧になってください
大したことは書いてありませんので、読まなくても特に問題はありません

登場人物紹介（名前付きのみ）（前書き）

キャラ紹介です

グラハルト＋アリサ含む入学試験編の六人だけですが・・・

読まなくても特に問題はありません、多分

あ、バスカーは読まないで差し支えるか・・・

登場人物紹介（名前付きのみ）

ステータスはSが最高で以下A B C ～ Gまで
特に何か注釈があればその都度記入

INTは主に魔法の威力に関する数値なので、実際の頭の良さには
影響無し

数字の普通評価はD

装備品に関してはまたそのうちに・・・

グラハルト

種族：人間

性別：男

年齢：不明

身長：180以上

体重：70キロぐらい

見た目：イケメン、細マッチョ、白に近い銀髪、作者のイメージは
フィース

職業：^{クラス}ルーンナイト

ステータス：

HP：S

MP：A

STR：S

VIT：S

AGI：S

INT：B

DEX：A

LUK：D

特殊能力：

正義の勘（本能的な部分で殺す・殺さない相手を理解できる）

拒絶反応（????）

謎の情報認識（グラハルトにしか見えない謎の情報を見ることができ）

HP限界突破・MP限界突破・身体能力限界突破・与ダメージ限界突破（それぞれの「人間に可能な範囲」を超えた数値に至ることができる）

形態変化（ルーンナイトの能力、別の戦闘スタイルに変化できる）

説明：

あおいぬ
通称「蒼犬」

一応主人公的な立場と言えなくもないかもしれないはずと言っている人がいたような気がしないでもない

あまり話すほうではない、よって誤解されやすい

話す前に一度考えてから話す癖があるので、さらに誤解されやすく、怖いイメージを持たれやすい

常に鎧と兜を身に付けているので、素顔を見たことがある人間は珍しい

以下アルドラが調べた結果からの情報

とにかく無茶苦茶に強い、特にSTR関連が異常なまでに高く、腕力だけで物事を解決する場合も珍しくない
ルーンナイトという特殊なクラスについている影響なのか、人間界では遙か昔に失伝したエンシャント・ルーン言語を使い、ルーンスペルという古代魔法を使う

5年前に突然現れ、世界中を旅しながらその無茶苦茶な生き方で有名になっていった

何かを探しているという噂なのだが、それが何かを知っている人間はいない

アリサの養父

アリサを女性として見たことは無いようで、そういった感情は持っていない
つていうか女性に興味ない

（読者なら気づいてると思いますが彼は異世界の人間です）

アリサ

種族：人間

性別：女

年齢：16

身長：170くらい

体重：秘密

スリーサイズ：秘密

見た目：美人、薄い青の髪を肩まで伸ばしている、スレンダーな体型、胸は小さくはない

職業：クラス無し

ステータス：

HP：B

MP：B

STR：B

VIT：B

AGI:S

INT:B

DEX:A

LUK:S

特殊能力:

万物の才能（あらゆる物事の成長速度にプラス補正）

世界の祝福（あらゆる存在が味方する、意思を持った存在も意識しない限り自然に惹かれていく）

HP 限界突破・MP 限界突破・身体能力限界突破・与ダメージ限界突破

説明:

通称「ふたつのおき双剣」

ヒロイン、むしろ主人公

万物の才能を持っていたせいで不幸な人生を送った少女

グラハルトに拾われてからはそれなりに充実した人生と感じている

胸は小さくは無い、決して小さくは無い、年相応なだけだ

グラハルトと一緒に行動していたせいもあってやや世間知らず

冒険者だった経験からそっち方面の知識と経験は豊富だが、一般常

識はあまり無い

ちなみにグラハルトのことは「父親」だと思っているので、恋愛対

象とは思っていないが、ややファザコンの気がある

物語の中核になる存在なので、主人公なはずのグラハルトより出番が多い

アレックス

種族:人間

性別：男

年齢：18

身長：178センチ

体重：72キロ

見た目：イケメン、ワイルド系、茶髪のチャラ男っぽい見た目

クラス
職業：聖騎士

ステータス：

HP：B

MP：C

STR：B

VIT：A

AGI：C

INT：B

DEX：C

LUK：D

特殊能力：

愛犬家（犬系に与ダメージ-100%、被ダメージ時防御能力全無効、犬系と仲良くなる確率にプラス補正）

鉄壁の守り（防御率にプラス補正）

防御特化（防御能力にプラス補正）

説明：

愛犬家として名高い冒険者だが、今はまだ無名の学生

パラディンとしてかなり有名なサリア・エルトリアという人物に師事していたため、パラディンとしての能力はかなり高い

師と行動を一緒にしていたため、陰に隠れてしまっていたので知名度は全くと言っていいほど無い

本編では衝撃の発言をしたが果たしてどうなるのか・・・
どうして序盤にグラハルトとぶつかっていたのか・・・
本編で明らかにしていこうと思います

レディ

種族：人間

性別：女

年齢：16

身長：165センチ

体重：40キロ台らしい

スリーサイズ：B90W52H67

見た目：金髪、巨乳、美人、お嬢様、貴族っぽい

職業：ウィザードナイト^{クラス}

ステータス：

HP：C

MP：B

STR：C

VIT：B

AGI：B

INT：A

DEX：C

LUK：C

特殊能力：

戦闘の才能（戦闘に対する成長速度にプラス補正）

魔導の才能（魔法に対する成長速度にプラス補正）

HP限界突破・MP限界突破・身体能力限界突破・与ダメージ限界突破

説明

本名レイディアント・クラス・フォルナス

二流貴族フォルナス家の長女、弟がいるので後継ぎの心配が無い頭がいいことに加え、フォルナス家は戦闘を重視するので戦闘能力は高い

グラハルトから教えを受けたことがあるので、各種限界突破の能力を得たが、成長度の問題でまだまだ人間の領域にいる
アリサが唯一友達と呼ぶ存在なのだが、作中で説明できなかったの
でここに書かせていただきます

ちなみに百合ではない

バスカー

種族：獣人（！？）

性別：男

年齢：20

身長：192センチ

体重：94キロ

見た目：巨漢、顔は普通、渋い顔だがギリギリで普通、見た目怖い、茶色がかった黒い髪をボサボサにしている

職業：バスターナイト
クラス

ステータス：

HP：A

MP：D

STR：A

VIT：B

AGI：C

INT : D
DEX : C
LUK : D

特殊能力 :

戦闘の才能

第六感(勘がするどくなる)

装備重量ペナルティ無効(装備品の重量による能力低下を無効にする、ただし装備品以外の重量による低下は受ける)

説明 :

本名バスカー・ギルデンス

実は獣人だった! っていうかよく見たらバスカーの見た目の描写が無かった!

あれゝ・・・?

実は狼の獣人だったという設定です、ただし特殊な事情により現在耳も尻尾もない

雷撃という通り名を持つ冒険者で、学校に通う予定は無かったので20歳になるまで試験は受けなかった

この辺は本編で書いていきます

マキア

種族 : 炎鬼族

性別 : 男

年齢 : 18

身長 : 183センチ

体重 : 73キロ

見た目：赤毛で逆毛、細身で筋肉質、顔は良い方、熱い心の持ち主、
むしろ暑苦しい

職業：^{クラス}フレイムオーガ（限定職）

ステータス：

HP：B

MP：特殊

STR：B

VIT：B

AGI：C

INT：特殊

DEX：C

LUK：D

特殊能力：

炎鬼化（長いので説明欄に記載）

対話・火（火系の精霊と意志の疎通ができる）

説明：

本名マキア・バレストウーラ・エンデベルト・ロキスティア

炎鬼族のマキアとしてちよつと有名な冒険者

実は16歳の時から試験を受けていたのだが、バカなのと頭が悪い
のとバカなのと試験内容との相性の問題とバカなので落ち続けていた
戦闘能力は高いのだが、炎鬼族の特性で炎以外使えないため、特定
の相手には弱い

炎鬼族とは鬼族^{オーガ}の亜種と言われているが、実際には逆で鬼族の祖先
にあたる

鬼神族という種族があり、その直系の子孫が炎鬼族を含めた精霊鬼
族と呼ばれる種族

さらにその精霊鬼族と紆余曲折あり、最終的に人間との混血が鬼族
と呼ばれるようになった

精霊鬼族は絶対数が少なく引きこもっている場合が多いので、マキアのような外の世界で活躍している存在は異端なぜ冒険者になったかはそのうちに・・・

炎鬼化

全ての行動が火属性になり、全ステータスに特殊補正
周囲の魔力及び火・熱を吸収し、吸収した量に応じてプラス補正
体が火化するため、物理攻撃のほとんどを無効化
ただし本人の意思によって受け止めることは可能
メメの実を食べた（笑）

グレイ

種族：人間
性別：男
年齢：18
身長：174センチ
体重：62キロ
見た目：イケメンっぽい、ちょっと長い黄緑色の髪、フードをずっと被ってるから顔が見づらい
職業：^{クラス}ダークプリースト
ステータス：

HP：C
MP：A
STR：D
VIT：D
AGI：C
INT：A
DEX：A

LUK：B

特殊能力：

魔導の才能

戦術の才能（戦術系知識の習得・発案の成長速度にプラス補正）

第六感

闇魔法適性（闇魔法の習得・成長にプラス補正、暴走しづらくなる）

幸運（都合のいい事態に遭遇しやすくなる）

説明：

本名グレイ・ティンカー

実は偽名

本名は作中にて出す予定です

謀略と呼ばれる知識人のだが、作者のリアル知識と頭の悪さの関係で、恐らくその能力が描写されることは無いであろう残念なキャラ魔法特化タイプなので個人での戦闘能力は低い

ただし手先が器用だったり気配を消したりという盗賊的な能力も持っているので、集団戦や混戦・乱戦になるとかなり強い

アリサパーティーの中では比較的まともな人物

ちなみに受験者の平均的なステータス

種族：色々、人間は6割

性別：男8割、女2割

年齢：16歳は半分くらい、あとは40歳くらいまでで様々

身長：色々

体重：色々

スリーサイズ：比較的にスタイルのいい女性は多かったみたい

見た目：色々だが、女性には美人が多かった

職業：^{クラス}色々

ステータス：

HP：C

MP：D

STR：D

VIT：D

AGI：D

INT：E

DEX：C

LUK：D

特殊能力：

色々

説明：

貴族のぼっちゃんとか戦場に出たことない人とかこれから冒険者を
目指す人とかが多かったのでこんな感じ

最終試験まで残った人達は全ステータスが一段階あがるくらい

INTが低いのは前衛系が多かったから

とりあえず主要人物は書いたかな・・・？

レディの親父とか学園長とか教師陣は名前が出たら記載していきます

ちなみにグラハルトの能力は他にもあるのですが、記載してあるもの
以外は装備品の能力になりますので記入してありません

・・・やべ、思ってたより設定が多かったぞ？
これちゃんと回収できるか不安になってきた・・・

登場人物紹介（名前付きのみ）（後書き）

そのうちにまた書く予定ですが、今の時点ではこんな感じです

そして気付いた事実

アルドラがいねえや

まあそのうち・・・、彼は彼でなかなか複雑な人物なので・・・

結果はフルボッコ

「どうしてこうなった」

そう言いながら必死に走っているのはアレックスだった

彼は今非常に厳しい状況にいる

どんな状況かと言えば・・・

「ぬあぁっ！？ちよっ！グラハルトさん！

死にます！死にますって！っていかどんだけ本気なんですか！？」

高速で飛んでくるグラハルトの斬撃をあらゆる手段でもって全力で回避していく

右から左から、上からも来れば正面からも来る

その速度は本気^{マジ}でやっているのがわかるほど速い、・・・つまり殺す気ということだ

今の状況を説明するならば、アレックスはグラハルトに殺されそうになっている

「・・・弱いヤツにはやれん」

と言うグラハルトなのだが、明らかに殺す気でなんなら存在そのものを無かったことにしようとしている雰囲気さえ感じられる

「・・・少なくとも・・・俺よりは強くないとダメだ」

「いや！それ！世界！最！強！です！から！！！！」

言いながらとんでもない速度で何度も振るわれる剣を、いつぱいいっぱいながらも紙一重でなんとか避けていくアレックス

話していた店はもはや遙か遠くになってしまっていて、大通りを駆け抜けながら大立ち回りを繰り返しているのだが、蒼犬の特殊能力（か、どうかはわからないが）によって住人には一切怪我人が出ていない

恐らく出ないだろうなともアレックスは考えているので、回りを気にすることなく必死に避けていく

「・・・なら最強になれ」

「無茶苦茶だこの人おおおお！！！？？」

顔の真横を通ったグラハルトの剣に、顔を青ざめさせながらアレックスは叫んだ

「がんばれ」

アリサの応援が虚しく響いていた・・・

「いてて・・・」

高級宿の一室、グラハルトとアリサが泊まっている部屋の中で、最終的に無残なまでにボコボコにされたアレックスが治療を受けていた

そりゃもうボコボコである

結局、逃げ切れなくなったアレックスがなぜか素手で殴ってきたグラハルトに対して、逆に殴り返そうとしたのだが、見事なまでの力ウンターを食らい空中に浮かされリアル空中コンボをくらって終わった

とはいえそのおかげでアリサに治療してもらっているのだから、くらった甲斐もあったかなあなんて考えてしまうのは惚れた弱みなんだろうか

「ニヤつきすぎ」

アリサに言われてアレックスはハツとする

顔に出ていた自分に渴を入れようとするが、目の前のアリサを見て顔が真っ赤になってしまう

「・・・はいおしまい」

「あ、ああ

ありがとう・・・」

終わってしまったことに軽く残念に思いつつ、顔に出ないようにしてはみる

頑張つて顔の筋肉に集中してみるが、慣れないことをしているせいで傷を痛がっているような表情になってしまっている

・・・本人に気づく手段がなかったのが残念だ

「・・・いいか？」

顔の筋肉と奮闘しているとグラハルトが室内に入ってきた、思わず

ビクツと反応してしまったアレックスは決して悪くは無いだろう
何せ普通体験できるハズの無い空中コンボという必殺技・・・文字
通り必ず殺す技というのが相応しい威力の攻撃を叩き込んだ本人な
のだから

何より衝撃の告白をした後だけあって、「さあ！再開だぜ！」と言
いだす想像さえできてしまう

「・・・少し話がある、・・・アリサ・・・悪いが二人にしてくれ」

「・・・ん、殺さないでね」

さらっとアリサが怖いことを言った気がするが、聞き間違いではない

どういう意味かと聞く前にアリサはドアを開けて出ていってしまった

グラハルトはアレックスの座っていた椅子の前にあるテーブルを挟
んで、反対側の椅子に腰掛けた

しばらくアレックスをジッと見つめ、背もたれに寄り掛かる

「・・・」

「・・・」

沈黙が続く

アレックスとしては非常に居心地が悪い、そりゃもう今すぐ逃げ出
したいくらいに悪い

嫌な汗が先ほどから止まらないし、手には汗がにじんで気持ち悪い

無限に続くかと思われた沈黙だが、グラハルトはやっと考えがまとまったようで、ゆっくりと話し始めた

「・・・まず最初に言っておく、・・・この話を信じるかどうかは・・・お前にまかせる」

珍しく前置きを話したグラハルトだが、アレックスにそんなことがわかるわけもなかったので素直に聞いている

「・・・俺がお前だったら信じない、・・・だから信じるとは言わない、・・・聞くだけでいい」

アレックスはごくりと生唾を飲み込むが、グラハルトがここまで言うならちゃんと聞こうと考えたようだ、爽やかな笑みをしながら返事をする

「信じますよ、グラハルトさんの話なら
例えどんなに信じがたくても」

それを聞いたグラハルトはフツと笑う

普段は兜で見えないが、きっとこの笑顔をよくするのだろうということがわかる、とても自然な笑顔だった

「おじさん、それ頂戴」

「あいよ！お嬢ちゃん美人さんだねえ！サービスしてやるよ！」

街に並ぶ屋台群の一面をアリサは歩いていた

入学試験のシーズンはとんでもない人数がこの街に来るため、ちょっとしたお祭り状態の街には屋台が大量に並んでいる

立ち飲み屋台等もあるため、この通りは喧騒に包まれている
中には受験者なのだろう人物達も多く、泣いたり笑ったり喜んだり
飲み潰れている人もいる

「あ、ごめんおじさん

お財布忘れて来ちゃった、後で来るから残しておいてくれない？」

「なんだい！うっかりさんだな、おじちゃんそういう子は嫌いじゃ
ねえ！

帰ってきたらさらにサービスしてやるから冷める前に来なよ！」

やたらと元気がいい店主と会話して、部屋に忘れた財布を取りに戻るため、店を後にする

アリサにしては珍しいミスなのだが、今日は色々あって疲れている
のだろうと思って気にしないことにする

（・・・そういえば、お父さん何を話してるんだろう？）

普通グラハルトがアリサに席を外してもらってまで誰かと話すとい
うことは滅多に無い、特に今回は衝撃の告白の後だっただけに尚更だ

気にはなりつつも財布を取ったらずぐに出れば大丈夫だろうと思い、二人が話しているハズの部屋へ向かっていく

この先に起こる何かの予感を、万物の才能が教えてくれることは無かった

良くない事の前兆を必ず察知できるハズの万物の才能が、察知できなかったわけではない

アリサにとってその出来事は良い未来に向かう一歩だから

アリサにとってそれはいずれ通らなければいけない道だったから

アリサにとってそれは……

「……俺はこの世界の人間じゃあない」

グラハルトはそう切り出した

アレックスは何を言われたのかわからないという表情をしている

「えっと……え？それは……」

「もちろん他の国の人間とか、亜人とかという意味でもない
……生きていた世界そのものが違うんだ

・・・俺がいた世界は・・・こことは・・・地形・・・も・・・人種・・・も・・・違・・・」

「グラハルトさん？」

グラハルトは唐突に苦しそうな顔になり、見る見る内に青い顔になっていく

「グッ・・・ゴホッ！」

やがて椅子にも座っていらなくなったようで、テーブルに片手を、両膝を床に着けて咳き込んだ

「グラハルトさん！大丈夫ですか！
今誰かを呼んできます！」

「・・・待て・・・聞け・・・」

そう言いながら空いている方の手で呼び止めるが、その手は血で真っ赤に染まり、ただ事ではない事を強調するだけだった

「ダメですよ！血を吐いたんですよ！？」

病気かもしれな・・・」

「いいから聞け！！！！」

ドアに手をかけようとしていたアレックスにグラハルトが叫んだ

怒声に近いその声には苦しさを混じらせ、それでも伝えようとする確かな意思が宿っている

空気が震え、ビリビリと肌で感じられるほどの声にアレックスは足を止めた

パキンツと何かが折れる

その何かは床に落ち、それがあつた場所に穴が空いていた

アレックスは振り返ってしまったのでその穴に気づくことは無かった・・・

「・・・大丈夫だ・・・向こう側の話をしようとする・・・こうなる」

立ち上がり、再び椅子に座りながらそう語るグラハルト

その姿に先ほどまでの苦しそうな状態は感じられないが、血で汚れた手と口の周り、床に着いた生々しい跡がどうしても目についてしまう

「・・・どこからどこまで話せるかはいまだによくわかってない・・・まあ向こう側についての話だろうとは思っているがな」

グツとアレックスは体に力を込める

こんな状態になってまで伝えようとしている何かを聞き逃すなんてできない

言葉だけでなく、グラハルトの一挙一動まで逃すまいと真剣にグラハルトを見つめる

「・・・続きを教えてください」

「・・・そんな顔をしなくてもいい
・・・向こう側について話すつもりはもうない・・・」

それでもアレックスは見つ続ける

きつといい話では無いだろうから、きつと辛い話だろうから、血を吐いてまで伝えようとする話なのだから・・・

「・・・真面目なヤツだ」

グラハルトはフツと笑う

「・・・結論から言おう

・・・俺はいずれ・・・時期はわからないが、いずれこの世界から消える」

突然ドアが勢い良く開いた

壊れそうなほどの勢いで開いたドアは事実、蝶番の部分が歪んでいる
恐らく二度と正しい動きを出来ないであろうそれが、きいゝと耳障りな音を出している

その原因を作った人物は、そんなことは気にならないとばかりにグラハルトを見つめていた

「・・・アリサ」

まだ見ぬ終わりの約束

「・・・アリサ」

壊れたドアの向こう側にはアリサが立っていた

睨むような視線をグラハルトに向け、口を強く結び、言い出す言葉を必死に探している

「・・・」

グラハルトは何も言わず、ただアリサを見つめている
優しい瞳が無表情の顔に張り付いていて、どこか悲しそうな雰囲気を出している

「・・・いなく・・・なっちゃうの・・・？」

アリサはやつとの思いでそれだけ言った

本当ならそんな言葉は言いたくは無い、答えてほしくない
言ってしまうばグラハルトは必ず答えてくれるから、答えてくれれば、今の言葉が真実だとわかってしまうから

そしてグラハルトは、誤魔化すことはあっても嘘を吐いたりはいから

そしてアリサは、グラハルトのわずかな変化で何を考えているかわかってしまうから

質問をした時点で、自分が一番聞きたくない答えが来ることがわか

りきっているから・・・

だからアリサは言いたくなかった

「・・・ああ」

そしてその通りにグラハルトは答えた

「ッ！」

アリサは顔を歪め、涙をいっばいに浮かべる

わかっていても聞きたくない言葉を聞いてしまった

やり場の無い悲しみに襲われ、自分を保つことができない

アリサは駆け出した

「アリサ！」

アレックスが声をかけるが聞こえていない

どこに向かったかもわからない

床に着いた涙の跡だけが彼女のいた痕跡を残している

「アリサ・・・」

グラハルトさん、申し訳ないですが・・・」

「わかってる、・・・すまん、アリサを頼む」

アレックスはアリサを追って部屋を飛び出していく

グラハルトはその後ろ姿を見ながら呟いた

「・・・悪いなアリサ・・・やはり俺は・・・」

俯いたグラハルトの視線の先は血を吐いたはずの床を見ている

その床に広がっていたはずの血はいつの間にか消えていた・・・

「アリサ！」

アリサは街の外壁の上から外を眺めていた

かけられた声に振り向けば、アレックスが息をきらしてこちらを向いている

「はあはあ・・・」

やっぱり早いな、追い付くのが大変だよ

ふふ、隣いいかい？」

何も言わずに前を向き直り、街の外を眺める

夜の空には美しい月が孤独に浮かび、月に照らされたアリサの姿が暗闇に浮かんでいる

涙を浮かべた憂いの表情は一枚の絵画のごとく美しく、アレックス

はその光景に見とれてしまう

「……何の用？」

アリサの声が響く

「……泣いてたからね、放ってはおけないよ」

アレックスが返す

アリサは変わらずに、ただそこに立っている

「ショック……だったと思う

ごめん、正直に言えばよくわからない

俺は親がいないから、親を失う苦しみはわからない……」

「……親が……いない？」

「うん、俺は戦災孤児なんだ

生まれてすぐに戦争に巻き込まれて両親は死んだらしい

たまたま師匠が見つけてくれて、そのまま育てられたんだ」

アレックスの言葉にアリサが反応する

自分と似たような境遇の相手が語る話は、真っ直ぐに心まで届く

「……そうだな、師匠が同じことを言ったら同じことをしたか
もしれない

でも……」

「でも？」

「まずは、知りたい
なぜそんなことを言ったのかも、なぜ自分に黙っていたのかも、な
ぜ今になって話したのかも・・・」

俺は師匠を信じてる

だからきつと、何か意味があつて何か考えがあるはずだから
それを俺は知りたい」

「知りたい・・・」

「・・・だから・・・教えてくれないか
今までの二人のこと
今までの・・・いやアリサのことを」

「・・・」

アリサを月を見上げ、すつと目を閉じた

「・・・私は・・・」

アリサは自分のことを話し始める

今までのことを一つ一つ確認するように・・・

「そうか・・・」

話し終わるころには二人とも座り込んでいた

外壁に寄りかかり、虚空を眺めていた二人は夜の街並みに目を移す

「……これで全部」

「……うん、そっか」

アレックスは余計なことは言わない

彼女の人生を評価するのは簡単だし、大変だったの一言で済ませるのはもつと簡単だ

だが彼は言わない

言ってしまうばそれまでだから

彼女の人生は言葉で片付けられてしまう程度の価値になってしまうから

言葉にできない何かを、一生失ってしまう気がしたから……

だからアレックスは、「過去」^{これまで}のことには何も言わずに「未来」^{これから}のことを話し始めた

「なあ、アリサ」

立ち上がりながら腰に挿していた短剣を引き抜いた

「この剣はさ、師匠が俺に買ってくれた最初の剣なんだ
今使ってるヤツは自分で金を貯めて買ったヤツだけど、こいつの
うが付き合いは長いんだ」

何の飾り気も無い短剣は大分使い込まれている

柄はボロボロで刃は欠けているし、よく見れば細かいヒビがあちらこちらに見られる

「もういつ粉々になってもおかしくないんだけどさ、不思議なことに今までずっと壊れなかった

・・・壊れないって信じるようになってた
・・・でも、違うん・・・だっ！」

最後の一言とともに、アレックスは思いっきり地面に短剣を叩きつける

「何を・・・？」

金属が碎ける甲高い音を出しながら、短剣は見事に碎けた

咄嗟のことにアリサは呆けているが、アレックスは悲しそうな顔で話を続ける

「・・・いつかはこうなってた、たまたま今日だったただけだよ
・・・明日は・・・俺がこうなっているかもしれない
俺達はそういう世界に生きているんだ」

真っ直ぐに、ひたすらに真っ直ぐに言葉を放つアレックス

「この短剣は壊れないと思ってた、でも現実にはこうして粉々だ
無くならないと思ってたものが、明日には無くなってるかもしれない
・・・物ならまだいい、・・・それが人だったら・・・グラハルト
さんだったら・・・
だから、帰ろう

明日は来ないかもしれないと悲しむより、明日が来るように今行動

しよう

グラハルトさんがなぜあんなことを言ったのか、聞きに行こう!」

真摯な言葉は時に魂まで響く

アリサにはしっかりと響いたようだ

「・・・うん!」

二人は宿に向かって歩き出した・・・

「・・・おかえり、・・・アリサは寝てるのか?」

「ええまあ・・・、疲れてたみたいで・・・」

アレックスに背負われたアリサは静かに寝息をたてていた

結局帰り道で寝てしまい、こうして宿まで背負われてきたようだ

「・・・ちょうどいい

アレックス、お前にだけ話しておきたいことがある」

「俺にだけ・・・ですか?」

アリサをベッドに下ろしながらアレックスはグラハルトのほうに向き直る

「ああ、とりあえずニヤけすぎだ
また殴るぞ」

フツと笑いながらそう言うが、本物の殺気が出ているので洒落にならない

すぐに顔を引き締め、椅子に座ったアレックスは悪くないと思う
誰だって痛い思いをしなくていいならしない方法を選ぶハズだ

「・・・真面目なヤツだ」

「いやマジで死ぬかと思いましたよアレは」

笑い合う二人の顔はやがて真剣なものに変わっていく

グラハルトは話の続きを語り始めた

「・・・俺がいなくなったあとのことを、お前に頼みたい」

「それは・・・」

「もちろん今のままじゃダメだ、言った通り俺より弱いヤツには任せられん」

「だからそれ世界最強ですって、人間の領域超えてますって、俺には・・・」

「できるさ、アリサと一緒になら・・・な
世界最強になればいい、人間の領域なんて超えればいい、出来ない

と言うヤツには・・・一生できない

出来ると信じてるヤツだけが、信じて鍛え続けたヤツだけが出る」

グラハルトはいつの間にかアリサを見つめている

優しく、強く、温かく・・・

長い付き合いではないが、アレックスにはその目が様々な感情を含んでいるのがわかった

「・・・何より、俺がお前を信じたんだ
・・・お前なら・・・きつと・・・」

「グラハルトさん・・・」

アレックスはグラハルトを正面から見て、心からの本音を返す

「グラハルトさん、俺はあなたがいるうちに必ずあなたを超えます
あなたが心置きなくいなくなることができるように、あなたが心配
する必要が無いくらいに、アリサが・・・涙を流す必要が無いくら
いに！」

だから・・・だから・・・!!」

「・・・楽しみにしてる」

（お父さん・・・私・・・強くなるから

お父さんがいなくても生きていけるくらいに・・・！)

寝たふりをしていたアリサは新たな決心を胸に秘めた

寝たふりを知っているアレックスだけが、彼女の手が強く握りしめられていることに気づいていた・・・

再出発（前書き）

おかしい・・・

こんなに長くなる予定じゃなかったハズなのに・・・

ちょっと展開が無理矢理ですがご覧くださいます

再出発

どこかで鶏のような生き物が鳴いているのが聞こえる

この世界にも朝昼晩があり、大きく世界の理が違わない以上、多少の違いこそあれども似たような進化を遂げる生物はある

不思議な感覚と懐かしい感覚を同時に感じながら、グラハルトは部屋窓から外を眺めていた

「・・・おはよう」

アリサが昨日のままの格好で起きてきた

まだ寝ぼけているようで、足取りが若干怪しい

「・・・おはよう、アリサ

・・・風呂を沸かしてもらっている、今のうちに入ってくるといい」

「ん・・・、行ってくる」

着替えとタオルを持って風呂に向かうところには、足取りもしっかりしていた

あえて言おう

サービスカットなど無い！！！！

「あれ、どうしたのアレックス？」

「ああ、おはようアリサ
・・・昨日の続きをね」

アリサが風呂から戻ると、部屋にはアレックスが来ていた
すでに鎧を身に付けていて、トレードマークに近い巨大な盾を背負
っている

「・・・まだ時間はある、・・・着替えてしまえ」

「ん、じゃあそうする」

言いながら余計なものを脱ぎ始めるアリサ
アレックスが思わず凝視してしまうが、グラハルトの鉄拳制裁・・・
いや超鉄拳死罪をくらって気絶したので本人は何も覚えていない
何も覚えていないということにしておかないと再び空中コンボの恐
怖があるので、覚えていないということしておく

「・・・さて、昨日の続きだな」

着替えも終わり、いつもの鎧姿になった二人
アリサはベッドに腰掛け、アレックスは盾を壁に立て掛けて椅子に

座っている

グラハルトは窓枠に腰掛け、窓の外を眺めている

余談だがこの世界はガラスがある、なので窓からは朝日が射し込んでいるので早い時間だというのに室内は大明るい
安くは無いので高級宿でしか使われていないが・・・

閑話休題

グラハルトは二人を一度見てから、再び窓の外に目を向けて話し始める

「・・・俺は異世界の人間・・・というのは言っただけ・・・」

二人はこちらを向いていないグラハルトに向けて頷く、見ていなくても伝わるものが三人の間にはできているから、それだけで十分なのだろう

「・・・俺は・・・帰る方法を探していた
・・・色んな可能性を・・・試して・・・色んな場所に行った・・・」

言葉が切れ切れになってきたのを聞いていたアレックスは、昨日の光景が頭に浮かぶ

「グラハルトさん・・・まさか・・・？」

ずっと片手を上げたグラハルトからは苦しそうな雰囲気は伝わってこない

「大丈夫だ、言葉選びが大変なだけだ・・・」

アレックスはほっとして視線を下げ、そして違和感を感じた

（血の跡が無い？）

「・・・俺は悪魔と同じだ、世界に嫌われている」

聞く前にグラハルトが続きを話し始めた

「・・・大地は俺との接触を拒み、溶岩のようにこの身を焼く

・・・空気は毒のように染み込み、呼吸するだけでも体を弱らせる

・・・この世界の存在は・・・例えば血の一滴でさえも・・・俺の肉体を拒絶する・・・

俺の存在を求めるのは死だけだ・・・」

床の状態を見てしまったアレックスは、決して冗談でそんなことを言っているのではないことを理解してしまう

「・・・理屈はわからんが、持っていた装備品を着ている限りは問題なく呼吸もできるし、地に足を着けることもできる

風呂はまあ・・・修行だと思って我慢だが・・・

そのおかげで「生きた鎧」（リビングアーマー）なんて呼ばれてるみたいだな」

フツと笑う顔はいつも通り自然な笑顔だった（あくまでも雰囲気だが）

本当に気にしていないんだろう

「・・・当然そんな世界は生きたくない
・・・だから・・・俺は探したよ・・・手段を・・・帰り道・・・
をな

ふう、言葉選びも苦労するな」

一息つきながら窓の外から部屋の中へと視線を移す

気がつけば外は日が登り、朝日がすっかりと顔を出しきっていた

椅子に近づきながらグラハルトは続ける

「・・・だからというわけじゃないが・・・いつかはきっと・・・
俺は消える

自分の意思か別の何かによってかはわからんが・・・、いつか俺は・・・
この世界から・・・いなくなる・・・」

アレックスの向かい側、テーブルを挟んだ反対側の椅子に座る

「・・・だから・・・アリサ、お前には強く・・・成長してほしか
つた

グロウス
Growth・・・俺の願いだ

学園ならきつと・・・俺が与えられなかったものを手に入れられる
ハズだ

・・・さっそく手に入れた男は、なかなか見所があつたしな」

前半はアリサを見ながら、後半はアレックスを見ながらそう言った

「ただし俺より弱いうちはダメだ」

「だからそれ世界最強ですからっ！

何年かかると思ってるんですか!？」

もはや三度目になるやりとりなのだが、アリサは僅かな変化に気づいた

アレックスのセリフを聞いたグラハルトがニヤリとしているので間違いないだろう

「無理って言わないんだ？」

「・・・ああ、無理とは言わないさ
なにせ・・・」

「」「無理って言うヤツには無理だから」「」

三人が同時にそう言った

彼らは本気でそう思っている、その言葉を疑ったりはしない

グラハルトは身を持って経験しているから、アリサは今正に挑戦しているから、アレックスはグラハルトを信じたから

「フッ」

「ふふ」

「ハハハ」

三人は笑った

言葉にできない何かを伝えあつた
言葉にしてはいけない何かを知った

それだけでこの先も生きていける

何があっても、何が起こっても、何かが起こる前に強くなれる確信があったから・・・

三人は学園に向かって大通りを歩いていた
通りを埋め尽くすほどに並んでいた屋台はもう半分ほどしか残っていない

その半分も今から店をたたむようだった

アリサはふと昨晚のことを思い出す

「そういえば昨日のおじさんに悪いことしちゃった」

「ふむ？約束すっぱかしでもしたのか？」

「うん、すぐ戻るって言ったのに結局ね・・・」

「・・・あの店か？」

グラハルトに促されて目を向けると、ぶんぶんときちんと子供のように手を振っている昨晚の店主がいた

グラハルトは目に見えて落胆し、ため息をつきながら心底嫌そうに話す

「・・・知り合いだ」

「おおーい！嬢ちゃん！昨日は大丈夫だったかい！？」

アリスは店主に近寄っていき、昨日のことを謝りはじめる

「おじさん、昨日はごめんね」

「いってことよ！それより嬢ちゃん泣きながら走ってたみてえだ
が大丈夫だったのかい？」

「・・・変わらん」

「なんじやい、お前さんの連れだったのか
あ！さてはお前が泣かしたんだな！？」

こんな可愛い嬢ちゃん泣かすたあ相変わらずふてえ野郎だ！
ぶっ飛ばしてやる！」

「ちよちよっとおじさん、彼は蒼犬って言って・・・」

「・・・心配無い、・・・不本意だが・・・互角だ、・・・不本意
だが」

片や世界最強の剣士、片やオタマとフライパンの二刀流屋台の親父
何故かはわからない、わからないが互角の戦いが始まったが・・・

内容はまた別の機会に語ろう

アリサとアレックスの感想は

「「あのおっさん何者?」「」

学園の前

三人は学園を改めて眺めている

これからの生活に想いを馳せて、経験という何にも代えがたい大切なものを手に入れようとしている

入り口に目を向けると、そこには仲間達が立っていた様子を見る限り、アリサ達を待っていたようだ

レディが、 그레이が、バスカーが、マキアが笑顔でこちらを見ている

「・・・いい仲間だ」

「でしょう?俺もそう思いますよ」

アリサは仲間を順番に見ていく、そして最後にグラハルトを見る

グラハルトも見つめ返し、二人はしばし沈黙する

「お父さん・・・」

「・・・ああ」

「あのね・・・私・・・」

目を剃らし、うつむき、泣きそうな顔をしたアリサ
アレックスは空気を読んだらしく、すでに仲間のところへと向かっ
ている

「・・・月に一度は会いに来る」

グラハルトの言葉に顔を上げ、再び目と目が合う

アリサは何かを言いかけて・・・やめた

今言う必要はきっと無いから、今はきっと違う言葉が相應しいハズだ
きっと違う表情が相應しいはずだ

アリサは振り向き、仲間のもとへと歩きだす

「・・・行ってこい」

グラハルトは誰にも聞こえないようにそう言った
兜に隠れた顔は誰にも見えない、だから誰にも聞こえるはずは無か
った

気がつけばアリサは振り返り、グラハルトを見つめていた

その両目には虹色の輝きが宿り、彼女が特別であることを証明して
いる

だが今のアリサを見たものは、きっとそんなものが無くても彼女を特別だと思ったはずだ

笑顔

ただそれだけで、彼女は輝いて見えた

虹色の輝きなど引き立て役にすぎない

彼女の見た目など飾りに過ぎない

輝いているのは心だ

内に秘めた想いが輝いている

輝いている彼女は何よりも美しかった

「行つてきます！」

学園へ向かうアリサの後ろ姿は、淡い夢のような弱々しさは感じられない

前を見据えた力強い歩みで、アリサは仲間の下へと進んで行った

再出発（後書き）

お疲れ様でした

この話を持って入学試験編は終了となります

章編集はそのうちしますのでお待ちいただければと思います

しかしおかしい、試験後の話はもっと早く終わらせるはずだったのに何故だ

学園生活一年目・魔法とは？（前書き）

第三章スタートです

蒼犬さんの出番がさらに減る！？

冗談はともかくとしまして、今後は今まで無節操に出ていたフラグの回収だったりとか無かった説明をいまさらしたりだとかがメインになっていきますので、話の進行スピードはさらに低下していきます。今まで語られなかった設定などを明らかにしていく予定ですので、かなり長くなるかと思いますが、お付き合いいただければと思いますでは本編をどうぞ

学園生活一年目・魔法とは？

魔法学園

そこでは文字通り魔法を教えているが、学園と呼ばれる通り魔法以外も教えている

一般教養はもちろん近接戦闘、魔法を使わない遠距離攻撃、索敵の技術と重要性や戦術指南などの戦闘に関わるものはもちろんのこと、直接戦闘に関わらない・・・ある意味では直接戦いを終わらせる手段として政治や人身掌握術、果てはトレジャーハントのやり方といった領域まで教えている

4年の過程があるとは言え、それだけの内容を全て教えるだけの施設となるとかなり広大な面積が必要になる

戦時の拠点としての運用も考えられて設計されているため、学園の敷地内はかなり広い

下手な村なら収まってしまいうほど広大な面積にあって、学生数は全校生徒合わせて四百名前後、教師や職員を含めても六百人程度しかない

校庭らしい場所では魔法の練習をしている生徒達がいる

闘技場らしい場所では一対一で戦っている生徒もいるし、それを応援している生徒もいる

しかしほとんどの生徒は、教室の中で教師の話を聞いている

当然アリサ達も同じように話を聞いている

壇上に立っているのは二次試験のときのエルフの教師だった

「えゝ、つまりゝ魔法とはゝ・・・」

彼は間延びした声でゆっくりと講義をしている

あまりにもゆっくりしているので、頭がふらふらしている生徒が多い

「・・・なのでゝ、ここの魔力式はゝ・・・」

さすがに彼の口調で説明するわけにはいかないのと作者的な理由で、わかりやすく解説させていただく

ちなみに内容はこの世界において解明されていない部分を含むが、現代知識を使っている部分がそれにあたる

この世界における魔法とは魔力によって発生した現象全般を指す、細かな分類こそあるが基本的に魔法とはそういう意味だ

では魔力とは何か？

答えはある種の物質である

原子と言ってもいい

この物質は無味無臭で空気と同じ重さと質量であり、空気中に無数に存在する塵やホコリ等と同レベルで世界中に充満している

魔力の特徴は主に三つ

一つは意思による干渉が容易であり、簡単に言ってしまうえば思った通りに動かすことができるということである

ただし干渉できるのは自らの体内に取り込み、自らの魔力となったものだけだ

二つ目はあらゆる物質と結合することが可能であり、自らの魔力と結合させた場合にはその魔力を操作して物質を操作できることが可能になる

もちろん操る対象が大きかったり重かったりすればそれなりの量が必要になる、魔力で物を掴んでいると思ってもらうのが一番わかりやすいだろう

物によっては結合することで、結合前とは全く違う物質になることもある

そして三つ目

最大の特徴とも言えるその性質こそが、「魔法」と呼ばれる最大の理由だ

魔力は上記二つの性質を残したまま、あらゆる物質に擬態することが可能なのである

擬態と言っても見た目だけというレベルではない、性質も特徴も全てが変化する

水素と酸素に変化して結合すれば水になり、その水に自らの魔力を結合させれば操作できる水が完成する

全てを自らの魔力で行えば魔力の性質によって操作性はよくなるが、魔力保有量や効率的な運用といった面から、強力な魔法を運用する場合は周囲の魔力を変化させて自らの魔力は操作や細かい部分に使用するのが一般的だ

なので簡単な魔法ほど意のままに動き、強力な魔法ほど操作に融通

が効かない

しかしこのままを理解できる現代人ならともかく、この世界の人間達は残念ながらそこまで理解できてはいないので使用方法は主に三つにわかれる

魔導術・精霊術・紋章術

魔導術は上記の理屈のまま使用する方法で、最も一般的だが最も理解されていない使い方である

この道を研究した人間だけが高みへと登れるが、到達できる存在は決して多くない

精霊術は文字通り精霊の力を借りるのだが、理屈自体はあまり変わらない

間に精霊という仲介者が入るだけだ

ただし精霊は原子などを理解しているらしく、明確にどんな現象を起こしたいかを伝えることができれば、精霊が適切な魔法を使ってくれる

そのぶん使用者のイメージ力によって効果は大きく左右されるし、使う魔力も余分に必要になる、精霊によって相性の良い悪い（相性によっては全く使えないこともある）があるなどのデメリットも多いしかしそれを考えても、イメージさえしっかりしていれば使えるということもあって使用者は多い

最後が紋章術

これは人間族の使用者がほとんどだ

過去の研究者達が積み上げてきた研究の結果、意味がわからなくても紋章が描ければとりあえず使える、という魔法だ

魔力を使って特定の図柄を空中に描くと、魔導術と同じような効果

が得られる、という現象を応用している

水を出す紋章、結合させる紋章、渦巻くような動きをさせる紋章等が配置まで含めて決まっており、それぞれの紋章に必要なだけ魔力を込めることで相応の結果を発生させる

紋章を描くとは言っているが、何も毎回指でなぞる必要はない。要は魔力を正確に図形にできれば良いので、必要なのは記憶力とその形に魔力を操作できる集中力だ

ただし込めた魔力の量によって効果の増減こそあれど、効果そのものが変化したりはしない

また紋章が一つ違っただけで全く違う効果になったりするので、使うには相応の注意力も必要になるなどもある

ゆえに使い手は正確に、かつ大量の魔法陣を覚える必要がある。結論を言えば使い勝手は精霊術に比べると悪い

ちなみに詠唱なのだが、魔法は魔力を込める際、特定の言葉に反応して、その性質に少くない影響を与えることがわかっている

別に言わなくても使えるのだが、ものによってはほとんど効果がなくなるようなものもあるので普通は詠唱する

現在ある詠唱は過去の研究者達が考え出した、最も効率的かつ効果が高くなる組み合わせと言われているが、まだまだ研究中というのが現状だ

以上が魔法の説明となる

「……というわけです、え、最後まで起きていられた人は、実技試験のときにちょっと優遇してあげますね」

教師の言葉からわかるように、いまだに起きている生徒は少ない
7割以上の生徒が夢の世界へ旅立ち、現実へ帰ることを拒絶している

教師が怒っていないあたり、おそらく毎度のことなんだろう・・・

ちなみにアリサパーティーはマキア以外全員起きている
バスカーが若干怪しかったが、気合いで最後まで耐えきったようだった

マキアは10分しか持たなかった

全体から見てもトップ争いできる速さだ

イビキをかなかったただけ幸運だったと言えるよう

途中イビキがうるさかった生徒の一人が、頭上から滝のような大量の水を浴びせられ「これが紋章術ですよ」と実演されてしまうワンシーンがあった

その後の説明で本来なら水圧で相手を押し潰す魔法だと説明された時は、全員の顔が蒼くなった

マキアがイビキをかいていたら危なかったかもしれない

「まゝ、今日の講義はこのへんで」

寝るのはいいですが、授業を妨害するようなら、威力を上げざるをゝ得ませんね

何がと言いませんので、何がとゝ聞かないでください」

教師の顔は始終笑顔だったが、生徒はきつと盤若のように見えていたに違いない・・・

「・・・面白い授業だったね」

アリスは相変わらず空気が読めなかった

学園生活一年目・魔法とは？（後書き）

というわけで魔法の説明の回でした

補足をさせていただきますと、技術的なスキルである例えば衝撃波を出すとか高速で何度も攻撃するとかという現象は魔法ではありません

魔法ではありませんが、肉体とか武器とかを強化したり魔法を使つての行動をしますがそれはあくまでも武器や肉体を使つての行動ですので魔法ではありません

ただし武器が当たったら爆発したとか武器から光が飛び出すなどは魔法による現象ですので、魔法となります

つまり魔法によって攻撃したのか武器によって攻撃したのかという部分で、魔法と技術が分かれていると思ってくださいまし

技術的な使用は特に詠唱を必要としませんし、発生も早いものが多いです

例

グラハルトの使った閃光剣フラッシュブラスター　あくまでも光の矢による攻撃なので魔法攻撃

バスカーのツールハンマー　雷を纏わせた「鎚」による攻撃なので技術

わかりにくくてすみません・・・

学園生活一年目・実技訓練（前書き）

よし、落ち着こうか

累計PVが2万件を突破しているなんて気にする必要はない、そう
だよなジョニー

ジョニーって誰だ

あざああしやありやああす！！！！（意味不明）

学園生活一年目・実技訓練

魔法学園の広大な敷地の中、実技演習場という名のコロシラムのような場所

円形の闘技場が中心に一つあり、それを囲むように大小合わせて8つの似たような闘技場がとなり合わせに繋がっている

円の外周が客席と通路になっており、人間6人が横に並んで歩いても大丈夫なくらいに幅広い

まさにコロシラムのような古代ローマを思い出させる建築様式なのだが、どうやらどこの世界も似たような環境なら似たような美意識を持つということらしい

その実技演習場では現在、アリサ達の学年である一年生がいくつかのグループでわかれて各演習場にわかれていた

今回の授業は生徒同士での戦闘演習のようだ

「ふふふ、今こそ名誉挽回の時ですわ！
覚悟なさいアリサ！！」

レディが鼻息荒く演習場に立ち、目の前の対戦相手を威嚇（？）している

対戦相手であるアリサはゆっくりと中心に向かって歩いていく

両手にはグローブではなく、木製の剣を持っている

ふっと笑うように息を漏らし、レディを挑発する

「レディ、痛くても泣かないでね」

「きーっ！いつまでも昔のままだと思わないでくださる！？」

昔のまま挑発に乗ってしまうのだから説得力がない

アリサと同じく木製の剣を片手に、もう片手に持った木製の軽盾を前に構え、レディは準備が整ったことを意思表示する

「行きますわよ！」

「行くよ！」

双方同時に駆け出し、演習を開始した

「どっせえええい！！」

荒い掛け声とともに床に激突し、小規模な爆発を起こしたのはマキアだった

「真っ直ぐというか馬鹿正直というか・・・」

俺ならともかく他の奴らには当たらん・・・よつと！
ファイアアロー！！」

詠唱破棄した魔法の矢を放ったのはグレイだ
実技演習なので本来魔法は禁止なのだが、相手が炎鬼族なので火系で傷つくことはない、という理由で許可されている
ただしマキアも避ける前提での条件だが

「むっ！」

素早い動きでその場を飛び退き、魔法の矢を回避したマキアはすぐさま正面から突っ込んで行く

「馬鹿正直は！当たればでかいんだよっ！！」

「当たらなければ0ですよ・・・っ」と

マキアの突進を横に避けたグレイは、待機させていた魔法を発動させる

「ぬぁ！？」

グレイの後方、マキアが突っ込んで行った先に炎の壁が立ち上がる

「こういうことをしてくる相手もいるんですよ？」

「ぬぁぁぁ！まだまだぁぁぁ！！」

再び突っ込んで行くマキアを見てグレイは呟く

「ま、蒼犬レベルになれば馬鹿正直も有効ですがね・・・」

二人の演習は物理的な意味で熱くなっていた

「トールハンマー（弱）！！」

「パワーシールド！！」

雷のような音とともに降り下ろされた槌が巨大な盾によって防がれる

戦っているのはバスカーとアレックスだ

「ブハハ！お前さんほんと強えな！

無名なのが信じられねえぜ」

「ま、師匠と一緒にだったからね
ただし今までは、だ」

そう言いながらアレックスは、レディとは違う大きな盾、いわゆる
重盾を前面に構える

「盾だって攻撃に使えるんだよつと！！」

盾を構えたままバスカーに向かって突進、何の小細工も感じられない
力任せに見える

「ブハハ！力勝負で俺に挑むか！
雷撃を！なめんな！よ！！」

バスカーは力をためている

見るからに筋肉が盛り上がり、全力で攻撃するつもりのようなだ
木製の槌（金属製は鎚と書く）はミシミシと音を立て、持ち手の部
分がひび割れていく

「うおおお！」

「どおりやあああ！」

盾と槌がぶつかり合う

バスカーとしてはアレックスを思い切り吹き飛ばしたつもりだった
だが結果として、アレックスは衝撃で踏みとどまったものの、吹き
飛んではいなかった

吹き飛んでいたのは槌の、ひび割れた部分から先のほうだった

「ありや？」

「演習用の武器が、そんな力に耐えられるワケないだろ？」

盾から飛び出していたアレックスが、バスカーの喉元に木製の短剣
を突き付けていた

「ブハハ！これが狙いだったか！

参った参った、俺の負けだ
ブハハハハ！」

バスカーの豪快な笑い声は、悔しさを感じさせることはなかった

「・・・ゼーゼー」

「おいおい 그레이！もうへばったのかよ！？」

그레이とマキアのほうも決着がついていた
主に 그레이の体力的な理由で

「マ・・・マキアと一緒にしないでくれ・・・
こっちは後衛型で、しかも魔力の吸収とかできないんだぞ・・・」

そう、前提条件からして 그레이が勝てるわけが無かった
火系の魔法しか使えないのに、火系をくらうとどんどん強くなるマ
キア

おまけに物理攻撃は全て無効化する炎鬼族の特性、なによりマキア
がバカなので挫けるという発想がないため勝機が無い
唯一の方法が負けを認めさせるやり方なのだが、バカなので負けに
気づかない

「・・・バカには勝てん・・・」

그레이が心折れたことで勝負は終わった

「ハッ！フッ！ていやっ！」

「・・・よっ・・・と」

アリサとレディはいまだに戦っていた

アリサは二本の剣を巧みに使い、攻撃に防御に止まることなく動き続ける

レディは盾と剣で役割分担させている正統派スタイルだが、時に体全体で攻撃を避け、盾で殴りかかるなどといった実践的な動きをしている

お互いにかすりこそすれど、一撃が入ることなく剣舞を続けている

「強くなったね、レディ」

「当たり前ですわ、成長は子供の義務ですわよ？」

「・・・義務かあ」

剣舞の合間に会話しているあたり、二人が全力でやっていないのがわかる

「確かに成長したよね・・・、特に胸が・・・」

「なっ！変なところ見ないでくださる！？」

ポコンッ

顔を真っ赤にして胸を隠そうとしたレディの頭に、アリサの剣が当たった

「感情を抑えるのはまだまだだね」

ぽかんとしているレディをよそに、アリサは振り返ってそのまま出て行こうとする

「むきー！ズルいですわよ！
もう一度！もう一度真剣勝負ですわ！」

「順番だからまた今度ね、後の人が待ってるよ」

言われてレディは周りを見ると、順番待ちをしている生徒を含めここにいる全員がレディを見ていた

「む・・・むうー！」

ぶるぶると震えながら涙目で睨む姿は非常に愛らしく、この日に「レディの涙目見てみ隊」というファンクラブができたらしい

「むきー！覚えてなさい！次こそ絶対勝つんですからね！」

「ふふ・・・楽しみにしてる」

ちなみにアリサのほうは「アリサ教」という宗教レベルのファンクラブができたらしい

完全に余談なので二度と出てこないだろう

「全員お疲れのようだな

自分の強さがどれくらいか確認できたか？」

虎っぽい獣人の教師が話をしている

授業の終わりということらしいが、一部を除いた生徒のほとんどが疲労でどうでも良さに聞いている

「ま、今回は確認だからな

次回からはまた違う内容になるが、教師も複数人でやるようになる
上級生との合同演習なんかもあるから、体力つけとけよ」

冒険者あがりの生徒は適当に返事をしているが、そうでない生徒は顔を青くしていた

「・・・お腹空いた」

もちろんアリサにそんなことは関係なかった・・・

学園生活一年目・実技訓練（後書き）

アリスパーティー内での実力比較でした

バスカーは手加減というか真面目にやってなかったなので微妙な終わりですが、模擬戦なのでみんな似たような状況です

学園生活一年目・自由時間（前書き）

この話でアリサ達の日常編は一旦終了します

次回からはなんと久しぶりのあのキャラが！

あれ、この話って主人公誰だっけ

学園生活一年目・自由時間

「お腹空いた」

「食堂楽しみですわ」

「学園の食堂はおいしいって評判ですよ」

アリサ・レディ・アレックスの三人は学園の廊下を食堂に向かって歩いてた

時間は日本時間で夜の7時といったところ

授業も終わり解散となり、腹ごしらえをしようと食堂に向かうことにしたのだ

学園の食堂は10時くらいまでやっているとのことなので、急ぐ必要もないのだが、腹が減っては戦はできぬとばかりに三人とも食堂に行くと言い出した
別に戦の予定は無いのだが

「おう、おめーらもメシか？」

声のしたほうを見るとバスカー・マキア・グレイがこちらに向かってきている

どうやら目的地は一緒のようだ

「ちょうどいい、みんなで食わないか」

「ふむ・・・、一人だけ両手に華というのは中々に許せませんね」

是非ともそうしましょう」

マキアとグレイの誘い・・・グレイはちょっと違う気がするが、そう言うのであればとみんなで行くことになった

「しかしアレックスが二人を狙っていたとは・・・、これはある意味一番の危険人物でしたね」

「え？グレイさん一体なにを・・・」

「確かに！冒険者なんて女っ気がないからな！貴重な癒しを独り占めとは許せん！」

「は？マキアさんまで・・・」

「ブハハ！諦めな！所詮男なんてそんなもんよ！もちろん俺も含めてな！」

「バ・・・バスカーさん・・・？」

にこやかに話す三人のだが、明らかに殺気を放ちながら会話する三人とも中々の実力を持っているので、アレックスに「だけ」伝わるようにしているあたり本気だというのがわかる

「いや・・・えっと・・・ごめんなさい？」

「いやいや落ち着きたまえよアレックス君、なぜ謝る必要があるのかな？」

まさか君に限って二人とも狙っているわけでは無いだろう？」

素晴らしい笑顔でグレイが問いかけてくるのだが、笑顔の後ろに鬼が見えるのはきつとアレックスだけだ

「H A H A H A、グレイ君やめたまえよ

アレックスに限ってそんなわけが無いだろう、そうだよアレックスくん??？」

マキアがこれまた爽やかなスマイルで青筋を浮かべながら話す体が炎鬼化してきているのはきつと見間違えではない

「二人とももうY A M E R O

アレックス君はまだまだ若いんでござえやがりますよ? 馬鹿なことを考える暇くらいありますよねアレックス君」

バスカーがまるで聖人君子のごとく優しい笑顔と声を出しているのだが、語尾がおかしくなっていて逆に怖い

「「「で?」「」「

「で?とは?」

汗をだらだら流しながら三人の問いに逆に問い返すアレックスはこのとき本気でこう思っていた

(グラハルトさんより怖いんですけど!!!)

「「「どっちが本命だ?」「」「

三人の重なった声は、なぜか先を歩いている話題の二人には聞こえなかった

一行は食堂に到着し、その光景に目を奪われていた
決して狭くは無いハズの食堂（一般的な学校の教室5つ分くらいの
広さ）にはたくさんの人がひしめき、入学試験を思い出させるよう
な状態になっている

「凄い人数ですね・・・、どうします？」

グレイはアリサを見ながら言うが、目の前の空間は座る場所を探す
だけでも大変そうだ

諦めて学園の外でも構わないと言外に言っているのだが、アリサは
気にせず奥の方へと進んでいく

「・・・ま、大丈夫でしょう」

レディがそれだけ言ってついていくので、一行は全員で歩き出した

「おい、あれって・・・」

「あれが噂の・・・」

「・・・期待の新人パーティーか」

アリサ達が歩いていると周囲の恐らく上級生らしい生徒達がひそひそ話を始める

どうやらアリサ達はかなり有名になっているようだ

歩く先は人が避け、進む道を示すように先へ先へと割れていく
やがて一つのテーブルの前で人はいなくなり、そのテーブルに座っていたグループはそそくさと席をたった

「・・・空いたよ？」

「空きましたわね」

「空いたな」

「空いたぜ」

「空いたぞ」

「限りなく不安な空き方ですが空きましたね、正直トラブルの予感
しかしませんよ」

グレイの予感は的中する

できれば当たらないで欲しかったと思うのは仕方ないと思う

「よお！てめえらが噂の一年生なんだってな！」

見るからに偉そうな態度の生徒がやってくる

これ見よがしに腕章を見せつけ、青い色（４年生）を強調している

「あ、ダメだ」

「何がだい？」

アリサが顔を見ただけでそう言うので、アレックスが何のことか聞

いてみる

答えを返したのはアリサではなくレディだった、ただし言葉ではなく

「俺様は4年生のハボツブギアっ！」

「殴つてもいい相手つてことですわ」

肉体言語という方法だった

彼が可哀想なので一応補足しておくが、彼の名前は間違つてもハボツブギアなどという残念な名前ではない

後半はレディに顔面パンチをくらったせいで出てしまった鳴き声だ
きつと彼は二度と登場しないのでこれ以上は説明しないでおこう、
アリサを脅して無理矢理手下にしようと声をかけたことだけは説明
しておく

「うん、殴つても大丈夫な相手だね
それよりお腹空いた、早く並ぼう」

食堂はセルフサービス式のようで、何人もの生徒が列を作つて並んでいる場所がある

グレイはその列を見てから提案してみた

「時間がかかりそうですね、私とアレックスは留守番をしていました
よう

その間に行つてきてください、私達は誰か戻ったら行きますよ」

「え、なんで俺？」

「H A H A H A、そりゃあO H A N A S Iが終わってないからに決まってるじゃないですかアレックス君」

「え、ちょ、なん」「よし、じゃあ行こう！」「ええ」

さっさと歩き出す一行の背中を見ながらアレックスは呟く

「どうしてこうなった」

「・・・なるほど、つまりアリサ狙いと言うわけですか」

「・・・はい」

グレイが顔を真っ赤にしたアレックスをニヤニヤしながら眺めているアレックスはグラハルトの告白の部分を隠して先日のことを話したようだ

話したのか話さざるを得なかったのかはわからないが、相手が「謀略」と呼ばれる相手なのだから恐らく後者なのだろう

「つまりアリサ狙いで近づいて行くと必ずレディがいると、そういうわけですね」

「そういうわけです、もう勘弁してください」

「ええ、肉体言語でお話をせずに済んでよかったですよ」

にっこりと微笑むグレイ

いまだに鬼が見えているアレックスはそれを笑顔と認識することができないので、恐怖を煽っているだけなのだが、恐らく狙ってやっているのだろう

「まあ、みんな戻ってきたようだし

俺からはこの話は終わっておこう、二人には俺から誤解の無いように伝えておくから安心するといい」

「前から思っていましたけど、グレイさんって男と女に話すときで態度違いますよね？」

「む、やはり出てましたか

まあ女性には優しくしろと教えられましたからね、態度が変わってしまうのもそのへんからだろう」

微妙に言葉使いが安定していないのは動揺しているからなのだろう
先程から目を合わせようとしないグレイに、反撃をしようとアレックスが口を開く

「それって「悪い！待たせたな！」・・・OTZ」

見ると全員が戻ってきたようだが、食事が載っているトレイの数が人数より多い

どうやらグレイとアレックスの分も持ってきてくれたようだ

「さあ食べよう」

アリサの掛け声で全員が食べる姿勢になり、グレイまでもが今にも

食べそうな雰囲気だ

アレックスは今聞く必要も無いかと考え、今は食事に集中しようと思ったようだ

・・・ちなみに集中しなくてはならない理由として、隣に座っているマキアが明らかにアレックスのオカズを狙っている気配がしたからだ

「じゃあいただきます」

「「いただきます」」

「いただきどうーあーっしゃー！！！！」

「させるくうあああ！！！！」

マキアとアレックスの壮絶な戦いは今、幕を開けた

テーブルは笑いに包まれ、周りの生徒もその光景を微笑ましく見つめる

楽しい雰囲気も大勢での食事も、こんな馬鹿みたいなやり取りも、アリサにとっては初めての経験だった

「あはは」

「男って・・・」

「ブハハ！いいぞ、もっとやれ！」

「馬鹿ですね、ええ馬鹿です」

アレックスとマキアの戦いはまだ続いている

「ほあちゃー！」
「きいええー！」

アレックスは馬鹿をやりながらも、それに気づいていた

アリサの顔がかつて見た笑顔だったことに

その顔を見れるなら、馬鹿でもなんでもやろう

「その時」が来るまで泣かなくて済むのなら、道化でかまわない

「その時」が来たらきつと彼女は一生分泣くはずだから・・・

そしてもう一つ気づいていた

アリサを見て、不適に笑っている生徒がいることに

その笑みはアレックスにとって、不安以外を感じさせることは無かった

「隙有り！」
「しまった！」

それを今のアレックスから理解できたものはいないだろう・・・

学園生活一年目・自由時間（後書き）

お疲れ様でした

ここまで読んでいただきありがとうございます

次回からはまた別の場所で唐突に、そして急激に話が進んでいくような気がすると思わせかけて実はそんなに進まない話が続きます

設定の回収が意外と多かったので長くなっていますが、お付き合いいただければ幸いです

今後ともソウケンをよろしく願っています

死神の取引1（前書き）

毎度お読みいただきありがとうございます

タイトルからわかるように連話となります

アリサ達はしばらくお休みですが、そっちはそっちで製作中ですので、アリサ達の学園編が楽しみな方々は暇つぶしにお読みください

死神の取引1

どことも知れぬ場所に広がる荒野の真ん中

とつくの昔に栄光を失い、ただの瓦礫が散らばった場所

廃墟という呼び名が相応しいその場所を、一人の男が歩いていた

黒い鎧に金の模様があり、犬のような兜をつけた男・・・

「蒼犬」

世界最強と噂される彼が廃墟の中を歩いていた

「よう、追い付いたぜ蒼犬」

彼に後ろから声をかける人物がいた

赤い髪をオールバックにして、彫りの深い顔をしている男

何を隠そう悪魔、それも大悪魔と呼ばれる強力な存在であるアルド
ラだった

「・・・お前か」

「・・・やっとわかったぜ、お前さんのこと」

蒼犬は足を止めた

だが振り返らず、言葉だけを返す

「・・・どうやった」

周囲に冷気が漂い始める、恐怖という存在のあまりの強さから起る錯覚だが、知っていてもそれを振り払うことはできない

「なに・・・、大悪魔ともなると死神と会うこともできるからな
ちよつと取引したのさ」

アルドラは言いながら自身の服の下を見せる

本来なら筋肉で引き締まった肉体に、迸る魔力を溢れさせる強靱な
肉体があるはずだった

しかし今のアルドラの体は、かつてそんな肉体だったことも信じられないくらいに痩せ細っている

骨が見えるほどに痩せた体からは、魔力の欠片も感じられないし、
病気かと疑うほどに肉という肉が無くなっている

「ひでえもんだろ？魔力も肉体も向こう100年は使い物にならねえ
今ならアリサどころか人間の駆け出し冒険者にだって勝てねえ」

クツクツクツと笑うアルドラなのだが、その顔に後悔の感情は見られない

代償として得たものは、彼にとってそれだけの価値があったのかも
しれない

「・・・何を知った」

グラハルトは余計なことを話さない
誤解されやすい一番の原因なのだが、もはや癖に近い話し方なので
直そうなど微塵も考えていないようだ

「・・・お前さんが別の世界から来たってことと、お前さんがそれ
を話せない事実を知ったよ
そして・・・俺がそれを誰かに話しただけでもお前さんが死ぬ・・・
って事実もな」

「・・・そうか、・・・俺は殺される側になったわけか」

アルドラの話が真実であるならば、アルドラは簡単にグラハルトを
殺すことができるようになったわけである
何せ人に話せばいいだけなのだから、蒼犬に近寄る必要さえ無い、
むしろ離れた場所から一方的に殺せるのだから、普通の感覚だった
ら命乞いでもしたくなるだろう

だがアルドラは意外な言葉を口にする

「ふん、わざわざ殺すためにこんな取引するかよ
俺が本当に知りてえのはそんなことじゃねえ、俺は・・・」

アルドラは近づきながら何かを取り出す

「てめえの、その強さの理由を知りてえんだ！」

そして取り出したアイテムをグラハルトに突きつける

「・・・これは？」

それは宝石だった

結晶と言ってもいい

空色の綺麗な青色をした結晶は、カッティングなど余計な細工が一切無い

だというのに、その美しさは一流の細工された装飾のように輝いている

「永遠の記録・・・記憶を記録にして保存する魔道具だ
この方法が、唯一の死なない方法だと死神は言ったよ」

グラハルトは黙って宝石を受け取る

永遠の記録をじっと見つめ、これによって起こる事態を予想する

「・・・一つだけ聞こう」

もはや恐怖という名の殺気は消え去り、ただ一人の「人間」がそこにいた

「・・・力を手に入れてどうする？」

人間の問いに「悪魔」は答える

「魔神になる、魔神にならないとできないことがある、俺の願いを叶えるために、俺は力が欲しい」

「・・・力でしか・・・叶わない願い・・・なのか？」

「力で叶えることが、一番可能性が高いんだ」

グラハルトははあとため息を吐いた

その手に持っていた青色の宝石は光り輝き、数秒後にはすぐに収まる

「・・・参考にはならんと思うぞ」

ひょいっとアルドラに投げて返し、アルドラも子供とキャッチボールしているかのように軽く受け取る

「へっ、それを決めんのは俺様だ

・・・そんじゃあさっそく「見つけたぞ！」・・・あん？」

声のしたほうを二人が見ると、太陽を背にこちらを向いている連中がいた

五人、たった五人

その五人は人間も獣人もエルフもいるが、気になるべきはそんなところではない

一人を除いて全員が女であることでもない

唯一の男、何の不思議もない普通の男であるはずのその男からは、尋常ではないほどに惹き付けられる「何か」が感じられる

良くも悪くも干渉せずにはいられないような、それでいて決して近づいてはいけないような不思議な感覚

「覚悟しろ！蒼犬！大悪魔！」

彼の感覚は非常に説明しづらい

だがきつと、現代人ならぴったりの言葉を使うことができる
蒼犬に言わせるなら彼は・・・

「・・・主人公か」

時は遡り半年前

ある国である儀式が使われた

勇者召喚

勇者とは名ばかりで、異世界の存在を強制的に召喚し、自国にとって都合良く動くよう無理矢理契約する儀式だ

その自国というのも国民や世界平和のためではなく、主に王族や召喚した本人という一部の人間にとってという意味だ

もちろん使用には厳しい条件が両手では足りないほどあるし、全ての条件が揃うタイミングは一生に一度あるかないかというほどだ
なによりそれが必要になるタイミングでは何故か世界滅亡の危機が
かならず存在するので、異常なまでに正当化されてしまう

最悪なのは召喚される対象が、召喚されたことに対して疑問に思うどころか嬉々として従うことだ

しかも例外なく強力な戦闘能力を持っているうえに、自分が正義だと思い込むような人物ばかりが召喚されるために手が終えない

そして今回召喚された彼もまた、例に漏れずして同じような人間だった

あとはまさにテンプレートのような異世界ライフ

強くなるために修行した、国内の色々な女性とフラグをたてた、伝説の装備を手に入れた、魔王を倒すために旅立った、旅先で精霊や色々な種族と仲良くなった

正にテンプレな人生を送ってきた彼の名は、東 あずま 光輝 ひかり

勇者として旅をしていた彼らは、今世界の脅威二人と対峙していた

「みんな！行くぞ！」

「やべえ、今の俺じゃ相手になんねえ
足手まといは勘弁だぜ！」

「……言ってるスキに逃げろ」

「確かに……な！」

アルドラはそう言って何かを空中に放り投げた
途端にアルドラは体が浮き上がり、今にも飛び立とうとしている

「逃げさせてもらうぜ

お前さんも気いつけるよ！そいつは勇者だ！」

どんっという音がしてアルドラは飛び上がる

その姿を目で追っているうちにみるみる小さくなっていき、今はもう黒い点があるくらいにしかわからない

「逃がしたみたいですよ勇者様」

「ああ、いつか倒すさ

今は蒼犬に集中しよう、アイシャ」

アイシャと呼ばれた女性はたわわに実った母性が眩しい金髪的女性だった

顔はぜんぜん違っただが、どこかレディを思い出すような雰囲気をしている

「・・・フツ」

蒼犬としては、勇者を前にしてずいぶん余裕がある自分に対して笑ったのだが、勇者一行には違う意味で伝わったようだった

「なっ！バカにしていますよ！あいつぶっ飛ばします！」

「落ち着きなさいリノン、挑発に乗っちゃダメよ」

「でもシェリル！」

なんというか良いパーティーなのだが、それぞれが勇者に自分をアピールしているように見えてしまう

発言するたびにいちいち勇者をチラ見しているし、勇者から見えるような立ち位置に行こうとしてジリジリと接近してきている

「・・・ノア、支援魔法を頼む
みんな、全力で行くぞ」

「うん、僕にまかせて！」

勇者一行が淡い光に包まれ、何かしらの魔法によって強化されたのがわかる

グラハルトも剣を構え、勇者を見据える

「・・・来い」

勇者と蒼犬の戦いが始まった

死神の取引1（後書き）

久しぶりにアルドラさん登場！

そしてグラハルトの真実がついに！・・・の前に勇者一向出現ですw

普通立場逆じゃね？なんで襲われてんの？って感じで楽しみください
い

死神の取引2

「・・・来い」

グラハルトがそう言った瞬間、強烈な殺気が勇者達に襲いかかる
冷気と錯覚するほどの圧倒的な気配、死という恐怖を感じずにはい
られない強烈な波動
離れているのに首筋に刃物を突きつけられているような感覚さえし
てくる

「う、うああ・・・」

「なにこれ・・・これが蒼犬なの・・・」

「足が・・・動かない・・・」

「怖いよ・・・勇者様・・・」

女性四人は完全に恐怖に吞まれたようで、全く動けない
勇者はさすがと言うべきか、恐怖を感じてはいるものの動けないほ
どではないようだ

「みんな大丈夫だ、俺がついてる！」

言うと同時に駆け出し、グラハルトに向かって真っ直ぐに突っ込ん
でくる

「うおおおお！」

何の小細工もないただの振り下ろし、猿でもわかりそうなほど素直
な剣筋

しかし言い知れぬ何かを感じたグラハルトは受けずに避けることを

選んだ

体を少し横にずらし、ちょうど一人分程度の間を空けるように避ける
避けられたことで地面に衝突した剣は、信じられない結果を出す

ずんつと剣と地面が接触したにしては異常に重い音がした
見ればその場所は剣から先１メートルほどに渡って切れており、その周囲は削ったかのようにへこんでいる

「・・・異世界補正・・・か？」

呟いた言葉は兜に遮られ、勇者には聞こえない
勇者はグラハルトに向けて剣を何度も振るう

さすがにアリサやグラハルトと比べると明らかに遅い剣速なのだが、
さきほどの攻撃から察するに何かしら特殊な力があるとふんだグラハルトは、迂闊に手出しせずに防御に徹する

不思議なことに先ほどの攻撃とは比較にならないほど弱々しい（グラハルト基準なので実際にはそこそこ強いのだが）攻撃に、逆に何かを狙っているのかと不安になってしまう

ひよいひよいと軽く避けているような光景に向けて、巨大な炎が飛び込んでいったのはそのすぐ後だった

「炎よ、紅く輝くは汝の鎧なり！焼き尽くせ！地獄の業火！イフリートインパクト！！」

シエリルと呼ばれていたクリーム色の髪をロングにしたエルフの女性が呪文を唱えた

唸りをあげて巨大な火の玉がグラハルトに襲いかかっていく、あまりに大きすぎて回避が間に合うか微妙だ

避けられないわけではなかったのだが、そこはさすが勇者一行といったところ、すかさずその可能性を潰してきた

「ストライクアロー!!」

リノンと呼ばれた茶髪をショートにしている獣人が矢を放つ衝撃波を纏った矢がグラハルトの行く手を遮るように飛んできたため、大したダメージにならないことはわかっていても条件反射レベルで勝手に避けてしまう

「・・・いい連携だ」

炎がグラハルトを飲み込み爆発する、熱気が周囲に溢れ、中心部ではどれだけの熱量があるのかを簡単に想像させるほどに熱い

「やった!」

火系の上級魔法イフリートインパクト

直訳すると炎魔神の衝撃という意味のその一撃は、純粹に威力を徹底的に上げた魔法だ

シンプルであるがゆえに効果は高いが、対策も多くある

しかし直撃した場合の効果は魔法の中でもかなり強力な部類であるため、普通であれば倒せないにしてもかなりの大ダメージになるなので直撃しただけで喜んでしまったのは仕方ないだろう

「・・・ッ! シェリル危ない!」

咄嗟にアイシャと呼ばれていたレディ似の女性がシェリルを突き飛ばす

「なにをつ・・・」

次の瞬間

突き飛ばしたことによってできた何も無い空間を、目に見えるほど巨大な斬撃の衝撃波が通過した

「ソニックブーム!？」

勇者達は衝撃波の飛んできた方向を見る

炎が2つにわかれ、道のようになっている

道の先には剣を振った状態のままグラハルトが立っていた

驚くべきことに傷一つついておらず、目に見えるダメージを負っている気配が全く無い

「そんな！無傷だなんて！」

「強い・・・」

彼らが驚くのも無理は無い、普通の相手なら必殺の一撃を食らったというのに、無傷でたっているグラハルトが異常なのだ

彼らとて今まで強敵と戦ってきたが、この攻撃を食らって無傷だったものは存在しなかっただけに、今回の結果はかなりのショックだったようだ

「落ち着くんだ！強力な魔法防御効果のある防具を身につけている

のかもしれない！

シェリルは援護にまわってくれ！アイシャ、行くぞ！」

アイシャは軽鎧に似つかわしくない大剣を両手で握りしめる

「勇者様、気をつけてください

あいつは今までの相手とは比較になりません」

「だとしても倒す必要がある、正義のために！」

二人は同時に駆け出し、グラハルトに飛びかかる

「・・・正義ね・・・」

勇者が斬り込み、隙をフォローするようにアイシャの大剣が振るわれる

合間にシェリルとリノンの援護が飛び交い、ノアと呼ばれた緑の髪をポニーテールにした女性が的確に指示をしながら支援魔法を放つ普通ならすぐに終わるような激しい攻撃は、普通なら一人で耐えられるものではないし、普通ならもう勝負がついていてもおかしくは無い

その状況にあつてグラハルトは耐えていた

耐えていたなんてレベルではない

時に防ぎ、時に避け、時にはあえて受け止めるその姿は余裕さえ感じられる

「強い・・・！」

五対一でも余裕がある相手など世の中そう多くはない、高レベルである勇者達にとってはなおさらだ
かつてない強敵との戦いで焦り始めた勇者達は、だんだん連携が崩れてくる

「ソニックブーム!!」

グラハルトがノアに向けて衝撃波を放つ

崩れた連携のわずかな隙を狙って突いたその攻撃は、予測していなければ防げない・・・はずだった

「させるかあああ!!!!」

勇者は恐るべき反応速度で進路上に立ち、盾に全力を込めて防御する

「ぐうあああああ!!」

だがグラハルトの攻撃はその程度で止められるほど弱くは無い、盾ごと真つ二つにされてもおかしくないほどの衝撃が勇者を襲う

「勇者様!!」

ノアが何かの魔法で防御したようだが、防ぎきれなかった分で勇者が吹き飛ぶ

「ぐあっ!!」

シェリルが素早く駆け寄り、回復魔法をかけ始める

当然のようにグラハルトはそこ目掛けて再び斬撃を放とうとするが

「させるかつ！」

アイシャが大剣を大きく横薙ぎし、グラハルトの行動を妨害しようとする

ズドンと一際大きな音がして、グラハルトに直撃したようだ

「・・・っ！」

だがグラハルトは掌で刃を受け止めており、何もなかったかのようにただ立っている

「・・・どうやら・・・期待ハズレだな・・・」

そのまま大剣を掴み、片手でアイシャごと持ち上げる

「なっ、まずっ！」

大剣ごと勇者の近くに投げ飛ばし、さらに追撃の魔法を詠唱する

エンシャント・ルーン言語による詠唱が呟かれ、グラハルトの前方に魔方阵が出現する

「爆炎！エクスプロージョン！！」

魔方阵は紅く輝き、突然前方に向かって大爆発を起こす
炎の雪崩が勇者達に襲いかかり、まさに絶体絶命の攻撃が彼らを飲み込んでいく

「くっそおお！」

瞬間

勇者達の周囲に別の炎が立ち上る

二つの炎は絡み合うようにせめぎあい、結果としてグラハルトの炎は上空へとそのベクトルを変更する

「・・・精霊か」

グラハルトの炎が消えると、その場にはもう一つの炎が揺らめいていた

その炎はやがて人の形に変化していき、男とも女ともわからない中性的な姿になる

「・・・殺シテハダメ」

精霊はそれだけを言った

その目には悲しみが宿り、悔しさを滲ませ、諦めの感情が伝わってくる

まるでアリサの泣きそうな表情を思い出してしまったグラハルトは、一気に戦意を失い、剣も殺気も納めてしまった

「・・・会話は問題無いんだろうな？」

グラハルトの問いかけに火の精霊は一度だけ頷き、勇者達にその泣きそうな表情を見せて消えてしまった

「助かった・・・？」

勇者達は何が起こったのかわからずに呆けている

唯一何があったかを理解しているらしいシェリルが、悔しそうな表情で言葉を放つ

「火の精霊よ！どういふことですか！殺してはいけないとは・・・
っ！」

気がつくと彼女の目の前にはグラハルトがたっていた

「・・・そのままだろう、・・・戦いは終わりだ」

体を震わせながらグラハルトを睨むシェリル

視線で人が殺せるならば殺しているだろうその視線は、現実にはそんな力を持たずにただ睨む以上の意味を持たなかった

グラハルトはシェリルを無視して勇者のほうへと歩いて行く、シェリルはその間ずっと彼を睨み付けていた

「・・・話をしようか」

グラハルトは勇者・・・いや、一人の人間「東^{あづま}光輝^{みつひかり}」に向かって
そう言った

死神の取引3

「・・・話をしようか」

グラハルトはそう言った

今しがた殺されかけた勇者達は何を言われたのかわからなかったよ
うだが、すぐに言葉を理解して反応する

「・・・！だ、誰があなたみたいな悪人と話すもんですか！」

アイシャが真っ先に反応し、グラハルトを否定する

「そうよ！こっちは殺されかけたんだから！そんなヤツと話なんかに
できるわけないでしょ！」

リノンが続けるが、支離滅裂なことを言っている

「・・・俺も殺されそうになっていたんだが？」

ぐっと言葉に詰まってしまったりリノンはチラリと勇者のほうを見る
ノアが必死に回復魔法を使っているようで、見る見るうちに具合が
良くなっているようだ

「勇者様・・・まだ動いては・・・」

「大丈夫だよ、ありがとうノア」

勇者は立ち上がり、グラハルトと対峙する

「・・・もう戦わない、だからそっちも戦わないでくれるか」

勇者はそう言っただけでグラハルトをじつと見る

馬鹿みたいに真っ直ぐな瞳が、きらきらと輝いているように見えている

女が惚れそうな顔と目付きだな、などというどうでもいい事を考えながら、グラハルトはしっかりとしたし答えを返した

「・・・火の精霊に誓おう」

「・・・つまり、昔俺が潰した軍隊がお前らの国の軍隊だった・・・と

・・・それで魔王とは別に倒すように・・・命令されていたと・・・

「

「そういうことだ」

つまりは最初からグラハルトは狙われていたというわけだった

見たこともない人間に襲われることなどもはや慣れてしまったグラハルトとしては、そんなことはどうでもいいとばかりに話を続ける

「・・・勇者・・・いや、光輝か

・・・お前は・・・無限進化の世界・・・と聞いて何か思い当

たるか？」

「無限進化の世界？」

それは何かのマジックアイテムか？

残念ながらそういった知識はあまり無いよ

みんなは聞いたことあるかい？」

光輝が後ろで明らかに不機嫌になっている女性陣に聞くが、首を縦に振ったものはいなかった

「だそうだ」

「・・・じゃあもう一つ、・・・光輝がいた世界のことは・・・話せるか？」

「俺がいた世界・・・」

光輝は驚いた表情をしているが、グラハルトはその理由がわからないので思ったことをそのまま聞いてみる

「・・・何か変なことを言ったか？」

「あ、いや・・・」

なんていうか、こっちに來てからそういうことを聞かれたことが無かったからね・・・

教えてもらってばかりで・・・」

グラハルトとしては当たり前の質問をしたつもりだったのだが、光輝にとつては意外な質問だったようだ

懐かしい思い出を探るように、自分が何者であったのかを確認する

ようにしている光輝は、虚空を眺めている

グラハルトは昔の自分を見ているような感覚に、自然と穏やかな雰囲気を出していた

だから光輝以上にこの話に反応している人物がいることに、二人は気づかなかった

「俺は・・・あんたに言っても分からないかも知れないけど、向こうじゃ学生だったんだ

高校三年、もう少ししたら卒業だった・・・」

「・・・高三・・・ガキじゃないか

・・・年上には敬語くらい使っただな」

「え、あんた・・・いや蒼犬サンは幾つでございやがりますですか」

「・・・わざとか、わざとだな？」

「・・・もう普通でいい・・・歳は30・・・だったハズだ」

「30？おっさんじゃねえか」

「・・・言っじゃないか、・・・何ならもう一回ぶっ飛ばしてやるうか」

ズゴゴゴゴ・・・という効果音が聞こえてきそうな威圧感を放ちながらグラハルトが立ち上がる

殺気ではないだけマシなのだが、人間をはるかに超えた威圧感では大差が無い

・・・だが光輝はそんなこともお構い無しに食って掛かる、別の意

味でも勇者だった

「フハハ！真の勇者は一度負けてから勝つのさ！何故ならそっこのほうがカッコいいかぶげらあっ！！！」

体操選手でも絶対にできないような捻りと回転を組み合わせ、顔面バウンドという必死の技術を用いて、勇者はこの上なく美しい軌跡を描いてぶっ飛んだ

「きゃー！勇者様ー！」

「ちよっ！会話の途中で殴るなんて卑怯よ！」

「そういう問題？」

「死んでないよね・・・？」

「・・・かいしんのいちげき・・・だな」

女性陣とグラハルトの温度差はきつと埋まることは無いだろう・・・

「・・・で？」

グラハルトは顔が泥とホコリと血とタンコブで変形した光輝に問いかけた

ノアが隣で必死に回復しているのですぐに治るだろう

「ああ、えつとなんだっけ？高三で卒業するところで？」

ああそうそう、ある日の帰り道でこっちに呼ばれたんだよ

最初はビビったなあ、ブラックホールみたいなのがいきなり出てきたさあ・・・」

・・・

・・・

・・・

「・・・というわけで俺たちはあんたを見つけたのさ！そしてチャンスだと思って襲いかかったんだ！」

ちなみに長かったため8割ほどカットさせていただいた、どのくらい長かったかと言えば昼間に会ったハズなのに日が沈み始めているくらいと言えはわかってもらえるだろうか

女性陣四人は懐かしむように話に聞き入り、時折会話に混ざってきいていたし、知らなかった真実まで知ったようで仲良くなっている

はあと溜め息をつきながらグラハルトは核心を突いてしまう

「・・・俺はお前の世界の話をしろうと言ったんだ・・・」

「あ」

「・・・はあ、・・・まあいい・・・重要な部分はわかった」

話を切り上げたグラハルトは、今日はもうここで野宿でもしたほうがよさそうだと判断した

光輝達はどうするかと考えていると向こうから話しかけてきた

「今日はもうここで休んだほうがよさそうだ、あんたはどうするんだい？」

「・・・同意見だよ」

「じゃあ一緒にしないか？食材の確保は手伝ってもらうけどな」

ニヒヒと憎めない笑い方で自然に誘ってくる光輝に、グラハルトは軽く感心してしまう

昨日の敵は今日の友とは言ったものだが、まさかさっきの今でそれをやってくるとは思わなかったようだ

自分も光輝のような性格だったら何かが違っていたのだろうか、ガラにもないことを考えてしまう

が、ある人物の挙動を見てしまったがために、そんな考えも全て一瞬にして吹き飛ぶ

なんてことのない、ただほっとしたような安堵の表情を浮かべ、安心の溜め息を吐いただけ

だがそれだけで、グラハルトにはわかってしまう

正義が鎧を着て歩いていると比喻されるほどに、彼は敏感にそれを感じとることができるから・・・

だが彼にとっては珍しく、その場ですぐに動くことは無かった

先にやるべきことがあると判断し、それを後回しにすることにした

「蒼犬？」

「・・・さん」くらいはつける

・・・食材は提供してやる、調理は任せたいがな
・・・ついでに寝床も提供してやろう」

グラハルトはそう言いながら、何もない開けた場所にむかつて掌をつきだす

そして数秒後には、何もなかったハズの空間にテントが出現した

「うおー！すげー！なに今の！どうやったの！？」

・・・ってかテントちっちゃいよ、二人くらいしか入れないじゃんか」

光輝が言った通り、テントは二人分くらいの大きさしかなく、とてもではないがグラハルト含めて六人も入れるようには見えない

「・・・入ってみる」

「ん？ああ、そんじゃあ失礼しますよ・・・ってなんじゃこりゃあ！！！！」

光輝が驚くのも無理はない

何故なら見た目と違って中には異常に広い空間が広がっていたからだ、仕切りの無い巨大な一部屋のみなのだが（ちなみに二十畳ほどある、わからなければ10メートルくらい縦横の広さがあると思えばいい）、家具は揃っているし大型のキッチンに風呂トイレ洗濯場、食材の貯蔵庫まで着いている

しかも微妙にテーブルや布団などが使われていた形跡があり、まるでついさっきまで誰かがいたような生活感さえ感じられる

「・・・好きに使い、・・・食材は貯蔵庫のものなら好きなだけ使
ってかまわん」

グラハルトはドサツと五人は座れそうなソファーに腰掛け、すでに
くつろぐつもりようだ

試しに貯蔵庫を覗いてみた女性陣だが、その量と種類の多さと鮮度
の高さに驚愕していたようだ

「・・・光輝、少し出よう、二人で話したい」

「・・・わかった、俺も確認したいことがあるしな
みんな、ちよつと外にいるから準備のほうよろしく頼む」

「今日は私が！」

「私が当番の日でしょ！」

「私の実力が全て発揮できるから私が！」

「まあまあ、これだけあるんだからみんなで作りましようよ」

女性陣は豊富な食材を前にして興奮し、光輝の声は誰にも届かなか
った

頂垂れる光輝の肩にグラハルトがポンと手を置く

「・・・気にしたら負けだ・・・」

死神の取引4（前書き）

とうとうグラハルトの真実がつ！

と思っていたら説明だけで一話分使ってしまった

うむ、文才がほしい！

努力が足りないんですねはい、そのとおりでございます、すいません・・・

重要

この話における内容において、他者様の作品に類似している部分が多くみられるかと思えます

自分としては、小説家になろうにおいてランキングトップ10に入っている作品や、ネットゲームを主題にした作品等をよく拝見させていただいておりますので、影響が全くないオリジナルだ！とは間違っても言えません

自らのネットゲーム経験等から考えたものとは言え、恐らく似たような設定の作品が数多く存在するかと思われます

そういった部分が不快に感じられる方はあまりお勧めできない内容となっております

パクリではないんだよ、がんばって考えたんだよ、ということだけはご理解いただければと思います

もしこの設定は問題がある、と判断された場合は感想なりメッセージなりいただければと思います

場合によっては大幅に改編もやむなしと考えています

死神の取引4

グラハルトと光輝がテントから抜け出したところ、別の場所ではアルドラがある魔道具を持って森の中にいた

「ふう、時間がかっちまった・・・」

やっぱ体力も魔力もねえのはきちいなあ、移動もろくにできやしねえ」

言いながら焚き火の明かりに照らされた魔道具「永遠の記録」というアイテムを取り出す

このアイテムは記憶を記録にして上書きされない限り保存し続けるという効果を持っている

記録できる量は純度と大きさによるが、基本的に発見されることが稀であることに加えて、ある一定のサイズより小さいものというのは全く発見されないため、あまり気にされることはない

アルドラが持っているものは握りこぶし大といったところだが、これでも人間一人の人生を記録するには十分なサイズだ
年数にすれば100年分は軽く記録できるだろう

「100年は体力も魔力も使えねえんだ・・・、さっそく中身を確認して役立たせてもらおうかね」

そう言つて永遠の記録に現在記憶されている内容、つまりグラハルトの人生を見るために、その内容を見始める

そしてアルドラは、そのあまりの内容に驚愕した

「・・・なんだよこれ・・・」

グラハルトと光輝はテントの外に出ていた

適当な瓦礫に腰掛け、夜空に輝く満天の星空の下で話している

「で、話つてのは異世界のことでもいいのか？」

「・・・ああ、光輝も同じだろう？」

「まあね・・・」

二人とも同じ内容についての話だったらしく、余計な会話もなくすぐに核心を話し始める

「単刀直入に聞く、蒼犬さんは異世界の人間だよな？」

「・・・ああ、間違いない

・・・光輝と同じ世界だったかどうかまではわからんが・・・」

「内容は聞いても？」

「・・・最初に言っておくが・・・俺はこの話をしようとするに死にそうになる

・・・冗談じゃなく本当に血を吐いて死にかけたからな

・・・光輝にはどうやら大丈夫なようだ・・・他言無用で頼む、
・・・俺以外の人物から他人に話すだけでもアウトなようだからな」

「・・・わかった、勇者の名にかけて誓おう」

「・・・それはあまり信用できないな」

「ちよっ！ヒドイ！人が真面目に言ってるのに！」

「・・・まあいい、話すぞ」

軽口を言いながらもグラハルトは真面目な雰囲気に取り替え、自らの過去を話し始めた・・・

その世界には「無限進化の世界オンライン」というタイトルのMMORPGが存在した

設定はよくある中世のヨーロッパ地方に似た世界を基準にした、北欧神話などがストーリーの主軸に関わってくる設定だった

その中でプレイヤーは冒険者となり、豊富な職業と装備品を使って様々なイベントをこなしていくうちに、世界を巻き込んだ大冒険をしていくという、よくあるネットゲームにありそうな内容だった

ただしタイトルが示す通り、内容は無限に進化・・・いや変化していくというのがウリで、事実なかなかユーザーに好評なアップデートが多くされたため、ネットゲームとしてはプレイヤー数がなかなか多いゲームだった

そんなアップデートの中でも特に好評だったのが職業選択とレベル
キャップ解放に必要な「転生」というシステムだった

このシステム自体は別段珍しいものではないし、家庭用RPGなど
では言葉は違っても似たようなシステムは多くあった

要は最大レベルになったときに、もう一度最初からレベル上げをす
る代わりにより強力なキャラへと進化できるシステムだ

無限進化の世界では、職業選択と関係するために非常に重要な意味
を持っていた

通常の最大レベルは100なのだが、転生をすることで110まで
上げられるようになる

最大5回転生することが可能であったため、最大レベルは150と
なっている

面白いのはこのときの職業選択だ

最初に用意されている職業は5種類で、剣士・盗賊・格闘家・魔法
使い・僧侶の中から一つを選ぶ

それぞれに職業レベルが存在し、これもまた一段階目が50、上位
職業になって50の最大100で転生するたびに上位職業の分が1
0ずつ上昇していく

ベースレベル（キャラ自体のレベル）が50以上、職業レベルが5
0のときにそれぞれの一段階上の職業になることができ、100に
なるまで別の職業になることはできない

そして転生すると、一段階上の職業になるときにさらに上位の職業
になることができ、当然繰り返せば繰り返すほど上位の職業に進化
していく

ところがこのゲーム、転生したあとの職業選択で、転生前の職業とは別の系統になることができた

しかし例えば剣士だったものが魔法使いになったところで、必要なステータスも違えば装備品も全くの別物が必要になる

覚えたスキルも使えなくなってしまうという意味の無いシステムに最初は思われていた

ところが、魔法使いから上位職業になろうとしたところ、通常なることができる職業とは別に魔法剣士という職業になれることが発見され、大騒ぎになった

つまるところ、職業経験の組み合わせによって様々な職業を選択できるといふシステムだった

しかも剣士から魔法使いの時と、魔法使いから剣士のときで、なれる職業は同じでもスキルやステータスが微妙に違うことも発見され、組み合わせを検証したがるプレイヤー達は大いにその研究に没頭した

そんな中でも比較的後期に発見され、状況を理解してあらゆる職業用の装備品を揃えていたプレイヤーでさえもあまり手を出さない職業というものがあつた

それが「ルーンナイト」という職業だった

まず避けられる理由として転職条件だ

剣士・魔法使い・僧侶をそれぞれ組み合わせで無いほうの上位職業として転生し、剣士と僧侶の組み合わせで選択できる「ホーリーナイト」も転生することで、最後に剣士で転職するときに選択できる職業だ

4 回目の転生をするまで初期の上位職業のまま、よくても2 段目の職業というのは、職業が研究され有用な組み合わせが発見されていた時期にはかなり弱い部類であるため、パーティーでは役にたたずソロでも効率の良いレベル上げができない辛い経歴だった

しかも使い方の違う3 系統をやる必要性からして、必要になる装備品が全く違うため、初心者から中級者にとっては辛いところであった

さらに最大の特徴にして最大の欠点であったのが、ルーンナイトの独特なシステムとレベルだった

それは基本型となるルーンナイトとは別に、能力が全く違う3 タイプに変化できることだった

近接物理攻撃に特化し、攻撃力や素早さの高いデュエルナイト
防御能力に特化し、聖属性の攻撃をメインにして回復・支援を扱う
万能なディバインナイト

魔法能力に特化し、専用の強力なスキルを覚えるアビスナイト

状況に合わせて自分を変化させられる特殊な職業なのだが、時期が悪すぎた

攻撃に関しては剣士系のレベル150 キャラのほうが強くて応用が効きやすい

防御に関しても魔法に関しても、同様に特化したその系統の職業のほうが強いという器用貧乏な職業だった

しかもレベルと装備品が個別に設定されていて、例えばデュエルナイトでレベル150 になっても他のタイプは転職時の50 のまま、おまけに基本型であるルーンナイトは3 タイプの平均値が上がるこ

とでしかレベルアップしないという、非常にめんどくさい職業だった
そのうえ装備品はルーンナイト含めた4キャラ分が必要になるとい
う金銭的にも辛い職業だ

当然他の組み合わせでレベル150を達成したプレイヤーはチャレ
ンジこそしたが、その中途半端な性能とレベル上げの苦勞に挫折し、
苦勞のわりに性能がみあわないということで誰もレベル150は達
成できなかった

そんな時期のある日、ルーンナイトでレベル150を達成したキャ
ラクターが現れたという情報が知れ渡る

それを達成したキャラクターの名前は・・・

グラハルトという名前だった

死神の取引4（後書き）

というわけでやっとタグについているネットゲーの意味を登場させられました

この後もしばらくはグラハルトがこちらの世界に来るまでのお話になります

タイトルの理由は最後で明らかになります

死神の取引5

グラハルトという人物は、以前生きていた世界においてはごく普通の人物だった

普通の学生として生き、不良にこそならなかったが学生時代特有のバカを普通の範疇でやっていたし、普通に勉強してそこそこの大学にも行った

そこそこの会社に内定が決まり、そこそこの業績を挙げてそこそこの給料をもらい、裕福でも無いが不自由しない程度のそこそこの生活を繰り返していた

普通、ごく普通の一般人、マンガやアニメなら通行人Aとかで済まされるレベルの人間だった

定時には仕事も終わるが、彼女がいるわけでも、毎日飲みに行くわけでも、通いたいほどの何かをやっているわけでもない彼はとにかく暇だった

暇をもてあまし、休みの日など寝ている時間のほうが長いくらいに暇だった

無限進化の世界をやり始めたのも暇潰し程度の理由しか無かったし、その切っ掛けも大学時代の友人に誘われたからというだけに過ぎない

インターネットは見るが好きだったわけでもなく、ネットゲームは金を払ってまでやりたいとも思わなかった

ゲームを始めたころは新しい感覚に興味を持ちはしたが、すぐに普段の生活の一部として定着してしまったために、感動など特に感じ

ることもなくなった

最初に選んだ職業は僧侶

やりたくて選んだわけではなく、友人が剣士を選んだので、特にやりたい職業も無かったから友人を支援出来ればと考えての選択だった

やり初めて三ヶ月もたつころには、友人も自分もレベル100近くなっていたし、顔を知らない友人も出来ていた

「転生」アップデートが実施されたのは、そんな時期だった

最初は気にしていなかったし、上位職業は気になるがもっと情報が揃ってからのほうが懸命だと、レベル上げもめんどくさいからと、率先してやろうとはしなかった

友人達は気になったようだが、彼らがやるなら一緒にやろうかな程度の考えしか無かった

転機はこのあと、友人のある発言から始まる

「俺引退するわ・・・」

スポーツ選手のような言い方だが、終わり方が個人の判断に委ねられるネットゲームにおいては辞めることを引退と言う場合が多いつまりこの発言は無限進化の世界を辞めるという意味だった

「・・・なんでよ？せっかく転生までもう少しのところで来たじゃんか」

当時のグラハルトは友人を引き留めるようにそう言う

「いや、いい加減リアルが厳しくなってきたからさ
・・・俺もうすぐ結婚するんだ」

リアル事情・・・というパソコンの画面越しには見えない情報、そして画面越しでは干渉できない個人の絶対領域

「・・・装備品とかはお前に全部やるよ
こないだ魔法剣士が見つかっただろ？あれで俺魔法使い系の装備品も揃えたから、僧侶にも使えるもんいっぱいあるぜ」

それから・・・と会話を続け、二人は最後の日までずっと話し合い、ずっと一緒に行動した

やがて最後の日を迎え、友人が最後のログアウトをした、二度と見ることの無い友人のキャラクターを目に焼き付けたグラハルトは、友人の勇姿を忘れないために、転生して剣士を目指すことを決めた

その後は必死だった

魔法剣士になりたいと言っていた彼の言葉の通り、剣士を経て魔法使いになった

パーティーは中々参加できなかったが、以前からの友人達が事情を知っていることもあって協力してくれたので、わりと簡単に魔法使いのレベル50近くまで来れた

明日には転職して魔法剣士だな、と考えていたときに、引退した友人から連絡があった

とりとめの無い普通の会話をしたあとで、当然のように話題はゲームの話になる

「その後どうよ？がんばってる？」

「・・・ああ、お前がくれた装備品のおかげで助かってるよ
明日には魔法剣士になれると思う、復帰するなら触らせてやってもいいぞ？」

「はっはっはっ、嬉しい話だがこちら今度生まれる子供の準備で手一杯、そんな暇ねえよ！」

それよか魔法剣士ってまさかオレの後を・・・なんて発想か？」

「・・・まあな、とはいえキャラ作り直しも面倒だったから、僧侶からの転生だけだな」

「ああ、だったら一つ頼みたいんだけどいいか？
魔法剣士になりたいって言ったけどよ、こないだ発見された職業知ってるか？」

「んー、確かルーンナイトとかいうヤツだったけど全然情報揃ってないみてーだけど・・・」

「それぞれ、公式の絵も発見に合わせて公開されたじゃん？あれ超かっけーんだけど」

「おいおい、頼みってそれか？」

ありゃ転職がめんどい・・・ってオレほとんどクリアしてんぢゃん」

「そゆこと、どうよ？」

「どうよ？ぢゃねーし、やるのは俺ツスよ
・・・やるけどな！」

「さすが！今度飲みに行こうぜ、そのときに詳しく聞かせてくれよな！」

「ういつす、土産話は支払いさせるからな？」

「そのくれー払わせていただきやすぜお代官様」

とりとめのないいつもの馬鹿な会話、話す場所がパソコンの画面越しから電話越しに変わっただけで、相変わらずの友人の頼みを聞き入れる

ルーンナイトを目指す、これがグラハルトがルーンナイトでレベル150になることを決めた理由だった

その後は顔の知らない友人達に事情を話し、無理だからやめとけとか道のりが長すぎるとか必死に説得された
だがそもそも時間はたくさんあるし、彼らが今までたくさん手伝ってくれたからこそ、ここまで育った自分のキャラ、それに対して妥協をしたくないんだと、逆に説得しかえした

熱い心を持っていたわけではないが、彼らは心を打たれたし、グラハルト自身も決してそんな自分が嫌ではなかった

切欠が友人からの頼みであつたとはいえ、自分のキャラである以上その成長は自分で決めて進んでいける、その成長の道を自分で決めたという事実が、ただ暇を持て余していた自分の心に何かを植えつ

けたようだった

友人達はそれならばとこぞって協力し、自分の成長なんてそっちのけでグラハルトに協力した

魔法使いで最大レベルを達成し、転生して再び剣士を経てホーリーナイトになってからも一緒にいてくれた

最後の転生をするときなんてお祭り騒ぎに近い状態だったし、目出度くルーンナイトになるのにあとは転職試験だけという日には、今まで手伝ってくれた仲間達が全員集まってくれた

グラハルトはそこまできてようやく、大事な事に気づく

仲間とは何か、協力とは何か、オンラインゲームとは何か

これはきつとゲームとか、パソコン上の付き合いとか、そんなことは関係ない

人と人との繋がりが、どんな顔をしているとか、立場とか仕事とか一切関係なく繋がることのできるこの奇跡が、素晴らしいものだったのだとここにきて気づいた

彼らのためにも、自分はこの職業に胸を張って育てていく責任がある

今までの人生のように、ただ暇潰しのために何かをやるわけではない自分で決めた何かを、仲間と共に最後までやり通すことがこんなにも楽しいことだったんだと知った

そして彼はルーンナイトとしてレベル150を達成するために、毎日たゆまぬ努力を続けた

・
そしてとうとうレベル150も現実的に思えてきたある日のこと・

「ボス狩りツアーやらん？」

顔を知らない友人の一人がそう提案してきた

彼はこのゲームのわりと初期からいる人間で、アップデートの度に右往左往してきた実力派・・・という言い方が正しいのかどうかはわからないが、とにかく昔からいるため持っている装備品もキャラクターも何より知識の量が半端ではない

「ボス狩りって・・・どこまで？」

「全部（笑）」

「全部でW時間沸きとかめんどくせーw」

「さすがwwwwww」

パソコンの画面には友人達が文字による会話を続け、無節操にそれぞれが意見を述べている

「ほら、グラさんがもうすぐ世界初のレベル150達成しそうじゃん？」

軽く計算してみたらボス全部倒した経験値と残りの必要経験値が大体同じような数字だなー思たからさ、どうよ？」

軽く計算とは言うがこのゲーム、細かいアップデートが何度もされているため、ボスキャラと呼ばれる普通のモンスターより強いモンスターの数も半端ではない

即沸き、時間沸き、イベント限定など種類はさまざまだが、その全てを倒すとなるとかなり根気がいる

特にレアなアイテムを落とす可能性があるボスキャラは人気だったし、出現時間を正確に把握しているグループが常に倒しているような状況だ

そんな中での全撃破は並大抵の努力ではできない

・・・が、グラハルトはそれに対して興味を持ってしまった

「いいね！やろうか！」

「ちょwwwまじかよwww」

「おい！どんだけだ！貴様の血は何色だー！ー！」

「よしきたwさっそく簡単なやつから行こうぜw」

彼らはなんだかんだ言いながらも協力してくれることをグラハルトは知っている

どうせなら彼らのためにも最後は派手に行こうと思っていたのだ、この提案はなかなかいいアイデアだった、どうせなら最後のボスでレベル150達成が一番いいのだが・・・などとも考えてしまう

結局彼らはボス狩りツアーを執行し、世界中のボスキャラを求めて
長い冒険を始めた

グラハルトがレベル150になるまで・・・あと少し・・・

死神の取引6（前書き）

累計PVが4万件を突破！

ありがとうございます！

記念としまして何かまた人物紹介とかその辺を書こうかな？

この連話が終わるころに合わせて投稿しようかと思っています

着々と増えていくお気に入り登録件数と1日のユニークアクセス、
毎日覗いてくださる皆様に感謝でございます

それでは本編をどうぞ

死神の取引6

無限進化の世界オンライン

よくあるネットゲームのよくあるMMORPG

よくある設定でよくある世界観でよくあるストーリーのゲーム

そのゲームのなかでよくいる、普通よりもちょっと強いボスモンスターと呼ばれるモンスター

その中でもある特殊イベント限定でしか沸かず、再出現時間が長いわりにはレアアイテムをたった一種類しか落とさないというボスモンスターがいた

しかもそのアイテムは他のボスモンスターからわりと高い確率で入手できるため、倒すうまみがないわりには強すぎて倒す理由が無いという何のためにいるのかよくわからないボスモンスターだった

その名を剛龍アレクタリウスという

設定上では、精霊王アレクタリウスという存在を飲み込みその力を得たとされているドラゴンタイプのボスモンスターで、実際クエストでは精霊王を助けるという名目で戦うことになる
だがドラゴン系は総じて強く、特にボスモンスターともなると非常に強力な個体が多い

そのうえ精霊王を飲み込んだというその設定にしたがって、強力な魔法をがんがん撃ってくるのに本体もありえないくらい強いという、公式が生んだチートだと噂されるほどの強力なボスだった

そのアレクタリウスは現在、あるパーティーと死闘を繰り広げていた。そのパーティーは10人以上の大所帯で、後方の支援人員まで含めると30人近くいるんじゃないかと思われるほどの大パーティーだった。

その先頭で一番激しく戦闘しているキャラクターは、グラハルトというキャラネームだった。

「エクスプロージョン!!」

爆発が龍を飲み込み、少なくともダメージを与えるが、残りのHPがどれくらいかわからないのでどれほど効いているのかわからない。少なくとも画面に表示されるダメージ上ではそれなりのダメージを与えているようだが、このモンスターのHPは桁を1個間違えてないか?と言われるほどあるらしいので、あまり期待はできない。

「つか〜! どんだけつえーんだよこいつ」

画面上に文字が表示され、味方の誰かがぼやいているのだとわかるが、グラハルトは操作とスキル選択に忙しいために文字入力をしていない暇がない。

「形態変化ディバインナイト!! ディバイドシールド!!」

「イフリートインパクト!!」

「アブソリュートゼロ!!」

「ナーガ・オブ・ライトニング!!」

グラハルトが展開した防御魔法の後方で、炎が・冷気が・雷が龍に

襲い掛かる

画面上の数字はグラハルトよりも明らかに高い数字を表示し、決定打にはならなくとも目に見えるダメージを与えたことを証明している

「タゲ移りそう！グラ！」

「おk！回復よろしく！」

グラハルトはそう言ってさらに一步先へと踏み出す

「形態変化デュエルナイト！！鬼神四刀流！！」

グラハルトは都合4本になった腕で龍をやたらめったら斬りつける、剣士系にはかなわない威力ではあるが手数が多い、その手数も盗賊系にはかなわないがそれよりは威力がある、かゆいところに手が届くその攻撃は龍に集中し、龍の意識がグラハルトのほうへと向く

「タゲこつちきた！あとよろしく！」

「おk！まかしれ！」

グラハルトは支援を受けながらとはいえ最前線で戦い続けている

他のメンバーは回復や補給のために何度か後方の部隊がいるところまで下がったりはしているが、後方の部隊から送られてくる交代要員のおかげで戦闘はずっと続いている

かれこれ1時間近くこの状態で戦闘をしているのだ

「グラ！ダメージ量的にそろそろ後半の後半！たぶんそろそろ倒せる！」

ボス狩りを提案した仲間の一人がそう叫ぶ

グラハルトはこの状況でダメージ計算なんてやっている彼の脳みそは一体どれだけ凄いなと関心してしまうが、そんなことはあとになってから聞けばいいだろうと思い、戦闘を続行する

「最低限の予備人員残して全員で攻撃しよう！俺がしんどい！」

「おっけい！全員攻撃だ！後方も参加！一気に行くぞー！！！！」

全員が一気に参加したことで一気に形勢は傾き、激戦はさらに激戦になっていった

戦いは唐突に終わった

画面で動き回っていた剛龍アレクタリウスは不自然に動きを停止し、死んだことを意味する暗い色に変化していき、これまた不自然に周囲にアイテムが突然出現する

奇妙なファンファーレが流れ、一部のボスモンスターを倒したときに出る宝箱が出現する

「・・・倒した？」

「終わった・・・終わったぜ！！！！」

「うはwwwまじかよwwwやつちまったよwww」

わぁーと一気に画面に文字が溢れ、戦いが終わったことを実感する

「アイテム拾えーw記念アイテムだぞwww」

全員を代表してグラハルトが一つ一つ拾っていく

「ま、特に珍しいもんもないわな」

「宝箱の中身はなんだった？」

「いや、まだ空けてないよ。せつかくだから帰ってから空けようか
と思つて」

グラハルトは全員で戦い、そして勝つたこの戦いを胸に刻みつけた
そしてこの旅を始めた理由を確認するために、ステータスウィン
ドウを開いてみる

「あれ・・・、レベル上がつてる」

「まじかよ！じゃあ150達成！？」

「うはwwwまじでwww派手なあがり方だなおいwww」

「150？エフェクト出てないぞ？」

このゲームはレベル150を達成するとその証明代わりにエフェ
クトが表示される

キャラの周囲にキラキラが出現し、若干キザったらしいエフェクトだ

漫画やアニメに出てくる美形キャラが纏うアレだと思ってもらうのが一番わかりやすい

もちろんプレイヤーによってオン・オフが切り替えられるので、別に表示されていないこと自体は問題ある状態ではない

しかし150達成した後でしかその切り替えはできないため、何か異常がない限り150達成直後は必ずそのエフェクトが発生しているはずなのだ、これが150を達成したことの証にもなる

「バグでもあったか？」

「いや違うっぽい、なんかクエスト発生してる、ちょっとみさして」

「帰ってからでいんじゃない？記念撮影してからにしょーぜ」

そう言って後方部隊の人間も集まり、グラハルトにお祝いの言葉をかけようと近寄るが・・・

「待つて、なんか怖いクエストなんだけどこれ」

「どゆこと？説明してみそ？」

「・・・えーつと要点だけ話すわ」

グラハルトが確認した内容は以下のものであった

クエスト名「覚醒」

あなたは見事剛龍アレクタリウスを討伐しました、さらにアレクタリウスを倒したことで最高レベルを達成しましたので、最終クエス

トが発生しました

あなたは最高レベルに達しましたが、その真の力を解放できていません、剛龍アレクタリウスの中にいた精霊王があなたの力を認め、あなたにそれを使いこなすための試練を与えます

このクエストを達成したとき、あなたは真の転生をすることができるようでしょう

剛龍を倒すほどのあなたならきつと達成できるはず、さあ仲間とともに最後の冒険をしましょう！

「・・・っていう内容だな」

「・・・つまりあれか、まだ続くってことか？」

「ちょっと待てwwwなんだそのクエストwww聞いたことねーぞwww」

「まあ150をアレクタリウスで終わらせようとするやつはいないだろうな・・・」

「もしかしてこのボスってこのためにいたんじゃない？レアアイテムの割りに経験値やたら高いし」

様々な憶測が飛び交う中で、グラハルトは一言呟く

「・・・内容やばいな」

全員がその言葉に反応したのだろう、グラハルトの次の言葉を待つために、画面上に大量に表示されていた文字は全て消える

「・・・ゲーム内にいる全てのNPCと会話・・・
ついでにイベントとクエストの全クリア・・・
しんどいわこれ・・・」

「ちょｗｗｗｗｗｗ」

「しんどいｗｗｗｗそれはしんどいｗｗｗｗ」

「うはｗｗｗｗしかも手伝えることすくねーｗｗｗｗ」

再び画面に大量の文字が並び、グラハルトへかけられたはずの祝いの言葉は、全て残念な彼を慰める言葉に変わった

ボス狩りツアーを決行してから2ヶ月、剛龍アレクタリウスを倒してから1ヶ月

グラハルトは最後のNPCの前にいた

そのNPCは引退した友人がお気に入りだったNPC

このゲームを始めたときに一番最初に知り合うキャラで、その後もメインストーリーが進むと何かと関わり合うキャラだった

このキャラに話しかけることで全てのNPCとの会話、という難関が終了する

全てのイベントとクエストのクリアは難しくなかった

そもそもこのゲームではモンスターと戦う戦わないを問わずイベント・クエストは割と早く展開し、さくさく進められるようになって
いる

相変わらず協力してくれる仲間達がいたので、そういったものは前半でほとんどが終わってしまった

NPCのほうは大変だった

なんせ全てのNPCということは、普段入り込まないようなダンジョンの奥地にポツンといるだけのNPCも含まれていたし、度重なるアップデートのおかげでグラハルトも知らない情報サイトにも載っていないNPCの存在というのも意外と多くあった

結果的に世界中全てを歩いてくまなく回るようになったため、非常に時間がかかった

さすがにNPCを探す程度に友人の力を借りるわけにもいかないと思い、一人で回っていたのも悪かったのだろう、みんなで回ればもう少し早く終わっていたはずである

「ま、みんな十分協力してくれたしな
あとはルーンナイトになったことを報告して・・・報告して・・・？
報告したら俺・・・何すればいいんだろう」

ルーンナイトになったのは友人に頼まれたからであって、ルーンナイトになって何かがしたいと思ったわけじゃない、レベル150になったからって何かをするためになったわけじゃない

突然、あまりにも突然気づいてしまったその事実

グラハルトにとってそれは気づきたくない・・・今までずっと目を逸らし続けていた事実

自分の進んできた道は、どこにも繋がっていない行き止まりを目指

す道だったのではないかという漠然とした不安と虚無感

グラハルトは最後の一步を前にして、立ち止まってしまった

進むのは簡単だ、ただクリックすればいい

右手をちょっと動かして、マウスを操作するだけだ

それだけなのに、それを行うことをひどく躊躇ってしまう

たったそれだけのことができないまま、時間だけが過ぎていく

画面に文字が現れたのは、そんなときだった

「すみません」

グラハルトがその文字に気づき、画面をしてみる

グラハルトのちょうど目の前、画面中央から少し上のほうに一人のキャラクターがいた

「どうしました？」

見れば初期キャラでまだ職業を選択する前の無職状態だ

数秒ほど返事まで時間がかかったので、おそらくネットゲーム自体

が初めてなのだろう

「どこにいいいですか」

「チュートリアルはやりましたか？」

.....

「やりました」

「ではまずそのNPCをクリックして会話してみるといいですよ、色々ヒントをくれます」

.....

「ありがとう」

非常に短い文章を打つのにこれだけ時間がかかっているのを見て、グラハルトは何か穏やかな気持ちになってしまう
自分もこんな時代があったなと思ってしまう
まあ仕事でパソコン使っていたからタイピング速度はそれなりに速かったが、ネットゲーム初心者なんてタイピングが早くてもこんな感じの会話しかできない

昔の自分と重なってしまう初心者を見て、昔の自分とその隣にいた友人を思い出す

そういえば自分も最初にこんな風な会話をしたっけななどと思い出していた

そのすぐあと、さらにもう一体キャラが出現した

「おー、きたか」

「おまたせ、これからどうすればいいの？」

「そのNPCに話すんだって」

初心者二人、男キャラと女キャラ

リアルと中身が違うなんてよくある話だが、そんなことはどうでもいい

二人の初々しい姿を見ていたグラハルトは、さっきまでの自分の悩みが恐ろしくどうでもいいことに気づいてしまう

この二人の初心者のように、ただ楽しむだけでいいじゃないかと、全てのNPCと会話し、全てのイベントをこなし、全てのボスを倒した

だがそれが本当に全てだったのかと聞かれたら、そんなことは無いはずだ

この世界にはたくさんの方がいる、たくさんプレイヤーが増え続けている、たくさんの仲間がいる

それだけでもまだまだ楽しめることがいっぱいある

だというのに、こんなことで悩んでいても意味がない

たったそれだけのことに気づくのに、自分はなんて時間をかけたんだろう

グラハルトは決めた、そして行動した、二人の初心者にそれを見せ

るために、二人の初心者がこれから目指すべき高みを見せるために、世の中にはこんな人間もいるんだということを教えるために

グラハルトは最後のクリックをした

「あら、久しぶりですね。なんだかとても立派になったような気がしますね？ いくつかお仲間さんにも合わせてくださいね」

いつも通りの台詞、いつも通りの内容、いつも通りのグラフィックが表示され、グラハルトのことなど何の関係もないと言わんばかりにいつも通りの対応をするNPC

いつも通りなら何も無く表示が消えて終わりのその光景がいつも通り行われた

いつもと違うのはその後で、グラハルトの画面にポンと表示されたクエスト終了を知らせる表示だった

クエスト「覚醒」

おめでとうございます！

あなたはこのゲームの全てをクリアしました

ですが全てをクリアしたあなたならわかっているはずです、このゲームはまだ終わっていません

あなたが終わらせたこのクエストも通過点に過ぎません

きっとあなたなら気づいているはずです、仲間と一緒にいることそれ自体がこのゲームの全てだということに

あなたが得た新しい力を使って、仲間と一緒に新たな冒険の旅へと出発してください

クリア報酬を得ました

限定装備入手：ルーンナイト専用装備一式を入手しました

内容を確認したグラハルトはアイテム欄を見える

本当に全ての装備品が一気に増えており、その一つ一つがとんでもない性能を誇っている

確認するのも面倒だったので、とりあえず一式装備してみると・・・

「おー」

「わー、なんか輝いてる」

レベル150を達成したキャラだけが発する、独特のキラキラエフェクトが発生した

「それなんですか」

「カッコいい！どうやってなるんですか！？」

「君たちが目指す目標さ、自分達で探したほうが楽しいよ」

グラハルトは自分の姿を確認し、初心者二人にそれだけ言ってその場を去った

「うおー！とうとうなったか！！！」

「まじおめwww」

「お疲れ様」

「ありがとう、みんなのおかげだよ・・・それはともかくとして、この二人なんだけども・・・」

グラハルトは仲間に報告するために戻ってきたのだが、なぜか初心者二人がくっついてきてしまった

「初心者さんらしいんだけど、なんというか・・・」

「よろしくおねがいします！」

「初めまして、こんにちわー」

友人達は彼らの初心者っぷりに保護欲をかきたてられたようで・・・

「まかせろ」

何をとも言わずに何かをまかせることになった

きっと大丈夫だろう、多分、きっと

「・・・終わり？」

「・・・終わりだ」

ここは荒野のど真ん中、すぐ近くには小さいの中には異常に広いテントがあるだけで、他は廃墟になった建物ばかりの場所

瓦礫に腰掛けているのは画面越しではない、生身の肉体を持ったグラハルトと、勇者としてこの世界に召喚された光輝だった

「え？どうやってこっちに来たとかは？」

「・・・何も覚えていない、そこで俺の記憶が途切れてる・・・寝ておきたような感じじゃなく、気づいたら目の前にこっちの世界が広がっていたんだ」

「テンプレ的な神様に会ったとかは？」

「・・・神なんて向こうでもこっちでも会ったことないな」

グラハルトの過去はなんとも言えない、不思議な力によってこちら側に来たということしかわからなかったが、グラハルトの強さの理由はおそらくその辺なのだろう

「つまり、そのゲームのキャラがそのまま肉体になったってこと？」

「そうらしいな、少なくとも見た目とか装備品は向こうで持ってた

ものだ」

「・・・なんていうか・・・あれだな」

「・・・無理に何か言わなくてもいい、・・・理不尽なのは俺が一番よくわかってる」

グラハルトの告白が終わり、二人は沈黙する

何もしないままそうしていると、後ろから声がかかる

「勇者さま〜ご飯できましたよ〜」

二人は振り返り、そういえばまだ晩飯を食べていなかったことを思い出す

唐突に空腹を知らせる音が二人の腹のあたりから聞こえ、二人はお互いに笑い出す

「・・・ふっ、まずはメシか」

「はっはっは、確かに考えるのは後だな!」

二人は星空が美しい夜の空を見ながら、テントに戻っていった

死神の取引6（後書き）

というわけで、グラハルトの強さの秘密でした

補足を再び、本編では恐らく言わないであろう部分です

ルーンナイトは特化した能力を持っていませんが、この話で語られている通りに、非常に柔軟な戦闘が可能になる職業です

なので「生き残り続ける」能力、言い換えるなら「戦い続ける」能力に関しては非常に高い職業です

しかしその能力はパーティーで戦うことが前提であり、しかもこういった大規模で長期戦になるような戦闘でない限りは特に目立ちません

少数パーティーでは役割分担をして、それぞれに特化した職業で構成されるのがゲーム上では基本だったので、ルーンナイトの真価がよく理解されていなかった・・・という裏設定があります

私の経験上、どんなネタ職業でもそれをMAXレベルまで上げている人間というのはいたものですが、ルーンナイトの150が達成されていなかったのは、そういう理由もあつたんだ、ということをご理解いただければと思います

この辺の設定を一度まとめたいと思いますので、4万件突破を記念してそういった部分の紹介話を作ろうかと思っています
もちろんネタバレしない程度にするつもりですので、説明不足な部分は多くなるかと思いますが・・・

今後ともソウケンをよろしくお願いいたします

死神の取引7（前書き）

伏線回収・・・できてない・・・だと・・・？むしろ増えただと？

馬鹿な・・・一体何があった・・・

文才が無いですね、すみません

連話「死神の取引」はこの話でおしまいとなります、ちょっと長いかな？

読んでいただけたら幸いです

このお話の後、1時間後に累計PV4万件突破記念として、職業やスキルなんかに関する設定の話を予約投稿してあります

本編には全く影響しないうえに、やたらと長くなってしまいましたので、興味の無い方は読まないほうがいいかもしれません

死神の取引7

グラハルトの告白が終わり、光輝とその仲間達と共に夕食を食べている時

別の場所ではアルドラが一人ぼやいていた

「くっそ！これじゃ俺には何の役にもたちゃしねえ！

あの死神野郎め！何が願いに近づくだ！ぶつとばして・・・ああくそ！わかってて力を奪い取りやがったなあ野郎！！！」

アルドラはかなり荒れていた

ありえないほどの力を持つグラハルトの過去を見て、その内容を参考に自分を強くしようとしていたアルドラなのだが、内容のほとんどを理解することができなかった

異世界から来たのではないかと予想こそしていたが、見た世界はまるっきり文化・・・というかそもそも世界の成り立ちからして全く違う世界であつたし、グラハルトが何をしているのかさっぱりわからなかった

わかったのは奇妙な箱の中に映像が流れていて、その映像の中にいたキャラクターの名前がグラハルトということだったただけだ

しかもそのキャラクターを操作しているらしい男は見たこともない凡人で、今のグラハルトからは似ても似つかない、何の力も威厳も感じないそこらへんの一般人だった

ただ箱の中の映像を見る限り、こちらの世界の一部を覗いているよ

うな形だったということだけはわかる、アルドラが見たことのある景色や名前が違うモンスター等が表示されていたからだ

「もしかしてグラハルトは他の場所から操作されてんのか・・・？いやそれにしちゃあこっちに来てからの記憶が変化しすぎてた、やつぱりあの箱の中にいたグラハルトになってこっちに来た・・・ん？なんか引っかけたな？なんだこの感じ」

自分の考えを声に出したり誰かに説明したりすると、自分の中での考えが整理されるというが、悪魔でもそういうことはあるらしい自分の推測を口に出していたアルドラは、何か違和感を感じてさらに続けてみる

「もしかして勝手に連想してただけか？

操ってた男がグラハルトになってこっちに来たと思ってたけど、実は別々の存在だったとか？グラハルトだけがこっちに来たとか？

じゃあもしかしてあの箱は肉体を作り出すなにかの装置だったとか・・・？」

荒唐無稽とも思える発想なのだが、そもそも異世界から来た人物に対する考えの時点で荒唐無稽なのだと思ったアルドラは、自分に思いつくあらゆる可能性を口に出してみる

「いやそもそもグラハルトはほんとに異世界から来たのか？グラハルトに「なった」のが5年前だけで、グラハルト自体は昔からいたんじゃないのか？

いや待て・・・器・・・そうだ器だ、あれほど強力な存在が収まる器なんてそうそうあるもんじゃねえよな、あんなぶつとんだ力なんてベテランの冒険者でも収まらねえ・・・

5年前・・・？5年前！？」

唐突にアルドラはある事を思い出す

自分が関わったある事件を、力を求めて力を探していた時期に起こった事件を

「まじかよ、ありえんのか？」

「気づいたか？」

不意に後ろから声が掛けられた

「……死神か？」

アルドラが声のしたほうを振り向くと、そこには黒いローブを纏つた「死」があつた

黒いローブはボロボロで布切れと言ったほうがよさそうなほどだし、

不思議なことにそのローブは中身が見えそうなほどに穴が開いていて、というのに、その中にいる人物を見ることは全くできない。無限に続く暗闇が形を持ったかのようにそこに立っている姿は、死という言葉を連想させる恐怖を纏っていた。

「……難儀しているようじゃな」

「……おかげさまで、気づいたかつてのは？」

「答えじゃ」

それこそがお主が真に求める望み、そこに繋がる唯一の道標、不可能にできる死神の取引じゃ」

死神と呼ばれた存在はローブに隠れた奥の暗闇から音を発している
なんとも言えない不気味な音は、本当にそう言っているのかも疑問
視できるほどにかすれた音を出しているが、アルドラにははっきり
と聞こえる

「・・・5年前、それが鍵を握ってるんだな」

「いかにも、一つの死が一つの生を生み出す

まこと不思議なるは悪魔でも死神でもなく、人間の生み出す奇跡よ」

死神は笑う

かすれた音が笑っているように聞こえるだけなのだが、確かに笑っている

顔も見えない、体も見えない、ただそこにあるだけの暗闇が笑っている

何も知らないものが見れば、それはただの恐怖、ただの死という存在が手招きしているようにしか見えないような光景だ

だがアルドラもまた笑っていた、死を前にして笑っていた

「・・・それが、俺の願いを叶えてくれるんだな」

「魔神になることと、願いを叶えることは同じではない、どちらか一方しか選べぬ」

「十分だ」

死と向かい合う悪魔は、三日月を貼り付けたような独特の笑顔をしていた

「・・・む？」

「どした？」

場所は変わり、外観からは全く想像できないほど広いテントの中
ソファーでくつろいでいたグラハルトは唐突に何かに気づいたように
声を出した

「・・・いや、・・・クエストが一つ終わったようだ」

「クエスト？そんなんわかの？」

「・・・ああ、あんまり役にはたたんがな」

グラハルトは何もない中空を見るような顔をしたあとで、何もなかったかのように元に戻る

「ふーん、まあいいや」

光輝はネットゲームの類をあまりやったことが無いようで、そういつたキーワードには特に反応しない

話を色々聞いた限りでは、彼は前の世界ではスポーツ少年だったよ
うだ

ネットゲームどころか家庭用ゲームでさえほとんどやったことがな
いような、現代においては珍しいタイプの人生を送ってきたらしい、
そしてモテたらしい

「それよかさ、旅の話聞かせてよ

5年も世界中回ってたんでしょ？色々おせーて」

「・・・教えてもらう態度をとつたらな」

「將軍殿！教えてほしいであります！こうですか將軍！」

「・・・誰が將軍だ、・・・話といつても一人でいたのは3年くら
いだ、・・・あとはアリサと一緒にだったな・・・」

「アリサ？誰それ女の子？かわいいの？」

「・・・義理の娘だ、・・・手を出したら・・・クロス」

「將軍！本物の殺気が出ているであります！怖いであります！もう
死にたくないであります！！！」

「・・・じゃあ手を出すな」

「了解であります！！！」

絶対に手を出さないことを誓いつつ、一度会ってみたいなあなんて
思った光輝であったが、なぜかそれを察知したグラハルトにぶっ飛
ばされてお星様になったのはお約束というやつだろう

「んんん！いい朝だ！寝心地最高だった！」

翌日、清らしい朝日に照らされて伸びをしている光輝がいた

その隣ではいつもと同じように仲間達が揃っている

いつもと違うのは端っこにグラハルトがいることくらいだろう

「あふあふ・・・まだ眠いです・・・」

「むむ・・・こんなに寝られたのは久しぶり」

「・・・ぐう」

「しっかりなさいノア」

女性陣はそれぞれがそれぞれの感想を抱いているようだ

見た目はただのテントだったのだが、安眠効果に回復効果、並の魔物には見えない触れない近づけないという超高性能テントであったために、夜の警戒の必要もなかったためぐっすりと眠ったようだ
ものすごく欲しそうにしている光輝の目がグラハルトに向いていたが、グラハルトはあえて気づかないふりをしてやりすごしていた

結局昨晚は遅くまで光輝曰くグラハルト武勇伝を語る羽目になったので、さすがのグラハルトも若干眠気が残っているようだ

「いやゝ助かったよ！こんな高性能アイテムがあるなら旅も快適な

「んだけどなあ！」

「・・・やらんぞ」

「チツ、バレたか」

二人は冗談もそこそこに、真面目な顔に戻って会話する

「・・・これからどうするんだ？」

「さあ、とりあえず蒼犬は強かったって報告はするけど」

「・・・アルドラは狙わなくていい、・・・今のあいつは馬鹿なこととはしないだろう」

「悪魔アルドラをか？まあグラハルトさんが言うならわかったよ」

ちなみに一晩かけてなんとか蒼犬からグラハルト「さん」にまで再教育できた、グラハルトにしては珍しくがんばったほうだと思う

「そういうグラハルトさんはどうすんだい？行くアテはあるの？」

「・・・今も昔も変わらんさ、・・・アテなんかあった試しがない」

「はっはっはっ！さすがだな！何なら一緒に旅するかい？」

「・・・馬鹿言え、・・・お前みたいな馬鹿の相手してられるか」

「ヒドイ！真面目に誘ったのにヒドイ！」

冗談っぽく大げさに泣き真似を始める光輝を見て、グラハルトはどうしても思ってしまう

光輝とその仲間達を見て、どうしても考えてしまう
かつて自分と一緒にいた仲間達のことを・・・

こんな風に馬鹿な話していたことを、あれがリアルだったらこんな感じだったのかと、馬鹿な会話をして、馬鹿な行動をして、それでも何かをやるときはいつでも一緒だった彼らのことを・・・

帰りたい

そう思ってしまう

帰りたくない

同時にそうも思ってしまう

今のグラハルトはこの世界に来たばかりの頃とは違う

知り合いができた、仲間と呼べる相手ができた

アリサを拾った、家族と呼べる相手ができた

光輝と会った、似たような境遇の共感してくれる相手ができた

今の自分にはどちらを選ぶか決めることができない

だがいつか選ぶ日が来ることをグラハルトは知っている

その日が来るまでに自分は選択をすることができているのだろうか

グラハルトは答えの出ない答えを求めている

「うつし、行くか！」

気づけば光輝達は旅立ちの準備を終えていた

「・・・ああ、そうだな」

グラハルトも立ち上がり、テントを出した時と同じように一瞬で消失する

いつも通りの鎧姿で、いつも通りの顔の見えない兜をつけている

グラハルトは光輝達を見る

彼らはすでに歩き始めていた

出会ったときと同じように、太陽を背にしている

太陽を背にしたせいで影ができ、全身真っ黒になっているように見える光輝だが、こちらを振り向いてグラハルトのほうを向いているのがわかった

光輝はグラハルトに向かって声をあげる

「グラハルトさん、またな！」

別れの言葉は普通の言葉にすぎないはずだった

しかし今のグラハルトにとって、何故かその言葉は、心の奥底に響いた

「・・・ああ、またな・・・だ」

また会おうという約束、ただそれだけの意味しか持たない言葉
たったそれだけの言葉は、グラハルトの魂を揺さぶる

この約束をこの世界でどれだけしただろうか

この言葉を交し合える人物とどれだけ会ってきただろうか

例えばこんな風に、気軽に言い合える相手がどれだけいただろうか

「・・・またな・・・か・・・」

グラハルトは光輝達が見えなくなるまで、その背中をずっと見つめていた

死神の取引7（後書き）

お疲れ様でした、これにて死神の取引編は終了となります

第三章自体はまだまだ続きますのでお楽しみください

いやあ、それにしても光輝くん、書いてて楽しめた、やっぱり馬鹿はいいですな

今後も出てくるかもしれないのでお楽しみにしてくださいませ

それでは今後ともソウケンをよろしくお願いいたします

1 時間後に予約投稿してある設定などに関するお話のほうで、今回の連話に対する補足のような内容がございます
興味がある方はそちらもご覧ください

しつこいようですが「長い」「うえに「見づらい」」ので、興味の無い方は本編に影響しませんので、お読みにならないほうがいいかもしれません

設定集などの補足（前書き）

いつもお読みいただきありがとうございます

累計PVが4万件を突破しましたので、記念に書いた内容でございます

設定集というか、ゲーム時代はこういう設定になっていて、それを元にキャラクター達の強さが決まっているんだよ・・・という内容です

ぶっちゃけ読んでも本編には全く影響ありません

そのうえやたらと長いです、なんていうんだっけかな、「ぼくのかんがえたおもしろいげーむ」をだらだらと書いただけの内容です

しかもパソコンで書いたもんですから、携帯からご覧になっていただいている方々には非常に見づらいと思います

一応本編にこれまで登場したものや、今後登場する予定のものなどに関係する内容だけ書いたのですが・・・

面白い内容ではないかと思しますので、そのあたりはご注意ください

ちなみに7000字近くあります

設定集などの補足

新しい登場人物のステータスや職業などについての説明です
世界観の説明は・・・まあいっか（笑）

グラハルトの補足から、前回分をコピってますのでほぼ一緒です

グラハルト

種族：人間・異世界人

性別：男

年齢：30

身長：180以上（ゲームキャラだからよくわからない）

体重：70キロぐらい（ゲームキャラだからよくわからない）

見た目：イケメン、細マッチョ、白に近い銀髪、作者のイメージは

フィース

クラス
職業：ルーンナイト

ステータス：

HP：S

MP：A

STR：S

VIT：S

AGI：S

INT：B

DEX：A

LUK：D

特殊能力：

正義の勘（本能的な部分で殺す・殺さない相手を理解できる）

拒絶反応（常にダメージを受ける、この効果は状態異常回復の魔法・

アイテムで回復できない)

謎の情報認識(ステータスウィンドウを見ることができ、自分以外には見えない、一部限定で他人の情報も見れる)

HP限界突破・MP限界突破・身体能力限界突破・与ダメージ限界突破(それぞれの「人間に可能な範囲」を超えた数値に至ることができる)

形態変化・デュエルナイト(STRプラス補正>SSS、AGIプラス補正>SS、DEXプラス補正>S)

形態変化・デバインナイト(HPプラス補正>SS、VITプラス補正>SSS、盾装備時の防御能力全アップ)

形態変化・アビスナイト(MPプラス補正>S、INTプラス補正>A、物理攻撃するたびにMP回復)

説明:

ついに明らかにになった異世界からの来訪者

こちら側にきた原因は不明だが、前の世界でやっていたネットゲームのキャラクターになった人物

当然レベルはベースレベル150・職業レベル150

元の世界に帰る方法を探して世界中を旅していた
今のところ手がかりは見つかっていないらしい

この世界においては、グラハルトが強いというよりは回りが弱い
という感じ

ちなみにモンスターはゲーム上より弱い存在しかいないため、グラハルト一人ではほぼ全て倒せる

長所ばかり書いてあるが、実は短所のほうが遥かに多い
多いので箇条書きにて説明

・文字が書けない(異世界補正?らしいもので読めるし話せるけど

書けない、勉強しなかった)

・料理できない(焼くか煮るかしかできない、料理嫌いだった、普段は保存食を大量に持つてる)

・頭がよくない(難しい会話はできない、騙されやすい、畏ひっかかりやすい)

・基本的に人見知り(知らない人怖い、でもノリと勢いでカバー)

・あんまり深く考えない(よって騙されやすい、誤解されやすい、勘違い多い)

・どうでもいいと判断すると全く気にしない(よって畏にかかりやすい)

・あんまり回りのこと気にしない(気に入った人は別、アリサとか)

ざつと書いてもこれだけある

キリがないのでこのくらいで・・・

東 光輝 (あずま こうき)

種族：人間・異世界人

性別：男

年齢：18 (高校三年生)

身長：182センチ

体重：73キロ

見た目：イケメン、細身でスマート、黒髪黒目の日本人、髪の毛さ

らさくら

職業：勇者(限定職)

ステータス：

HP：A

MP：A

STR：A

V I T : A
A G I : B
I N T : C
D E X : A
L U K : A

特殊能力：

異世界補正（全てのステータス、習得速度にプラス補正）

勇者補正（都合のいいことが起こりやすい、ご都合主義）

専用装備補正（勇者専用装備が使える、そういった道具の発見率にプラス補正）

魅力補正（同姓・異性・種族を問わずにモテやすくなる、ただし一部の人間から恨まれる確立に超プラス補正）

光魔法適正（光魔法の習得速度にプラス補正、暴走しづらくなる）

幸運（都合のいい事態に遭遇しやすくなる）

説明：

異世界からの来訪者

勇者召喚された青年、こちらに来てからはまだ半年ほど

スポーツ青年で爽やか、イケメン、文武両道とモテる要素満載だけでも鈍感というテンプレ青年

召喚されてからもテンプレな生活を送り、さまざまな女性とフラグをたてまくっている

小説家になるうにおいては、どちらかといえば主人公と一緒に（むしろメインで）召喚されるタイプの完璧超人

一応魔王を倒すために召喚されたものの、国の人間の陰謀によって色々めんどくさい立場

その全てが勇者補正、またの名をご都合主義という最強のスキルによって解決できる

現在その辺が発動中のようで、召喚した国の色々とした問題を解決
していつているらしい

何気に物語のキーマンの一人

レベルとしてはベースレベル100にあたる

仲間に関してははっきり言って脇役なので

特徴だけ箇条書き

アイシャ・召喚した国の騎士で光輝の教育兼お目付け役、大剣を使
う前衛型、レディ似

リノン・獣人の弓使い、狼族で素早さを重視している、格闘戦もこ
なせる中衛型、茶髪のショートカット

シェリル・エルフの魔導師、攻撃と回復の魔法が使える完全後衛型、
トドメ役、クリーム色のロンゲ

ノア・人間の魔導師、支援タイプ、回復魔法も使える、司令塔役で
ボクっ娘、緑のポニテ

言うまでも無いと思うけど一応言っておく

全員が勇者が好きで、全員が言うまでもないが美人

夢と希望の大きさはアイシャ>シェリル>>>壁>>>ノア>リノン

アルドラ・バステア

種族：悪魔

性別：男

年齢：200歳くらい（数えるのが面倒で覚えていない）

身長：姿を変えられるので意味なし、よくしている姿は175センチ
くらい

体重：姿を変えられるので意味なし、よくしている姿は70キロくらい

見た目：姿を変えられるので意味なし、よくしているのは彫りの深い顔に赤毛をオールバック、平賢みみたいな感じ

職業：アークデーモンクラス（限定職）

ステータス：

HP：A

MP：A

STR：A

VIT：A

AGI：A

INT：A

DEX：A

LUK：C

特殊能力：

拒絶反応

真名の強制力（真名を呼ばれると強制的に呼んだ相手に従う）

HP限界突破・MP限界突破・身体能力限界突破・与ダメージ限界突破

老衰無効（年齢による身体能力の低下が無効になる）

無限成長（無限にレベルアップが可能になる、ただし必要経験値が多くなる）

悪魔適正（闇魔法の適正が最高になる、暴走しない、闇属性の行動による消費MPが大幅に減少、光系は全てが逆になる）

生命力吸収（周囲の存在からHP・MPを吸収できる、吸収する量は相手とのLV差による）

説明：

グラハルトより先に名前が出ていたキャラなのに、前回説明されな

かったかわいそうな子

現在は死神の取引により、全ての能力を失っている
そのため拒絶反応も含めた全ての特殊能力が無効で、ステータスも
LUK以外はFランク

（Gランクは例えば両腕を怪我で動かせなくなったとかでないかぎり存在しない、この場合STRがGランクになる）

何かの願いを叶えるために魔神になろうとしていた

死神の取引によって、グラハルトの真実を知り、それを切っ掛けに
何かを知ったようだが、それはまた本編で・・・

頭は割りといいみたいだが、少々大雑把に物事を考えるらしく、陰
謀とかにはひっかかりやすい

レベルとしてはベースレベル100だったが、現在は1

ちなみにこっちの世界では一般人のベースレベルは子供、5歳くら
いまでは1で、大人は5から10くらいまで、冒険者になると10
〜30くらい

20後半からベテランレベル、30を超えると強い人、50を超え
ると有名人

70レベルを超えると世界レベルの有名人で、ほとんどが二つ名持ち

80レベルを超える人物は10人いないくらい

90レベルを超えてる人は歴代でも片手で数えられる人数しかないな
い、現代では一人だけ（グラハルトや光輝を除く）

以下各キャラのレベル

グラハルト 150・150

アリサ	6 0 ・ 0 (無職のため)
レディ	4 8 ・ 7 2
アレックス	5 7 ・ 8 1
グレイ	4 5 ・ 6 9
バスカー	5 9 ・ 8 3
マキア	5 1 ・ 0 (限定職のため)
光輝	1 0 0 ・ 0 (限定職のため)
アルドラ	1 0 0 ・ 0 (限定職のため)

以下参考程度に

学園長	8 2 ・ 8 9
ゲイル	7 6 ・ 8 7 (忘れてる人多いかもしれないけどレ
デイの父親)	
サリア	8 0 ・ 9 2
女教師	4 7 ・ 6 1
エルフ教師	4 3 ・ 6 7
獣人教師	5 1 ・ 5 8
イケメン教師	6 3 ・ 7 4

ちなみに職業レベルが高いのは、こつちの世界だと普通

実戦が多い人物ほど職業レベルは上がりやすく、訓練が多いほどベ
ースレベルが上がりやすい

職業については下に記載

職業について

ネットゲームをやったことがある人なら、名称だけでもある程度把握できると思いますが一応・・・

剣士系：物理関係の能力が高めで、HPが非常に高い。重装備ができるので、装備品によっては魔法防御をあげることも可能

盗賊系：素早さが高く、文字通り「盗む」の成功率が高い（盗む自体は他の職業でも可能）。軽い鎧などを装備でき、幅広い装備の選択が可能、ゲーム上では一番使用率が高かった

格闘家系：そこそこの物理攻撃と素早さ、そこそこの魔法関係の数字をもつバランスタイプ。独特な装備が多く、強力なものが多いが、他の職業と兼用しづらい。組み合わせによってスタイルが全く変わる上級者向け職業

魔法使い系：魔法関係の数値が非常に高いが、物理関係は滅法弱い。瞬間火力の高いスキルが多く、ゲーム上では火力役として重宝され、二番目に使用率が高かった職業

僧侶系：ステータス全てが低めに設定されている代わりに、回復・支援関係が使える職業。パーティーに一人は欲しい重要職業。ただし戦闘面に関してはほぼ無力なため、需要と供給が合わない悲しい職業だった

上位職業の名称

剣士系

ソードマン

剣士＞ウォーリア（100）＞ナイト（110）＞ハイナイト（120）＞バスターナイト（130）＞ロードナイト（140）＞エンペラーナイト（150）

盗賊系

シーフ

盗賊＞ハイシーフ＞ローグ＞シャドウ＞シャドウウォーカー

格闘家系

バトラー

格闘家＞ハイバトラー＞ナックルウォーリアー＞バトルロード＞タイラント

魔法使い系

魔法使^{マジシャン}>ハイマジシャン>メイジ>ウィザード>ハイウィザード

僧侶系

僧侶^{アコライト}>ハイアコライト>プリースト>ハイプリースト>カーディナル

組み合わせ例の紹介

種類が半端ないので数種類だけ・・・

剣士+盗賊

アサシン(110)>ハイアサシン(120)>サイレントアサシン(130)>シャドウアサシン(140)>インヴェジブル(150)

説明：剣士系の攻撃力と盗賊系の素早さを持った職業

名前の響きだけで使う人間が非常に多かった人気職業

防御能力が犠牲になっているが、姿を隠して行動でき、背後に忍び寄った時の不意打ちは剣士系でさえ殺せる攻撃力を持つ

剣士+僧侶

ホーリーナイト>ガーディアンナイト>パラディン>エレメンタルガード>ゴッドブレス

説明：強力な防御能力を持つ職業

パーティーの盾役。物理攻撃能力は普通だが、魔法関連の値が高いパラディン以上になると覚えられる魔法の種類が増えるため、魔法重視のタイプになることが多い。

盗賊+僧侶

ブラックアコライト>ダークアコライト>ダークプリースト>デビルプリースト>デスプリースト

説明：闇の道を歩んだ僧侶

別に悪の道に走ったわけではなく、闇をもって闇を制す立場の人達のこと

能力を低下させたり、悪魔召喚などができる。本体も素早さ関連が高めで、地味に強い職業

剣士＋魔法使い

マジックソード

魔法剣士＞マジックナイト＞ウィザードナイト＞エレメントナイト

＞フォースエッジ

説明：剣も魔法も使える火力前衛、重装備もできるため防御力もある剣に自力で属性付与して戦える。詠唱を伴う（キャスティングタイム）近接スキルが多く、扱いは難しいが火力が高い、人気が高い職業だった

剣士＋盗賊＋格闘家＋魔法使い＋僧侶

スキルマスター（140）＞バトルマスター（150）

説明：大器晩成型職業。各職業の代表的なスキルをそれぞれ覚える特徴的な職業。なるまでは辛い、なったあとが強力だったため、150達成者も多かった。

ちなみに何故レディやバスケー達が転生後の職業についているかですが、一応理由は考えてあります

「転生」という概念がそもそも無いので、純粹に強くなっていた結果という形です

ゲーム上では例えば剣士系なら

ソードマン＞ナイト＞転生＞ソードマン＞ハイナイト＞転生・・・と繰り返します

しかしこちらの場合

ソードマン>ナイト>ハイナイト>バスターナイト・・・と変化していきます

必要レベルに達した時点で正式な儀式を受ける必要があります、それを受ければ2次以降の職業名を名乗れるようになります

この場合、ゲーム的な言い方をするなら、職業レベルは50からのやり直し、ですが覚えているスキルは基本的に全て使えるままです

このへんは本編では絶対に書かないので書かせていただきました

スキルについて

基本的には各職業ごとに決まったスキルを持っていて、他の職業のものは覚えられない

これはゲーム上では当然ですが、こちらの世界で考えると、あくまでそういう使い方が多い、という参考程度です

なので剣士系でも魔法をメインに戦う人はいますし、多くは無いですが他職業のスキルを使える人もいます

ここから先の話はあくまでゲーム上ではそうだった、という話で、

この世界においては例外も存在するという前提での内容です

基本的に1次で覚えたスキルは上位になっても全て使える

転生している場合は、2次になるときについていた職業のスキルは全て使えるが、転生前のものも一部覚える

(例：魔法剣士になる場合、1次を剣士、2次を魔法使いから魔法

剣士になった場合、魔法使いのスキルは全て使えるが、剣士・ナイトのスキルは一部しか使えない)

スキルは覚えた直後はレベル1かレベル0(使えない)だが、使った回数(熟練度)と職業レベルが一定値以上あればレベルアップしていき効果上がる、最大スキルレベルは10

装備品にも稀に専用スキルが設定されていて、こちらも同様に使えば使うほどレベルアップしていく

ただし装備品のスキル熟練度は、キャラ毎に設定されているので、他キャラに貸してもそのキャラは1から熟練度をあげる必要がある

一部のスキルは転生する度に、強化されたスキルに変化していく

例外的に魔法は全職業で覚えることができる

魔法にはレベルが設定されていて、1〜10までと、フリースペルと呼ばれるレベルが無い魔法がある

無職以外はレベル1なら全て使え、2次以上はレベル2まで、一度でも転生するとレベル3までが覚えられる

その後は何度転生してもレベル3までしか使えない

それ以上のレベルを覚えるには、専用のスキルが必要になる

ちなみに覚える方法はスペルスクロールというアイテムを使用するだけ、ゲーム上は高いが売っていた、この世界でも売ってはいるが、かなり高く貴重品

レベル4以上もスペルスクロールを使って覚える必要があるので、これをいくつ手に入れられるかが魔導師の実力に関わってくる

ちなみにスペルスクロールは使い捨て、この世界では使ったら内容が全て白紙になってしまう

スキル一部紹介

剣士系

パワースイング：強く振る、剣士系の基本スキル。なぜか「ぬん！」などの掛け声が表示される

剣装備効果アップ：短剣・片手剣・両手剣・双剣装備時の攻撃力上昇

盗賊系

素早さ上昇：AGI・回避率・移動速度が上昇

盗む確立アップ：そのまま盗む成功率があがる、盗もうとするたびに熟練度上昇

格闘家系

気功：気を纏うことで一定時間身体能力上昇

波動：気を収束して打ち出し離れた相手を攻撃する

魔法使い系

魔法知識：スキルレベルが上がることにより、同じレベルの魔法が使用できるようになり、効果が上昇する。魔法を使うたびに熟練度上昇
防御魔法：魔力を自分の周囲に展開し、物理・魔法防御力を上昇させる、残りMPの割合と効果がリンクする。常時自動使用スキル

僧侶系

ヒール：HPを少量回復させる

ブースター：STR・VIT・AGIを上昇させる

メンタルブースター：INT・DEX・魔法攻撃力・魔法防御力を上昇させる

ルーンナイト

封印：ルーンナイトで覚えるスキル以外の全てが使えなくなる

形態変化：別の戦闘スタイルに変化することができる

パラディン

シールドオブシールド：スキルレベルに応じた時間、防御力が上昇、魔法攻撃をスキルレベル×10%無効化

魔法知識：魔法使い系のものと同じ、ただしどこまであがるかは何次にいるかによる、ゴッドブレスで7まで

魔法剣士系

魔法知識：魔法使い系のものと同じ、ただしどこまでレベルがあがるかは何次にいるかによる、フォースエッジで7まで

属性付与：自分の攻撃に属性を付与することができる、ただし自分の覚えている魔法の属性のみ。使える魔法のレベルが高いほど、追加ダメージが上昇する

マジックシヨック：武器に付与された属性を、一気に解き放って爆発させる、使用後は属性付与が解除される

こんなところですかね
書いていて思いました、超なげえ・・・

装備品とか世界観とか全然書いてないや、どうしよう（笑）

設定集などの補足（後書き）

読んでいただいたあなたの気持ちを代弁しようと思います

「長え！その割りに全然核心ついてねえ！オナニーは他でやれよ！」

・・・あれ、パソコンに水滴がついてる・・・うん、決して涙ではない、泣いてなどいない、ちょっとあれだ、コーラがはねただけだ、コーラなんて持ってないけど

冗談はともかくとしまして、ここまで読んでいただきありがとうございます
ざいます

今後も何かしら記念になるようなことがあるたびに、何かしらこう
いったものを書いていこうと思っています

今後ともソウケンをよろしくお願いいたします

皆様のご感想・ご意見・評価はいつでも歓迎いたします

酷評や設定の矛盾点（いっぱいあるだろうけど）などでも言っ
ただけければ直させていただきます

閑話・聖騎士サリアⅡエルトリア（前書き）

毎度読んでいただきありがとうございます

今回はアレックスのおっしょー様のお話です

けっこう無理矢理1話分にまとめたので、説明不足感がひしひしと伝わってきます・・・、自分でそうなんだから読者様におかれましては更に感じられてしまうと思いますが、そこは一つご理解いただければ・・・何をとは言わないでください

それではどうぞ

閑話・聖騎士サリアⅡエルトリア

パラディン
聖騎士

鉄壁の守りとも、戦場の魔剣士とも、はたまた騎士の姿をした魔導師とも呼ばれる職業クラス

その中でも有名な人物、聖騎士サリアⅡエルトリアという人物がいる
赤茶色の長い髪をポニーテールにし、鷹のように鋭い目つきをしている

三十代も後半に入った年齢というのが信じられないほど美しい顔立ちは、男女を問わずに人気がある

身長は女性にしては高いが、それよりも自身の二つ名を表すような断崖絶壁の胸が若干コンプレックスらしい

だが実力は世界でも有数のパラディンとして有名な人物だ

二つ名はそのまま「鉄壁」

歩く盾とも呼ばれる彼女は、まさにパラディンの最大の特徴を、最大限活用する高レベルの存在なのである

防御に徹した場合に限り、蒼犬の攻撃でさえも防ぎきると噂されるほどに、鉄壁の防御を誇る

そんな彼女が有名になるのは自然なことなのだが、実は有名になったのは最近のこと

ほんの4〜5年ほどで有名になった

しかもそれ以前の彼女を知る人物達は、全員が彼女のことを弱かったと言う

さらに詳しく言われていたことを説明するならば、以前の彼女は防御より攻撃を重視しており、パラディンとしての役割を軽視するような態度だったらしい

それが4〜5年前にあったある事件の後で、急にその方向性が変わった

三十代を過ぎた体の衰えを感じ始める年齢であつたというのに、目覚ましい成長を遂げていき、戦場においては必ず生き残り、任務においては必ず仲間全員を無事に帰還させた

彼女に何があつたのかを知る人物は、同じ任務についていた者だけそして事件を起こした張本人である、「蒼犬」と呼ばれる男だけだった

サリアはその日、護衛任務についていた

護衛対象は王族の一人で、第三王子という微妙な立場の人間だ

王位継承権はそのまま第三位なのだが、第二王子は病弱で実質上には継承権を放棄している

第一王子はなかなか良くできた人物だが、野心が無く国民第一主義、国民からの支持は高かった

国の重鎮達にとっては、自分達の思うように動いてくれない相手ということ、あまり人気が無い

それに対して第三王子は野心家で、国民よりもむしろ国自体、はっきり言ってしまうなら自分がいい思いができれば後は知らないというような人物だった

当然金と権力に溺れた国の重鎮達は、第三王子を祭り上げて王位を継がせようと躍起になっている

そんな微妙な立場と時期に行われたこの護衛任務

実は第一王子派の、サリアが所属する第二騎士団の団長と副団長を殺害するための罠だった

道中に盗賊が王子を狙う形で襲い、時間稼ぎをしているうちに大型の魔物を投入

逃げるふりをした盗賊がスキについて両名を暗殺・・・という筋書きだった

そして事実、その通りにことは運び、両名は暗殺されてしまう

咄嗟にサリアが指揮を代理したが、強力な魔物と盗賊達の巧妙な戦術の前に苦戦していた

彼女と蒼犬が出会ったのはその時だ

それは突然だった

離れた場所にいた盗賊の一人が急に倒れたのだ

まわりの人間はそれに気づきさえしないほど、あまりにも突然倒れた

やがて一人、もう一人と倒れていくのだが、誰もそれに気づいていない

サリアだけが、唐突に頭が「無くなった」盗賊を目撃していた

「ッ！？全員下がれ！防御陣形！！」

サリアがそう指示をだし、王子を乗せた馬車を囲むようにして、騎士達は盾を構える

その直後

青白い光が中空を走ったのを、サリアは見た

その光は盗賊の一人にぶつかり、頭を正確に貫き、絶命させた

騎士達が一ヶ所に集まったことで、邪魔が無くなったかのように、その光は幾度も見えた

正確に盗賊達を捕えるその光は、天罰と言いたくなるほどに美しく、清らかな青白い光だった

盗賊達が7割ほど肉の塊になったあたりで、唐突に大型の魔物が暴

れだした

恐らく操っていた者が殺されたのだろう、全部で五体いた魔物は全て暴れ、ある一ヶ所を目掛けて襲いかかった

鼻が無くなった象のような魔物は、あるいは口から炎を吐き出し、あるいは巨体に見合わぬ速度で突進していく

全ての攻撃がぶつかり、炎が立ち上る中、自らも火の中にあるといふのに、象のような魔物は動かなかった、突進したままの姿勢で立ち止まっている

正確には、壁にぶつかってその壁を突き抜けようとするように、前に前にと力を込めている

炎の中から何かが象を押し返し始め、その全容を明らかにしていく

蒼い鎧、金の装飾、犬のような兜

腰には片刃らしい細く、長く、反りのある武器が2本挿してある

突進していた二体の象を、片手で一体づつ抑えている
抑えているというか

「バカな・・・あの魔物を押し返している・・・？」

魔物はいまだに前へと進もうとしているのだが、まるで荷車を押すようにどんどん押し返される

この魔物は普通なら、人間十人と引つ張り合いをしても余裕で勝てるだけの力がある

それだけにこの状況に対して、驚きの言葉を出してしまうのは仕方

ないことであろう

「鬼神光剣!!」

その場にいた全員がその言葉を聞き取った直後、再び青白い光が幾つも走る

象の魔物は瞬く間にただの肉塊と化していき、ついでに盗賊達も同様にしていく

数秒もたつところには、騎士団以外に生きている者はいなかった

サリアが目の中の光景に呆けていると、その男はこちらに向かってゆっくりと歩いてきていた

敵ではないようだが、味方でもない判断したサリアは声を張り上げる

「止まれ!」

男は素直に止まる

「貴様は何者だ!名を名乗れ!」

「・・・グラハルト」

男は以外に素直な受け答えをする

悪い人間では無いのだろうか、サリアが考え始めたが、次の言葉を聞いて一気に血の気がひいた

「・・・そいつを殺しに来た」

そう言っ指差したのは、後方にあつた馬車、その中から顔を出しておもちやを見つけたような顔をしている、バカ王子だった

バカ王子はそのセリフが聞こえなかったように、ずんずんと前に出てくる

「王子！危険です！」

サリアの忠告を完全に無視して、王子は男に話し始める

「貴様！気に入ったぞ！部下にしてやるからありがたく思え！」

王子のニヤニヤとした顔は、まるで自分の言葉は絶対服従が当たり前と言いたげだ

自分に使えることが平民の幸せとでも言い出すかもしれない

不穏な気配を察したサリアが動く

「・・・寝言は寝て言え」

サリアが王子の前に立ち、巨大な盾で庇うように構える

甲高い金属音が聞こえ、盾と剣が擦れあう不快な音が響く
ハンマーで叩かれたような、ありえないほどの重い衝撃を感じつつ、

両足でなんとか踏ん張る

「・・・弱いな」

男はそう呟き、サリアを見つめる

「貴様・・・！騎士を侮辱するかっ！」

今まで積み上げてきたものを否定されたサリアは、目に見えて怒る

「・・・後ろを見る」

「なに？」

言われて後ろを見てみると、そこには衝撃の光景があった

ニヤニヤ笑いのまま、頭と体がお別れをしている第三王子が転がっている

男が言った通りに寝てしまったようだ、二度と覚めることの無い眠りへと

「な・・・なんで・・・」

サリアは第三王子が死んだこと自体はどうでもよかった、むしろ死んだほうがいいとさえ思っていた

周りの騎士も同じ考えのようで、王子が死んだことより、どうやって防御を抜けたのかに驚いているようだ

「・・・仲間を守れないパラディン・・・ただの的だな・・・」

「貴様・・・っ！」

「・・・心配なくていい、・・・お前は殺さない」

「どこまで・・・どこまで侮辱する気だ！」

「・・・殺す相手がなくなるまでさ」

言い終えた瞬間

再び甲高い音が鳴った

音と同時にサリアの右側から何かが飛び散った

それが血だとすぐに気づいたものはいない

「・・・え？」

「・・・あと六人だな」

「や・・・止める・・・」

「・・・鬼神光剣」

「やめろおおおお！！！！」

サリアは持てる全ての力を使って、男に魔法を放った

後日、殺された七名は、この事件の内通者であったことが判明した金を握らされ、成功すればそれなりの権力を与えられる約束があったらしい

だがサリアにとってそんなことはどうでもよかった

手も足も出なかった、という事実だけで彼女は打ちのめされていた積み上げてきた全てが通用しなかった、どんなに魔法を打ち込んで、あの男は止まらなかった

どんなに力を込めて攻撃しても、微動だにしなかった

自分にできたことは、ただ一撃を防いだだけ

それも自分を守ったのであって、自分以外は誰一人として守れなかった

彼女は・・・弱かった・・・

弱い自分が許せなかった

自分の弱さを悔いて泣いていた

だから彼女は、入り口から入ってきた人物に気づけなかった

「師匠・・・」

そう話し始めたのはアレックス、彼女の義理の息子

昔彼女がまだ若いころ、戦争に巻き込まれた村で唯一生き残った赤ん坊

いまではもう13歳になり、自分のようになりたいと言ってくれる
自慢の息子

「アレックス・・・私・・・弱かった・・・誰も守れなかった・・・
私は・・・弱い・・・」

涙を流しながら語る彼女

その彼女の重い言葉を受け止めたアレックスは、しっかりと言う

「師匠は弱くなんかない！」

アレックスの言葉に、サリアは顔をあげる

「師匠は弱くなんかない！だって・・・だって・・・っ！
お母さんはいつだって俺を守ってくれたじゃないか！」

守る、という言葉にサリアは反応する

そして思い出す

『仲間を守れないパラディン』

自分はなぜパラディンを目指したのか、どうしてわざわざパラディンという道を選んだのか

自分の人生は、目の前にいる涙を流す少年のため

彼を守り抜くためにパラディンになったのではなかったのか

自分より弱い誰かを守るために、命を懸けて救いたいと思う何かのために

国という金と権力のためでなく、国という場所に住む一人一人の人間のために、自分はパラディンになったのではなかったのか

「師匠は強いんだ……っ！もっともっと強くなるんだっ！だから……だから……泣かないで……お母さん……」

涙を流し続けているアレックスを、サリアはそっと抱きしめた

「ごめんね、アレックス……、ちょっと弱気になってたみたい私は負けないわ、もっともっと強くなる……、次は負けない」

サリアの目から涙は消えた

新たに宿った意思は強く、優しく、母としての力強さを感じさせる

次は負けない

勝つことができないとしても、次は簡単にはやらせない

誰一人として、二度と目の前で殺させたりはしない

肉体は強い意志に引っ張られる

三十歳という年齢の壁を超え、衰えという言い訳をするのは辞めた彼女が「鉄壁」の二つ名を手に入れるまで、時間はかからなかった

閑話・聖騎士サリアⅡエルトリア（後書き）

お疲れ様でした

ちなみにアレックスは10歳の時点で正式にパラディンを目指して修行していました、なのでこの時点でサリアは師匠であって、普段はそう呼ばせていました

なぜこの時点でサリアの話を出したかは・・・次回以降で説明していこうと思います・・・

今後ともよろしく願います

聖騎士の贈り物1（前書き）

ここから再び連話です

サリアとグラハルトのラブストーリーが・・・っ！あるわけない

本編をどうぞ

聖騎士の贈り物 1

聖騎士サリアⅡエルトリア

世界でも有数のパラディンとして知られ、「鉄壁」の二つ名を持つ
凄腕の騎士

その腕前は二つ名が表す通り、まさに鉄壁

あらゆる攻撃を的確に防ぎ、それが武器であるか魔法であるかなど
一切関係なく、あらゆる攻撃から仲間を守る

三十代の後半に差し掛かった年齢であるというのが信じられないほ
どに、彼女は強く、そして美人だった

そんな彼女は今現在、騎士達が使う訓練場で、ある男と対峙していた

「ふはは！今こそ決着を着ける 때가 来た！

聖騎士サリアよ！私が真のパラディンであるということを教えてや
ろう！」

向かい合う男は無駄に豪華な鎧を身につけ、防御なんてしたらせつ
かくの凝った細工が削れてしまうような、見事な装飾の盾を構えて
いる

しかも重鎧に重盾を装備しているにも関わらず、取り回しがしづら
そうな無駄なゴテゴテジャラジャラキラキラした装飾のついた長剣
を持っている

「……それでよく動けるわよね」

彼女の言葉も最もである

そのくらいゴテゴテした装飾で、悪趣味と言われても仕方ないような装備なのだから

残念なのは、それだけ悪趣味な見た目であるにも関わらず、この男は強い、という事実であった

「貫け！ライトニングアロー！！」

男は電撃系の魔法の矢を放つ

電撃系は威力が高く、速度が速いという特徴がある

その分だけ扱いは難しいし、集中に必要な時間も長いことが多いなにより自分の魔力だろぅが変化した魔力だろぅが操作性が異常なまでに悪いという特徴がある

狙った場所に着弾させること自体は難しいことではないが、その速度が速すぎるために、放ったあとで別の場所を狙うといったことがほとんどできない

ただしこういう止まっている相手を狙う場合などに限れば、早すぎるという特徴は長所になる

操作できないほどの速度で飛んでいくのだが、それは逆に相手に対処するヒマを与えないということになる

普通であればただ盾で防いで終わり、それもただの盾ならば感電してしまつたため、防いだことにはならない

普通であれば、の話であつて、鉄壁と呼ばれる彼女にはこの程度でダメージにはならないが・・・

「ふん」

サリアはただ盾で防いだだけのように見えた

だがそれが、瞬間的に魔力で雷の通り道を作り、体より先に地面に雷エネルギーを流したと気づけるものは少ない

「貫け！貫け！貫け！」

男は立て続けに魔法の矢を放つ

一度に飛んでくるのは1本のみ、それも威力は一般人ならショック死できるかもしれないが、そこそこの冒険者なら十分耐えられるレベルだ

「何を狙つてゐるんだか知らないけど、この程度じゃ消耗さえしないわよ？」

サリアは軽く挑発してみるが、男はそんなことはわかっていると云いたげな顔だ

「ふん！狙いはこつちさ！」

よく見れば男は長剣に魔力を込めている

よく魔法を強化するのに媒介が用いられるが、普通は杖とか魔力を込めた本とかだ

しかし彼の長剣は媒介としての能力が高いものらしい、ゴテゴテした装飾はそのためだった

「雷を司りし精霊よ、我が敵に汝が鉄槌を下せ！サンダーボルト！」

瞬間、轟音が響き、彼の剣からさきほどより遥かに巨大な雷光が発生する

電気の逃げ道を作るなどという方法では防ぎきれないほどの巨大な雷エネルギーは、彼女を焼ききらんと迫ってくる

「我が盾は完全無欠！シールドオブシールド！！」

シールドオブシールド

魔法攻撃に限り、あらゆる攻撃を数秒間無効化するスキル

パラディンの中でも使える者は少ないスキルで、彼女が鉄壁と呼ばれる理由の一つ

理屈は難しくない、単純に魔力の「擬態」を解除する性質の魔力を作り出し、それを膜状に展開するだけという単純明快なスキルだ
ただしあくまでも「擬態」を解除するのであって、例えば魔力で操っているだけの大岩などは防げない等という制限もある

一応膜自体にもある程度の防御能力はあるが、決して高いとは言え

ない

さらに言えば消費も凄まじい

なぜなら擬態を解除するという能力そのものが、その能力を持った魔力自身を解除しようとしてしまうために、常にその魔力を生成し続ける必要がある

そのためどんな熟練者でも、持って数秒しか展開できないという難しいスキルだ

しかしこの場合においては絶大な効果を示す

電撃系はそのあまりの速さゆえに、攻撃が持続する時間も極端に短い瞬展開しただけで十分に効果はあった

「この程度？」

「それを待つてたんだよ！サンダーボルト！！」

二連発

わざわざ媒介を使った理由はこれだった

恐らく剣には、魔力を一定量注げば勝手に魔法が発動するような仕掛けがあるのだろう

その間に本人が再び同じ魔法を使用し、防御スキルのスキについて勝負を決めるつもりだったのだ

再び雷光が輝き

サリアに直撃した

・・・

「やった・・・か？」

直撃した瞬間に激しく光り輝いた雷光は、彼の視力を一時的に奪った真つ白な視界のなかで、正面にいたはずのサリアの気配を必死に探る

「・・・やってなかったら負けだな」

弱気な発言をしてしまうのは、視界が利かないという不安からだっただろうか

それとも自分の後ろから感じた、強烈な殺気のせいだったのだろうか
後ろから感じる殺気と同じ場所から、女性の声が響いてきた

「あら、じゃあ私の勝ちね」

サリアの声は、あの攻撃を防ぎきったと確信するには十分だった

「・・・どうやった？直撃したはずだ」

段々視界が戻ってくる中で、彼はサリアにそう尋ねた

「確かに驚いたわ、でも直撃はしてない

・・・同じスキルを使っただけよ、ただし盾じゃなくて鎧にね」

シールドオブシールドと名がついているため、盾に纏うものというイメージが強いこのスキル

しかし実際には盾じゃなくても使える

言ったように鎧であっても、武器に使うことだってできる

ただし理屈はわかっていないが、なぜか盾以外に使った場合は使ったものの自体にしか効果が発揮されず、周囲に展開することもできないという仕様になっている

盾という存在が、スキルを強化しているからではないかと言われているが、真相はわかっていない

「・・・シールドオブシールドの2連続とは・・・やられたな」

「まだまだ鉄壁を貫くには足りないわね」

「ふん、次は勝つ！」

すっかり回復した視力で、サリアに悔しそうな顔を向ける男
そしてその男はサリアの姿勢を見て驚いた

なんと彼女は盾こそ構えているが、短剣を握っていないのだ

殺気というのは文字通り殺そうとする気持ちであって、それは武器などの相手を殺せる道具を持ったときに顕著に現れる

それを持たずに、いや正確には盾であれほどの殺気を出したということは、彼女が盾をどれだけ使っているか容易に想像できる

彼女にとっては、盾こそが絶対の防御であり、盾こそが最も信頼できる武器なのだ

「・・・次は・・・勝つ！」

同じ言葉を繰り返す男だが、二度目の言葉には強い意志を感じられた

「ふふふ、負けないわ」

歩き出した彼の背を見ながら、サリアは呟いた

「そう、次は勝つわ」

彼の背を見るサリアは、別人の姿を重ねているような目だった

「サリア様！大変です！」

訓練場を離れ、廊下を歩いていたサリアは後ろから声をかけられた

見れば門番の役目をしていたはずの部下が、血相を変えて走ってくる

ただ事ではないと判断するには簡単だった

すぐに表情を引き締め、鷹が睨むように部下を見る

「とりあえず落ち着け、何があった」

「は、ハッ！失礼しました！」

城内に侵入者です！相手は一名！見た目からして恐らく蒼犬です！
目標は……」

蒼犬、と聞いたサリアは走り出した
部下が何かを続けようとしていたが、そんなことはどうでもいいと
言わんばかりだ

「とうとう来たか、蒼犬っ！」

「王の間に向かってましたよー！」

部下はなんとかそれだけ伝えることが出来た

「蒼犬ー！ー！！！」

王の間に繋がる大扉は半開きになっていた

扉を抜け、そこにいるはずの相手に向かってサリアは大声で叫んだ

「・・・む？」

そこには蒼犬がいた、確かにいた、いたのだが何か雰囲気が違う
なんというか、運動会だと思って張り切って出てきたら明日でした
みたいな微妙な雰囲気だ

「・・・あれ？私なんか間違えました？」

「・・・間違っではない・・・と思う」

なぜか蒼犬にフォローされてしまうこの状況に、サリアはますます
混乱してしまう

何故か国王と王妃まできょとんとしている

状況を説明してくれたのは何故かいた第一騎士団の団長、サリアの上司だった

「ゴホン、あくなんというか、結果から言うなら誤報だ」

団長が言うにはつまりこういうことだ

門番を完全に無視して城内に入ろうとしたグラハルトを、門番が拘束に近い形で取り押さえようとしたところ、機敏に察知したグラハルトが殴って気絶させてしまった

それを見ていたもう片方の門番が応援を呼んで回ったのだという

「ん？なぜそれで誤報なんです？普通の対応だと思うのですが・・・」

「まあそうなんだがな、グラハルト殿がアレックスの名前を出すものだから・・・」

「アレックス？なぜ息子のことが話題に？
というかなぜ蒼犬がアレックスのことを知っているんだ？」

「・・・娘の同級生だ」

「同級生？ああ魔法学園か・・・、え？娘？」

「・・・義理のな」

「え？義理の娘がアレックスと同級生？は？」

「・・・とりあえずサリア、陛下の前だということを忘れてるだろう」

頭の上に大量のハテナマークを出しているサリア
今の彼女を三十代だと言われて信じる人はいないだろう

「かまわないさ、それよりアレックスは元気なのか？
あいつ変なところが真面目だから苦労しそうで心配なんだ」

今さらなのだが、国王はかなり若い
サリアより少し年下の三十歳といったところだろう

第三王子が「不幸な事故」にあつてから数年後、正式に王位を継承し、拙いながらも前王の助言の下、国王として立派に生きている

アレックスとは昔から兄弟のように仲良くしていたため、グラハルトが

「・・・アレックスに言われて来た」

という、何をしに、が抜けた言葉に反応して、即座に不審者扱いを解除させてしまった、というのがこの微妙な空気の原因だった

国王曰く

「俺にはワカル！アレックスが選んだ人に悪いヤツはいなあい！」

ちなみにこの国王、素の人格はちよつとバカである

「ふむ？つまり戦う必要は無い？」

「無い！サリアもアレックスの話は聞きたいだろ？」

戦うならちよつと話を聞いたあとにしよう」

「はあ、かしこまりました陛下」

何故かすっかり殺気も昔の記憶も、綺麗さっぱりどこかに飛んでいったサリアだった

原因は今と昔のグラハルトから感じる雰囲気の違いだったのか
それとも自慢の息子の話を他人から聞けるからなのか
それとも国王のバカな態度が理由だったのか

サリアはよくわからないまま、そのまま雑談に興じることになった。
・
・

聖騎士の贈り物1（後書き）

ちなみに最初に出てくる名前のない彼もパラディンです

いわゆる「普通」はこういうパラディンになるんだよ、というタイプですね

職業紹介もそのうち書かないとなあ・・・

聖騎士の贈り物2

ある王国の一室

無機質な灰色のレンガを積み上げた床と壁に、様々な装飾がされたいかにも王城の一室といった部屋

壁には一目で名作とわかる絵画がかけられ、国を表す紋章が描かれた垂れ幕がかかっている

テーブルや椅子なども職人が気合を入れて作ったのがわかる高級なものが揃えられ、調度品は華やかな輝きに気品を感じさせる

一つ間違えれば悪趣味な部屋になりそうなそれらは、完璧な配置によって嫌らしさを感じさせず、ただ高貴な気配だけで空間を満たしている

その部屋の中で長方形のテーブルに揃えられた椅子に座る5人がいた

この国の王とその妻、騎士団の団長とその部下、そして明らかに場違いな空気を出している一人の男

蒼犬と呼ばれるその男の名はグラハルトという

グラハルトは犬のような形状をした青い兜をつけている

王族の前で兜をつけっぱなしというのはかなり失礼なはずなのだが、周りの人物達は誰も気にしていないようだ

下顎にあたる部分がないため、メイドが運んできた紅茶をそのまま飲んでいる

国王も王妃も騎士団長もそれぞれが紅茶を飲んでいる

一人だけブルブルと体を震わせながら、何かを溜め込んでいる人物がいた

彼女の名前はサリアⅡエルトリア

世界でも有数の強力なパラディンとして有名な彼女は、体を震わせで一気に溜めたものを吐き出した

「きーっ！！く・や・し・iiiiiiii！！！！

私というものがありませんが他の女にウツツを抜かすなんて！」

「サリア、王の御前であるぞ」

国王の前ということも忘れて騒いでいるサリア

両手で頭を左右から抑え、ブンブンと振り回しながら唸っている

「ちっちゃいころはお母さんお母さん言っずつついてきた可愛いアレックス……

私のアレックスが……こんな……こんな……蒼犬の娘となんてっ！！！！」

「……それはこちらの台詞だ」

ちなみに先ほどまで、グラハルトがここに来た経緯を話していたようだ

何がどうなってアレックスの告白のことを話したのかはわからない

が、その話の途中からずっとこんな感じなようである

サリアは涙目になりながら蒼犬を睨み付ける

「あああなたに何がわかんよ！あの子は私がっ！大事に育てて・
・っ！」

「・・・そのまま返そう」

涙目になっているのに鷹のような鋭さを失わないサリアの視線

兜の隙間から見える恐怖を連想させる鬼のようなグラハルトの視線

二つが中空でぶつかり合い、火花を散らしているような錯覚が見える

二人のこの状態に効果音をつけるとするならば、おそらくズゴゴとかゴゴゴゴゴとかが正しい

背景にはきつと火山の噴火とか雷が鳴っている画がぴったりだろう

「ふふふ・・・」

サリアは唐突に俯いて、髪の毛で顔が見えないような状態になる

ゆらり・・・というような立ち上がり方で椅子から立ち上がり、体ごとグラハルトのほうを向く

幽霊のようなその姿ははつきり言って怖い

「いいわ、子供の決着は親で着けてやろうじゃないの」

ギリリと光るような視線をグラハルトに向けてそう言う

一体どういう考えでそこに至ったのかは彼女しかわからないが、何かの決着をつけるつもりのようなのだ

「勝負よ！蒼犬！」

ビシッ！という擬音がきつと正解なのだろう

指をピンとはってグラハルトに突きつけ、今すぐにでも戦いを始めようとしている

グラハルトはそれに対して・・・

「・・・だが断る」

華麗にスルーした

「ちょっと！ここは普通望むところ！とかこっちの台詞だ！とかじゃないの！？」

普通はそうなんだろう

グラハルトが普通ではないということは、今更語る必要もないのだろうが・・・

「・・・パラディンとタイマンなんぞやってられん」

ちなみにこれはグラハルトの本音である

グラハルトの考えとして説明しておく

グラハルトの知りえるパラディン、しかもその中でも防御特化、というのは非常にやりづらい

彼の職業は3種類の戦闘スタイルを駆使した柔軟な対応が可能になる職業だが、その分特化した職業には敵わない

だが普通は相手が苦手とする分野での戦闘が可能になるため、一対一に限って言えば一方的な勝利も珍しくない

魔法を使う相手には高速の剣技で、防御タイプには強力な魔法で、前衛タイプには防御重視のカウンター狙いで

しかしパラディンは違う

文字通り防御特化のパラディンとなるとそう簡単にはいかない

魔法は止められ、攻撃は防がれ、カウンター狙いの相手にカウンタ―を狙うのは難しい

少なくともグラハルトの前世において、防御特化パラディンを切り崩せた記憶はほとんど無い

倒された記憶も無いとはいえ、勝負のつかない勝負になるのは目に見えている

そんな勝負をわざわざやってはいられない・・・という意味だった

・・・が！

残念なことにそれを理解できる人間は少ない

恐らく理解できるのはアリサか学園長あたりの、付き合いの浅くない仲間だけだろう

そしてこの場にはその二人はいない

となれば当然、その話を勘違いしてしまう

特にサリアは

「な！パラディンを馬鹿にする気！？昔の私と一緒にしないでもらいたいわね！」

どうやら完全に勘違いしたようだ

彼女としてはこう聞こえたことだろう

「俺がパラディンと一対一？ハッ、わざわざ雑魚一人相手にしてくれるかよ！」

もはや別人の発言だが気にしたら負けだ

とりあえず挑発と受け取ったということだけは理解してもらいたい
拳を握り締め、痛いくらいの視線を向けるサリアに声をかける勇者
はその場にいなかった・・・

「落ち着けサリア」

わけでもなかった

騎士団長が落ち着いた雰囲気と話しかける

「団長！」

「落ち着け、馬鹿にしたわけではないだろう?」

どうやら彼はグラハルトの言葉を理解できるタイプの人間だったようだ

「あ、そうなの?」

ちなみにちよつと馬鹿な国王はわかってなかったようだ

「おほほ」

王妃は笑ってるだけだった

ちなみにこの人最初から今まで一切発言していない、にこにこ笑ってるだけだ

「グラハルト殿、せめてもう少し理由を話してやってくれないか?」

騎士団長に促され、グラハルトはゆつくりと話す

「・・・防御特化パラディン・・・しかも高レベル・・・俺は決
め手に欠ける

・・・戦時ならともかく・・・そんな理由でお前とはやりたくない
な」

ちなみに前世のグラハルトはパラディン属するホーリーナイト系最高職業「ゴッドブレス」のレベル150、その防御特化と真剣勝負をしたことがある

そのときは3時間かけても全く勝負が動かず、6時間経過したところでお互いの集中力が切れてぐだぐだに、12時間が経過したところで両者が寝落ちして終了となった

さすがにそんな思いはもう二度とごめんだと、グラハルトはそう思っているのだ、パラディンとのタイマンなどやりたくないのである

「え・・・？それって・・・？」

サリアとしては意外な高評価を受けていたことに驚いてしまう

グラハルトはそれに気づいたのか、さらに言葉を続ける

「・・・昔と違うのはすぐに気づいた、・・・今なら・・・弱いとは間違っても言えないな」

世界最強レベルの存在からの褒め言葉

しかもかつて自分が敗れた相手からの言葉は、サリアにとって衝撃だった

自分を認めてもらえた事実が彼女に感動をもたらす

自分の生き方が間違っていなかったと言ってもらったようなものだ

あれ以来、守るということに固執してきた

目の前にいる全てを守るように生きてきた

目に映る全ての人間を庇うように戦ってきた

人間だけではない、そこにいるなら人間でも動物でも、時には魔物でさえも守ったことがある

守る必要のないような悪人でさえも守った

自分では敵わないような強大な敵を前にしても、仲間を見捨てて逃げたりはしなかった

自分はいつでも一番最後に逃げた

自分が生きている限り、誰一人として死なせたりはしなかった
目の前に迫る「死」を前に、自分は必死に対抗してきた

その全てが正しかったと、今なら言える

否、言ってもらえたような気がする

目の前にいるただ一人の男が、その全てを認めてくれたような気がする

サリアにはもう、グラハルトを敵として見ることはできなかった

「・・・ありがとう」

呆けたような表情で、サリアはそれだけを言った

「さて、本題に入りたいんだが」

国王はそう切り出した

その顔は先ほどまでのちょい馬鹿をした間抜けな表情ではなく、国王としての威厳を放つような表情をしている

なぜか王妃まで笑顔をやめ、真剣な顔つきで蒼犬のほうを見ている

「・・・5年前について・・・だな」

グラハルトの言葉に、騎士団長は顔をしかめる

何かを知っているような表情だが、硬く結ばれた口から言葉を得ることはできないだろう

「5年前・・・？それはいつたい・・・？」

サリアだけが何もわかっていない様子で、困惑した表情のまま疑問を口にする

それに対して国王は、ゆっくりと説明しはじめた

「5年前・・・第三王子がサリア含めた第二騎士団が襲撃された事件・・・蒼犬によって結果が劇的に変化した事件、つまりサリアがサリアになった事件のことだ」

「・・・どういうことですか？」

サリアの表情は厳しくなっていき、鷹のような視線が国王へと向かう

「サリア、まずは話を聞け

・・・あと国王を睨むな」

騎士団長がサリアを諫めるように促す

サリアはなんとか感情を押さえ込んだようだった

ちなみに国王は顔こそ変わっていないが、大量の冷や汗をかいたよ

うだ

マントに隠れた服の背中部分が、汗で色に変色している

それを察したわけではないのだろうが、グラハルトが言葉を繋いだ

「・・・俺は利用された、・・・というわけだな？」

グラハルトの発言は、サリアだけでなく、その場にいた全員を驚愕させた・・・

聖騎士の贈り物3

「その通りだ」

ある城の中の一室

高級な調度品に囲まれた部屋で、高級なテーブルと椅子で寛いでいた人物はそう言った

何を隠そうこの国の王である

彼は王としての威厳を放ちながら、会話の続きを始める

「デュラン＝マクスウェルという人間がいる・・・正確にはいた、だな」

国王はそこで一旦話を止め、手元にあった上品な香りのする紅茶を一口飲む

その間を狙っていたかのように、騎士団長が話を引き継いだ

「我が国の頭脳と言ってもいい人間だ
素性に関しては極秘・・・それも最優先事項であって、この国では人の命よりも重い扱いを受けている」

険しい顔をしたまま、口をほとんど動かさずに話している

少し離れたら腹話術に見えそうだ

「ちょっと待った」

ペペン

扇子を鳴らした歌舞伎舞台が背景に見えそうな、ベストタイミングで割り込んできたのはサリアだった

誰も違和感を感じないくらい自然に、そして快活に、シリアスという言葉を場外ホームランしたような雰囲気話しかける

「それ私が聞いたらまずい話じゃないかしら？」

「というか国外の人間に話すのもかなりまずいわよね？」

話す内容はそうでもなかったが・・・

「・・・かなりまずい内容だな」

国王が再び口を開くが、その表情は真剣そのものである
カリスマ、という言葉が似合うだろう

「しかし、二人には知ってもらいたいな

サリアは特に・・・な」

二人をじつと見つめる国王の顔は、悲しげな瞳を並べ、決意を秘めた表情をしている

顔だけでこれだけ複雑な表情ができる人間はそんなにいないだろう

「・・・聞こう」

グラハルトの言葉

国王はニツコリと微笑み、サリアは真面目な顔で黙った

デュラン「マクスウエル

彼の信念はただ一つだけだった

「自国の存続と発展」

シンプルで尚且つゴールの無い目標

思うに容易く、実行するに辛く、維持するになお辛い

やり方はいくらでもある

だが全てのやり方がどこか間違っている

正しいやり方など誰も知らない道のり

彼はその険しい道のりを歩くと決めた人物であつた

そもそも彼は「人物」ではない

非人道的な狂気とも呼べる実験の元に産み出された、ホムンクルス人造人間なのだ

ホムンクルス自体は、未だ研究段階であるとは言え、ある程度発展した一つの技術ではある

しかしそれはあくまでも、植物や動物、あるいは魔物といった人の

ような存在を使わない、何より人の形には程遠い存在の生成だったある程度人間の言葉を理解する知能は持つが、人間のそれとは比べ物にならない、動物がちょっと頭が良くなった程度
その分身体能力は融通が利くため、さまざまなタイプのホムンクルスが生み出されている

だがホムンクルスは生物として最大の欠陥があった

それは生命活動に必要な栄養素が、魔力だけという非常に効率的な構造であるというのに、その魔力を空気中から吸収する器官が存在しないという点にある
魔力を持った物質を体内に埋め込むといった方法や、近くにいて誰かが定期的に魔力を供給する、といった方法以外の解決策が存在しない

これは現在研究されているどのようなタイプのホムンクルスにも当てはまる

不思議なことにどのような組み合わせ、どのような構成、どのような過程を踏んでも同様になる

長年の研究が行われているというのに、未だに解明されていない謎の構造なのだ

理屈はわかっているが、ホムンクルスとはそういう存在だった
しかし彼は違う

研究資料等は全て始末され、関係者も全て死んでいる

なのでどうやって生み出されたかはわからない

わからないが、彼は確実にホムンクルスだった

その証拠として彼には、ホムンクルスに必ず刻まれる黒い模様

「刻印」と呼ばれる、十字架に天使と悪魔の羽を簡略化したようなものが付いた模様がかった

彼の後頭部、髪の毛で隠れて見えない肌には、確かにそれが刻まれていた

デュランはホムンクルス初となる、魔力吸収器官を持つ存在として生み出された

その代わり肉体的な能力は、普通のホムンクルスと比べてかなり低下したが、人間並みの強さは備えていた

何よりの特徴として、肉体の維持に大量のエネルギーを消費するらしく、人間と同様に食事をとる必要があった

もはやホムンクルスというよりも人間に近い存在であったのだ

だがホムンクルスとして生まれた彼は、人間として扱われることはされなかった

物として、人間の所有物として扱われていた彼は、捻じ曲がった性格になる・・・はずだった

一人の研究員が彼を「教育」したらしく、暴走することもなく、ただひたすらにその能力を高めることに成功した

そしてその能力とは

「知能」

人間でさえ難しい内容を次々に理解し、記憶していくその知能は、周囲を驚かせた

生まれてから5年も経つころには、賢者と呼ばれるような人物と対等に会話し、時にインスピレーションを与える

10年も経つころには誰よりも知識を持ち、逆に賢者とさえ呼ばれるようになった

やがて彼の能力は戦争に利用されることになっていく

的確に情報を整理し、尋常ではない速度でそれらを計算していくやがて出される提案は、状況に最も適した作戦であり、戦争を勝利へと導いていく

状況に適しているというのは、その戦場で勝つか負けるかレベルではなく、大局を見据えた全体でのレベルで見ている

そのため例えば分が悪い勝負であろうとも、彼の決断には誰もが従う
そういう暗黙の了解とも言えるものが、このころには出来上がっていた

事件があつたのはそんなある日のことである

当時王位争いをしていた第一王子派と、第三王子派

デュラン自体はどちらにつくということとはしなかった

彼からすればどちらも力不足であり、王たりえるにはどちらがなっ

ても同じであつたから

しかしある日、ある報告から彼は第一王子派に移ることを決める

その報告とは、魔物の侵攻という情報だつた

おそらくそれは今すぐに起こるようなものではない

だがこの国に残る過去の文献や、王家に伝わる話からして、状況が似通っている

それに気づいたのは残念ながら彼だけであつた

今この時期にこんな情報を流しても混乱するだけ、と判断した彼は、対抗手段をとるために準備を始める

彼が取つた対抗策はいくつもある、そのうちの一つが王位継承争いの決着だつた

彼からすればどちらが王になっても同じではあるが、その時が来たときに素直に従ってくれそうなのが第一王子だつた、というだけの理由に過ぎない

しかしその理由だけで、彼は第三王子を殺害することを決めた

第三王子の策略を知つた彼は、どうにか利用できないかと考えた

そのときにちょうど、蒼犬という人物を知つた

蒼犬がこの世界に来てから間もない頃であつたにも関わらず、彼はその生き方を調べ上げ、そして彼を理解した
理解し、そして利用することを思いついた

彼ならば、必ず自分の思つた通りに行動してくれるはずだと・・・

そしてその考えは的中した

第三王子の策略の現場に到着してからは、何も手を出す必要は無かったと報告されたらしい

蒼犬は現場に着いた途端、全てを理解したように行動した
盗賊どもを魔物ごと全滅させ、見事なまでに第三王子を始末した
第二騎士団内にいた内通者まで殺してくれたのは、もはや感謝しそ
うになった

むしろその場に連れて行くまでが大変だったらしいが、それは彼の
知るところではない

デュランの思う通りに事は運び、王位継承争いは決着する

そして魔物の侵攻に備える準備を着々と進めていった・・・

「・・・やはり・・・な」

全てを聞き終わったグラハルトが呟く

「気づいていたのか？」

国王が彼に尋ねる

グラハルトは控えめに頷く

「・・・あれだけ露骨に誘導されればな」

彼としては利用されているのをわかっていたのだろう、わかったうえで、利用されたようだ

「・・・ちよつと待つて」

サリアが割って入った、先ほどと同じようにベストタイミングと言える絶妙の間取りだ

さつきと違うのは、その表情が真剣そのものということだろうか

「その話が本当なら、魔物の侵攻が起こってるはずよね？
そんな話は全く聞いていないんだけど？」

もはや王の前など全く関係ないように話す

意外にもこの話を聞いて取り乱すようなことは全くしなかった
落ち着いたように淡々と事実だけを確認している様子だ

しかし彼女の態度を見て騎士団長が不機嫌な顔をしているのだが、
国王はそれを気にしていないようだ

「・・・いや、確実に起こっている

今はまだ遠方で、どこにも影響は出ていないようだが、確実に発生している

それも最近になって移動を開始した・・・という報告がある」

「念のために言っておくが、これは極秘事項だ

前線に砦を建設中だし、近々騎士団には出撃命令が出される予定だ
・・・全戦力を持って・・・な」

騎士団長が補足をする

「全戦力……？相手の規模はどれくらいなの？」

「……偵察の話によれば、……不明だ」

「は？不明？どういうこと？」

サリアと騎士団長の会話なのだが、他の人間は誰も口を挟もうとしない

「……大地を埋め尽くすほどの大群……としか報告できんらしい数が多すぎて真つ黒な海のように迫ってくる……と言ったほうがいいか？」

「ちょ……ちょっとそれって……」

サリアが驚愕にひきつった顔を浮かべる、絶望という色を出しながら……

「国家の危機だ」

国王がはっきりと断言した

その表情には余裕など一切感じられない

目の前に迫る危機、という現実在必死に抵抗しているのだろう

だがしかし

国王は諦めていなかった

その目には確かな希望を見つけている

目の前に座る、たった一人の男をじつと見つめていた

「頼む」

国王は立ち上がり、グラハルトを見る

そして彼は

頭を下げた

一国の王が、王族でもないただ一人の男に頭を下げた

それはたった一つの願いのため、たった一つの国を救うため、たった一つの国に住む、大勢の人間を救うため

そのためにたった一人が頭を下げれば良いのなら、いくらでも下げよう

彼は本気でそう思っている

だからこそ、迷いなく彼は頭を下げた

この国を救える唯一の可能性に

グラハルトという一人の人間に

頭を下げたのである

「頼む、この国を救ってくれ！」

グラハルトは悠然と立ち上がる

椅子から立ち上がる間、国王は頭を下げ続けていた

ただ一言、彼が答えてくれるのを待つしかできなかった

だから彼は、グラハルトの言葉を聞いた瞬間、涙を流してしまう

グラハルトから帰ってきた答えは・・・

「・・・引き受けた」

聖騎士の贈り物 4

「はい、これ」

サリアはそう言って、一つの小さな箱を差し出した

差し出された相手である、グラハルトは怪訝な表情をしている

「・・・これは？」

ここは騎士用に備えられた宿舎の一部屋で、サリアが一人で使っている場所だった

かつてはアレックスも一緒に住んでいた

その部屋には今、サリアとグラハルトしかない

茶会の後、グラハルトはすぐに最前線へ向かおうと言い出したのだが、さすがに全員に引き留められた

なのでサリアを含めた一部の精鋭部隊に、先行命令を出し、その時に一緒に向かうことになった

そういう理由で少し時間ができたので、グラハルトはこの国に来た本来の理由を達成しようとしたのだった

そのことをサリアに話すと

「・・・ああ、そういえばそんなこと言ったっけ」

本人が忘れていた

どうやらそれほど重要な物では無かったらしい

グラハルトとしては、この時期にこの国に来るためだけのイベントだったかと考えたようだ

しかしそれを誰にも言わなかったので、急ぎ渡すと言われてしまったなのでこうしてサリアの部屋まで受け取りに来たところという展開になっている

「昔あんたと会った場所で拾ったのよ

盗品かとも思っただけど、女の勘？ってやつであんたの物だと思っつてずっと保管してたの

私としてはこれを使って、あんたを呼び出す道具程度に考えてただけど・・・」

まさにその通りになってしまった、というわけだった

恐るべきは女の勘ということだろう

グラハルトは箱を開き、中身を確認する

そこに入っていたのは何かの形を模したブローチだった

蛇が絡み合うような形で、歪んだ菱形を形作っている

上と下の頂点部分がわずかに伸びていて、中心部には犬のような生物をデフォルメした模様が描かれている

確かにこれなら「蒼犬」と呼ばれるグラハルトの物だと思ってても仕

方がない

「・・・俺のじゃない」

意外にもそれは蒼犬の持ち物では無かったようだ

サリアは知るよしもないのだが、実際問題としてグラハルトが何かを落とす、ということはありえない

グラハルトは空間魔法「アーカイブ倉庫」と呼ばれる魔法を使っている

これはようするにゲーム上におけるアイテムインベントリであって、何もしない限り、グラハルトの所持品は全て専用の別空間に存在している

術者が取り出すか、死なない限り永久的にそこにあるので、意識して落とさない限り絶対に落ちることは無い

つまりこれはグラハルトの所持品ではなく、あの場にいた誰かの所持品ということになる

「・・・だが、・・・もらってもいいか？」

「え？うん、まあもう5年近く前の物だし、別にいいと思うわよ何かの魔道具なの？」

今度はサリアが怪訝な表情を浮かべる

一応は何かの魔道具かと思い、効果を確かめたことはあったのだが、何かの能力が見つかったわけでは無かった

そのためグラハルトが欲しがるといのが不思議だったようだ

だがグラハルトにとっては、このアイテムは重要な意味を持っていた
何故なら、彼には見えているからだ

アイテムの効果や説明が、ではない

彼だけに見える、情報画面

そこにある一つの項目

クエストと表示されているその内容の一つ

「初代学園長の遺産」と表示された欄

それが進行された時に現れる黄色の点滅がされていた

「・・・キーアイテムだ」

グラハルトは一人呟いた

数日後、正式に命令が下された精鋭部隊、サリアを部隊長とした通
称「聖壁部隊」が前線に向かっていた
グラハルトも部隊に混じって向かっている

蒼犬との共同作戦ということで、あるものは怯え、あるものは勝利
を確信し、移動中は様々な感情が渦巻いていた

移動は少人数であったため、馬車を3台使った移動だった立派とは言えないが、実用性を重視した頑丈な作りになっている馬車を、馬ではなく馬のような魔物が引いていた馬じゃないのに馬車と呼んでいいかどうかは置いておこう

硬い木製で組まれた屋根付きの馬車は、鉄製の盾を鱗のように並べて側面を防御している

屋根には一際大きな人間程の大きさがある盾が、傾斜をつけて3つ配置されている

見た目だけならば、鉄製の魚のようだ

かなりの重量があるそれを引く魔物は、辛そうな雰囲気をまるで感じさせず、荷物の乗っていないカートを引くように軽々と進んでいく

一台あたり10人ほどが乗り込んでいるのに、たった一頭で引いているだから、どれだけ力が強いかわかるというものだ

これだけ重装備の馬車を引いている理由としては、魔物の侵攻に合わせるようにして、魔物達の終結地点に近い魔物達が活性化しているのが原因だった

終結地点がそもそも人里離れた場所で、街道や交易路からかなり離れている

その場所にわざわざ向かうのは冒険者くらいなのだが、冒険者にとっても、そこを目指してまで行く理由が無いという場所だった

そういった理由があるため、魔物が終結しているということは世間には全く知られていない

それは逆に、前線に近づくにつれて無傷の魔物が多くなっていくと

いうことだった

この馬車はデュラン・マクスウェルが提案したもので、こういう事態や魔物達の中に突っ込んでいくことを念頭に作られたものだった。しかし残念なことに、この馬車がその本来の用途を達成することは無かった。

理由としてはグラハルトだ

彼は馬車の中に入らず、先頭の馬車の屋根に陣取り、周囲を警戒していた。

警戒していた、というよりも威嚇していた、と言ったほうが正解だろう。

魔物が近づこうとするたびに、その強力な殺気を放って威嚇する。

気の弱い魔物なら気絶してしまうし、気絶しない魔物は一目散に逃げていく。

ある程度知識のある魔物はそもそも蒼犬を見た時点で逃げ出すという状況だった。

そのため前線に建てられた砦に到着するまで、魔物による被害は一切でなかったのだ。

本来なら3日はかけて到着するところを、わずか2日で到着できたのは彼のおかげだろう。

そして精鋭部隊と呼ばれるだけあって、この部隊の人間はそれを正確に理解していた
そのため彼の殺気に当てられることなく、迅速に行動し、砦に着いてからはキビキビと行動できたのは流石といったところだ

部隊長であるサリアが乗り物酔いしていたこと以外は、素晴らしい部隊だった

砦の屋上

魔物達の軍勢が見える高い場所で、グラハルトはその光景を眺めていた

目の前に広がる光景は異質の一言だ

黒い海のようなうねりがそこにあり、森も、山も、何もかもを飲み込んで進んでくる

2日もしないうちに砦にぶつかるところであらうその流れは、人間に止められるとは思えないほどに大きい

黒い海のようなそれが、本当に海であったほうがまだマシというものだ

その全てが魔物達の集まりだと思つと、背筋が冷たくなりそんな光景だった

抗うことのできない死の波

普通の人間であつたなら、恐怖で逃げ出しそうな光景

グラハルトはその光景を、ただ静かに見守っていた

「・・・凄い光景ね」

グラハルトの後ろからサリアが声をかける

「・・・数だけさ」

「あつはつは、あれを見てそう言えるのはあんたくらいよ
大体戦争つてのは個人の實力より数で決まるのがほとんどよ？あつ
ちは万を軽く超える数、こっちより遥かに多いわ」

「・・・勝つ必要がある、・・・勝てる理由だけ考えればいい」

「確かに・・・ね、あんたにはかなわないわねえ」

グラハルトとサリアは、目の前の光景をどうにもできないと諦めた
りはしない

グラハルトにいたっては本気でなんとかできると思っているし、事
実なんとかできてしまうのだろう
そういう信頼をサリアは持っている

かつての彼の戦う姿を知っているものならば、彼が負けるシーンな
ど想像もできないから・・・

だからサリアは、余計なことを言わなかった

「・・・頼りにしてるわ」

たった一言のその言葉で、サリアは下に下りて言った

一人残ったグラハルトは、じっと黒い海を見つめている

「・・・頼り・・・ね・・・アリサ以外で頼られたのは初めてか？」

フツと小さな笑いが聞こえた

目の前の悪夢とも言える光景を目の前に、世界最強の男は笑っていた

「・・・期待には答えないとな」

黒い海は、砦に向けてじわじわと接近していた

聖騎士の贈り物5（前書き）

書いていて思ったこと

この話必要だったか？つまんなくね？

第三者視点ができただと考えると、うん

タイトルと最初の部分は連動して、後ほどつながります

ネタバレ？しません・・・

聖騎士の贈り物 5

「・・・ぐっ・・・かはっ・・・」

ある男の胸を剣が貫いていた

刺さった剣は鎧を貫通し、背中から飛び出している

見ただけで致命傷だとわかる

穴の空いた胸からは大量の血が流れだし、大地に赤い水溜まりを作っていく

「グラハルトお！」

サリアが呼んだ男は、力を失って地に膝をついた

男の血に濡れた剣を持つ別の男が、高らかに笑っていた

狂ったような笑いだけが、周囲に響いていた

「・・・俺が突っ込む」

魔物の侵攻に対する前線の砦

その中の会議室では、今回の作戦について話し合いが行われていた

参加しているのはグラハルトとサリア、砦の建設時から駐屯している第二騎士団の団長、今回の砦建造に大量の資金と人手を提供した上流貴族、そしてなぜここにいるのかわからない貴族が一名さらにグラハルトを除いた全員の補佐という、総勢九名が話し合いをしていた

話し合いと言っても、内容は大したことは話していない

理由は簡単で、簡単だからこそどうしようもない

相手の数が多すぎるのだ

デュラン「マクスウェルが準備した対抗策の数々は、全てと言っていいほどがこの砦に集められている

だがその全てを使ったとしても、万を遥かに越える数の敵を殲滅できるとは思えなかった

自然と会議は落ち込み、デュランでさえ予想できなかった、魔物の大侵攻という事態に頭をかかえていた

グラハルトが発言したのはそんなタイミングだった

言う人間が違えば、ただの無駄死ににしか思えない発言だが、彼が言ったからこそ意味があった

彼だからこそ、なんとかしてしまつのではないかと思えてしまった彼が死ぬところなど、誰も想像できなかった

「バカを言つな、死ぬ気か！」

サリアだけが反論した

彼女は本気で言っているのだろう、目が本気^{マジ}だった

「・・・信用できんか？」

「そうじゃない、信用はしている

だがお前は言うなれば切り札だ、お前に万が一があつたら我々は全滅なんだぞ？

本国から応援が来るまで守りに徹するべきだ」

「・・・応援が来たからといって、・・・勝てる理由にはならん」

「しかし！」

二人が話している間に入ってきたのは、なぜいるのかわからない貴族・・・面倒なのでB貴族でいいだろう

「よいではないか、蒼犬ならば簡単には死にますまい
我々がきちんと援護すればよいのでは無いですか？
その際には是非とも我が兵团をお供させましょう」

ようするにこの男、手っ取り早く手柄と名声が欲しかったのだ

蒼犬と共に最前線で戦った、蒼犬が自分の部下として戦ったという
事実が欲しいのだろう

B貴族のBはB A K AのBだ、きつとそうだ

そのためだけに、わざわざ危険とわかっているこの場所に來たのだ

から、その根性だけは誉めてあげたいところだ、B A K Aだが非常に残念なことに、実際問題それ以外の有効な手段を、誰も思い付かないことが事実であった

結局はB A K Aの言う通り、十分な支援体制をした上で蒼犬が突っ込む、という方針で決定した

サリアだけが最後まで反対していたが、グラハルト自身が行くと言って聞かなかったため、サリアが折れた

ただし条件として、サリア率いる聖壁部隊が追従することになったB貴族の部隊も、結局一緒に行動することになったのは何故だろうか

そして戦いの時はやってきた

魔物の軍勢は目に見える距離まで迫ってきている

黒い波にしか見えなかったその軍勢も、今では魔物達の一体一体を確認できる

砦の全面に広がっていた広大な荒地は、いまや黒い波にほとんどを飲み込まれている

対するグラハルト達の軍勢は、まるで黒い海に浮かぶ小舟のような人数しかない

何も無ければ、皆ごと押し潰されてしまいそうな弱々しさだった

魔物の軍勢を前に、グラハルトとサリアが話している

「ハハハ・・・さすがにこれは笑えるわね・・・」

人間どうしようもなくなると笑うらしい

サリアが笑ったのは敗けを悟ったからなのか、それとも隣に立っているグラハルトが、余裕を与えてくれるからなのか
彼女は前者だと判断したようだった

「・・・雑魚ばかりだ、・・・数以外の強さは無い」

グラハルトは冷静に観察をしていたようだ

言われてサリアがよく見れば、確かに納得できる言葉だった

繁殖力は高く、猿なみの知能はあるが身体能力が低い、というタイプの魔物が多い

中型犬が二足歩行したようなコボルト、緑の肌が気持ち悪いゴブリ
ン、力はあるが猿よりバカと言われるマツチヨな見た目のオーク

少なくとも見える範囲では、これらの種族が7割を構成しているようだった

「なるほど？」

こうして見れば確かになんとかかなりそうね

・・・他の人は気づいてるかしら？」

「・・・大丈夫だろう、・・・他の奴らは優秀そうだった」

「そうね・・・」

向こうに影響が出ないように、わざわざバカを引き受けたんだしね」

「・・・ひどいな、・・・あれと一緒にじゃバカがかわいそうだ」

「あつはつはつ！確かに！ただのバカのほうが遥かにマシだわ！」

唐突に二人は真剣な表情に戻る

サリアは背負っていた盾を持ち、短剣を握りしめる

グラハルトはバスタードソードを一度振り、肩に担ぐようにして持つ

「一つだけ聞いてもいいかしら？」

「・・・なんだ」

「どうしてこんな戦いに加わってくれたの？」

彼女は真剣に疑問だった

蒼犬という人物の性格を考えても、一人の人間に頼まれた、というだけの理由でこんな大軍勢と戦うなど信じられない

自分達のように、国を守るという大義名分目には無い

国に守りたい誰かを残してきたというわけでも無い

例えばこの戦いに勝ったとしても、何かを得ることを約束したわけで

もない

戦いのみを追い求める狂戦士であつたとしても、この大軍勢を前にすれば裸足で逃げ出すだろう

その中であつてグラハルトは、逃げるでも怯えるでも狂うでもなく、
淡々としていた

彼がそうであるからこそ、今この砦にいる誰もが落ち着いていられる
ということとは、誰も気づいていないのだが・・・

グラハルトは、小さな声で答えを呟いた

「・・・男の頭は・・・軽くないからな」

それだけの理由だつた

グラハルトにとってはそれだけで十分だつたのだろう

金でも、名誉でも、権力でもない

ただひたすらに真摯な態度だけが、彼を突き動かした

それだけで、否、それだけが、彼が動く唯一の理由なのかもしれない

「・・・それだけで十分だ」

グラハルトは剣を担いだまま、黒い海に向かって歩き出す

「・・・男つて馬鹿ねえ」

サリアがそれに続くように歩き出す

短剣を持った片手を上に上げ、仲間たちに合図をする

グラハルト達はすぐに走り出し、黒い波に向かって突撃をしていった

「・・・本気でやる、・・・打ち合わせ通りに頼む」

「わかってるわ！援護はまかせなさい！」

走りながらグラハルトとサリアが会話する

サリアは仲間に指示を出すために、いったん速度を緩める

それとは逆に、グラハルトはさらに加速して行く

「・・・本気を出すのは久しぶりだな」

誰にでもなく呟き、「本気」を出すために準備を始めた

エンシャント・ルーン言語による呪文が詠唱され、彼を立体型魔方阵が包み込む

「形態変化解除！ルーンナイト！！」

彼の鎧が変化していく

いつものように色が変わっていくが、いつもとは違う色だった

いつもの黒ではなく、アルドラを倒した白でもなく、蒼犬と呼ばれた理由の蒼でもない

鉄の色、鈍く輝くその色は、質実剛健を表したかのように力強い

鎧は重鎧だが、動きを阻害しない程度に一部が取り外されている

肩と腕には重量を感じさせる大きめの装甲があるが、二の腕部分は存在しない

足腰も同様に、大きめの装甲だが、太ももの部分は何も無い

腹は無いが、胸の鎧は厚く、生半可な攻撃など通さないのが一目でわかる

兜は蒼のときのように、顎部分が存在しないが、兜そのものが大きくなっている

マントは赤く、黒ずんだ血のような色をしている

その姿は騎士

強さを象徴するようなその姿は、騎士という言葉が似合う姿だった

「能力開放！フォースドライブ！！」

その姿もすぐに変化していく

鉄色だった騎士の姿は再び魔方阵に包まれ、その姿を変化させていく

だがその魔方阵は、普段よりも明らかに巨大だった

三重に展開された魔方陣は複雑に絡み合い、グラハルトの姿を完全に覆い隠す

フォースドライブ

それこそがグラハルトの「本気」を出すスキル

ゲーム上では使うことができなかった最終手段

最後のクエストを達成したことで使えるようになった、究極の戦闘スタイル

グラハルト第四の形態とも呼べるその状態

その戦闘スタイルとは

「全て」

だった

彼が変化できる全ての形態の能力を持つ

全てのスキルを使える

全てのスタイルで使えないスキルが使える

世界最強の男が使う、世界最強のスキルだった

立体型魔方陣が一際輝き、光の中心からグラハルトが飛び出した

飛び出したグラハルトが、魔物の軍勢に向かって、最初の攻撃を繰り出した

「剛剣！フォースブレイド！！」

剣から光が迸る

黄金色に輝く光が、触れるものを一切の容赦なく消し飛ばす

それは魔物であるか否かなど関係ない

木々も、草も、大地も

全てを無慈悲に消滅させていく

たった一撃

それだけで、グラハルトの前方20メートル近くに渡って、全ての存在が消滅していた

「ぬううううあああああああ！！！！」

グラハルトは叫びながら、魔物の大軍勢に向かって突進していった

聖騎士の贈り物5（後書き）

えー、次回の話はグラハルトが無双というやつをやる予定です

作者の描写力の問題で面白く書けるかどうかはわかりませんが、精一杯がんばらせていただきます

皆様の期待に答えられるようにがんばりますので、今後ともよろしくお願いいたします

聖騎士の贈り物6（前書き）

えー、グラハルトさんの無双、というヤツにチャレンジしてみました

厨っばい

もっと勉強します

聖騎士の贈り物 6

「ぬううううあああああああ！！！」

グラハルトが目前にある黒い波に向かって突っ込んでいった

光が剣から進り、それを波に向かって振り回す

たった一撃

それだけで波は消えていき、そこに何があったかさえわからないほどに、全てが消滅していく

その波は大量の魔物であって、一体を倒すのにも苦労するような強力な相手も混ざっている

だがグラハルトの前では、強さも大きさも、そもそも魔物であるかさえも関係ない

ただその光の範囲内にいた

それだけで何もかもが消滅してしまう

サリア率いる聖壁部隊は、目の前の光景をただ呆然と見詰めていた

「なにあれ・・・無茶苦茶すぎない？」

サリアの言葉も最もであろう

グラハルトは確かに世界最強だとは言われているし、事実そうであると思えるだけの話をよく聞く

だがこの魔物の大軍勢を前にして、彼一人でそれをどうにかできるとは思えなかった

万を遥かに超えるその大軍勢を、たった一人の人間が「攻めて」いるのだ

普通ではありえない、普通でなくてもありえない、異常という言葉ですら生ぬるい

神の裁きかと思いたくなるほどに、目の前の光景は異常だった

グラハルトの姿はすっかり変化していた

先ほどまでの剛健な姿に加え、覆われていなかった二の腕・太もも・腹・顎部分まで鎧に包まれている

色は白だが、ディバインナイトのような白というよりも、発光しているような白色だった

蒼い装甲が所々に見られ、それはデュエルナイトの鎧と共通している部分だと思える

マントはアビスナイトの装備している真っ黒でボロボロなものだが、そのマントが翼のようにはためき、悪魔のような印象を与える

片手で振るえるとは思えない、2メートル近い巨大な剣は、刃こそ

真っ直ぐに伸びているが、描かれている模様や装飾部分は波打つように歪んでいる

形状だけなら魔や闇に属することがイメージできるその剣だが、白を基調とした金の模様が描かれていることで、神聖さを感じさせる

同じような見た目の盾は、やはり大きい

横幅こそ人間一人分だが、普通に構えているだけでグラハルトの身長と同じくらいの高さがある

どう見ても小回りが利かなそうで、動きの邪魔にしかならないと思えるほどの重装備

だがそれもある意味では当然だった

何故なら小回りを活かす必要が全く無いからだ

大振りな攻撃

ただの一振り

それだけで十分だった

それだけで魔物は消えてしまう

むしろより強く、より遠くまで届くように、力いっぱい振り抜く

黒い波は、ただそれだけで押し返されていく

触れることはおろか、近づくことさえ許されず、魔物達は次々と消えていった

「爆炎！エクスプロージョン！！」

グラハルトの魔法が発動する

エンシャント・ルーン言語による詠唱無く、いきなり発動させた

魔力によって描かれた紋章が出現し、紅く輝いたかと思えば、それは巨大な爆発となって敵を飲み込んだ

いつものそれより遥かに強い

まるで火山が噴火したような轟音を響かせる

急激に膨張した空気が、炎よりも先に衝撃波となって襲い掛かる

赤よりも高熱になっているために、青く燃える炎が全てを飲み込む

グラハルトの前方、扇状に広がっていくその炎は、途轍もない勢いで進んでいく

100メートルも進んだところでようやく炎は消え去った

「ぬううううあああああああ！！！！」

それでもグラハルトは攻撃を止めない

魔物の軍勢は100メートル先まで存在しない、彼の剣が放つ光では明らかに届かない

それでも彼は剣を天に向け、さらなる攻撃を繰り出した

「必ず殺す剣、我がこの一撃こそがそれであると知れ・・・」

ルーン・エンシャント言語ではなく、普通の詠唱が行われる

「汝避ける術は、死を持って逃げるのみであることを知れ・・・」

やがて剣から放たれていた光は収まり、グラハルトはただ突っ立っているだけになる

「無慈悲なる消滅の一撃・・・」

何の気配も感じない状態、まさに嵐の前の静けさだった

そして

嵐が訪れる

「必殺剣！フォースディストラクション！！」

瞬間

グラハルトの全身から黄金色の光が迸る

その光はドーム状に広がっていき、10メートルほどのところで止まった

やがて何かを押さえ込むように震えだし、グラハルトの真上あたりが膨らみはじめる

突然、爆発するようにして、黄金の光は空に昇っていく

柱のように巨大な光は、晴れ渡る空を背景に、神々しい輝きをしていた

「ぬううううあああああああ！！！」

グラハルトは剣を振り下ろす

ゆっくり、ゆっくりと

スローモーションのようだが、少しずつ確実に、前へと振り下ろされていく

そして光の柱が、剣の動きに合わせるようにゆっくりと、前へと倒れていく

魔物達にもう少しまともな知能があったなら、その光景は「恐怖」以外の何者でもなかっただろう

何故ならその光は、先ほどまでグラハルトが振るっていた光と同じ色なのだから

わずか一振りで、何十もの魔物を消滅させた光なのだから

それがこれほど巨大な形で迫ってくる光景を、恐怖以外の何と云えるだろうか

光の柱は大地へと迫り、接触した

消滅

何もかもを消し去り、黒い波は真つ二つに分かたれる

そこにはどんな存在であるかなど関係ない

血も肉も骨も、魔物であるかどうかさえ関係なく、光に触れたものは全て消滅していく

嵐という名の光は吹きすさび

嵐が通った後に残っているものは、何もなかった

光の中心にいたグラハルト以外には・・・

この攻撃によって、魔物の軍勢は4分の1ほどが消滅した

「・・・がつ・・・くそ、・・・時間切れか・・・」

グラハルトは唐突に力が抜け、地に膝をついた

視界がぼやけ、もはや意識を保つことさえ難しい状態だ

フォースドライブ

使用中はダメージ・体力・魔力など、あらゆるものが無尽蔵と思えるほどに、驚異的な回復力を見せる
能力もほぼ全てが上昇し、スキルは強化され、はっきり言ってほぼ無敵状態になる

ただしそんなスキルが簡単に使えるわけではない

10分

それが限界だった

そしてそれを過ぎると、グラハルトは何もできない状態になってしまう

ゲーム的な説明をするならば、HP1・MP0・自然回復停止・行動不能という状態になってしまう

この状態になっている時間は5分

今の攻撃で近くに魔物がいないとはいえ、一番近くの魔物までは数百メートル程度しか離れていない

5分もあればグラハルトに迫ることは難しくないだろう

絶大な能力を誇るが、10分以内に決着できなければ死を待つだけ
使い場所を間違えれば、復活の呪文など存在しないこの世界では、死ぬだけのスキルなのだ

だからこそ、グラハルトはサリアと打ち合わせをしていた

「グラハルト！無事か！？」

サリアだった

事前にこういう状態になることを説明していたため、サリア達は動けないグラハルトの回収を予定していた

今回の作戦はこういう内容だ

グラハルトが突っ込み、前線を押し返す

そしてサリア達がそれを回収しつつ、皆まで後退しながら、皆に設置された兵器を使いながら前線を維持

グラハルトが回復次第、再び前線に投入し、魔物の軍勢を押し返す
この一連の行動を繰り返していくという作戦だった

予想外だったのが、グラハルトの異常なまでの戦闘能力だ

これによって本国からの応援を待たずして、この皆だけで決着がつく可能性が出てきた

死に戦だと思っていた兵士達は、自然と士気があがり、驚異的な戦いをしてみせた

砦内の一室、医務室として使われている部屋に、グラハルトは運び込まれた

「・・・ぐあ・・・」

すぐに医療担当がかけより、回復魔法やアイテムを使い始める

サリアも何か手伝えないかとうろろうしている

そんな彼女に向かって、グラハルトは厳しい声で話しかけた

「・・・何をしている・・・前線の指揮に行け・・・」

「お前を放ってなど・・・!」

「行け!」

サリアはぐつと体に力を込め、グラハルトを見つめた

だが、言葉を出すことはできない

グラハルトから伝わる威圧感が、彼女に口を開くことをさせない

「お前は何のために戦っているんだ! 勝つためだろうが!

ここにすることが、勝つことに繋がるのか!? 違うだろうが!!!」

間がなかった

いつも話す前に入る、独特の間が無い

それだけ彼が、必死だということが嫌でも伝わってくる

「・・・勝負は・・・俺じゃない・・・お前達が・・・時間を稼げるかどうか・・・なんだ」

グラハルトの言葉にサリアはハツとした

そうなのだ

この戦いは、グラハルトが敵を倒すことも当然鍵になってくる
だがそれ以上に、グラハルトが動けない間に、砦を守ることと同じ
くらい重要なのだ

そしてそれは、サリアの腕にかかっていると言っても過言ではない
改めて、自分の責任を認識したサリアは、出口へと体を向けた

「ふふ、そうだったな・・・
鉄壁の名にかけて、必ず守りきってみせるわ」

「・・・頼んだ」

出口へと歩いていく彼女は、振り返らなかった

背中に背負った巨大な盾、彼女のトレードマーク

その後姿は、信頼できるだけの力強さが感じられた

彼女が出て行ってからグラハルトは一人、呟く

「・・・フツ・・・誰かを頼ったのは・・・初めて・・・だな」

言ったあと、グラハルトは意識を手放した・・・

チャラと音がした

グラハルトの胸元、兜と鎧の隙間

そこには、サリアから受け取ったブローチがいつの間にかついていた

ブローチの中心

デフォルメされた犬のような紋章

その顔が、笑ったように見えた

聖騎士の贈り物6（後書き）

補足を少々

グラハルトはゲーム的な部分を使ってスキルを使用しています
頭の中にスキルショートカットがあるような状態ですね

なので普段はショトカから使用＞自動でルーン語詠唱＞対象・範囲
指定＞スキル発動という流れで使っています

なので無詠唱でも魔法が使えることを知りませんし、そもそも魔法
の使い方がよくわかっていません
もちろんルーン語なんて一文字も理解していません

ほぼ無詠唱で使えたのは、この状態だからという理由です

ショトカ起動＞すぐに対象・範囲指定＞発動という流れだったから
できたというわけです

そもそも今まで詠唱のフレーズ入れてないから、非常にわかりにく
いかと思いますがそういうことです・・・

聖騎士の贈り物7（前書き）

毎度お読みいただきありがとうございます

物語全体が佳境に入ってまいり・・・そうでもないか

フラグが続々回収できてきまし・・・うん、そうでもないな

うん、なんといいですか・・・うん、すいません・・・

本編をどうぞ

聖騎士の贈り物 7

魔法学園の一室

偉い人がいそうな部屋の、偉い人が座りそうな椅子、その前にある偉い人が使いそうな机

そこにいる偉そうな格好をした年寄り

つまりはこの学園の長という立場にある、偉い人がいた

その偉い人は、ある報告書に目を通している

読み終わったその書類を机に置き、溜め息をひとつはく

「はあゝ・・・、思ったより厄介じゃのう
どうしたもんかのう」

すっとお茶が差し出される

女性の教師がにつこりと微笑み、机をはさんで向かい側に立っていた

「お疲れ様です、学園長
・・・その書類は例の事件の報告書ですか？」

女性の教師は書類を軽く見ながら、学園長に質問する

「ああゝ、そうなんじゃよ
どゝゝも嫌々な予感がするの・・・」

学園長は椅子の背もたれによりかかり、軽く伸びをしながら返事をした

どうでもいいがその椅子、ものすごく座り心地がよさそうである

「嫌な予感ですか？内容を伺っても？」

「むう・・・長いぞい？」

お願いします、といって自分の分のお茶を用意する教師

応接用のソファ―に座ったのを見てから、学園長は語り始めた

「初代・・・ライアン＝ローレンスのことは知っておるじやろ？」

「ええ、この学園に勤めるものなら当然です

万物の才能を持っていたらしい、ということまでは存じています」

初代学園長ライアン＝ローレンス

学園の創立者にして、学園の初代学園長を勤めた稀代の魔導師
経歴のほとんどが不明で、ある日突然現れたように有名になり、世
界各地で冒険者として活躍していた

あるときこの学園の設立を宣言し、各国の王族・貴族・権力者から
協力を得た

万物の才能を持っていたらしい、ということくらいしか情報が残っ
ておらず、彼自身についての話はほとんど知ることができない

「彼の目的が何なのかよくわからんから、推測でしか話せんがのう
どうにもあの墓石は・・・召還の媒介になるようであ

それだけならいいんじやが、何かをどこかに贈るような能力もあったみたいじゃ」

「召還の媒介で、何かをどこかに贈る・・・？」

「・・・例えば戦闘の記録とかじゃな」

「戦闘の記録・・・じゃああのウォードラゴンは・・・」

「恐らく記録をとるために召還されたのじゃろうな
あの場で戦闘をした6人・・・それに蒼犬の分も含めて、どこかの誰かが彼らのことを知ったのは間違いないじゃろう」

「そんな能力を一体どうして？ライアン」ローレンスは300年も前に死んでいるんですよ？」

「さてのう、調べるにはあまりにも年数が経ちすぎておる・・・
しかしどうにも嫌な予感がしてのう、なんかできんかのう？」

学園長の問いに、女教師は答えることができなかった

「ぬううううあああああああ！！！！」

グラハルトは魔物の軍勢に再び突っ込んでいた

今では敵の数も目に見えて少なくなっている

当初の4分の1もないだろう

とはいってもそもそもの数が万を遙かに超えていたので、まだまだ多い状況ではある

この突撃でグラハルトは都合4度目の突撃になる

一度の突撃で4分の1ほどつつ倒しているので、単純計算ならこの突撃で終わると考えられる

だが現実として、相手が都合よく固まってくれてくれるわけもない

物量を活かして拡散し、一気にやられないようにしている

通り抜けて後方を叩こうという策略が無いのが、魔物達の悲しさであろうか

魔物達は目の前の脅威であるグラハルトを排除することに躍起になっており、全ての魔物がグラハルトを狙っている

グラハルトにしてみれば都合がいいのだが、一気に排除できない状況にはさすがに苦労しているようだった

全てを殲滅することは不可能ではない

だがこのまま方々に広がった状況では、あと数回はこの無茶を繰り返さねばならないだろう

時間切れが来れば些細なことで死んでしまう

味方の消耗も大きくなってきている

奇跡的に死者こそ出ていないが（B貴族の部下を除く）、このままでは厳しい状況であるのは間違いない

皆に搭載された兵器の数々も、今では半分以上が使い物にならなくなってしまうっている

持ってあと2回

それが恐らく限界だった

今を含めてあと3回の突撃で、魔物達を全て倒さねばならない

「ぬううううあああああああ！！！」

剣から迸る光が、目の前の魔物達を消滅させていく

ちなみに前回から読んでいる方なら気づいてるかもしれないが、グラハルトは剣を振るときの掛け声が全く同じである

これは別に彼の叫び声のボキャブラリーが少ないわけではない

実はこれスキルなのだ

剣士系職業の基本スキル「パワースイング」

MPを消費することで、瞬間的に筋力をあげ、強く振ることができるスキル

転生するたびに、その上位である「フルパワースイング」「マキシ

マムスイング」「オーバードマキシマムスイング」となっていく
そして最上位の剣士系だけが使える「オーバードスイング」
グラハルトはこれを使って攻撃している

ゲームだったときには、普通スキル名が画面に表示されつつ発動するのだが

なぜか、このスキルだけは違った

画面に表示されるのがこのかけ声なのだ

パワースイングから順番に

「ふん！」

「ぬうん！」

「ぬおりやああ！」

「ぬううおおおおお！」

「ぬううううあああああああ！！！」

製作者の何かがこもっているということだけはわかる仕様だった

途轍もなくどうでもいい話なのだが、グラハルトは叫びたくて叫んでいるわけではなかった

閑話休題

「崩落！アースクエイク！！」

グラハルトは剣を地面に突き刺す

剣から前方に魔方阵が浮かび上がる

その魔方阵は緑色の光を放ち、すぐに消えてしまった

だがそれは失敗したわけではない

突然剣を刺した部分から、大地に亀裂が入る

その亀裂は剣を中心に150度近く開いた扇状に入っていく

次の瞬間

大地が爆発した

岩が柱状になって、地面から次々と突き上げてくる

大地震とも呼べるほどの振動を起こしながら、数百メートルにわたって次々と飛び出していく

エクスプロージョンよりも遥かに広い範囲、長い距離を突き進むそれは、味方でさえも戦慄を覚えた

だが、その攻撃のおかげでさらに魔物達は減った

一気にたたみかけようと、グラハルトが剣を上段に構える

フォースディストラクション

まさにその詠唱が詠う通り、必ず殺す剣

黄金の光が、あらゆる存在を消滅させる

グラハルトが使える中で、恐らく最強の一撃

その一撃を放つための準備に入った

グラハルトのブローチに刻まれた犬の模様

その犬が、再び笑った

サリアはグラハルトの後方にいた

前方には、黄金の光をドーム状に展開させたグラハルトが見える

あれを使っているということとはそろそろ時間切れだなと判断し、サリアはグラハルトの近くへと走り出した

黄金の光の柱が出現し、それが倒れ、再び魔物達を消し飛ばす

もはや魔物達の数には目に見えて減っており、この分なら次の突撃で決着が着くだろうと予想できた

急いでグラハルトの元へと駆け寄る

グラハルトの近くまで行ったとき、サリアは驚いてしまった

なぜならグラハルトの目の前に、一人の男が立っていたからだ

何もかもを消滅させてしまうあの光が放たれたあとで、グラハルトのすぐ傍に誰かがいる

はつきり言ってそれは、かなり危険な状態だった

サリアは直感で、あの男はまずいと判断した

なぜならその男は、笑っていたから

狂気を感じさせる笑みだった

サリアはさらに驚く

なぜならグラハルトの体に、ありえないものが見えたからだ

自分の攻撃で、傷ひとつつかなかった鎧から、ありえない物が見えている

はつきり言って、かなり危険な光景だった

サリアは直感で、あれはまずいと判断した

なぜならそれは、剣だったから

グラハルトの体を剣が貫いていた

「グラハルトお！」

少し前

光が空へと昇っていき、それを魔物達に振り下ろした

まだ少し時間があると判断したグラハルトは、今のうちにサリアのところまで下がろうとした

その瞬間、グラハルトの全身から力が抜けていった

その状況にグラハルトは違和感を感じる

体感時間とはいえ、まだ1分以上時間は残っていたはずだ

力が抜けていく感覚も、どこかおかしい

力を奪われているような、「何か」から干渉されているような感覚だった

ふと、グラハルトは自分の首下に違和感を感じた

そこには、別空間にしまったはずのブローチ

これだ、と直感的に気づくが、すでに遅い

力が奪われただけでなく、スキルの残り時間も無くなったようだ

立つことさえできなくなり、膝を地面につく

倒れなかったのは意地だろう

こんな危険すぎる状況を前に、倒れるわけにはいかなかった

ブローチを外すだけの動きさえできないが、それでも倒れるわけにはいかなかった

だが、外す必要などなかった

勝手にブローチが外れたからだ

グラハルトの元を離れたブローチは、地面に落ちて転がる

犬の紋章がグラハルトに見えるように倒れる

そして、その犬の紋章が、グラハルトを見て・・・

笑っ
た

聖騎士の贈り物7（後書き）

しまった、回収できなかった

あれですよ、気になるところで切るのは連話の基本ですよ？
そうですよ、ええそうです、決して才能が無いわけじゃない

「やっべ、これ思ったより長くなる、いいか2話に分けちゃえ
なんて決って思っはいません！」

こんな自分が本性ですが、今後ともよろしくお願いいたします

聖騎士の贈り物 8（前書き）

毎度お読みいただきありがとうございます

累計PV6万件・ユニーク7千件突破いたしました

これも毎日読んでいただいている皆様のおかげでございます

お気に入り登録もだいぶ増えまして、感謝感謝の日々でございます

この話にて連話「聖騎士の贈り物」は終わりです

ちよつと急展開すぎたかな？と思わなくはないですし、話も中途半端ですけど終わりなのです

マンガにこういうシーンありそうだな、というイメージで作ったんですが、自分のイメージが読者様に伝わればいいなと思います

それでは本編をどうぞ

聖騎士の贈り物 8

一瞬の出来事だった

ブローチから剣が飛び出し、グラハルトの胸を貫く

貫いた剣を手にする男が現れる

血を吐き出すグラハルトを男が見る

その男が、狂ったように笑い声をあげる

全ては

一瞬だった

地面に落ちたブローチに描かれた犬のような紋章、それがグラハルトを見て笑った

その笑顔は不気味で、いじめをしている人間がいじめられている人間を見下している時のような、自分が相手よりも上位の存在なのだと確認しているような笑顔だった

グラハルトはスキルの影響で、もはや一步も動くことができない状態にある

その不気味な笑顔を見ていることしかできなかったが、それでも動かなければいけないというのだけはわかった

懸命に体を動かそうと脳から命令を出す、まるで他人の体のように、その命令が実行されることはなかった

ブローチを見ることができないグラハルトは、その後起こったことに驚愕することになる

黒い煙のようなものがブローチから立ち昇る

それは蛇のように動き、一本に収束していった

やがてそれは集まった先端の部分から剣のような形に変化し、煙のような見た目は鉄のような見た目に変化していく

完全に剣の切っ先に変化したかと思えば、それはグラハルトに向かって飛び込んできた

まるで蛇が獲物を狙ったときのように、一瞬で素早く、正確に胸を

目指す

そして

グラハルトの胸を貫いた

グラハルトの鎧は強力なものだ

ゲーム上での最終クエストを達成して入手したこの鎧には、様々な特殊効果もさることながら、基本的な防御力がとても高い生半可な攻撃など一切通さないし、普通の武器では傷一つつかないほどの性能を誇る

その鎧が、あっさりと貫かれた

刺さった、のではなく、貫いたのだ

胸を貫通し、背中から刃が飛び出している

例えばグラハルト自身が使っている最強の剣を使っただとしても、ここまで見事に貫くことはできない

ありえない、と言ってもいいだけの状況に、グラハルトは驚愕し、逆に冷静に状況を理解できた

物理的なダメージを受けていない

この剣は恐らく物理的な攻撃力を持っていない

なぜなら自分がまだ死んでいないということに気づいたからだ

実際にはどうなるかはよくわからないが、今の状況でグラハルトが物理的ダメージを受ければ、例えば些細なダメージだったとしても即死しているはずだ

以前このスキルを使ったあとに、自分のステータスを確認して、自分のHPが1になっていたのを確認している

その状況で死んでいない、ということはこれはHPにダメージを与えるものではないというのが理解できた

何が起こっているのか確認しようと、ステータス画面を開こうとした

だがグラハルトは結局ステータスを見なかった

なぜなら、その剣の後方部分

いまだに蛇のように動く煙が、さらに形を作り始めたからだった

煙は完全に剣の形に完成する

特に何か特徴があるわけでもない、普通の長剣

しかし煙は、それで湧き出ることをやめなかった

剣のときよりも大量に、新たな蛇が出現し、その剣に絡まりながら新たな形を形成していく

剣に絡まっていた部分は、人の手のような形状になっていく
そこからさらに腕を形作るように絡まりあい、肩・胸・頭・反対側の腕・下半身へと集まる

人間のような形を作り出すころには、腕の形ははっきりとした人間の形に変化しており、煙のような曖昧な存在などではなくなっていた

人間

一人の人間が、その場に現れた

黒い髪を肩まで伸ばし、黒い瞳をしている日本人のような姿

その姿はグラハルトにそっくりだった

グラハルトの姿をそのまま黒目黒髪にしたような見た目の男

剣を握り、完成した人間の顔から、グラハルトに向けて言葉が放たれる

「いただくよ、蒼犬」

瞬間、グラハルトは全身から「何か」が抜けていくのを感じた

それが何かはわからないが、自分にとって大事なものだというのがはつきりわかる

まずい

これを奪われるのはまずい

抵抗しなくてはならない

だが抵抗することができない

「・・・ぐっ・・・かはっ・・・」

抵抗すればするほど、全身が壊れていくのがわかる

物理的な攻撃ではないはずの貫かれた胸からは、傷を受けたかのように血を噴き出す

口からも血を吐いているはずだが、そんなことはどうでもいい

グラハルトは咄嗟にステータス画面を呼び出し、自分のHPを確認する

減っていない

きっとこれは幻覚か何かで、血を出しているように見えるだけだ

グラハルトはそう判断し、無理矢理に体を動かそうとする

剣を持った男は、それを見て声をかけた

「ふん、なかなか大変だなあ？「死ねない」ってのも辛そうだ」

「・・・なん・・・だと・・・」

「知らずにここまで来たとはな

まあいいさ、どちらにしろ「全て」もらうつもりも無い」

「ッ！」

ズルツと肉と剣がこすれる不快な音がして、剣が引き抜かれる

貫いていないと思っていたグラハルトの胸は、彼の予想を大きく外れていた

貫いた、という現象でここまで綺麗に穴が開くとは思えないほどに、剣の形に合わせて穴が開いていた

それは物理的に「破壊」したというよりも、「消滅」したといったくなるほどに、綺麗に開いていた

男は唐突に笑い出し、グラハルトの驚いた姿を見ている

「アハアーハッハッハッハア！意外だったか！？それはそうだよな

「胸を貫かれて死んでないんだもんなあ!？」

グラハルトは信じられないような雰囲気で、自分の胸を見ている穴の空いた胸からは大量の血が流れだし、大地に赤い水溜まりを作っていく

グラハルトの血に濡れた剣を持つ目の前の男が、高らかに笑っていた
狂ったような笑いだけが、周囲に響いていた

「アッハッハッハッハッハ！やはり世界は私の味方だ！
全てが都合よく動いた！全てが最高のタイミングで重なった！
クククツ！そしてこれからも、全てが私のために動くんだ・・・ア
ハハハハハハ！」

「グラハルトお！」

サリアが叫び、二人のいる場所に向かってくる

「ああ、そうだった、貴様にはまだまだ死んでもらうわけにはいかないんだった」

「・・・き・・・さま・・・」

「心配しなくていい、手は出さないさ
ついでだ・・・あいつらも始末しといてやる」

サリアがグラハルトに駆け寄り、その状態を見て言葉を失う

「・・・そ・・・そんな・・・グラ・・・」

「・・・大・・・丈夫・・・だ、・・・勝手に・・・殺す・・・な」

息も絶え絶えに、だがはつきりと口に出してグラハルトは無事を知らせるが、サリアにはそんなことが信じられない

「その通りだ、まだ生きてるよ
早く連れて行くんだな」

「貴様っ！」

「おおっと、止めといたほうがいい、君でかなう相手じゃないよ？」

「なんだ・・・と・・・」

サリアは男と会話しながら、彼のある部分を見てしまった

彼の顔、そこにある片方の目

そこには、普通ではないものが存在していた

「馬鹿な・・・それは・・・」

ありえなかった

それは一つの時代に一人しか存在しないから

生まれ変わりのように、必ず一人だけしか存在しないはずのものだった

彼の片目には、虹色の輝きが環を作っていた

万物の才能

サリアの目の前に立っている男は、その証拠である輝きが片目に存在した

「消えろ、雑魚ども」

その男は魔物達に向けて、片手を振った

それだけだった

それだけに見えた

それだけで、魔物達は吹き飛んだ

「なっ！！！！」

ありえなかった

手を振っただけで、衝撃波が発生したらしい、ということしかサリアには認識できなかったようだ

グラハルトが放っていた魔法のような範囲が、その衝撃波によって吹き飛ばされ、そこにいた魔物達を吹き飛ばしたのだ

その本人は、まるで消耗した様子がない

ニヤニヤとした顔を浮かべたまま、当然といった顔をしている

「片付けはしておいてやるさ、さっさとそいつを連れて引っ込むんだな」

サリアに向けてそう言い放ち、彼は魔物達のところへと歩き始める

「ま、待て！貴様は一体・・・！」

サリアが男を呼び止める

男は振り向こうともせず、だがはつきりと聞こえる声で、返事を返した

「初代学園長、ライアン＝ローレンス」

ライアンは、それだけ言っただけで魔物達に突っ込んでいった

目にも止まらないその速さは、サリアでさえ捕らえることができない

「待つ・・・！」

次の言葉を言おうとするころには、すでに彼の姿は無くなっていた
代わりに、魔物達の軍勢が次々と弾け始める

あれが全てライアンのやっていることだと、サリアには信じるこ
とができなかった

「初代・・・だと？300年前に死んだ人間がどうして・・・」

何が起こったかわからないが、わかっていることが一つだけある

「まずは、治療だ」

グラハルトを背負い、サリアは皆へと急いだ

聖騎士の贈り物 8（後書き）

えゝ、ジャン 系とかのマンガならこういう終わり方もよくあるかなゝなんて思ってもらえたら嬉しいです

一旦この話で連話は終了し、新たな短めの連話が少し入ります
その後アリサ編に戻ると思われます

当初の予定よりも話数が多くなっていますが、最後までお付き合いいただけたら感謝でございます

累計PV6万件突破の記念として、また何か設定集のようなものを作る予定ではあるのですが、なにぶん本編に関係あるもので語らないものって何かあったかな・・・？という状況でして、あまり期待しないでいただきたいでございます
とりあえずサリアのステータスは書きます

今後ともソウケンをよろしく願います

対話1（前書き）

毎度お読みいただきありがとうございます

新たな連話です

この話の根本的な部分に触れる話となっています

いつもと違ってタイトル通り、会話がメインになっております

書いていて違和感が（笑）

本編をどうぞ

対話 1

「・・・ここは・・・」

真っ暗な闇の中で、グラハルトは目を覚ました

周囲は何もない

闇が広がっている、というよりも、何もない空間が広がっているというのがしっくり来るような不思議な空間だった

宙に浮かぶようにして寝ていたグラハルトは、地面さえも無いはずの場所に両足を着いた

「久しぶりだね」

そう声をかけてくる人物がいた

だが彼の姿は見るできない

そこに「いる」ということしかわからない

人のような何かがそこにいて、それが話しかけているということしかわからなかった

声からして男だろうな、という程度しかわからない

「・・・誰だ？」

「誰だはひどいな、ずっと一緒だったじゃないか」

肩をすくめて呆れたという風なジェスチャーをしたような気がした

「・・・知らないな」

「じゃあ思いだそうか、答え合わせと行こう」

そこにいる誰かがそう言っていると、何もなかった場所が別の場所の風景を写し出した

「・・・ここは・・・」

「最初の地、君が今の君になった場所だよ」

周囲の景色は山の麓らしい景色に変わっていた

ゴツゴツとした岩が転がっており、辺りには森が広がっている
いや、広がっていた、というのが正しい

『SHAAA!!!』

背後から耳に響く嫌な高音で叫ぶ声が聞こえた

「ダークサーペント、君が最初に倒した魔物だね」

蛇に翼が生えたような体に、目玉が左右4対、合計8個もある気味の悪い顔をしたドラゴンがそこにいた

赤黒い体の大きさは、人間など簡単に飲み込めそうなほど太く、20メートルはありそうな長さをしている

「・・・このときは焦ったな」

「あはは、最初は殴って倒そうとしたんだよね」

二人が話していると、竜に向かって何かが飛び込んでいった

「・・・俺か」

「そう、君だ」

わかってると思うけど、これは過去の映像だよ」

飛び込んでいった物体は、過去のグラハルトだった

「いくらレベルが高いっていつても、殴るのは無謀だったと思うなあ」

「・・・アイテムとスキルに気づいただけマシだろう」

次の瞬間には、過去のグラハルトは手に二振りの刀が握り、蒼い鎧に変化した姿になっていた

そしてすぐさま竜を切り刻み、戦いを終わらせる

「・・・これはきつかったな、・・・正直吐きそうだった」

「そうだねえ、変なプライドでやせ我慢してたもんねえ」

すぐに森の中から、たくさんの人間が現れた

「これは傑作だったな、直球すぎる質問だよ」

「・・・吐きそうだったんだ、それを言うのが限界だった」

『・・・ここは何処だ？』

過去のグラハルトがそう言った瞬間、景色がまた変わった

「そして初めての街に到着と、どうだった？」

「・・・本物の猫耳は衝撃だったな」

「アハハハハ！うはは！ね、猫耳って！ププ・・・ブハハハハ！」

さらに景色は入れ替わり城の中らしい場所を写し出す

「・・・笑いすぎだ」

「ハハハ・・・はあ、悪い悪い」

まさか王女様の誘いを断ったのってそれが理由？」

周りの風景では、色んな人間がいる

その中でも一段高い場所に座る国王らしき人物

その隣で、頬を赤く染めた、熱っぽい視線をグラハルトに向けている女性がいた

「一目惚れっぽかったのに、勿体無い」

「・・・好みじゃない、・・・大体王族との関係なんぞ、面倒になるに決まってる」

「そんな理由でフツたのかい？」

「・・・よく見る」

すつと一人の人間を指差す、過去のグラハルトも同じタイミングで同じ人間を見ていた

「ああ、本気の人がいたのね」

その方向を見れば王女の紅潮した顔を見たのか、明らかに敵意を向けている男性がいた

「・・・まあ、これだけわかりやすければ・・・馬鹿でもひくだろう」

「ふん、意外と考えてるのね」

「・・・意外とな」

またしても風景が切り替わる

次は冒険者ギルドの建物内だった

10人以上の男達が過去のグラハルトに武器を向けている

「・・・こんなこともあったな」

「少し飛ばしながら行こうか、主に作者的な都合だけど」

「・・・何を言っているんだ？」

「いや、こっちの話」

それから一つ一つを確認していった

ギルドの連中が、新人らしい青年の成果を横取りしようとしていたのをブツ飛ばした

ゲーム上で数が必要だった鉱石の採掘に行ったところ、たまたま貴族の子供を誘拐していた盗賊達に会った、もちろんブツ飛ばした

街でその鉱石を売ったところ、金を異空間にしまう前に盗まれたこともあった

それを追いかけて、やたらと頭に来る顔ばかりの集団に会ったこともある

こいつらがスリをやらせているんだと判断し、ブツ飛ばした

その国の王城で、いきなり魔物達が出現したこともあった

原因はよくわからなかったが、とりあえず全部ブツ飛ばした

やらないと宿屋の美味しい晩飯が食えないから、という理由だったが・
・

「・・・あそこのメシは美味かった」

国境近くの街では、もっと美味しい料理があると聞いて向かった

街に着くまでに有名らしい盗賊団と、有名らしい巨大な猪の魔物を倒したが、興味がなかったので放置
懸賞金がもらえると知ったのは他の奴らが手柄を持っていた後だった

街に着いても、戦争中という理由で全ての店は閉まっていた
運よく防衛隊の食事係と合うことができたため、食事を分けてもらえることにはなった

だがそれも都市が落とされ不可能になってしまい、グラハルトは邪魔くさい奴らをブツ飛ばしながら食事係を探して、何故か娼婦の館に入ったこともある
食事は娼婦が作ってくれたので満足したが

「・・・あそこのメシも美味かった」

その後も色々だ

学園長と知り合ったりゲイルとケンカしたり戦争に参加してみたり
伝説のアイテムや秘境を発見してみたり軍隊より強い魔物と戦ってみたり
お偉いさんをブツ飛ばしてみたり

「・・・5年は長いな」

「アリサに会うまでは、だろ？」

周囲は雪が降っていた

見覚えのある景色、人生が変わったあの日の風景

「・・・やはり、お前が導いていたのか？」

「まあ・・・ね、わかっていたのかい？」

「・・・俺は寒いのが嫌いなんだ、・・・わざわざこの国に来る理由は無かった」

「だが、来た

そして導かれるように、あのおっさんに目をつけた」

「・・・考えればその時点でおかしかったんだ、・・・俺はあいつを殺せない、殺せないとわかっていても殴りかかった
・・・一人の死を隠蔽したくらいで、わざわざ殴る理由にはならないはずだ」

「ま、実際には他にも色々やってたけどね
個人的に許せなかった・・・ってのが正直なところだけでも」

「・・・アリサに会わせたのも・・・そうだな？」

「いつからわかってたんだい？」

「・・・アリサに会った時・・・いや、アリサの笑顔を見た時だな」

「ああなるほど、確かにあれは嬉しかったなあ」

気がつけば周りの風景は、グラハルトが城門を吹き飛ばすシーンに

変わっていた

走り出す二人がいる

「笑顔」のアリサがそこにいる

現在のグラハルトは、不思議な感覚がした

このシーンを見ていて、懐かしさは感じる

だが、それだけだ

「笑顔」のアリサを見ても、感じないのだ

普段のように、守りたいとも思わない

体の奥がざわつくような感覚もない

恋人を見るかのような、優しい気持ちも

何も感じない

「・・・お前の感情だったんだな」

「うん、君には悪かったと思ってるよ」

「・・・いいさ、・・・それなりに楽しめた」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

再び景色は変わる

そこでは、アリサがグラハルトを相手に剣を振っているところだった

「・・・これで・・・よかったのか？」

「ああ、よかったよ」

むしろよくやってくれたとさえ思う、必ず必要になるはずだからね」

そして再び、雪の振る町へと景色が変わる

「・・・アルドラか」

「そう、悪魔アルドラ

でも残念ながら、切っ掛けはこいつじゃない」

見ればアルドラが問いたただされているシーンだった

その後、豚と手下どもが周りを囲んだ

「そしてさらに残念なことに、このおっさんも直接の切っ掛けじゃない」

そしてさらに景色は変わる

入学試験の日だった

対話2

「入学試験の日、ここが転機だったんだ」

そこは魔法学園の校庭だった

入学試験を行ったあの日と同じように、たくさんの人間がいる

その中には当然、過去のグラハルトとアリサがいた

「・・・転機・・・？」

「そう、転機だ

ある意味では、この日のために君がいたと言ってもいい
そして、その役目は果たされた」

「・・・ウオードラゴンか？」

「その通り」

「・・・だが俺はあの時」

何かを言いかけて、グラハルトは止まった

またしても景色が移り変わり、あの日のグラハルトを見ているよう
な状況になる

「あの日」

「誰か」はそう言って話し始めた

「君は色んなものに導かれたんだ
それはわかっていたんだろう？」

「・・・すぐにはわからなかったよ、・・・ゲイルにダリアス、リ
リーまで会って最後に学園長からの呼び出しだ
・・・さすがに気づかないほうがおかしいだろう？」

グラハルトはそう言って過去の自分を見る

そこにはレディの父親であるゲイルがいた

『・・・なぜいる』

『娘の応援！』

「確かにこれだけじゃわかんないよねえ・・・」

「・・・基本的にバカだからな」

『ファルケンに会いに行こうかと思ってな、一緒に行くか？』

『・・・学園長ならさつき見てきた、・・・必要ないだろう』

『うむ、見たのと会ったのは違うと思うんだがな？

それともあれか、おまえらついに目と目で語り合う領域につ！』

「うん、バカだね」

「・・・基本的に・・・な」

『そついやダリアスも来てるって話だぞ、もう会ったか?』

『・・・まだだな、・・・何か厄介事か?』

『さあ?でもリリーも来てるって話だし、なんかあったのかもな』

「精霊の試練を乗り越えた人間、それが四人も集まれば導きどころじゃないよね」

「・・・俺にはわからん、・・・だがこの面子が揃って何もなかったことは一度も無いからな」

『何かあったに決まってるでしょ』

唐突に緑の髪的女性が会話に混ざってきた

特徴的な耳の形からして、エルフのようだ

『俺達が集まるってなあ、そういうこつたる』

なぜか片手にオタマを持った、屋台の親父にしか見えないおっさんが、リリーの後ろからそう話す

『リリー!ダリアス!久しぶりだなあ!』

『・・・ようつ』

『ゲイル、後にしましょう、今は何が起こるかを予想して、すぐに

対策するべきよ』

『ってわけだ、今は話してる時間も惜しい』

『え〜っ！せっかくレディと食べるご飯選んでたのに〜っ！』

『・・・まかせた』

『あんたが逃げてどうすんのよっ！』

「なぜ逃げた」

「・・・ろくなことにならん」

『そこまでにしとけファルケンが使いよこしたぜ』

ダリ阿斯と呼ばれた屋台のおっさんが、後ろを振り向く

一人の男が四人へと近寄る

そこでまたシーンが切り替わった

『現在この都市は包囲されておる』

『ファルケン、わかりやすく説明してくれ』

『うむ、報告によると、試験開始と同時に魔族らしい者達が現れたとのことじゃ』

現在森につながるこの学園を除いた、東西南北全ての門を監視しているらしい』

『監視？制圧でも侵攻でもなくてか？』

『監視としか言いようが無いんじゃない』

遠くからこちらの動きを伺ってるだけで、今のところ何も手出しはしてきとらん

幸い住民には気づかれてないようじゃが、国防隊が密かに配備を開始した

放置もできんが下手に刺激もできん』

『・・・森だな』

『森？』

『じゃろつな』

『説明してくれるかしら？』

『うむ、推測じゃがの』

この都市は学園が都市の最外部にある、当然そこに繋がっている森は外に繋がっておる

その森に何の手出しもせず、門だけを狙っても大した意味は無いじやろつ

少なくとも今の時点では、森の中に魔族の姿は確認されておらん』

『あからさますぎやしないか？』

森に行けって言うてるようなもんじゃないか』

「・・・この時もお前が手出ししたんだな？」

「ああ、どうしても行く必要があったからね」

一瞬ノイズのように空間がブレて、同じ風景の違う時間変わったようだった

『・・・俺が森に行く』

『話聞いてたかお前!?!』

『・・・知らない、・・・勝手に行かせてもらっ』

『おいこら!』

過去のグラハルトはさっさとドアから出ていってしまう

「・・・強引だったな」

「いやあ、改めて見ると強引だったねえ」

『仕方ない、門の警備は我々3人だな』

『すまんのう、三次試験までになんとかなってくれればいいんじゃないのう』

『まあ、アイツが行くなら悪いようにはなんねーだろ』

『確かに、でも後始末が大変なのよね・・・』

『ま、うちの娘もいるし大丈夫だろ』

ザザッと再びノイズが走る

「……?……俺の知らない記憶だぞ」

「あはは、言ってなかったね

これは単純に記憶を辿ってるんじゃないよ

記憶を切っ掛けにして、真実を映し出してるのさ

だからある程度までなら、知らなかった真実も見れる」

「……便利だな」

変化した風景は相変わらず学園長の部屋だった

学園長ことファルケンが、通信のマジックアイテムで誰かと話をしていた

『そうか、魔族は退いたんじゃない』

三次試験が始まり、大分時間が経ったようだ、もう外は大分暗くなっている

『少し待て、別の通信が入ったようじゃ』

右手右耳に当てていた通信器を、左手左耳に直しながら通話を続ける

『ファルケンじゃ、どうした?』

『学園長! ガラムです! 緊急事態です!』

『落ち着け、何があった』

『ドラゴンです！ウオードドラゴンが森に出現しました！』

『なんじゃと！？』

『急ぎ応援を！試験の中止も宣言してください！』

『・・・』

『学園長！』

『・・・試験は続行じゃ』

『なっ！』

『大丈夫じゃ、蒼犬が森に入っておる』

『蒼犬が・・・？』

『万が一もありえる、応援を送るからお主はそれまで待機、受験生の安全を確保するんじゃ』

『りよ、了解！』

通信を終えたファルケンは、再び通信器を持ちかえる

『ライラ、急ぎじゃ、クルーガを連れて森に向かってほしい
わしもすぐに行く、詳しい話は・・・』

『・・・仕事してたんだな』

「学園長の評価低くないかい？」

「・・・まともに仕事しているのを見たことが無いからな」

「うわぁ、学園長かわいそー」

さらに場面は変わり、今度は森の中だった

森の中を、過去のグラハルトが一人走り回っている

「これ迷ってたよね？」

「・・・探してたんだ、・・・迷ってたのではない」

「うん、迷ってたのね」

「・・・夜の森は危険だからな、・・・慎重に行動していたんだ」

「なるほど、どうあっても迷子だったとは認めないわけね」

「・・・」

唐突に地面が揺れ、何かが壊されたような音が響く

『・・・向こうか』

「正直に言えば、もう少し早く行ってほしかったなあ・・・」

「・・・夜の森は危険だからな」

場面は切り替わり、ウォードドラゴンがアリサに突進する直前になる

『ッ！！！』

「かなりギリギリだよねこれ」

「・・・タイミングがいいと言ってもらいたいな」

アリサの鼻先5センチほど無いほどの至近距離、そこでグラハルトはドラゴンを受け止めた

片手だというのに、わずかに体が揺れただけで後退もしない

「転機はここだ」

そしてすぐ後には、過去のグラハルトが蒼い鎧へと変化し、ドラゴンを貫くシーンが映し出される

「この瞬間、あいつの狙いは君に固定された」

「・・・あいつ・・・やっぱりあいつのことか？」

「そう、あいつさ」

姿の見えない男は、十分に間をためてから言葉を放つ

「初代学園長ライアン＝ローレンス」

対話3（前書き）

皆様いつも読んでいただきありがとうございます

この対話という連話は、話の確信をついていきます

この対話3においては、いきなり突拍子も無い展開が・・・っ！内容はまあ見てからののお楽しみということをお願いします

ただいきなりな展開でございますので、愛想を尽かされるやもと非常にときどきしながら投稿しております

それでも読んでいただけたなら、幸いです

それでは本編をどうぞ

対話3

「初代学園長ライアン」ローレンス」

何もない空間で、姿の见えない男が話す

「・・・俺を刺した男もそう名乗った」

姿は见えないが、なんとなくその辺にいる、というあたりを見ながらグラハルトが答えた
ただ漠然と「いる気がする」という感覚なのだが、恐らく間違っ
てはいないのだろう

「・・・あいつは何なんだ？」

「あいつは・・・万物の才能を持った人間だよ」

「・・・万物の才能・・・アリサと同じ能力か」

「そう、何があつたかはわからないけど、目的はわかつてる」

「・・・目的？」

「そのためだけに、彼はあの瞬間を待っていた
あの瞬間のためだけに、全てを賭けてじっと待っていたんだ」

言葉の直後

周囲の景色が激しいノイズ音を出しながら、砂嵐のように乱れる

だがそれもすぐに終わり、数秒後には新たな景色を映し出した

その景色は先ほどまでグラハルトがいた戦場だった

魔物達が何かに向かっていく

それを凄まじい勢いで殲滅していく一人の人間がいる

まるで先ほどまでのグラハルトがそこにいるかのように、剣を振るたびに衝撃波が発生し、魔物達を圧倒的な力で倒していく

「・・・これは？」

「今のライアンさ、「僕たち」の力を奪ったあとの・・・ね」

「・・・俺・・・「たち」・・・？」

「・・・ほとんど持っていかれちゃったよ、もう前と同じというわけにはいかない

おかげさまで何もできなくなったから、こうやって君と会話できるだけの余裕ができたわけだけだ」

「・・・それは後で聞こう、・・・先に目的の話だ」

「そうだったね、やつの目的だ」

再びノイズが走り、ライアンの姿をより近くで見るような位置に変わる

黒目黒髪で、西洋系と東洋系のいいところ取りをしたような整った顔立ち

髪は肩まで伸ばしているが、さらさらの髪は不潔な印象を感じない
グラハルトの素顔とそっくりなその男が、グラハルトが絶対にしない、歓喜の表情で笑っていた

「学園にあった墓石は、選ぶための道具なんだ」

「・・・選ぶ？」

「力を奪う相手を選ぶための道具だったのさ」

「・・・ブローチもか？」

「役目は違う、でもあれも初代の作った道具の一つだね

実際には他にも色々ある、指輪・ピアスにネックレスなんてのもある
墓石にしたってあれ一個だけじゃない、同じような道具が世界中にあるよ」

「・・・役目というのは？」

「選ばれた相手の手に渡ったら、力を吸収し、仕組みを理解するんだ
ちよつとづつ、気づかないくらい少しずつ・・・吸収っていうより
学習とか複写に近いかな？」

「・・・コピーか」

「コピー？まあ多分それだと思う
そしてある一定以上を吸収したら、本体が現れて一気に全てを奪い取るんだ」

「・・・確かにそうだったな」

姿の見えない男は、そこで一旦言葉を区切り、間を空ける

グラハルトは気になったことを、その間で聞いてみることにした

「・・・力を求めた理由はなんだ？」

男はすぐには答えない

たつぷり時間を空けてから、続きの言葉を言った

「魔王を復活させるためさ」

「・・・魔王？」

「そう、魔王」

君が出会った光輝君だったわけ？彼が呼び出された最大の原因だね」

風景は再び入れ替わる

しかし今度はノイズが走らず、端の方から流れるように変化していく

そして映し出された光景は、限りなく透明な水晶が並ぶ洞窟の中だった

大小様々な水晶がところ狭しと並び、洞窟の中とは思えないほど大きな空間を埋め尽くしている
平坦な場所など一つもなく、剣山のようにとがった水晶の先端が、
全て天に向かって伸びている

その壁際の一画

明らかに他のものより巨大な水晶の塊が存在した

そしてその中心

水晶の中

そこには一人の女性がいた

「……ここは？」

「さあ？世界のどこかにはあると思うけど、どこにあるかは全くわからないよ」

「……あいつは？」

「あれが魔王だよ、と言っても300年前のだけだね
今表立つて暴れてる魔王とは全くの別人、何の関係も無いよ」

「……封印されているのか？」

「その通り、封印っていうか仮死状態っていうか？」

少なくともあの中にいる限りは何もできない

何も無ければ、このまま未来永劫、ずっとここにただ存在するだけ

だよ」

「・・・何がライアンということか」

「そうだね、彼と彼女の間に何があつたかはわからない
でもライアンは彼女を復活させようとしているし、そのための力も
手に入れた」

「・・・一つ聞いてもいいか？」

「どうぞ？ 僕に答えられることならなんでも」

「・・・万物の才能を持つてして・・・解除できなかったのか？」

「・・・難しい質問だ

時間さえかければ可能だったんじゃないかと思う、でもそれは、
少なくとも一人の人間が生きる時間ではとてもじゃないが足りな
かったと思う

万物の才能がいくら優秀でも、不老不死に至ることは不可能だから
ね、優秀だったがゆえに、自分が生きる時間では解除できないと理
解できたんじゃないかな？」

「・・・それでこの方法を思いついたのか？」

「そういうことだろうね・・・とは言つても、これもかなりの博打
だったけど」

「・・・聞いても？」

「そうだなあ、長いよ？」

まあまず彼は魔法の天才だったことが前提だね

どうやって知ったかは知らないけども、彼は僕と同じ魔法を見つけたみたいなんだ」

「・・・その魔法とは？」

「うん・・・言いにくいんだけど・・・ダウンロード、という魔法だ」

「・・・ダウンロード・・・ロード・・・？」

「そう、この世界の根本を揺るがしかねない魔法だよ
条件は色々と厳しいけれども、過去を現在に反映できる魔法なんだ
僕の場合は君という過去の英雄を・・・
彼の場合は過去という名の自分を召喚した」

「・・・ちょっと待て」

「・・・」

「・・・その話で行くと・・・俺は過去の人間ということか？」

「ダウンロードで召喚できた以上、それは間違いない」

「・・・俺はこんな世界は知らないぞ」

「それはそうさ、少なくとも君は遙か過去、この世界がこの世界として存在する前の存在なんだから」

「・・・お前は、・・・この世界がどういう世界だか理解している

のか？」

「全てを知っているわけじゃない、でも少しは知っている、ダウンロードを手に入れた時に、僕は色んなことを知ったから」

「・・・続けてくれ」

「わかった

僕は確かに色んなことを知ったけど、正直言ってそれはどうでもいいんだ、君には悪いと思ってるけどね？

僕が一番気にしたことは、ダウンロードの発動方法と、そして同じ魔法を手に入れたライアンのことだよ

ライアンはこの魔法を知って、未来に全てを託したんだ

つまり、魔王を復活させられるだけの何かが、未来にきつと現れるということを感じた

そしてそのために色んな手段を用意したんだ、それが墓石であり、ブローチである

墓石が復活させられる存在を見つけたら、その存在に惹かれるようにブローチを作った

そしてそのブローチが持ち主の力を吸収して、ダウンロードの魔法が発動するように条件をつけたんだ

そして何より、その存在が現れるとしたら、間違いなくそれは自分と同じ「万物の才能」を持った存在だろうと予測していた」

「・・・発動方法は？」

「・・・術者の死・・・だよ」

瞬間

周囲に広がっていた幻想的とも言える水晶の洞窟は消えた

残ったのは暗闇

何も無い空間が、ただ広がっているだけだった

「そして、この魔法を知ることができる場所には、ある存在がいるんだ」

「・・・ある・・・存在・・・？」

「未来を知る存在さ」

「・・・未来・・・？」

「原理はわからない、どういう存在なのかもよくわからない、でも確かに存在したよ

・・・もちろん未来を知る、といっても全てを知っているわけじゃない、あくまでも可能性を教えてくれるだけだよ

しかもそれも、自分の知りたいことがどのくらいの可能性があるか、ということしか教えてくれない」

「・・・どういうことだ？」

「彼が望んだ可能性は、この仕組みを作ったあと、何年後にそれが叶うかというものだったらしい」

「・・・それが300年後だったというわけか？」

「そう・・・なんだろうね、さすがに当時の結果までは教えてもら

えなかつたよ」

「……お前は……何を聞いた」

「……」

再び風景が切り替わる

そこは見覚えのある風景だった

たくさん人間が同じデザインの腕章をつけている

その腕章も人によって色が違うようだ

年代も性別も種族もバラバラ、だというのに、どこか和やかな雰囲気を感じさせる不思議な空間

風景は上空から見下ろす形だったが、やがて移動を始める

廊下を抜け、中庭を抜け、闘技場のような場所に行き、さらにその中心にたっている人物に近寄っていく

青い髪、二つの剣を持ち、微笑を浮かべた整った顔

「……アリサ？」

「そう、彼女についてだよ」

「……もう一度聞こう、……お前は何を聞いたんだ？」

男はすぐには答えなかった

じっと彼女を見つめているような雰囲気を感じる

やがて、彼が口を開く

「アリサが・・・ライアンの計画の対象になる可能性を聞いたよ」

「・・・結果は？」

「99%・・・と言われたよ」

対話3（後書き）

えー、まあここまで読んでいただいている読者様でしたら、もう話の展開が読めるかもしれませんが、こんな内容です

次で対話編は終了としますので、この会話形式の話も読みづらいかと思いますが、それまでお付き合いくださいましたら感謝でございます

今後ともソウケンをよろしく願います

対話4（前書き）

いつもお読みいただき、ありがとうございます

累計PVが6万件を突破・・・の記念を書いていたんですが、これを投稿するところには7万件を突破しそうな勢いで驚きましたみなさま、私の拙い文章を読んでいただきましてありがとうございます！

1時間後に記念の人物紹介を予約投稿してありますよければそちらもどうぞ

さて、この話にて連話「対話」編は終了となります

説明会なんですけど、説明口調にならないように・・・しかし必要なことは伝わるように・・・気を使ったつもりなんですけど、難しいですね

正直に言います、つまらないかもしれませんが

それでも読んでいただけたら、感謝です

それでは本編をどうぞ

対話 4

「・・・99%」

「そう、99%さ

・・・うん、正直はあせんとの意味はよくわかんないんだけど、かなり高いってことだね？」

ガクツと頂垂れてしまうのはきつと仕方がなかったのだろう

「・・・百分率も知らずに行動したのか

・・・せめて無謀に近いこと・・・という理解はあったんだろうな？」

「ひゃくぶんりつ？

っていうか無謀だったの？説明求む」

はぁ〜と長い溜め息を吐いたのも、きつと仕方ない

百分率も知らずに99という数字だけでここまで行動したということとは、自分がどれだけ無謀な挑戦をしていたかわかっていないと言うことだ

現実を知らせるため、そしてしっかりと理解できるように慎重に言葉を選び、整理して、一気に話す

「・・・百分率とは、簡単に言うと、例えば百回同じ行動をした場合に、そのうち何回が予想した結果になるかを数値化したものだ

1回なら1%、10回なら10%、全部なら100%

100に近ければ近いほど予想通りの結果になりやすい、99%と言ったら・・・不測の事態が無い限り確実に起こるくらい高い数値

だな」

1回なら1%、と言ったあたりから彼の放つ雰囲気が大分怪しくなる
相変わらず姿は見えないというのに、すつとぼけた表情をしている
のだろうな、というのがはつきり伝わってくる

説明が終わるころには、不思議な感覚だが、汗をだらだら流して明
後日の方向を向きながら口笛さえ吹いているような感じまでしてくる

「　　」

「・・・とりあえずもう一度死ぬか？」

「ごめんなさい

今死ぬと本当に消滅するから勘弁してください」

「・・・つまり、・・・100回に1回しか成功しないような賭け
をした、・・・というのはわかったな？」

「ああ、うん、それは理解しました
ま、わかっててもやったと思うけどね？」

「・・・ならいい、・・・成功したようだしな」

「おかげさまで

とはいえ、力はほとんど持っていかれちゃったから、大変なのはこ
れからだけど・・・」

「・・・説明求む」

「うん、まあわかってると思うけど、ここは現実なんだ

現実で「すぎる」とか「しょおとかつ」とかつてのがありえないことはわかってるよね？」

「・・・まあな」

「今残っているのは、「めにゅー」と「あいてむ」の情報だけだね
空間魔法アーカイブに記録してある道具類は無事だけど、肝心のアーカイブが使えない状態だ
どれだけ致命的かはわかるよね？」

「・・・肉体はどうなんだ？」

「無事とは言えないかな？」

彼が奪ったのがダウンロードによって得た力だけだったのが幸いだ
つたみたい

肉体は僕の魂を使って再構成したものだから、彼に奪われることは
無かったようだね

まあ「グラハルト」の強さを身につけたのは確かだけど、君の体が
弱くなったわけじゃない」

「・・・つまり強さ自体は変わってない、・・・ということか？」

「その通り」

でも今後は、ダウンロードの恩恵が受けられない

頭で考えた通りにしか体は動かないし、魔法を使うと意識しただけ
で勝手に発動してくれたりはいしない

今から改めて鍛え直す必要がある

もちろん・・・」

彼は一度言葉を区切り、間を置く

「君がやる気があるなら、だけどね」

「・・・根本的な質問なんだが」

「なんでしょ？」

「・・・お前は・・・いや、俺達は・・・何なんだ？」

「僕達は・・・」

再び間が空く

だがさきほどのそれとは違う

言葉を強調するための「溜め」ではない

言にくい言葉を言わなければならないという「躊躇」

それでも伝えられるべき言葉は、空気の振動となって伝わった

「過去・・・だよ」

「・・・過去？」

「そう、過去だ」

僕は5年前、君は・・・数えられないほど遙か昔の・・・」

「・・・数えられないほど遙か昔・・・？」

「君は・・・異世界から呼び出された存在なんかじゃない、ダウンロードにそんな力はない

君は今の時代より遙か昔、この世界に存在した一人の人間、それが現代に蘇った存在なんだ

・・・当然・・・元の世界に戻る方法なんて無い」

「・・・そうか・・・そう・・・か・・・」

「すまないと思っている」

「・・・」

「僕の自分勝手な理由で君を呼び出した、それに付き合わせるのには正直言つて、かなり心が痛い」

「・・・それでも」

「それでも？」

「・・・それでも・・・叶えたかった願いなんだろう？」

「そう・・・だね・・・僕にとっては、何よりも叶えたい

例え悪魔と恐れられても、例え命の冒涇者と罵られても、例え自分が死んだとしても

何よりも叶えたい願いだ」

「・・・一つだけ聞かせてもらいたい」

「僕に答えられることなら」

「・・・俺は・・・生きたのか？
・・・過去にいた俺という存在は、・・・死ぬまで・・・向こうの
世界で生きたのか？」

「僕には・・・わからない」

悲しみの雰囲気があたりを包む

グラハルトのものなのか、姿の見えない彼のものなのか

おそらくはグラハルトのものだろう

なぜならば、姿の見えない彼は「でも」と話を続けたから

「でも、きつと生きたはずだ

ダウンロードは過去のある時点にいたある存在を再構成する魔法だ
少なくともその存在ごと未来に転移させるような魔法じゃない！
だから、きつと、君は・・・っ！」

グラハルトは泣いていた

顎の無い鉄色の兜、その露出された肌からは、涙が筋となって残っ
ている

「・・・じゃあ・・・いいさ」

「でも・・・」

「俺が生きたなら、それでいい
俺が気になっていたのは、元の世界に戻るかどうかじゃない

元の世界に残してきた、友人達が心配だったんだ

最後の瞬間まで一緒にいてくれて、一緒に馬鹿をやっていて、一緒に笑って、喜んで、怒って、泣いた、そんなあいつらが気になっていただけだからな

俺が生きていたなら、きつと最後まで一緒だったはずだ

あいつらと俺と一緒に生きたという事実があるなら、俺はそれだけで十分だ

・・・会えないのは、寂しいが・・・な・・・」

「・・・すまない・・・ほんとうに・・・すまないっ！」

「いいさ、それだけ強い願いなら、聞いてやる」

すつとグラハルトはある一点を見つめる

何も無い空間が広がっているその場所の中にあつて、何も無いはずの空間の一点

「お前の願いは・・・何だ？」

空間が波打ったような気がした

グラハルトの見つめる一点から、波紋のように広がった

「僕の願いは・・・」

また空間が波打つ

今度は気のせいではない

確実に空間が波打った

そして、その波は収まらず、何度も繰り返して波打っている

「アリサを救うことだ」

「ならばその願い、このグラハルトが受け取ろう」

「ああ、頼むよ、相棒」

「ふ……長い付き合いになりそうだな、相棒」

空間の波は唐突に止まり、静寂だけを残した

グラハルトが見つめる一点には、新たな存在が現れていた

身なりのいい格好だが、嫌味のない装飾をした服装

金髪に蒼眼の整った顔立ちは、モデル並みに整った顔立ちをしている

身長は高く、180センチを超えているのがわかる

「……名前を聞いていなかったな、貴族さん」

「ああ、そうだったね

では改めて、初めましてグラハルト

アリサに恋した貴族・エドワード」グラトニアス「シュトラッサー
です

といっても家名はとつくの昔に捨てたから、今はただのエドワード
だけだね」

「・・・よろしく」

「ああ、よろしく」

グラハルトとエドワード

二人の出会い・・・いや再開が、何をもたらすのか

それを知っているものは、誰もいない

「・・・ところで、これからどうするんだ？」

「特訓だね！体に頭を追いつけないと！」

「・・・この年で特訓とは・・・いやな響きだな」

「はっはっは！何を言う！勉強もやり直すんだから覚悟したほうがいいー！」

「・・・いやな響きだ」

「ま、そう言うなって
それに良い情報もあるぞ？」

「・・・良い情報？」

「そ、良い情報」

「・・・あまり聞きたくない気がするんだが」

「いや聞いてもらわないと困るな」

「・・・言ってみろ」

「うん、まあ難しいことじゃないよ
レベルアップができるようになりました」

「・・・説明求む」

「了解！

まあ今まではあくまでも、過去の「グラハルト」を再現してただけ
にすぎないんだよ

今はいろんな意味でそれが不可能になった
再現する、ということは、そこから先に進まないことも意味している
変化、という可能性をも否定していた状態だったんだ
それが不可能になったということは？」

「・・・なるほど、レベルアップというわけか」

「もちろん楽しい

すぎるが使えない以上、技は体で覚える必要があるし、魔法も1から勉強だ

でも肉体は以前のまま、魔力も当然ある状態、体がすぎるを覚えて
いることもある

希望が無いわけじゃないよね？」

「・・・ライアンを倒せると思うか？」

「倒す必要がある、魔王復活はもはや確定事項だ

アリサを守るためには、ライアンより強くなる必要がある」

「・・・過去の自分を超える強さ・・・か・・・楽しいな」

グラハルトはふと、過去の友人との電話を思い出し、なんとなくそれを口に出してみる

「・・・やるけどな」

「さすが！そこなくっちゃ！」

「・・・フツ」

なんとなく言った言葉は、まるで過去の友人のような返事を返された
なんとなく・・・そうなんとなく

グラハルトはこの先もなんとなく、なんとかなるんじゃないかと思
ってしまう

「・・・目的を整理しよう」

「うん？君が言うならそうしようか」

「・・・俺達の目標はなんだ？」

「アリサを守ること」

「・・・そのための障害はなんだ？」

「ライアン＝ローレンス、そして彼が復活させるはずの魔王」

「・・・なぜその二人を倒す必要がある？」

「二人の目的が、この世界の破滅だから」

「・・・なぜアリサを守る必要がある？」

「万物の才能は、人間になら干涉できる
ライアンがアリサに干涉して、その力を利用してしようとしないわけがない」

「・・・ならば俺達はどう動けばいい？」

「ライアンはすぐには動かないはずだ
力が体に馴染みきっていないはずだし、魔王の居場所はわかっていないだろうから」

だから僕達は、今のうちに全力で強くなる
そしてアリサを守りながら、ヤツらを倒す！」

「・・・改めて考えると・・・」

「うん？」

「・・・欲張りなヤツだな」

「そりゃそうさ、貴族だったからね！」

「・・・貴族にはロクなヤツがないな・・・」

「ひどいな、その貴族に世話になってたくせに」

「・・・やっぱり殺しておくか？」

「ヤメテッ！殺したら肉体消えちゃうからっ！君も死んじゃうからっ！」

「・・・冗談だ」

「本物の殺気が出てましたケド、それって装備の効果じゃなかったの？」

「・・・5年も生きてればこれくらいできるようになるだろう」

「うん、冒険者1年しかやらなかったからわかんない」

「・・・」

二人の馬鹿な会話がいつまで続いていたかはわからない

気づけば周りの景色は真っ白になっていった

グラハルトが目を覚めたのは

再び暗い闇の中だった

ただしそれは、先ほどまでいた空間とは明らかに違う

木製の枠の中で、人間一人だけが入れる程度の狭い箱の中だった

なんというか、生きているうちに入ることはない箱の中のような気がする場所だ

つまりは、棺桶の中らしい

「・・・なんじゃこりゃあ!」

有名な台詞を言ってしまったのは、きっと仕方ない・・・

対話4（後書き）

お疲れ様でした、これにて「対話」は終わりです

新たな伏線が出てきましたが、この時点でグラハルトの正体については全てが公開されたことになります

次回からは少し、時間が飛んでいく予定です

この話の1時間後に、人物紹介と若干の補足の話を予約投稿しております

別段読んだところで本編に影響は出ませんし、内容も面白いものではないかと思えますので、読まなくても特に問題ありません

気になる方はそちらもお読みください

人物紹介と若干の補足（前書き）

累計PV6万件突破記念でございます

3度目となりますが、前回前々回と同様、読まなくても問題はありません

また、つまらないと思われるも仕方ない内容ですので、興味がなければお勧めできない内容となっております

それでも読んでいただけたならば、感謝感謝でございます

人物紹介と若干の補足

設定集のようなもの・・・です

とりあえずは変化したグラハルトのステータスと、サリアのステータス、さらには名前が出てきた学園陣と名前だけしかでてこなかった4人組の紹介です

装備品に関してhも若干の説明を・・・

グラハルト

種族：人間・異世界人

性別：男

年齢：30

身長：180以上（ゲームキャラだからよくわからない）

体重：70キロぐらい（ゲームキャラだからよくわからない）

見た目：イケメン、細マッチョ、白に近い銀髪、作者のイメージは

フィース

職業：^{クラス}ルーンナイト

ステータス：

HP：S

MP：A

STR：S

VIT：S

AGI：S

INT：B

DEX：A

LUK：D

特殊能力：

正義の勘（本能的な部分で殺す・殺さない相手を理解できる）

拒絶反応（今は無くなっている）

謎の情報認識（ステータスウィンドウを見ることができ、現在は見る以上の操作ができない）

HP 限界突破・MP 限界突破・身体能力限界突破・与ダメージ限界突破（それぞれの「人間に可能な範囲」を超えた数値に至ることができる）

形態変化・デュエルナイト（現在は使用できない）

形態変化・デイベインナイト（現在は使用できない）

形態変化・アビスナイト（現在は使用できない）

説明：

ついに全貌が明らかにっ！

前回も言ったような気がするけどとうとう全てがっ！

いや「グラハルト」に関しては本当に前回の話で全てです

「世界」の成り立ちについてはまだ謎の部分を残してありますが、

それはグラハルトとはあまり関係がありません

エドワードとの対話中は仮死状態で、結構な日数を経過していたので、一時は死亡したものと扱われていました

現在はゾンビのごとく復活を果たし、サリアとともに訓練中です

再び活躍するのはかなり先の予定

エドワード

種族：人間

性別：男

年齢：20（死亡時）

身長：181センチ

体重：74キロ

見た目：イケメン、普通体型だが贅肉はあまりない、金髪さらさら、青目、典型的な外人モデルさんみたいな顔

職業：クラス

ステータス：スキルマスター

HP：B

MP：C

STR：B

VIT：B

AGI：C

INT：C

DEX：B

LUK：E

特殊能力：

正義の勘（本能的な部分で殺す・殺さない相手を理解できる）

戦闘の才能・強（戦闘に対する成長速度にプラス補正、通常より効果が高い）

魔導の才能・強（魔法に対する成長速度にプラス補正、通常より効果が高い）

悪運（都合のいい事態に遭遇しやすくなる、変わりに普段は不運な事態に遭遇しやすくなる）

貴族のカリスマ（一部の人間に魅了効果）

説明：

本名エドワードⅡグラトニアスⅡシュトラッサー

ついに名前が公開された貴族さん

わりと初期に出てきたのに全く出番が無かったうえ、名前も今更という残念なキャラ

グラハルトを召喚した張本人で、ある意味ではこの話の主人公
彼自身は魔法ダウンロードを使用するために死亡したのだが、豚貴
族との間に何があったかはそのうち本編で書きます
アリサのために、文字通り命をかけた純愛青年
冒険者としての実力は高かったらしい（１年でスキルマスターにな
れるのは異例、普通は１０年かかってもなれない）

サリア

種族：人間

性別：女

年齢：３６

身長：１７３センチ

体重：５０キロ台らしい

スリーサイズ：Ｂ７５Ｗ６１Ｈ６９

見た目：赤茶色の髪でかなり長い、普段はポニテ、鷹のような鋭い
目つき、若干怖い、顔は美人

職業：パラディン^{クラス}

ステータス：

ＨＰ：Ｂ

ＭＰ：Ｂ

ＳＴＲ：Ｃ

ＶＩＴ：Ａ

ＡＧＩ：Ｃ

ＩＮＴ：Ｂ

ＤＥＸ：Ｂ

ＬＵＫ：Ｄ

特殊能力：

鉄壁の守り（防御率にプラス補正）

防御特化（防御能力にプラス補正）

魔法攻撃耐性（あらゆる魔法攻撃に対して耐性がつく）

状態異常耐性・物（状態異常に対して耐性がつく、病気・自然毒・怪我による炎症など）

状態異常耐性・魔（状態異常に対して耐性がつく、魔法による毒や麻痺など）

強靱な意志・老衰（強靱な意志によって一部マイナス補正を無効化する、老衰による能力低下を無効化）

説明：

本名サリア・エルトリア

世界レベルでも有名なパラディン

本編ではほとんど活躍しなかったが、グラハルトやアルドラを除けば最強の部類に入る人間

完全な防御特化タイプのパラディンで、グラハルトをもってして戦いたくないと言わしめるほどの能力を持つ

現在はグラハルトの訓練につきあっている

地味に親馬鹿、アレックスにちよつと危ない感情を持っている・・・

実は既婚者、16歳のときに結婚している、子供を授かることは残念ながら無かった

旦那は彼女が18歳の時に、彼女と同じ戦場で戦い死亡している、その直後というか帰還途中に襲われていた村で戦闘し、その最中にアレックスを拾った

この辺のエピソードは閑話としていつか書こうと思います

グラハルトにどんな感情を抱いているかは謎というか未定？要望があつたらくつつけるかも？

ライアン

種族：人間

性別：男

年齢：不明

身長：180以上

体重：70キロぐらい

見た目：イケメン、細マッチョ、黒目黒髪、グラハルトそっくり

職業：クラス不明

ステータス：

HP：？

MP：？

STR：？

VIT：？

AGI：？

INT：？

DEX：？

LUK：？

特殊能力：

不明

説明：

本名ライアン・ローレンス

初代学園長として有名な元冒険者、300年前に謎の死を遂げている死因や死亡場所、葬式を行ったかどうかなど、彼の死に関する情報はほとんどが失われている

彼が残した遺産は数多くあり、そのほとんどが強力なマジックアイテムであり、作中に言われたように選定と吸収の効果を持っている。ただしそれが初代の遺産だと明確にわかっているものはほとんど無く、ただの強力なマジックアイテムとして世に広まっている

魔王を復活させて、世界を破滅させるのが目的、とエドワードは本編で語ったが、何があつてそうしようとしているのかは謎
本編で描いていくのでご期待ください

魔王

種族：不明

性別：女

年齢：不明

身長：不明

体重：不明

スリーサイズ：B??W??H??

見た目：金髪で腰まである長い髪、ストレートでサラサラ、顔は絶

世の美女、胸はでかい

職業：クラス？

ステータス：

HP：？

MP：？

STR：？

VIT：？

AGI：？

INT：？

DEX：？

LUK：？

特殊能力：

不明

説明：

300年前、ライアンが生きていた時代に存在した魔王
エドワードによると光輝が呼び出された最大の原因とのこと
ライアンとの間に何があったかは不明
現在は誰もわからない場所で、水晶の中に封印されている

学園長

種族：人間

性別：男

年齢：67歳

身長：172センチ（ただし腰が曲がってるので普段は160台くらいに見える）

体重：62キロ

見た目：真つ白になってしまった髪の毛と髭、量はふっさふっさでハゲではない、優しい顔したおじいちゃん、

職業：^{クラス}スペルマスター

ステータス：

HP：C

MP：A

STR：E

VIT：C

AGI：D

INT：A

DEX：A

LUK：D

特殊能力：

魔導の才能

全魔法適正（全種類の魔法の習得・成長にプラス補正、暴走しづら

くなる)

老衰(肉体的ステータスにマイナス補正)

精霊の試練・魔(魔法の精霊の試練を受け、達成したものに与えられる能力、魔法関連の能力全てにプラス補正)

説明:

本名ファルケン・ナウレア

魔法学園の学園長を勤めている人物

普段はお茶を飲んだるところしか見れない不思議な人物なのが、仕事はきっちりやっている模様

魔法使いとしては最高位の術者として有名なのだが、現在の仕事についてからはほとんど現場には出ていない模様

稀に自ら出向いたりすることはあるものの、本気で戦うことはあまり無い

わりと初期から出ているくせに名前が無かった人物、裏では色々大変らしいが、それが描写されることはきつとない

職業であるスペルマスターは魔法使い・僧侶・ブラックアコライトを経て最後に魔法使いから転職できる職業(140)

魔法と名がつけばほとんどあらゆるものを使える、強力な職業、その分肉体的なステータスが極端に低いという典型的な後衛型

ゲイル

種族:人間

性別:男

年齢:41

身長:186

体重:84

見た目:渋いおっさん、ちょっと暗めの金髪、仕事のできるリーマ

ンみたいな髪型

職業：クラスロードウォーリア

ステータス：

HP：A

MP：E

STR：A

VIT：B

AGI：A

INT：F

DEX：A

LUK：D

特殊能力：

戦闘の才能

魔導の才能・無（自力での魔法が一切使えない）

精霊の試練・剣（剣の精霊の試練を受け、達成したものに与えられる能力、剣を使った場合の能力全てにプラス補正）

説明：

本名ゲイル・イシュゲンスト・フォルナス

レディの父親にして、二流貴族フォルナス家の現当主

貴族云々の話は本編に全く影響しないので省くが、当主としての実力は相当に高い

元々冒険者をしていて、精霊の加護はそのときに手に入れた

ロードウォーリアは剣士・盗賊・格闘家（順不同）を経て転職する職業

物理攻撃のエキスパートで、あらゆる距離で戦闘ができるので、苦手な相手が少ない強力な職業

ただし魔法には弱いので、装備品で補う必要があるという、典型的な前衛型

学園長とは仲が良い

超がつくほど親馬鹿だが、決して何でもかんでも手出しするようなタイプじゃない

獅子は我が子を谷に落とし、昇ってきたものだけ育てる、という言葉があるが、落としておいて心配で自分も落ちていって、いつでも助けられるように影から覗いている感じ

ダリアス

種族：人間

性別：男

年齢：45

身長：177

体重：79

見た目：屋台のおっさん、ハゲ、愛嬌のある感じ

職業：^{クラス}インヴィジブル

ステータス：

HP：B

MP：D

STR：A

VIT：C

AGI：A

INT：E

DEX：A

LUK：D

特殊能力：

戦闘の才能

観察の才能（情報収集能力にプラス補正、観察力・洞察力があがる、

クリティカルヒットがでやすくなる)

精霊の試練・料理(料理の精霊の試練を受け、達成したものに与えられる能力、料理が上手くなる、料理道具装備時に全能力にプラス補正)

説明:

本名ダリアスⅡダリウス

以前に一度だけなぜか出てきた屋台のおっさん

実は世界でも片手で足りるほどしかない、150台の最高職業達成者の一人

レベルはベース87・職業93と、明らかに頭ひとつ抜けているガチで戦うと学園長とかゲイルより強い

微妙な精霊の試練を達成していて、微妙な能力を持っているため、普段は屋台のおっさんとして生きている

しかし料理道具装備時の能力上昇が「異常」に高く、元々の強さと相まって通常状態のグラハルトと互角に戦えるほど強い

彼がそんな実力者だと知っている人物は、仲間を除けばほとんどいない

リリー

種族:エルフ

性別:女

年齢:不明

身長:不明

体重:不明

スリーサイズ:B??W??H??

見た目:緑色の髪が肩甲骨くらいまである、毛先が若干カールしている、スレンダーな体型、エルフなので美形

職業：^{クラス}不明

ステータス：

HP：？

MP：？

STR：？

VIT：？

AGI：？

INT：？

DEX：？

LUK：？

特殊能力：

精霊の試練・？（精霊の試練を受け、達成したものに与えられる能力、詳細は不明）

その他不明

説明：

本名リリーナ・クレセント

名前だけしか出てきていない謎の仲間

名前が出てきた時点でわかっていただけだと思いますが、今後何かしらの形で活躍します

能力などはそのときに・・・

キャラ説明は以上かな？思ったより長くなってしまいました
以下ちょこつと補足

魔法について

対話編においてダウンロード、という魔法が出てきました

これに加えて未来を確立で教えてくれる存在、わざわざ魔法の設定をあんなめんどくさいものにした理由

私の作品まで見ていただいているほど、様々な小説を読んでいる鋭い読者の皆様でしたら、これだけで魔法がどういうものか、それから考えられる世界の背景が想像できるかと思います

飽きることがないように努力して描いて行きますので、様々に想像してもらえたらと思います

装備品について

以前からちよいちよい書いているんですが、装備品に関する情報を少し

ゲーム上だったころは装備箇所は右手・左手・頭・鎧・籠手・足具とアクセ4種、指・腕・首・耳の4箇所

こちらの世界ではそういった制約があまり無いので、わりと自由にカスタマイズされています

アクセももちろん腕輪4つとか全部の箇所に3つずつといったこともされています

ただし動きの邪魔になることが多いことに加え、マジックアイテムは需要と供給が合っており、高額である場合が多いので、一人で複数所持している人物は多くありません

主要な装備品

グラハルトの剣

ファイアーオブアビス

アビスナイト時の剣、黒い刀身で、刃の半分までが片刃、そこから先が両刃になって横幅も倍になっている剣、魔法効果を高める効果がある

デイベインフォース

デイベインナイト時の剣、白い刀身で、両刃、中央に水晶のような透明な物質がある、持っているだけで回復と防御力上昇

はがね
「鋼」「瞬」
またたき

デュエルナイト時の剣、まんま日本刀の形、ゲーム時代は二つで1セットだったので、どちらも同じ能力を持っている、AGI上昇とスキル使用時の威力上昇

兜

各形態によつて若干違うが、全てに追加スキル「恐怖領域」がついている

スキルを発動させている間、一定感覚で周囲の敵にバッドステータス・恐怖が発生する

恐怖状態になると全ステータスが若干低下、消費魔力が増加、一定確立で行動停止といった状態になる

こちらの世界だと、敵味方あまり関係なく発生してしまう
よく使っている「冷気と錯覚するほどの殺気」はこれが原因

アリサの武器

グロウス（Growth）

グラハルトがアリサに贈った剣

ゲーム時代にグラハルトがデュエルナイトで使っていた武器を、こちらの世界でアリサ用に鍛えなおしたもの

グラハルトがゲーム時代に持っていた、この世界では伝説級の鉱石をふんだんに使った一品物

効果は成長、使用者のスタイルに合わせて特殊効果が追加され、武器自体の能力も変化していく

なぜそうなるかはグラハルトにもわかっていない

現時点での効果はAGI上昇・損傷自動修復・回復速度上昇

こんなところでしょうか？

次は8万件突破したときに書こうかなと思っています

人物紹介と若干の補足（後書き）

というわけで、人物紹介がほとんどとなりました

そのうえ不明という部分が多いこと多いこと（笑）

ここまで読んでいただけた読者様には感謝でございます

今回は8万突破時にするべきか、ネタが尽きてきたから10万件まで待つか・・・

あ、その前に飽きられないようにするのが先ですね

今後ともソウケンをよろしく願います

学園生活二年目・共同実習（前書き）

いつもお読みいただきありがとうございます

アリサの学園生活編に戻ってまいりました

少しばかりのんびり系な進行になりますので、グラハルト編との落差が激しいですが、お付き合いいただければ幸いです

この話は特に話の大筋には関係ありませんが、次回の連話までのクッションとして執筆させていただきました
気を抜いて見ていただければと思います

本編をどうぞ

学園生活二年目・共同実習

グラハルトが魔物の軍勢と戦った日から一年

アリサは無事に2年生になっていた

進級試験も一応はあったが、アリサ達の学年は優秀だったようで、一人も落ちることなく進級できたようだ

進級試験の少し前の話だが

グラハルトの死亡という報告が届いた時があった

アリサは驚きこそしたが、何かの勘違いだろうなと冷静に判断したむしろアリサ以外の人間が大いに取り乱したため、滑稽とも思えるその光景が、アリサを落ち着けたのかもしれない

数日後には誤報（生き返ったという報告だったが）が届いたため、それはそれで騒ぎにはなったものの、アリサは特に驚かなかった

しかし周りの人間は、試験なんてそっちのけでグラハルトの話に夢中になっていたため、試験では大変苦労したようだ

アリサ達の学年ではいなかったが、上級生の中には落ちた生徒もいたようで、泣く泣く追試という名の難題を遂行する羽目になったようだ

だがそれも全て過去の話

そんなこともあったなあ、で済むような内容に過ぎない

いま現在のアリサ達にとってはどうでもいい話だ

アリサ達が2年生になったということは、当然新入生が入ってくるということだ

そして今日は、その新入生との共同実習の日

アリサ達も去年体験した、先輩からのありがた~~~~い洗礼をいただける日なのだった

何がそんなにありがたいのかと言えば・・・

「おらぁ走れ走れ一年どもがあっ！

そんな速度じゃ追い付かれちまうぞ！」

「せんぱっ！ちよっ！たすっ！無！理！」

「死ぬ~~~~！」

「ひい！死んじゃうよぉ！誰か助けてえ！」

「はっはっは！それだけ元気ならまだまだ大丈夫だな！
グレイ！追加だ！」

バスカーとマキアが新入生を応援しながら、森の中を颯爽と走っている

新入生は必死な顔で走っているのだが、それもそのはず

彼らの後方、わずか10メートル程度の距離を、地響きが聞こえそうな勢いで追う魔物がいるからだ

「BURUAAA!!!!」

つまるところ、これが先輩からのありがた〜い洗礼だった
毎年恒例の通過儀礼で、アリサ達も例外無く受け取った洗礼だ

ちなみにこの魔物はゴリラ並みのパワーを持つてはいるが、魔物なんて総じてゴリラ並みどころか象並みのパワーがあるので、大して強い存在ではない

一般人なら脅威だが、冒険者や騎士になろうという人間が相手をできない魔物ではない

2年生以上は、パーティーで戦えば負ける相手では無いため、最悪の場合は手助けをするので、この儀式によって死者が出たことはないらしい

しかしそんな事情を新入生が知るはずも無く、出来るのは精々「逃げる」という行為を全力で行うことだけだった

「お、終点が見えてきたみたいだぞ」

「ブハハ！あそこまでがんばりな新入生！」

マキアとバスカーが言って見た先には、二人の女性が立っていた

日光が彼女達の後ろから射しているため、新入生達にとっては女神のように見えただろう

「は・・・はひっ」

「・・・」

「・・・」

「うん・・・まあ一人だけでも返事があっただけマシか」

もはや返事もできないほど疲労した新入生にとっては、その姿を見るだけで精一杯だった

「修行が足りないわね」

「そうですね、修行が足りませんわ」

「僕らが異常だったっていう発想は無いんですかね？」

ちなみにアリサ達のパーティーがこの通過儀礼を行った時だが、全滅という結果を出した
もちろんブルタイガー側が、と言うのを忘れてはいけないのだが

普通はアリサ達が見ているような「逃げる」が正解だし、倒せても逃げるのが暗黙の了解のようなものとして定着している
残念と言わざるを得ないのは、アリサは若干空気が読めないことだった

ついでに言えば全員が全員、単体でブルタイガー5匹くらいなら簡単に相手をできるほどに強かったのも原因だ

見敵必殺

片っ端から倒してしまったせいで、上級生からちゃんとした説明をされてしまったほどだった

「あまりいじめるのも可哀相ですし、助けてあげますわよ？」

「了解」

チャキツというどうやったら出るのか作者的には未だによくわからないありがちな音を出し、二人は自分の武器を構えた

アリスは入学時から使っている双剣を、レディは細身で装飾の美しい片手剣を

二人は飛び出し、新入生達を飛び越え、ブルタイガーの前に立ちはだかる

「新入生、見といたほうがいいぞ
我らが女神様の戦いは参考になるからな」

マキアが珍しく建設的な意見を述べる

だが新入生にとっては貴重な意見であることに変わりはないので、
言われたとおり後ろを振り返る
振り返った先には、確かに「女神」が二人いた

片や流れるように動き、風のようにひらひらと舞う女神
彼女が振るう剣に触れた魔物は、例外なく切断されていく
血が吹き出し、見たくないものが見えているというのに、そんなものが
気にならないほど彼女に目を奪われる

片や魔法という戦いを象徴するような現象を纏い、嵐のように敵を
蹂躪していく女神

氷の塊が彼女の周囲を回転しており、魔物達は近づくことさえでき
ずに潰されていく
ぶつかった瞬間に凍結していき、彼女が歩いた道は繊細な美しさを
感じさせる氷の道と化していた

「すげー・・・」

「綺麗・・・」

「・・・強い・・・」

「・・・でも」

新入生は声を揃えてそう言った

何が言いたいかわかってしまうだけに、バスカーとマキアはすでに苦笑い状態だ

「・・・参考にはなりません」

「ですよね」

「だよなあ」

「だな」

「マキア、適当なこと言わないように」

残念なことに、レベルが違いすぎた

新入生にとって、全く参考にならなかったようだ

しかし全く効果が無かったかと言えばそういうわけでも無い

「でも俺！あんな風になりたいです！」

「私も！先輩、ご指導よろしくお願いしますう！」

「二度と逆らいませんので殺さないでください」

一人だけ明らかに方向性の違う新入生がいたが、実は間違いではない

この通過儀礼は、縦の関係を明確にするために行われる意味が強い
即ち自分たちでは敵わない相手をぶつけさせ、必死になって生き延

びようとする、そしてそれを最後に2年生が倒すことで、2年生の強さを明確にするのだ
自分たちで倒せなかった相手を倒せるという事実が、自分たちと2年生との実力差を明確にさせる
つまり逆らってはいけない相手、として、上級生としての認識をしっかりと持たせるのだ

それがこの通過儀礼の役割であり、過去からずっと続いている理由だった

（ちなみに教師も、この通過儀礼を知っているが、その必要性を理解しているので黙認している）

「・・・調教完了・・・？」

「言葉が悪いですね、教育と言いなさい教育と」

「・・・しつけ？」

「犬かつ！」

「犬がなんだって!？」

「アレックスうるさいですわよ」

「・・・シクシク」

なんだかコントがあったような気がするが、きつと気にしたら負けだ
こうして見事に、アリサ達は新入生からの信頼を手に入れ、通過儀礼を無事に終えた

来年はきつと彼らが同じことをするはずだ

そうやってこの儀式は毎年行われていく

この儀式のおかげで、新入生達是一緒になった2年生に絶対の信頼を抱き、その関係は卒業するまでずっと続いていく

この森は昔はちゃんとした名前があったが、今は誰もその名を呼ばない

この儀式のおかげで、そちらの名前のほうが定着してしまったから今では誰も古い名を知らない

この森は、今はこう呼ばれている

「絆の森」と

この森で告白すると、必ず結ばれる、という都市伝説まで存在する

完全に余談

アリサ達は自分たちだけで解決できてしまっているの、彼らと一緒に行動した2年生は信頼を得ることはできなかった
ただし今でも良い友人関係は築いている、らしい

学園生活二年目・共同実習（後書き）

お疲れ様でございます

内容がないよ・・・やめとこ

親父ギャグしか思いつかない貧相な頭の作者ではございますが、今後ともソウケンをお楽しみいただければ幸いです

今後ともよろしくお願いいたします

学園生活二年目・それぞれの行動（前書き）

いつもお読みいただき、ありがとうございます

伏線の回収と、新たな伏線の発生と、中途半端に伏線回収です

なんとなく最近話がg d g dになってきてる気がしなくもないですが・・・

お付き合いいただけたら感謝でございます

それでは本編をどうぞ

学園生活二年目・それぞれの行動

魔法学園

そこは未来の有能な人材を育てる場所

冒険者・騎士・政治家

様々な道を目指す者たちが集い、時に競い合い、時に協力しながら、将来の目標を達成するために集う場所

そこでは多種多様な内容を教え、それぞれ別の道を目指すものたちを、可能な限りその能力を高めさせる場所

授業は一般的なものを除いて、ほとんどが少数でより深く、専門的に長所を伸ばしていくスタイルをとっている

そのため教員の数も多く、それなりの設備を揃えた施設も多く設置されている

特にトイレやシャワー等といった衛星関係の設備は完璧と言ってもいい

教師・生徒両方の女性陣から、強力な要請が耐えなかったために数多く設置されている

様々な将来のために様々な設備が敷地内に設置されているため、学園内は非常に広く、施設を見て回るだけでも1日を使ってしまうそんな中であって、5分もあるけばどこかしらにはシャワールームが存在する、と言えばどれだけ数があるか想像できるだろうか

当然そんな状況になれば、普段は誰も使わない場所というのが出て

くる

そして、だからこそ使う、という人物も当然出てくる

この日、様々な場所で様々な人物達が、それぞれの想いを抱いてそういった場所にいた

人気のないシャワールームの一室

ついたてによって部屋を区切られ、カーテンで隠されたシャワールーム

その中で、黄緑色の髪を濡らし、普段はふわりとしているのであるう髪を後ろに流し、オールバックにするように水をしばった人物がいた

グレイ♡ティンカー

アリサパーティーの頭脳にして、後方支援担当

後方支援とは言っても、ダークプリーストという特性上、攻撃・回復・支援・敵能力低下という何でもござれの万能人物

非常に頭がキレル存在で、地味な役回りだが非常に有能、いなくてはならない中核的な存在

残念なのはその頭脳に対して、作者の頭脳が追いつかないということとだろうか

恐らく彼が頭脳で活躍する場面は絶対に描かれないうという、非常に残念な人物だ

超がつくほどレアな特殊能力「幸運」を持っているのに、現実には不運という悲しい存在

「なぜか寒気がしたな・・・もう少し浴びるか」

彼は蛇口をひねり、温水を頭から浴びる

頭から温水が流れそれが体を伝っていき、体に熱が伝わるのを感じながら、独り言を呟きはじめる

「・・・蒼犬死亡の話聞いたときには肝を冷やしたが・・・誤報で良かった

ここまでは概ね予想通り・・・といったところか」

人は考えを口に出すことで、頭の中が整理されることがあるという彼はそれを身をもって理解しているので、こうやって独り言を呟くことが多い

もちろん人のいない場所を選んでるので、周囲から不審がられることはない

さらにダークプリーストという職業は、盗賊の下積みが必要とするそして盗賊という職業は、気配察知能力に長けた成長をする場合が多く、スキルもそれに関係するものを覚える

そのスキルを使って、周囲に人の気配、近寄ってくる気配さえも無いことを確認したうえで呟きだった

「魔物の数が異常に増えていたのは予想外だったが、蒼犬の強さはそれ以上に予想外だったな

ライアンが魔物を倒したのも予想外だったが・・・」

再び蛇口をひねる

キュツという小気味良い音をたてて、温水の流れを遮断する
再び濡れた髪を掻き揚げ、髪をオールバックにして水を絞る

「・・・何にしても、予想より事態の推移が早い
学園トップの座は4年になってからで良いかと思っていたが・・・
計画の前倒しが必要だな」

シャワールームを出て、近くにかけてあったタオルを手に取り、頭
をガシガシと拭き始める

「今年中・・・遅くとも3年生のうちには・・・それまでに事態が
動かなければいいんだけど、ね」

頭を拭き終わり、体を拭き始める
換気用の窓からふわりと風が入り、彼の髪をふわりと持ち上げた

黒い模様が、髪に隠れた後頭部に描かれていた

「里帰り？」

闘技場のような形をした模擬戦場で、アリサとレディ・バスカーが
そう言った

「そう、里帰り」

それに返事を返すのはマキアだ

アリサ達がいる模擬戦場は、授業以外では普段人気が無いエリアになっっている

理由としては、このエリアだけでも結構な広さがあり、ここまで来るだけでもそこそこの時間がかかるからだ

それに加えて、2年生以上は実践訓練として街の外に出る授業も多くあるので、模擬戦をする意義が少ない

1年生が使うことも稀にあるが、ほとんどの場合は新しい環境に適応している途中で、厳しい授業内容に慣れていない、なので滅多に来ない

そういう理由から、この場所を普段から利用しているのはアリサ達くらいしかないのだ

（ちなみにアリサ達は全員がかなり早い移動速度なので、授業に遅れる心配なく、よく利用している）

「また急な話ですわね、どういう理由ですの？」

レディが率直にマキアに尋ねる

マキアは若干、苦い顔をしながら理由を話し始めた

「いやあ、実は前から言われてはいたんだよ

でもほら、俺頭悪いからさ、1年のときはそんな暇なかったんだけど・・・

2年になって少しは余裕が出てきたから、また余裕が無くなる前に行っておこうかな」と

「うん、この時期に行く理由はわかった

でも、行く理由がわからない」

そう返すのはアリサだ

確かに、と隣でレディが頷いている

「ん、種族的な理由なんだよ

俺ら炎鬼族ってのはさ、一人前と認められたら奥技を授けられるってゆー伝統があるんだよ

俺の場合、一族ほったらかしにして出てきちゃったからさ、学園に入るのが一人前の証・・・ってゆー条件だったんだよね」

「ブハハ！それでおめー冒険者やってたのか？」

「そうそう、集落を飛び出したのが13のころで、入学条件が16じゃん？」

それまで腕を磨いておこうと思って・・・ごめん正直に言えば金が無くって冒険者始めたんだよ」

「か・・・軽い理由ですわね」

「ふん」

「まあそんでさ、俺一人じゃ入学なんて無理だったと思うわけよ
実際2年連続で落ちてたし

でも今回入学できたのは、みんなのおかげだと思ってるんだ」

「ブハハ！確かにグレイが声かけてくれなかったら俺も落ちてたかもな！」

謙遜などではなく、バスカーは本気でそう思っているようだった

言い方こそ軽いが、その表情は笑っていない

「だろ？だからなんていうかき、お礼じゃないけど・・・みんなを紹介したいんだ

あ、俺んちつて集落じゃ結構良い立場だから、美味しい飯くらいは出せるぞ？」

真剣な表情になって言う

実はマキアの真剣な表情というのは珍しい

普段は常に薄く笑いを浮かべ、戦いとなれば笑いをいつそう深くして楽しむように戦う

その微笑と、整っている顔立ちから、上級生下級生を問わずに密かなファンクラブができてるのは余談だ

珍しい彼の真顔、それほど真剣に言われて無碍にするほど、アリサ達も薄情ではない

「わかった、行こうか」

アリサの同意だけで、全てが決まった

「ま、あなたがそう言うなら行ったほうがいいんでしょうね」

レディはアリサの力を一番理解している

アリサが行くと言えば行った方が確実にいい結果になるということを知っているのだ

もちろん全てが上手く行く、というわけではないが、確実にいいことが起こるということを身をもって体験している

「ブハハ！俺も行くでしょう！」

「ありがとう、みんな
詳しい話はまたあとでするよ」

マキアの故郷、炎鬼族の里

帰るべき場所を思い出し、マキアは遠くを見つめた

「・・・来ましたか」

魔法実験室、と呼ばれる数ある教室の一つ

数ある教室の中でも、授業以外で近づく人間が誰もいない教室
ここは普段、魔法の基礎を教え、それを実践するための部屋だ
だが昨今の魔法学園では、全く魔法を使えない人間というのは珍し
く、使えなくても素質だけはある、という人物が多い
そういった人物は、書物や授業の話聞いただけである程度使える
ようになるし、感覚を掴むだけなら自分の部屋や中庭で事足りる
逆に完全に魔法が使えないタイプの場合、やるだけ無駄と諦めて全
く近寄らない

そんな理由があって、授業以外で近づく人間は誰もいないのだ
しかしこの日は違った

声を出した学生以外にも、もう一人がこの部屋に来ていた

重鎧と言えるほどに追加装甲が付けられた元軽鎧
トレードマークとも言える、人間程もある巨大な盾
それに似つかわしくない、短剣を腰に挿している

アレックスだった

「何の用ですか、先輩」

アレックスは目の前の学生にそう尋ねる

学生は見たことも無い紺色のジャケットとズボンを着ている
アレックスにとっては、であって、日本人であれば学生のトレード
マークとも言える服装だった

学生服といったらこれだろう、というほどに学生服らしい学生服を
身につけ、3年生を意味する赤い腕章をつけている

黒目黒髪で日本人的な顔立ちは、どこか怪しい気配を放っている

「・・・腹の探り合いはやめようか、苦手なんだ」

「そうですか、実は俺もです」

「ははは、気が合いそうだね」

「残念ですが、僕は全くそう思えません」

「ありや、こりや厳しい

・・・そう睨まないでくれよ、敵じゃない・・・と思うから」

「どついう意味ですか？」

「・・・僕は異世界の人間なんだよ」

この瞬間、グラハルトのステータス画面には、進行したことを意味する黄色い点滅が発生していた
点滅したクエストの名称は

「異世界の学生」

しかしアレックスには、そんなことを知る由も無かった

学園生活二年目・それぞれの行動（後書き）

お読みいただきありがとうございます

もう少し学園編は続きます

その後はアリサ側の連話を投稿していく予定です

なんとなく、話に飽きを感じさせてしまいそうな内容なのですが、勉強していきますので、今後ともよろしくお願いいたします

今後ともソウケンをよろしくお願いいたします

学園生活二年目・異世界の学生

「・・・僕は異世界の人間なんだよ」

普段は誰も使わない教室の1つ

日本人的な黒目黒髪で、日本の学生が一般的に着ている紺色の制服を着た青年はそう言った

彼の目の前に立っている、アレックスに向かっての発言だった

「異世界・・・ですか」

「あんまり驚かないんだね？つてことは蒼犬さんから何か聞いてるのかな？」

「っ！グラハ・・・蒼犬がどういう存在か知っているんですか？」

「まあ全部つてわけじゃないけど・・・」

教室の真ん中に立っていた青年は、手近にあった椅子を引き寄せ、そこに腰掛ける

背もたれを体の正面に持つてきて、行儀の悪い感じの座り方だった

「君も座りなよ、長い話だし」

あごでアレックスのいるあたりを示し、座るように促す青年
その表情は人当たりの良さそう、それでいて怪しい雰囲気を感じさせる

「・・・では失礼します」

「ああ、そんなに堅苦しくならなくていいよ、僕は前世でも今世でもそうというのはあまり気にしないからね」

「いえ、癖みたいなものですから、気にしないでください」

「そっか、じゃあそうしよう」

自己紹介、まだだったよね？

僕の名前は・・・こっちではケビンって名前だよ、ケビンⅡデュラス
向こうの名前は・・・いるかい？」

「アレックスⅡエルトリアです
必要ならお聞きしますが？」

「じゃあいいや、関係ないし、向こうの話はするつもりもないしね」

にこにことした顔のままでそう話すケビン
だがアレックスには、どうしてもその笑顔が信用できなかった
不安、という言葉しか思いつくことができない

「それで、どういった用件ですか？」

一応の警戒をしつつ、すぐに動けるように体の力を抜いておく
緊張状態では筋肉が固まってしまい、咄嗟に動くことができないこ
とを知っている

それくらいの感情を抑えることは、アレックスにとって容易いことだ

「話っているのは・・・まあぶっちゃけてしまえばアリサさんのこ

とだけだね

・・・そう怖い顔をしないでくれよ、別に何かしようってわけじゃないんだから」

「信用できません」

青年が言った通り、今のアレックスは睨むような視線をケビンに向けている

アリサの名前が出た瞬間、咄嗟に盾を構えようとしたくらいだった

「はつきり言うね、どうしてそんなに信用できないんだい？」

睨むような視線のまま、アレックスは返事を返した

「理由はいくつかあります

あなたは僕らを、正確にはアリサをよく見ていますよね

でもあなたから近づいてきたことは一度もない

アリサは万物の才能持ちです、アリサにとって得になることなら、あなたにどんな理由があろうと一度は接触しているはずなんですよ」

ケビンは納得したように頷く

「なるほどね、万物の才能にそんな能力があつたとは知らなかったな」

「一度も接触していない、ということは、アリサの得にはならないということですよ

そうであるならば、あなたが避けていれば接触することはまず無いでしょう」

「ふむ、確かに僕は避けていたね、理由はもちろんあったけども」

「さらに言えば、あなたは入学時、成績トップグループの一人として入学している

万物の才能持ちであるアリサには、そういった人間はほとんどが一度は接触しています

接触していないのはあなたと、あなた以外ではあと二人しかいないんですよ」

今度は驚いたような表情をして、少し考えてから返事をした

「それは驚いたなあ、っていうか君よく覚えてるね？

・・・ん？そんだけ知ってるってことは、よく一緒にいるってことかな？

もしかしてアリサさんのこと好きだったりする？」

今度はアレックスが驚いたような表情をする

この流れでそんなことを言われるとは思っていなかったようだった

「そ・・・そんなことは関係ないでしょう!」

「照れるなよ、若いつていいねえ」

見た目20にも満たない人物に言われるのもどうかとは思いますが、茶化すように彼は話した

「こっちは前世から数えて36歳、もう青春できるほど若くないからなあ、羨ましいわ」

ちなみに彼は16歳で入学しているので、3年生である現在は18

歳である

「いや・・・まあ・・・好き・・・ですけど・・・」

アレックスは言い終わると同時に、ボツと言っ音が聞こえそうなほどに顔を真っ赤になってしまった

「・・・もう少し世間話とか恋話コイバナもしたいところだけど
そろそろ本題に入ろうか」

そう言っケビンはやめた

それと同時に緊張感が漂う

アレックスも真顔に戻り、真剣に話を聞く体勢になる

しかし不思議なことに、先ほどの不安な感じをケビンから感じることは無くなっていた

「聞かせてください」

彼が語ったのは、なぜ自分がここにいるか、という話題だった

もちろん彼が最初に言っ通り、前世の話は全くせず、彼が何を知って何をしようとしているのかだった

「僕は・・・前世の知識が残っていてね、おかげでこの世界では天才として生きてきたよ

万物の才能が出ていないのが不思議なくらいだってよく言われたなあ
前世でも格闘技とかはやっってたから、戦闘方面もそこそこ強かった

し、良い師匠にも恵まれた・・・ああ、こんなこと聞いてもしようがないよね」

軽く雑談をしながら話す彼だが、その表情はどこか他人事のようにだった

「まあこの学校に来るのは10歳くらいのころには決めてたよ、家もそれなりに裕福だったし、冒険者も経験してたしね
その冒険者時代に・・・15歳のときだね
ある施設を見つけたんだ」

「ある施設・・・？」

「そ、はつきり言つてこの世界にはありえない施設だったよ
その奥には特殊な装置があつて・・・まあ君には関係ない話だけでも、もう二度と元の世界には戻れないんだなつて理解しちゃったんだよね

そしてそこで僕は、色々と知っちゃったんだよ」

他人事だった表情は、だんだんと生氣を取り戻してきたように明るくなつていく

まるで自分の人生がそこから始まったとも言いたげな表情だった

「きつと何人もそこには来てたんだろうけど、誰もその装置をちゃんと動かせなかったんだろうね

ちゃんとした操作がされた形跡が無かった

おかげで僕はちゃんと情報を調べられたわけなんだけど・・・

ああ、ごめんごめん、また脱線しちゃったね」

悪い癖だなあ、と言いながら笑う

苦笑いを浮かべ、手を顎に当てて器用に肘を背もたれの上部に乗せる

「結果から話せば・・・装置の使用した履歴が残ってて、そこに誰が何を使っただかが全部記載してあったんだ

今から5年前・・・いやもう6年前か、ある人物が蒼犬ことグラハルトを召喚したこと

300年前に初代学園長が特殊なシステムを組んだこと

そしてそれぞれが・・・確立計算システムに何を計算させたのかの全てが・・・ね」

「初代・・・？」

「そう初代さ

君はこないだ魔物の大侵攻があったって話は知ってる？」

アレックスは険しい表情をして、なんと答えるべきか悩む

大侵攻の件に関しては、親であるサリアから手紙をもらっていたので、周囲より先に知っていた

もちろんグラハルトと一緒に戦うことも書いてあったので、特に心配はしていなかった

そして世間一般では、グラハルトが死んだことは報じられていても、魔物の大侵攻があったことはあまり知られていない

もちろん知っている人物は知っている、程度の情報ではあるが、自分の国が公にしていない以上、自分からあまり話したくない内容でもあるのだ

「・・・言い方を変えようか、蒼犬が死んだと思われた原因を知っているかい？」

「・・・いや」

これは本音だった

原因については徹底的とも言えるほどに、あらゆる情報がつぶされている

現状その事実を知っているのは、グラハルトと共に戦った砦の騎士団と、その騎士団を抱える国の王とその側近だけだ

「恐らく、初代が復活したのが原因だろうね
少なくとも履歴からの情報を整理すれば、そういう考えになる」

「・・・何が言いたいんですか」

「初代の目的は・・・恐らく魔王の復活、そしてそのためには、アリサさんを何らかの形で利用しようとするはずだ

・・・正直に言えば、僕はアリサさんなんてどうなっても良いと思ってる

でもそれをやらせてしまうと、僕の周りの僕の大切な人たちを守れないんだ

だから僕は抵抗したい、アリサさんを初代の手に渡したくはない」

「・・・もう一度、質問させてもらえませんか」

「なぜアリサさんに近寄らなかったか？ってヤツかい？」

「そうです」

「・・・結果から言うなら、アリサさんには不利益になるから・・・かな？」

ケ빈は非常に難しい表情でそう言う

「不利益・・・ですか？」

「僕の考えた通りに事態が進めば、恐らくそうなる
だから僕は、自分の決心が揺らがないように彼女を避けていた
恐らく万物の才能も、その辺を感じ取っていたんじゃないかな？」

「それは一体どういう・・・」

ケ빈は険しい表情になっていく
何かを言いたそうで、それが言いつらいことのようにだ

そして意を決して、大きく息を吸い、その言葉を口から出した

「・・・僕の予定通りなら・・・アリサさんは・・・」

その一言は、アレックスにとって衝撃だった
聞いたあとで後悔してしまうほどに、なぜ聞いたのかと考えるほど
に、未来というものを知らないほうがよかったと、アレックスは人
生で初めて思った

「消える」

その言葉には、嘘や冗談など全く感じられなかった

閑話・ケビンⅡデュラス（前書き）

いつもお読みいただきありがとうございます

ケビン君の閑話でございます

あまり内容が無いので軽く読んでいただければと思います

読まなくても問題ないっちゃ無いです

閑話・ケビンⅡデュラス

異世界転生

小説やネット小説なんかではよくある設定

神様の不手際が原因だったとか、何の因果もなく突然そうになったりだとか

彼の場合は後者だった

理由もまったくわからず、ある日気がついたら突然そうになっていたそうしか言えないほどに、寝て、目を覚ましたらそうになっていた周りには見たこともない人間ばかりで、家は明らかに自分の住んでいた場所とは違う場所
両親と思われる人物は、かつての自分の両親とは何もかもが違いくる別人だった

ケビンⅡデュラス

彼は前世とも呼べる記憶を持ったまま、この世に生を受けた

この世界において、文化レベルは決して高いとは言えない
あくまでも彼が生きていた時代と比べれば、と言う必要があるが

彼が生きていた時代は現代とほとんど変わりがない

違うことと言ったら、とうとうナノマシンという人類の夢見た技術の一つが実を結び、実用段階にまで移行していたことだろうか

ナノマシンとは文字通り、ナノサイズ（10の-9乗）の大きさしか持たない部品や機械を指す場合が多い

少なくとも、一般的な認識では「目に見えないほど小さな機械郡」というのが常識だろう

そういった意味で言えば、この時代のナノマシンは非常に大型であり、砂粒程度とはいえ確実に目視できる程度のサイズだった

実際にはナノマシンというよりも、ミリマシンとも言ったほうがよさそうな大きさだったのは間違いない

だがその有用性は非常に高く、特に建築関係においては非常に効果的だった

なにせ多少のひび割れ程度であれば、十分な量のナノマシンを散布して、一定のプログラムにそって配置させてやるだけで補修が完了する

高額であつたとはいえ、手間も作業員も、何よりも職人が培ってきた技術というものがいらぬ、というのは需要が高い

彼がこちらの世界に来る直前などになれば、建物ひとつがまるごとナノマシンで出来ている、などという建物さえ完成していた

ちなみにこの建物、10階建てで総面積3000平米という大規模建築物だったのだが、なんと全体工期が3ヶ月というありえない短期間で竣工した

詳しい原理や、その高度なプログラム技術については謎が非常に多いのだが、有用性の高さによってあまり着目されることもなかった

逆に一気に業界が活性化してしまったため、様々な問題が一気に現れたが、それを考えてもナノマシンの有用性は非常に高かった

その不透明性と、大量の問題を抱えた状態によって、建築業界以外にはあまり大きく普及しなかった

そういった事情もあり、現代と大きく変化した点はそれほど無かったと言えるだろう

彼が生きていたのは、そういう世界だった

それなりの生活をして、それなりの学生だった彼は、それなりの一日を終えた次の日には、異常とも言える世界に飛び込んでいた

現代知識を持っていれば、この世界の理屈や魔法の使い方は理解が早い

特に彼は学生として優秀なほうだったので（ついでに顔もそこそこ良い）、天才と言われていた

生まれも悪くない家だったこともあるだろう

一般教養は若いころから叩き込まれたし、剣だって持たされていた
いい師匠を両親がつけてくれたので、剣も魔法も使える天才的な人物として、周囲からは褒められていた

そんな彼が、魔法学園の入学、ということを決めるのは自然な流れであったといえよう

魔王が存在している（らしい）という話であれば、一人でも優秀な

人材をさらに育て上げるのは、世間的に義務に近い風潮があった
彼自身、地方という枠に収まっているつもりも無かったし、自分の
世界に戻るなら戻りたいと思っていた

だから魔法学園で勉強し、世界を回って色んなことを知りたいと思
っていた

10歳のときには自ら志願し、魔法学園への入学を決めていた

彼が14歳を迎えたとき、彼の両親は師匠と一緒になら、という条件
付きで冒険者になることを許した

学園に入る前に実力をつけておく、という名目もあったし、彼の力
は領地内に留めておくのはもったいないという判断だったらしい
一応すんなりいったわけではないと説明はしておくが、内容はそれ
だけで一つの物語が出来てしまうので割愛させていただく

それから2年間、海を越えたりはしなかったものの、各地を巡って
活動していた

途中「蒼犬」の噂をよく聞いて、会ってみたいとは思っていたが、
結局一度も会うことはできなかった

15歳のとき、何の気なしにふとある依頼を受けたことによって、
彼の人生は大きく変化する

内容は遺跡調査だった

特に何の変哲もない、よくある内容だったし、報酬もいたって普通
だった

しかし彼は、その依頼に添付された資料を見て驚愕してしまった

遺跡の入り口を模写したのである。う絵がいくつか一緒にあり、魔法でも使ったのか、妙にリアルな絵だった

その絵に描かれている遺跡の入り口

そこには、この時代ではありえない装置が映し出されていた

周囲は森らしく、入り口全体を見渡す絵には大量の木が描かれている。どうやら地下に向かって作られた施設らしく、入り口の上にはびっしりと木が生えている

重厚な鉄製の扉が入り口を塞いでいる絵、しかしその扉には、取っ手がどこにも見当たらない

入り口を斜めから写したのである。う絵、その絵には、扉の少し手前、人間の胸くらいの高さにそれがあった

ボタンがいくつも並べられ、かつては映像を映し出したのである。う画面

現代においてはよくあるが、この世界では考えられない装置。パスワードを入力するための、テンキーが備えられた装置がそこに存在していた

彼が依頼を受け、その遺跡に着いたときにはまず啞然とした。恐らく誰もパスワードの入力を理解できなかったであろう、扉は無残なまでに破壊されていた

中に入ってみれば、ドアというドアは片っ端から破壊されている。これでは何も手がかりは手に入れられそうにないと思っていたが、

逆に不思議だと感じた

なぜこれだけドアを壊され、明らかに中を物色されているというのに、依頼がまだ存在したのだろうか

普通に考えれば、これだけ散策されていれば遺跡の調査依頼が残っているはずがない

なのにいまだ残っているということとは、まだ手付かずの部分があるのではないか？

そこまで考えた彼は、周囲を一切無視して、最奥部を一直線に目指していった

そして最奥部

そこには一際重厚な扉が設置されていた

まるで金庫のような巨大な扉

大銀行の奥にある（といっても彼はTVなどでしか見たことがないが）ような、巨大な金庫

かつて散策したものがたちが破壊しようとしたようで、あちこちが焦げ付いたり、細かな傷ができていたりする

だが、壊された様子は全くない

ただひたすらに、何かを守るように、そこに存在していた

唐突に、機械音が周囲に鳴り響く

「声紋認証ヲ開始シマス、登録者デアル場合ハ、登録番号ノ入力デモ許可デキマス」

日本語だった

彼は懐かしい言葉に感動さえ覚えたが、一緒にいた師匠はまるで理解できていなかったのを見て、顔には出さなかった

しかしものは試し、とばかりに、答えてしまったのが功を奏した

「あゝ、あ、あ、あ……こんな感じの声だったかな？」

前世の自分の声を思い出し、日本語で言ってみる

日本語にしたとたん、自分でも驚くほど前世の声にそっくりだった

「照合中デス……認証完了、ヨウコソ四乃神博士、通行ヲ許可シマス」

呆氣にとられてしまった

自分の知らない自分を、機械は呼んだ

不安も恐怖も感じたが、彼は先へと進むことを選んだ

この不安の正体も、自分が知らない自分のことも、この扉を潜った先に答えがあるような気がしたから

ケビンⅡデュラス15歳

この日、彼はこの世界の始まりと、終わりを知った

閑話・ケビンⅡデュラス（後書き）

この話を投稿して思ったこと

ケビンだけで外伝作れるっ！？

うん、まあそれと言ったら光輝君もそうか・・・

作る・・・？いや無理です、すみません

今後ともソウケンをよろしくお願いします

炎鬼族の掟1（前書き）

新たな連話スタートです

まずはマキア編！

あまり長くはなりませんが、馬鹿なのを全開で展開していく予定です
ので、楽しんで読んでいただけたらと思います

それでは本編をどうぞ

炎鬼族の掟1

「あぢい・・・」

バスカーが頂垂れながら山道を歩いていた

バスカーだけではない、アリサも、レディも、グレイにアレックスも一緒に歩いている

先頭を馬鹿みたいに・・・間違いがあった、馬鹿が走り回っている先頭にいるのはマキアだった

「獣人にこの暑さはつらそうですわね」

そう、暑いのだ

彼らが歩いているのは、山は山でも普通の山ではない
活火山の山道、しかも世界でも有数の巨大な火山の麓を歩いていたのだった

アリサ一行は多少なりとも暑さにより疲労しているが（馬鹿一人除く）、バスカーは一際だった

犬のように下を出して少しでも体温を下げようとしているし、汗も尋常ではないほど出ている

「ぜー・・・はー・・・あの野郎・・・覚えてやがれ・・・」

「気持ちはわかる・・・、わかるが、あいつが炎鬼族の時点で見つけてもよかったな」

バスターがあんまりな発言をするが、グレイに窘められる

確かに炎鬼族は炎と熱を吸収できるという特性がある

で、ある以上は、その住処は自然とこういった場所に近くなるのは容易に想像できたはずだった

もちろん考えていなかったわけではないのだが、周囲の熱気は想像していた以上だった

「おおーい！集落が見えたぞー！」

一人だけ元気な馬・・・いやマキアがそう声をあげ、だいぶ先のほうでぶんぶんと手を振っていた

「・・・あの野郎・・・死なす・・・」

「やめておけ・・・、ここでは勝ち目がない・・・気がする」

バスターほどではないが、グレイも結構辛そうだった

暑すぎる熱気は、肉体よりも先に精神に影響を出していたようだ

「里帰りですか」

「そう里帰り、他のみんなはいって言うてくれたんだけど、どうよ？」

「どうよも何も、みんな行くなら行くに決まっているでしょう」

時は少し遡り、魔法学園

その教室の一つで、これから講義が始まるうとしている少し前、所謂休憩時間というやつだった

その時間に、マキアが 그레이 に話しかける

「おっけー、そんじゃあとはアレックスだけか」

「ああ、アレックスは聞く必要が無いでしょう」

「ん？なんで？」

「アリサがいるなら来ますよ」

「え、そうなの」

「そうなんです」

事実、その後一応話をしてみたが、1も2もなく即答で行くとの答えだった

恐るべきは 그레이 の洞察力なのか、アレックスの純愛なのか・・・

それから1週間後、遠征の申請を学園に提出し、馬車も使わず徒歩でマキアの里を目指して出発することになった

だが重大なことを今まで誰も確認していなかったことに 그레이 が気づき、あわてて確認する

「マキア、どこを目指して行けばいいんだ？」

「ん？言っ てなかつ たっ け？」

「聞いてない、誰か聞いたか？」

この会話に、首を縦に振ったものはいなかった

「あれ？悪い悪い、まあ目立つから別に言う必要も無いよ、あれだし」

そういつてマキアはある方向を指差した

指の方向にあるのは山、そして山、その次に山、つまり山しか見えない方向だった

「・・・どれだよ」

誰が呟いたのか、全員が思っていることが言葉になった

「どれってあれだよ、あの火噴いてる山」

火を噴いている山、と聞いて全員が一瞬固まった

その山は霊峰とまで呼ばれる巨大な山で、今まさに活動をしている活火山だ

といつても何十年も噴火しておらず、学者の研究結果によると向こう100年は噴火しないであろうと言われている山だ

しかしその巨大さゆえ、魔法学園と、その学園の周囲に広がる都市からは、どこにいても見える、というほどに巨大な山である

一番最初に頂垂れたのは、バスカーだった

「・・・最初に言ってくれ・・・マジで・・・」

ということがあって、彼らはマキアの里帰りという名前の、活火山ハイキングという危険行為を行っていた

道中魔物に遭遇こそしたものの、彼らにとって敵になるような魔物は出なかった

それも山に入るとピタツと出なくなったので、今では安心してハイキングを行っている

体調管理という別の危険要素は出てきたわけではあるが・・・

さすがにこの状況で野宿でもすれば、バスカーが脱水症状で死んでしまうと判断し、一行は早々に集落に到着するように移動していた
そして集落が見えたというマキアの言葉通り、集落が見える位置に全員が移動する

「あれが・・・」

「そ、あれが炎鬼族の集落、俺の故郷さ」

「すごいですわね・・・」

その場所は、異様とも言える光景だった

基本的にこの辺は、溶岩が固まったのであろう、周囲は黒い岩が転がり、斜面も基本的に灰色か黒色だ

だがその周辺だけが、まるで宝石をばら撒いたかのように色とりどりの空間だった

いや、実際に宝石なのだ

ばら撒いてはいないが、大小様々な宝石が各所に散りばめられている色のついた水晶のようなものがあちこちから突き出し、それが山肌をくりぬいたような空間にびっしりと生えている

くりぬいた、と言ってもその奥行きは相当にあるのがよくわかる貫通してどこかにつながっているのではないかと思えるほどに巨大な空間が広がっている

水晶が光を反射しているのか、一番奥にある祭壇のような場所まで、遠目でもはつきりとわかるほどに明るいのが印象的だった

「入り口なんてあつてないようなもんだけど・・・

えーつとあつた、外の人間はあそこを通つてもらふことになつてゐる」

そう言つて一行がその方向を見ると、確かに関所のような場所が存在した

存在したのだが、 그레이が違和感を覚えてしまう

「マキア・・・あの道はなんだ？」

道があつた

それは関所を通り、村の中へとつながっている

それは当然というか、普通はそうなっているのだから不思議ではない不思議なのは、その反対側

道の反対側を目で追っていけば、真っ直ぐ向かった先にあるのは彼らがよく知るものが見えた

「なんだって、道に道以外の何かあるか？」

「うむ、聞き方が悪かった

あの道はどこに繋がっているんだ？」

グレイの発言に、全員がその道を見て、道の先を見て、その先にあるものを見た

「どこって・・・どこだろ、俺この道歩いたことないからわからん」

その先にあったものは

魔法学園だった

正確には魔法学園を抱える都市が薄っすらと見える

そして視力のいい者なら、その道が紆余曲折あったすえに、魔法学園へと繋がっているとどこまで見えたはずだろう

「てめえ・・・まじで死なす・・・」

「うわぁ・・・遠回りしたっばいですね」

「うん、一回死んでみるかねマキア君」

男性陣の物凄い殺気がマキアを襲う

「いやぁ・・・ははは・・・どうしたのカー三人トモ、カオガコワイヨー？」

マキアがお約束という制裁を受けようとした・・・が

「待て！！！」

乱入者によつて、お約束という何者にも破られてはいけない鉄の錠は破られてしまった

乱入者は上からマキアの前に着地する

着地する、と言うと少し語弊がある

炎の塊のようなものが二つ、目の前に降り立ったのだ

それはすぐに人のような形を作り上げ、男と女の一人づつが現れる
もちろん火のような姿ではなく、確かな肉体という物質となつて

「ここは我々炎鬼族の聖域だ！下賤な人間どもよ！即刻立ち去るがいい！！」

男のほうが見た目どおり暑苦しい声でそう言ってくる

女のほうもアリサ達を睨み、今にも襲い掛かろうと構えている

アリサ達もとつさに構え、戦いが始まるうかとしたときだった

「お、二人とも久しぶりだな

元気してたか？」

「は？」

「え？」

目の前の二人に、マキアが軽く声をかけた

「若！若ではございませんか！！！」

「お帰りになったのですね若！お帰りなさいませ！！！」

二人の態度が急変したのだった

あまりの突然な態度の変化に、呆気にとられたアリサ達は、戦闘態勢のまま硬直してしまう
そして一言

「「「若！？」」」

「・・・バカ？」

最後の発言がアリサであつたのは言うまでもない

炎鬼族の掟1（後書き）

若干ギャグパートっぽく進めていく予定です

私の感性と読者様の感性が合えばいいかなと思いますが、それを表現できるだけの才能が欲しい・・・

今後ともソウケンをよろしくお願いします

炎鬼族の掟2

「若！早く族長の元へ！」

「そうですぞ若！人間どもは我々にお任せください！」

炎鬼族の集落

アリサ達の前に現れた、若干空気の読めない男女がマキアに向かって言っていた

「若を誑かそうとしたようだが、我々に見つかったのが運のつきよ！」

「その通り！若には指一本触れさせはしない！」

「炎鬼族って馬鹿しかいないのか・・・？」

最後の発言はグレイのものだが、小声だったので二人には聞こえなかった

「待てて二人とも！そいつらは俺の仲間！友達！同じパーティー組んだんだって！」

マキアは一応とめているのだが、二人はやはり空気が読めなかった

「若！騙されてはなりませんぞ！人間なんぞが仲間であるわけがありません！」

「そうですぞ若！仲間のふりをして若を利用しているに過ぎません！」

二人は聞く耳もたず、といった様子で、馬鹿・・・もとい若と呼ばれたマキアを守るように立っている

炎鬼族は閉鎖的な生活をしているせい、独自の文化と考え方を持っているとはいえ、二人はかなり偏見的思想を持っているようだった

「・・・いい加減」

スツとアリサが前に出る

両手にはすでにグロウスを構え、いつでも振れる状態だった
そしてそれが一瞬ブレたかのように動く

「・・・話くらいは聞いて」

フワツと風が起こる

何が起こったかわかったのはアリサ達だけだったようで、目の前の男女は頭に疑問符を浮かべている

「なにを・・・」

している、と言いかけて男は言葉に詰まった

アリサの目を見て、彼女の瞳に輝く虹色の環を見つけてしまったから

「お前ら二人とも、足元見てみる」

「若？」

マキアが二人にそう言い、二人は大人しく言われたとおりに足元を見る

「これは!？」

二人の足元、足の間の地面に傷ができていた

剣で斬ったようにスッパリと、縦に切れ目が入っている

しかもそれは、そのまま高さを変えていれば、自分たちを真っ二つにしていただろうというほどの長さだ

全く気づかなかった、剣を振ったのも、物を切った音も、何も感じなかった

目の前の女性が本気で剣を振れば、自分たちなど一瞬で殺されるその事実気づいた二人の顔を、冷や汗が流れていく

「もう一度言う、彼女達は俺の仲間だ、手を出すな」

「・・・ハッ！畏まりました!」

女のほうがそう答えたが、男のほうは硬直したまま動かなかった

「マキア！よくぞ帰った!」

集落のある洞窟の中、その中でも一番奥にあるテントの中で、豪快な声を出してマキアに声をかける人物がいた

テントと言っても一般的に想像する三角形のテントではなく、遊牧民などが使うタイプに近い

モンゴルの遊牧民族が使うゲル（平べったい円柱状のもの）が一番近いだろうか

その人物はマキアとそっくりな髪型で、同じく赤い色をしている
顔立ちはマキアがそのまま年をとって、顔に皺が増えたらこんな感じなんだろうな、という顔をしている

「親父！戻ったぜ！」

そのままガツンと拳をぶつけ合い（結構マジな音がした）、熱い漢の再会が果たされる

「元気だったか馬鹿息子！そうか元気か！ならいい！」

「はっはっは！馬鹿親父め！まだ何も言っていないぞ！」

「はっはっは！こまけえこたいいんだよ馬鹿息子！一族置いてくよ
うなヤツにはこれくらいで十分だ！」

「はっはっは！確かにそうだな馬鹿親父！いつまでも引きこもって
るようなヤツとはその程度の会話で十分だ！」

「言っじゃないか馬鹿野郎！親父の恐ろしさを教えてやろうか？」

「へっ！引きこもりにやられるほど弱かねえぞクソ野郎が！」

「んだとコラアッ！」

「やるかゴラアッ！……！」

ちなみに親子仲は悪かったようだ

ガルルと獣のような声を漏らし、お互いに睨み合っている
きつと漫画やアニメだったら、二人の間には火花が散っているに違いない

現実には両者の間ではなく、体から火花が出始めているが・・・

二人の馬鹿が言い争っている頃

アリサ達は客人用のテントに通されていた

男女別々のテントを用意されたのだが、特にやることもなかったの
で今は男性側のテントに集まっている

バスカーはもはやダウン寸前だったので、速攻で横になって休んでいるが

ちなみになぜか最初に出会った男女も一緒にいた

「炎鬼族も水を飲むんですね」

「ええ、体が炎になる以外は人間と大差はありませんよ

炎を食べることはできますが、腹が膨れたりはいけませんし、喉も潤
せません

暑さには強いですが、快適な環境にいられるならそちらのほうがい
いんです」

女のほうがそう説明しながら、よく冷えた水の入った水差しをバス
カーの横に置く

「まあ魔法は火しか使えないからな、生活に不便が無いかと聞かれ

れば、不便は多いが・・・」

男がそうつけ加え、アリサのほうを向き直る

「・・・ところで、アリサ殿」

「・・・なに？」

「あなたは・・・」

「おう！戻ったぞ！」

男が何かを言いかけたところで、入り口から勢いよくマキアが入ってきた

どうやら父親と何かあったようで、全身ボロボロだった

「若、おかえりなさいませ」

「おう！親父とは話してきたぜ！」

肉体言語で、ということと言わないが、その場にいる誰もが言わなくとも理解できた

話と聞いた女のほうが、マキアに声をかける

「奥技伝承ですか？」

「おう！明日からさっそくやるからな！
みんなも今日は泊まって行ってくれよ！約束通り美味しい飯は出させるからさ！」

「若、それでは我々は準備のほうをしまいります」

「ああ！頼むよ！

みんなのためにとびっきりのヤツを用意してくれ！」

「かしこまりました、それでは失礼します」

「・・・失礼します」

男女がそう言ってテントを出て行く

完全に二人がテントの外に出たところで、 그레이가マキアに問いかける

「・・・ところでマキア」

「ん？」

「若と呼ばれているようですが、あなたの立場は何なんですか？」

「ん？良い立場って言わなかったっけ？」

「どのくらい良い立場かと聞いているんですが・・・、お父様はどういう立場なんですか？」

「族長」

「そうですか・・・私の質問がわかるか・・・族長！？」

一瞬理解できなかった 그레이가そのまま会話を続けようとしてしまった

族長と言った時点でグレイ以外は驚いたのだが、グレイだけが一瞬遅れるという間抜けっぷりだった

「そうだよ、族長、言わなかったっけ？」

「聞いていませんよ・・・ということはマキアは次期族長というわけですか」

「いや、兄貴と姉貴と弟と妹が二人ずついるから、俺はあんまり関係ないよ、なる気もないし」

「どんだけ兄弟多いんですか・・・」

次々と明らかになるマキアの事情

実はマキアのことをあまり知らなかった一行は、宴会が開かれるまでマキアとずっと話していた

その夜、炎鬼族の宴会が開かれ、マキアの一人前を祝う宴は、盛大に行われた

アリサ達も一緒に楽しみ、それぞれがそれぞれに楽しんだようだったマキアは自分は族長になる気は無い、と言っていたが、どうやらこの集落ではかなり期待されているらしい

その証拠にマキアの周りには常に人がいたし、集落の若い娘達は必死に近づこうとしていた

それを見てアリサ達がニヤニヤとしていたのは言うまでも無いだろう

そんな中で一人、宴会から離れていった人物がいた

「・・・ふう」

茶色の髪が風になびく

火山の麓であるため、灰を含んだ風が吹いているが、不思議なことに集落の近くでは灰が無かった

きつと何かの魔法が作用しているのだろうと思いながら、アレックスは一人、魔法学園がある方角を眺めていた

『アリサさんは消える』

数日前に言われた言葉が、アレックスの頭に浮かぶ

「消える・・・か・・・」

視線を集落に戻し、盛り上がっている宴会場を見る

人の大きさは顔も判別できないほどにしかわからないような距離だがアレックスにとって、その中からアリサを見つけることなど難しくない

きつと彼なら、周りがどんな状況であってもすぐに見つけ出すだろう

「消させない、絶対に」

彼は詳細を語ることは無かった

話せば未来が変わってしまうから、という理由だった

「俺が・・・守る・・・絶対に・・・！」

決意の言葉は、風に乗って消えていった

炎鬼族の掟3

「ではこれより、炎鬼族の掟に従い、最終奥技の伝授を行う」

炎鬼族の集落

その一番奥にあった祭壇のような場所で、マキアとその父である族長が立っていた

祭壇の頂上部分は平らになっており、四隅には火のついた蜀台が置いてある、逆に言えば、それ以外は何も無い
まるで闘技場のようなその場所は、全力で動き回っても余裕があるほどに広い

おそらくは本当に闘技場なのだろう

その場所で行き合う二人を、祭壇を見渡せるように配置された洞窟の横穴があった

一族の者たちはもちろんだが、アリサ達もその横穴から二人を見ていた

「この感じだと、二人は戦うことになるんですかね？」

門番の女性（最初に会った男女の片方、門番だったらしい）に、グレイが尋ねる

「ええ、その通りです
族長となる可能性のあるものは、この儀式によって奥技を会得し、会得できたものだけが族長となる権利が与えられるのです」

奥技伝承

それは単純に技術を伝えるだけの儀式ではなく、権利の獲得という意味も含んでいた

この儀式を経ることでは、族長と認められることは無いのだという

「逆に言えば、他家の者でも奥技を会得できれば族長になることができるんだ

今の時点では族長一家の長男と次男、他家では私ともう一人が会得している」

とはいえ、最近ではマキアの一族が代々族長を務めているので、他家のものが族長になったのは300年以上前だと言う

300年前、と聞いて反応したのは、アレックス一人だけだった
アレックスだけ、ということにもすぐに気づいたので、特に何かを言い出すことはしなかったが・・・

「始まるみたいですわ」

「マキア、一つだけ言っておく」

「なんだよ今更」

「この奥技は、頭を使う必要がある」

「うげっ、まじか」

祭壇のうえで、親子が話しはじめる

「だがそれを教えることはできん
結果が同じでも、過程はそれぞれが己のやり方で見つけるしかない
そのためには、教えてしまふと時間がかかりすぎる」

どうやら奥技会得のためのアドバイスだったようだ
マキアは頭を使うのが非常に苦手なため、このアドバイスもどこまで意味があるかはわからない

「そしてもう一つ

奥技をこの場で会得しない限り、お前は絶対に俺に勝てん」

「へっ！今まで手抜いてたとしてもいいてえのかクソ親父」

「・・・いいな、必ず勝て、必ずだ」

「・・・？」

「行くぞっ！」

次の瞬間、族長の体は炎に包まれる
マキアもそれに合わせて自分の体を炎に変化させた

だが二人の間には、決定的な違いがあった

「親父、なんで炎鬼化しないんだ？」

「自分で理解しろ」

族長は炎こそ纏っているが、炎鬼化していなかった
マキアのように体自体が炎となっている状態ではない
人間の肉体を、炎が包んでいるだけという姿は、炎鬼族の最大の特
徴である炎鬼化ではなかった

「ふんっ！」

族長が動き、一瞬でマキアの目の前に迫り、右手で殴りかかる
本来であれば、炎鬼族同士の戦いというのは一方的に終わる
それは力の強いものが、力の弱いものの炎を吸収し、一方的に吸収
するだけで終わってしまうからだ
その力の差の前には、技術も、魔法も、何も関係ない
ただ炎鬼族としての力が上か下か、それだけしか存在しない

そして本来であれば、マキアの力はこの集落にいる炎鬼族の中では
最強だった

それは父親をも凌ぎ、冒険者として力をつけた現在では、ただのパ
ンチでは傷もつけられないはずだった

「ぐあっ!？」

だが結果として、マキアは殴られた
殴られただけではない

「熱いいい!？なんで燃えたんだよ俺は!？」

燃えた

炎と化しているはずのマキアが燃えたのだ
今は炎と化しているからわからないが、恐らく人間の姿に戻れば火
傷をしているのだろう

冒険者としての癖で、咄嗟に両腕を交差させて防御したが、もろに食らっていたらかなりのダメージになっていただろう

「もう一度だけ言う、自分で理解しろ」

「くそがつ！」

「・・・炎じゃない」

「あら？もう気づいたんですの？」

「そんな馬鹿な、炎鬼族以外であれを理解できるなど・・・」

祭壇を眺める洞窟の一つで、アリサが呟いていた
レディも気づいているようだが、アリサ達で気づいているのはその
二人だけのようだ

その二人に対して、女の門番が驚いている

「どういうことだい？」

アレックスが問いかける

グレイも聞きたいようで、アリサ達のほうを向いていた
バスカーも若干暑さにやられているが、多少は慣れてきたようで、
話を聞く余裕はあるようだ

「・・・あれは、炎を出して燃やしているんじゃない

「燃える」っていう現象を再現した結果、炎が出ている状態」

「現象の再現・・・？」

族長が纏っているのは、「燃える」という現象そのものだった、概念と言ってもいい

燃える、という現象は科学的な言い方をしてしまえば、発熱を伴う激しい化学反応のことを言う

この化学反応の結果、炎というものが出現する

燃えるという結果だけを纏った族長の奥技は、この世界の魔法という神秘も相まって、あらゆる存在を燃やすことが可能になる奥技だった

それは炎そのものと化しているマキアでさえ例外ではない

普通であれば、特にこの世界の文化レベルであれば、炎が先にあってそれに触れたものが燃える、という発想が強い

それゆえに、この場でそれを理解できたアリサとレディは異常と言ってもいい

実際にはグラハルトがこういう知識「だけ」は割りと話していたので、その辺から常識に捉われない発想ができる、という理由が一応あるのだが・・・

「しかしそれでは、マキアが気づく可能性は低いのではないですか？」

グレイの発言は尤もだった

事実、今祭壇の上ではグレイが押されている

族長の動きは、マキアから見れば決して倒せない相手ではないだがそれ以上に、今まで無縁であったはずの火傷や熱さ、といった

現象に戸惑い、恐れを感じているようだ

自らの攻撃でさえも、族長の纏う炎に触れば燃えてしまう、直接殴れば自分のダメージにしかない

相手の攻撃は防御もできないため、避けるしかない

マキアは防戦一方で、反撃の糸口を掴めないでいた

「・・・若なら気づくはずです、あの方は本能で色んなことに気づける方です

奥技の正体に気づかなくても、きっと・・・」

門番の女が、祈るような目でマキアを見つめていた

「若・・・」

男のほうも、マキアをじっと見つめている

この二人は本当にマキアを信頼しているようだった

「・・・がんばれマキア」

珍しく、アリサが小さな声でマキアを応援した

「・・・」

「どうしたマキア！お前の力はこの程度かつ！」

「うるさいな、考え事くらいさせろよクソ親父」

マキアは焦っていた

父親の使う奥技の謎が、全く解けない

火傷なんてまだ炎鬼化がうまくできなかった子供のころ以来だがしかし、冒険者として世界中を巡っていたマキアにとって、父親の動きは対応できないほどじゃない

考える時間はあるが、考えるだけの頭が無かった

攻撃を避け、火の玉をいくつか生み出し、それをぶつけてみたが、元が同じ炎鬼族だ

大した意味がないどころか、敵に塩を送る行為に等しい

何かきつかけが掴めるまで、ひたすら回避に徹するしかない判断していた

しかし炎鬼族とは言っても、所詮は一つの生命体にすぎない疲労は蓄積し、周囲の熱を吸収して体力は回復できても、精神までは回復できない

徐々に攻撃も危ない場面が増えてきている

「・・・どこだっけな、どこかでこんな状況あったよな」

マキアは自分の冒険者時代を思い返す

彼は彼なりに、いくつもの修羅場を経験している

それなりに命の危機もあったし、その全てをなんとか切り抜けてきたマキアはアリサ達のように、頭を使うことはできない

だが、今まで生きてきた経験、それそのものが、彼にとっては大事な財産なのだ

その財産の中で、今回と似たような経験があったことを思い出す

「・・・そうだ、あの時だ

蒼犬を初めて見たあの時だ・・・あんときはどうしたんだっけ・・・

」

思い出し、マキアは足を止める

戦いの最中に足を止めるという、自殺行為にも等しい行動

当然彼の父親は、そんな致命的な隙を見逃すほど甘い人物ではなかった

「戦闘中に！足を止めるとは！この軟弱者があっ！！！」

大振りな一撃

何の変哲もないただの右ストレート

だが今のマキアにとっては、それは致命的な攻撃になるはずだった

バシンツという音がした

マキアが父親のパンチを、片手で受け止めていた

「そうだ、思い出した

あの時はこうやったんだ」

その片手は、もう燃えることはなかった

炎鬼族の掟4（前書き）

この話で炎鬼族の掟編は終了です

少し駆け足でしたが、終わりなのです

あまりギャグができませんでした

物足りないかもしれませんが、本編をどうぞ

炎鬼族の掟4

昔の話

マキアがまだ15歳、冒険者だったころの話

彼はその日、ある依頼を受けていた

冒険者ギルドを通して受注した依頼で、そのころにはすでに知る人ぞ知る冒険者だったマキアに、名指しで指名された依頼だった

もちろんマキアだけではなく、マキア以外にも同レベルかそれ以上の人物達も名指しされていた

ベテランクラスが数名必要になるような、難しい依頼だとは思っていたが、結果は散々なものだった

内容は討伐

それも暴走した炎の精霊を討伐するというもの

特別討伐対象に指定されている存在で、階級が指定されていない最低限の存在だった

もちろん特別討伐対象に指定されている時点で、その強さは通常の魔物とは比べ物にならない

しかしこれだけベテランが揃っていれば、簡単ではないがなんとかなるだろうと思っていた

結果は全滅

炎鬼族という特性があったから、マキアだけは生き残ることができたがこの精霊は特殊な個体であったようで、本体は火そのものであるが、召喚術を使うことができた

呼び出される存在は、リビンググアーマーなどと呼ばれる動く鎧だった

しかも様々な戦闘スタイルを持つ者たちで、騎士風のものや剣士風のもの、槍や弓、魔法を使うタイプまで存在した
その数も多く、まるで小隊並みの数を相手にすることになったのだ
精霊の膨大な魔力量もあって、倒しても倒しても一向に減らない鎧の軍団

さらには魔法タイプは火以外の属性も使ってくるため、マキアだけでは死ぬ可能性のほうが高い

このままではすぐにマキアも死んでしまうだろう、という状況だった
状況が変わったのは、それからすぐだった

死を覚悟し、せめてどうにかして本体に一矢報いようと、突撃を決めた瞬間だった

自分と鎧の軍団、その奥にいる炎の精霊、さらにその向こう側に光が見えた

その光は紅く輝いたかと思うと、唐突に爆発した
爆発は炎の雪崩となり、炎の精霊も、鎧の軍団も、マキア自身さえも飲み込んで全てを焼き尽くしていく

熱い

マキアはそう感じた

炎鬼族である自分が、熱いと感じる

これはヤバい

本能がそう告げた

これに巻き込まれたら自分は死ぬ

理由など何もない、ただそう感じた

今日まで自分を生かし続けてくれた、本能とでも言うべき直感がそ

う告げている

死にたくない

死を覚悟した後であつたというのに、自分の本能はそう感じている
ここで死ぬなんて嫌だ

まだ自分は何も成していない、一人前と認められてさえいない、こ
こで死ぬ自分を、自分自身が一番許せない

なんでもいい、生きられるなら、他の事はどうでもいい
目の前の死という存在に抵抗できるなら、なんでもいいから助けて
ほしい

燃やせ

前のほうから、そんな声が聞こえた気がした

死を、燃やせ

炎の精霊がそう言っているような気がした

目を向けたときには、炎の雪崩は眼前に広がっていた

「そうだ、あの時はこうやったんだ」

父親の奥技を纏った拳を片手で受け止め、マキアは呟く

「そうか、これが奥技だったんだ」

マキアはすでに、自身の体を炎と化している状態ではなかった
目の前の父親と同じく、人間の肉体が炎を纏っている状態になっていた

「燃やす、ただそれだけしか存在しない力、だからこそ強い」

父親は拳を放った体勢のまま、自分の息子を見る
表情こそ変化していないが、その目には驚きの感情が現れている

「・・・理解できたか？」

マキアは父親の目を見て、返事をする

「理解はしていたみたいだ、忘れていただけさ」

「ならば、続きだ」

そう言つて、父親は手を引き、一旦後ろに下がる

「その力で、俺を倒せ、それで終わりだ」

真剣な表情の父親が言つた

その表情は、自信に満ちている

その自信は、自分が勝つことを信じているのでは無いのだろう
目の前にいる息子が、自分に勝つことを信じている、という表情だ
つた

「親父、俺は行くよ」

マキアは拳を握り締め、攻撃の準備をする

「・・・ああ、行つてこい、お前はもう自由だ」

父親は何も構えず、全てを受け入れるように立っていた

「・・・ありがとよ、馬鹿親父・・・」

マキアは思い切り飛び出し、全力で拳を振るう

何の構えもしていない父親に、思い切りその拳をぶつける

父親は、何の抵抗もなく、そのまま吹き飛んだ

「・・・行け、・・・自慢の馬鹿息子・・・」

火は自由だ

そう言えば誰もが首を傾げるだろう

確かに火は、燃える場所が無ければ存在することができない
だが火を掴むことは、誰にもできない

ゆらゆらと揺れるように存在し、何者にも屈することなく、誰もその揺らぎを止めることはできない
遮ることはできる、消すこともできる
だがそれは、支配することが絶対にできない
ただそこに、自由気ままに、自らが出す上昇気流の力によって、ゆらゆらと揺れているだけ
火そのものである炎鬼族、その行動を止めることは、例え親であってもできない

奥技伝承の儀式はこうして終わった

「と、言うわけで！お前にこれをやる！」

場所は変わり、復活した族長とマキアは一家のテントに戻っていた
二人以外は誰もいない
今夜は一人前になれた祝いの宴を開くということになり、全員準備に忙しくしている

二人しかいないテントの中、木製のテーブルの上には酒瓶と二つのガラス製コップ
そして本が一冊置いてあった

「何が」と、言うわけで！「だこのクソ親父、全身火傷してんぞこの野郎」

「お前が未熟なのが悪い！」

「ほおーう、言っじゃないか、もっかいぶっ飛ばすぞ」

「ふはは！・・・まあ今日くらいはやめよう、たまには静かに飲むのもいいだろ？」

「・・・ふん、今日だけだぞ」

族長は酒瓶を傾け、二つのコップに酒を注いでいく

片方をマキアに渡し、自分も手に持つ

どちらからともなく、コップをぶつけ合い、チンツという小気味良い音をたてる

「乾杯」

酒を飲みあい、親子の静かな会話が始まった

「なあ、親父・・・これって」

本のことを聞こうとしたマキアだったが、族長は人差し指をたて、黙るように伝えてきた

「いい酒だろう？俺のとおきだぞ」

さりげなく話題を切り替え、あらかじめ書いておいたのだろう、文字が書いてある紙を渡した

その姿に違和感を感じながら、マキアは文字を読む

「・・・っ！？」

「騒ぐなよ？今日は静かにやりたい気分なんだ」

「親父・・・、そうだな、今日は付き合っぜ」

「・・・すぐに出たほうがいい、あまり長くはいられないんだろう？」

「ああ、そうだな・・・親父も気をつけろよ」

「ふん、それでも族長やってるんだ、そう簡単にはくたばらんさ」

二人の会話は、何かに緊張しているような雰囲気のまま、静かに宴の時まで続いた

マキアが笑いながら泣いていた、族長以外は誰も、その事実を知らない

マキアは手紙の内容を思い出す

『マキアへ

この本は今回のものとは別の奥技が記されている、必ず習得し、誰にもバレないようにすること

必要なときは必ず来る、アリサさんと一緒に行動していれば、その時はわかるはずだ

初代学園長のライアンが復活したようだ、我々は古き盟約に従い、彼の従者達に協力してきた

時期的なことを考えれば、そう遠くないうちに約束が果たされるはずだ

奥技を会得した者ならば大丈夫だが、そうでない者たちは恐らく何の抵抗もできんだろう

今日が最後かもしれんし、10年たっても大丈夫かもしれん

だが、お前は二度とここに来るな、罪は全て俺が受け持つ
それが族長としての、俺の最後の仕事だ

最後に

立派に成長してくれて良かった

お前は、俺の最高の息子だ

誇り高く、最後まで生きてくれ

父より
『

「おい、マキアー！」

宴の会場から、マキアを呼ぶ声が聞こえる

主役がいらないなんてしまらないな、と思いながら、マキアは会場へと歩き出した

受け取った手紙は燃えていた

灰になった手紙は、空へと消えていく

火山から降る灰が、灰となった手紙と混ざって空で踊る

どれが手紙だったのか

それはもう、誰にもわからなくなっていた

炎鬼族の掟4（後書き）

ということで、マキア編は終了です

マキアがただ奥技を獲得した、というだけで終わりなのですが、伏線が出現してしまいました

なんとなく予想がつく方もいらっしゃると思いますが、予想通りの展開だと思います（笑）

今後ともソウケンをよろしくお願いいたします

狼人族の掟1（前書き）

タイトルからわかるとおりには連話です

人物紹介のバスカーの欄を覚えている方ならピンと来るかもしれませんが、バスカー編です

ご都合主義的な展開ですが、ご容赦くださいませ

それでは本編をどうぞ

狼人族の掟1

炎鬼族の集落

そこはもう夜の闇の中だった

あちこちで消えることのない火が灯りとなり、真っ暗というほどではないが、薄暗い夜の光景が広がっている

集落の住人達はあちらこちらに散らばり、何も無い地面の上に倒れている

・・・と言うと、何かの惨事のあとかと思うかもしれないが、そんな悲劇的な状況ではない

宴の後ということで、酔いつぶれた者達が雑魚寝しているだけという、どちらかといえば微笑ましい状況だった

マキアが無事一人前になったことを祝う宴会

それはそれは盛大なものとなり、集落にいた全ての者達が総出で祝った

もちろん客人としてアリサ達も一緒に祝ったのだが、彼女達は地面の上にはいない

用意された客人用のテントの中で、ぐっすりと寝息をたてていた

その集落の状況を、遠くから観察する影がいた

影は複数いるようで、何人かはじっと観察を続けているが、それに話しかけるように時折別の影が近寄り、すぐに離れるという行動を繰り返していた

二つの影が近寄り、会話を始める

「どうだ、何か変化はあったか？」

「今のところは特にありません、今回は退きますか？」

「もう少し様子を見る、胸騒ぎがするんでな」

「胸騒ぎですか・・・」

「ああ、それに万物の才能が来ているんだろう？
何も起こらないほうが不自然な気がするからな」

「そういうものですか」

しかし「彼」が一緒に行動していたのは意外でしたね、あなたの・
」

「待て、何か感じないか」

言われて影は広場に目を向ける

そこには寝ていたはずの男が一人、起き上がってフラフラとしていた
影からはかなりの距離があるはずなのだが、二人は彼の表情まで正
確に捉えている

「・・・表情が怪しいな」

「そうですね・・・、とうとうですか？」

二人が見つめる男性は、表情に生気が無く、虚空を見つめるように
目の焦点が合っていない

どこかに向かうわけでもなく、ただフラフラとその場に立っているだけだ

「全員に戦闘準備をさせろ、今日がその日かもしれん」

「了解しました「ギルデンス」様」

片方の影が音も無く走り去り、周囲にいた影に近寄っていく
それを確認しながら、彼は男の観察を続けた

「バスカー・・・死ぬなよ」

バスカーはふと目覚めた

この集落の夜は意外に冷える
活火山の麓であるから、それなりに気温は高いが昼間ほどではない
動物に近い肉体を持つバスカーにとって、このくらいの温度は一番
動きやすい温度だ

一番実力を発揮できる状態にあつて、彼は精神に余裕ができていた
のであろう

野生の勘が働き、何かが起こったことを感じる
何かが何かはわかっていないが、この感じはきつとよくないことだ
と思い、飛び起きるようにして布団から出る

「みんな、起きろ」

声だけで仲間を起こし、愛用の武器である鎚を手取る

「・・・むぁ・・・なんだよ・・・」

「・・・っ！どうした!？」

マキアはまだ寝ぼけているが、アレックスも不穏な気配を感じ取ったようだ

起き上がりこそゆっくりしたものだだったが、すぐに自分の装備のもとへと近寄る

マキアはだらしく布団に胡坐をかいたままだ
(ちなみにマキアは男だけで飲みたいと言ってこの部屋に来ていた)

バスカーはふと、一人足りないことに気づいた

「おい、グレイはどこいった？」

「いますよ、ここに」

声のしたほうを向くと、グレイはすでに自分の装備を整え、窓際から覗くようにして広場を眺めていた

「・・・山肌に人影が見えますね、数は把握できませんが、最低でも5人」

「5人？この感じはそいつらが原因か？」

「それはわかりません、何か関係はあるでしょうがね」

バスカーも窓際に近寄り、グレイと窓を挟んで反対側から、同じようにして広場を見る

「……住民は？」

「気づいていないようですが、何人が立ち上がってます
……妙な感じですが」

「妙な感じ？」

「見てみなさい」

グレイに言われ、立ち上がっている何人かを見ている
男も女も立ち上がっていてはいるが、ふらふらと揺れるように立っている

全員がどこか生気の抜けたような顔で、何も無い空間を見つめている

「……幻術でもかけられてんのか？」

「そうかもしれませんが、今の時点ではなんとも言えませんね
とにかくアリサ達を起こしましょう、嫌な予感がします」

会話が終わるころにはアレックスとマキアも着替え、いつでも戦えるように準備を終えていた

すぐに出ようとして、テントから出た瞬間だった

ズドンという音が響き、何かが爆発したことを知らせる
爆発した方向は、彼らのすぐ近く、アリサ達が寝ているはずのテントだった

「アリサ！」

アレックスが叫び、燃え盛るテントの中に飛び込もうとする

「落ち着け！二人は無事だ！」

咄嗟にマキアがそれを止め、テントの横のほうを指差す

そこには無傷で、すでに装備に身を包んでいるアリサとレディがいた

「みんな、無事？」

アリサが全員に声をかけ、全員が無事なのを確認する

「どうなってんだ？何があった？」

バスカーがアリサに声をかける

それにアリサは声を出さず、代わりに燃え盛るテントの中を指差した

「・・・なんか怒らせるようなことしたのか？」

「馬鹿言わないでくださいます？マキアならともかく、私達がそんなことするわけないでしょう」

「その割には、ずいぶんおっかねえ顔してんぞあの姉ちゃん」

燃え盛るテントの中には女性がいた

あの門番であった女性が、体の一部を炎と化しながらこちらを見ている

そしてゆっくり、こちらに向かって歩き出した

「アリサが何かを感じて、装備を整えてから彼女を起こしたんですわでも、起きた途端にあんな感じになって・・・」

「・・・どうやら彼女だけじゃないみたいですよ」

グレイは周りを見ながらそう言った

それにつられて全員が周囲に目を向ける

周囲は集落の者達に囲まれていた

全員が体を炎に変化させ、今にも襲い掛かってきそうな気配をしている

そして全員が全員、生気が抜けて、どこか遠い場所を見ているような表情だった

「一体何が起こっているんだ？」

アレックスの問いに答えたのは、意外にもマキアだった

「約束の時が来たのさ」

「マキア？」

アリサがその様子を不思議に思い、声をかける
だがマキアには聞こえていないようだった

「・・・くそっ！」

「マキア！」

マキアは体を炎鬼化させ、飛ぶように跳躍する
飛びながら、全員に声をかけた

「みんなは逃げてくれ！

俺は親父のところに行く！」

「・・・わかった」

返事を終わると同時に、炎鬼族が一斉にアリサ達に襲い掛かってきた

「ちっ！殺すわけにはいかねえなっとお！！」

バスカーが鎚を思いつき振り上げ、地面に叩きつける

雷の力を纏わせず、単純に力だけで行った行為だった

普通なら何の意味もない、せいぜい威嚇程度にしかない行動だが、バスカーはそんな行動をする人物ではなかった

「ブラスト！！」

衝撃波、といってもあまり強いものではなく、攻撃時に発生した風圧と相まって、敵を押し返す技だった

自身の体に遮られるため、前方にしか効果は出ない

しかし扇状に広がるその衝撃波は十分な範囲に広がり、炎鬼族を吹き飛ばす

「行くぜ！」

バスカーが開いた道を、全力で駆け出した

「どうなっただ？何が起こったんだ」

「そんなことわかりませんよ、今はとにかく逃げましょう」

アリサ達は集落を逃げ回り、入り口であった門の近くまで来ていた
殺せないとはいえ、そもそも炎鬼族には物理攻撃があまり意味がない
斬っても突いても炎と化し、すり抜けてしまう
しかしそれでも足を止めることくらいはできるので、あまり遠慮せ
ずに攻撃しながら逃げていた

「ちょっと待て！何か来る！」

アレックスが前方にある門、その向こう側から何人もの人間が来る
のを目撃した

その姿はよく見ると、人間というよりも獣のようだった

「狼人族だど！？なんでこんなところに・・・ってありや？」
ウエアウルフ

「どうしたの？」

「いや・・・知り合いが混ざってるなあと・・・」

バスカーが狼人族の集団を見て、ある人物を見つける
その人物を迷いも無くこちらに向かってきて、声をかけた

「バスカー！無事か！？」

「おう、兄貴こそこんなところで何やってんだよ」

「「兄貴!?」」」

兄と呼ばれた狼人族の男は、その種族名が表す通りの人間だった、いや亜人と言うべきか

薄青の体毛が全身を覆い、首から上はまさに狼、尻尾もあるし、裸足の足と手からは鋭い爪が生えている

「今は説明は後だ、お前たちはすぐに退け!」

「まだ仲間が中にいるんだ!」

アレックスが食い下がるが、狼人族の男はすぐに答える

「大丈夫だ、見ていたから状況はわかっている
安心しろ、見捨てたりはしない、我々は味方だ」

「どういうことだよ?」

「もう一度言う、今は説明している暇が無い、お前たちは退け」

その直後だった

一際大きな爆発が集落の奥から起こる
位置からして恐らくは族長のテント

マキアが向かった場所だった

「マキア!!!」

狼人族の掟1（後書き）

というわけで炎鬼族フラグ回収の話です

少し展開が遅くなるかもしれませんが、お楽しみいただければ幸いです

今後ともソウケンをよろしく願います

狼人族の掟2

「親父・・・」

「・・・マキアか」

炎鬼族の集落、その族長が住む最奥部に近いテント
その場所はすでに焼け落ち、炎をその場所に維持するだけの材料と化していた

そのテントのすぐ傍で、かつて族長だった男とその息子が向かい合っている

「・・・みんなは？」

・・・母さんは・・・兄貴は・・・姉貴は・・・みんなは!？」

「・・・」

マキアの問いかけに族長は無言で答え、ただ首を左右にゆつくりと振るだけだった

「なんでだよ・・・チクシヨウ！」

「なんでよりによって今日なんだよ!？」

マキアの目からは涙が流れ始める

体は地面に膝をつき、両手で支えるように地面に倒れこむ

「マキア・・・」

父親である族長は、ただそれを眺めることしかできない
本来なら彼がいない時に起こるはずであった事態であったが故に、
彼は息子がいた時のことを考えていなかった
息子が、目の前の光景を見ることは無いはずであった

「これじゃあ何のために集落を飛び出したんだ！俺は何のために冒
険者になったんだ！？」

なあ親父！俺は・・・俺は・・・っ！

みんなを殺すために・・・冒険者になったんじゃ・・・無い・・・」

だから族長は、何も言葉をかけることはしない
慰めも、励ましも、今のマキアには気休めにしかない
いやむしろ、気休めにもならないだろう

それほどに今のマキアは、取り乱し、落胆し、絶望という感情を表
に出している

「・・・お前はすぐにここを出ろ

狼人族が迎えに来てくれているはずだ」

「・・・親父・・・イヤだ！親父！俺はみんなを・・・」

「行けっ！」

マキアの言葉を族長は遮る

今は話をしている時間さえもらえないようだ

ザッという地面を踏みしめる音が聞こえた

それは一つではない、二つでも全く足りない、十も超えた数だろう
二人の周辺には、かつては同じ集落の「仲間」だった者たちが困
でいた

今はその全てが、生気を感じられない表情をした「敵」なのだろう
今にも襲いかかりそうな姿勢で、全員が体の一部を炎と化している

「手紙に書いただろう？」

罪は全て、俺が引き受ける」

「親父・・・」

すぐに一人が飛び上がり、全身を炎に変化させながら二人に突っ込
んでいく

それに続くようにして、他の者も次々と同様に突撃を開始した

「行けえ！」

「くそっ！くっそおおおおおおお！！！」

直後、二人は別の行動をとる

マキアはその場から離れ、入口に向かって駆け出す

族長はマキアに伝えた奥技を身にまとい、体に炎を纏う

そして、族長がいた場所は大爆発を起こした

「どういっつたよ！なんで兄貴がここにいんだよ！？」

バスカーが学園へ続く道を走りながら、実の兄に問いかける
兄の姿はバスカーと違い、耳も尻尾もある、体毛さえ存在し、まさに狼人族を示す通り、狼が二足歩行をしているような人物だった

「今はそれを話している暇はない

炎鬼族は強力だ、私もすぐに戻らなくてはならんだろう」

「だったら俺らも・・・」

「それはダメだ」

「舐めてもらっては困りますわ、それでも私たちはそれなりの腕はありますわよ？」

「・・・いや、お兄さんの言う通りだ、我々はこのまま逃げよう」

「グレイ？」

「・・・グレイの言う通りです、僕らは・・・きっと彼らを殺せない」

殺す、という単語を聞いたレイが、ハツとした表情をする
戻る、ということは彼らを殺す、ということに繋がる
きっと自分たちがなんとか殺さないようにしたとしても、狼人族達は殺すのだろう

「・・・そういうことだ、はっきり言って足手まといだ
我々の約束は、彼らの全滅だからな」

それを聞いて、バスカーは走るのをやめた
その顔にはいつもの軽いニヤついた笑顔ではなく、誰も見たことの
無い真剣な怒りの表情だった

「殺す必要があんのかよ？」

バスカーの脳裏によぎる、少し前の光景、一人の少女

バスカーの動きを見て、全員が足を止める
そして全員が、バスカーの怒りを受けた
その表情に、誰もが恐れを感じずにはいられない
普段の仲間であるはずのレディ達ですら、その顔の前に何かを言う
のは踏みとどまってしまっ

だがそれでも、言葉を発するのは、やはりというべきか、彼の兄だ
った

「殺すしか無い」

その言葉に思い浮かぶのは、血の池に倒れる幼い少女の姿

「どうにかして・・・っ!？」

全てを言い終わる前に、空から何かが降ってきた

それは炎の塊

集落に入るときに一度見た光景
一度目と全く同じように、まるで映像を繰り返しているように、二
度目は全く同じ結果を生み出す

前回と違うのが、二人ではなく一人だけだったということだろうか

違いはそれだけではない

生気の抜け落ちたような表情、虚空を見つめる両の目、ゆらゆらと揺れながら動くゆっくりとした歩み

数日前に、凜とした態度でアリサ達を迎えた女性と、同じ人物とはとても思えなかった

「あ、あんたは・・・」

大丈夫か、と聞こうとしてすぐにやめた

なぜなら彼女は、炎と化した腕を思い切り振りぬき、アリサ達に向かって火炎放射機のような攻撃をしてきたからだ

「チッ！」

バスカーが後ろに下がると同時に、間に誰かが割り込んでくる

「フンッ！！！」

その男は全身に炎を纏ってはいるものの、体は人間そのままの状態だった

炎鬼族に伝わる奥技

これを使えるものは、マキアと族長を除いて四人しかいないと聞いている

そう聞かせてくれた本人が、そこに立っていた

つまり、彼女の傍らに立っていたはずの門番の男だった

彼が炎を全て吸収したことにより、炎は誰にも当たらない

「無事ですか？」

「ああ、助かった」

「・・・彼女は私が殺します、ギルデンス殿、ご協力願えませんか？」

「了解した

バスカー、お前達は早く退け」

「待てよ！俺は諦めてねえぞ！？」

途端、何かがバスカーの脇をすり抜けた
あまりに自然に、あまりに緩やかな流れ、空気という抵抗を可能な
限り受け流し、移動したことさえ咄嗟にわからないほどの移動だった
気がつけば、アリサが門番の女性の目の前にいた

「アリサ！？」

「アリサ殿！？」

「おいお前！」

咄嗟に気付いたレディと、前を向いていた門番の男、狼人の男がい
ち早く気づき、声をかける
だがそのころには、すでにアリサは「やるべきこと」を終え、くる
つと振りがえったところだった

「・・・バスカー、ダメよ」

「なんだと・・・何が・・・？」

バスカーはその先を見なくなかった、自分の知っている少女の未来を見るような気がしたから

「・・・彼女は、もう助からない」

次の瞬間、女性は血を噴き出した
胸をエックス字に切られ、体が引き離されるほどではないが、目に見える致命傷を負っていた

「な・・・」

「そうだ、もう殺すしかないんだ

彼女達は、そういう契約を結んでいるんだ」

「なんだよそれ・・・なんで・・・そんなに割り切れんだよ・・・
昨日まで一緒に！飲んでたヤツらじゃねえか！

それしかねえからって！なんでそんなに割り切れんだよ！！！」

バスカーは怒り、今にもアリサにその鎚を振るおうと武器を構える
目の前で倒れた女性と、自分が知っている少女が重なって見えた

「・・・彼女が、それを望んでいたから」

アリサはゆっくりと振りかえり、彼女の死体を通り過ぎ、集落のあった方向へと歩き出す

バスカーはアリサが門番の女を通り過ぎる時、倒れた彼女の顔を見てしまった

「あ……」

アリサの言葉の意味が、それだけでわかってしまった
きっとその場にいた全員が、同じ行動をしたはずだ
そして全員が、同じことに気付いたはずだった

「……ちくしょう……」

バスカーは結局、鎚を振るわなかった

力なくその場に崩れ落ち、現実という非情な存在に打ちひしがれて
いる

きっと彼一人なら、このまま何もできなかっただろう

きっと彼一人なら、このまま逃げだしていただろう

きっと彼一人なら、心が壊れて狂っていただろう

だが彼には、仲間がいた

それは素晴らしいことだ

なぜなら、彼が向かったかもしれないその全ての負の道を、遮って
くれたから

「行こう」

最初に行ったのはアレックスだった

「こうなっては行くしかないですね、全く参りましたねえ」

次はグレイだった、その顔には余裕さえ感じられる

「行きましょうバスカー、私達がやらなくてはなりませんわ」

最後はレディだ、彼女の顔は、真剣そのものだった

バスカーは彼らの言葉に、立ち上がらないという選択肢をとれる男ではない

何より、彼女の顔を見た以上、自分達がやることが、せめてもの救いになると思つて立ち上がる

そう、他の誰かにやらせるわけにはいかない

「・・・ブハハ」

いつもの笑い声、小さく弱いが、バスカー独特の笑い声だった

誰かにやらせるくらいなら、自分の手でやる必要がある

「ブハハ！そうだな！すまねえなお前ら、俺らしくねえとこ見せちまった！」

立ち上がったバスカーは歩き出す

前に向かって、集落に向かって

その背中に、覚悟というとても重い荷物を背負って

「いい仲間だ」

兄がそう声をかける

「だろ？自慢の仲間だ」

にやりといつもの笑顔をして、バスカーは答えた

「行きましょう」

門番の男に促され、全員が集落に向かって駆け出した

駆け出した直後のこと

門番の男は、かつて相手だった女性をチラリと見る

彼女の顔は、満足そうに笑っていた

狼人族の掟3（前書き）

ちよつとご都合主義的な展開に加え、駆け足での説明、さらには後付けっぽくなってしまったバスカーの怒りの理由の説明でございます

説明回なので面白い内容ではありませんが・・・

本編をどうぞ

狼人族の掟3

「兄貴、詳しく聞かせてくれ」

炎鬼族の集落へと続く道を走りながら、バスカーは見た目が全く違う兄に問いかけた

「契約について、だな？」

それに対して、兄と呼ばれた狼が二足歩行したような、青い体毛の男が答える

「我々も聞きたいですね、契約はもちろん、我々が何をすべきかを」

グレイが聞きたい内容を補足する

「少し長い話だ、要点だけ話すぞ」

「頼む」

風のように走りながら、アリサ達は彼の言葉に耳を向ける

かつて炎鬼族は、滅亡の危機にたたされたことがあった

実に現代から数えて300年前

人間に謂れない罪を押し付けられ、一つの国と戦争をしていた
炎鬼族の強力な特殊能力を持って、最初こそ善戦していた

しかし人間達の膨大な数と、炎鬼族が抱える水に弱い（正確には水を被ると炎鬼化できなくなるだけで、水系の攻撃に弱いというわけではない）という決定的な弱点が致命的となり、いつしか炎鬼族はその人数を劇的なまでに減らしたのだという

最後に生き残った人数は、世界中全てに散らばった数を合計しても、2桁を超えることは無かったという

さらに人間からの迫害は消えることなく、炎鬼族というだけで殺され、捕らえられ、隠れるようにひっそりと生きるしかなかった

そんな時代、ライアン・ローレンスが現れた

彼は炎鬼族の者達に救いの手を差し伸べ、世界中の人間達から彼らを守った

ついには炎鬼族の罪を謂れないものである、と確固たる証拠と、その罪の模造を行った者達を世間に公開した
それによって人間達と炎鬼族の仲を取り持ち、やがて炎鬼族が世間に認められるまで尽力したという

当時の炎鬼族の長を務め、現代に残る全ての炎鬼族の祖先となる女性はこの感謝した

感謝してもしきれないほどの感謝として、彼女はライアンとある契約を交わしたのだという

それは彼女達からすれば当然と言えるものであった
彼女達でなくとも、同じような境遇になったものなら必ず同じような内容を言っただであろうという約束

何も返せない者達が、唯一約束できる未来への契約

「あなたが私達を必要としたならば、我々は全力であなたを助けます」

受けた恩を返す

だが今すぐに返せるような何かを持っていない
ならば未来へ

恩に値するほどの何かを手に入れたならば、そのときこそ返すという約束

彼女は当然のごとくそれを約束した

それが間違いであったと、考えることさえ無く

ライアン＝ローレンス

それは万物の才能を持つ存在

その力を持つてすれば、あらゆる計画は成功へと導かれる

彼はこの時、すでに未来への計画を整え、それを実行している途中だった

炎鬼族の滅亡と、自分がそれを救ったという事実
それは彼の計画の一部でしかなかった

未来への約束は、彼の魔法によって明確化された
肉体に魔法を刻み込み、ライアンの呼びかけに答えて必ず実行する
ようにと

ライアンへの従属と、同じ契約をしたもの達への無条件での協力、それが魔法によって明確に刻み込まれる
それは親から子へ、子から孫へと受け継がれ、決して消えることのない呪いとなつて炎鬼族を捕らえた

そして月日は流れる

「なんじゃそりゃ、普通にいいヤツじゃねえか」

話の途中で、バスカーが兄に声をかけた
かけずにいらなかったというのが正しいだろう
なぜならもう炎鬼族の集落は目の前にまで迫ってきているのだから

「最後まで聞け・・・と言いたいが、言ってる暇がないな」

もう数十秒も走れば、門をくぐって集落の中へと入る
そうなれば戦闘が否応無く始まり、会話などしている余裕など無い
だろう

それを察してか、バスカーの兄は速度を緩める

「・・・初代族長の死後、次代の族長がその話に違和感を感じて調べたらしい
その結果・・・」

言いよんだ兄を見て、バスカーが怪訝な表情をする

彼はこういう大事な場面で言いよどむ癖がある、ということを知っている

重要なことをはぐらかす、というよりも、自分が答えを見つけることを望んでいるかのように答えを待つ

そしてこちらが答えを言い当てると、にやりと笑って褒めてくれる昔と変わらない癖だった

だがバスカーには、答えることができなかった
情報が少なすぎる

答えを考えているときに、門番の男がバスカーの代わりに言葉を紡いだ

「騙された、日記にはそう書いてあります」

「騙された？」

「日記には、『騙された、ライアン』ローレンスこそが、我々を滅ぼそうとした元凶だったのだ』

次代の族長が残した日記にはそう記されています」

「それってどういう・・・」

バスカーは最後まで言い切ることができなかった

なぜなら彼らの前に、炎鬼族の者達が立ちはだかり、一斉に炎の球を投げてきたからだ

「ちっ！」

「そのまま走れ！」

回避をしようとしたバスカーに、後ろから声がかかる

アレックスがバスカーの後方から加速して、追い抜くように前に出て行く

愛用の巨大な盾を体の前に構え、そのままさらに加速して走っていく

「我が盾は完全無欠！シールドオブシールド！！」

アレックスの前方に薄い膜が展開され、移動に合わせて前方へと進んでいく

炎の球はぶつかった瞬間に爆発するが、その爆発も完全に遮断する

「アリサ！」

アレックスの後ろからアリサが飛び出し、一瞬で炎鬼族の者達との距離を詰める

甲高い金属音が響き、アリサの剣が鞘から引き抜かれ、振りぬかれたことを伝える

振りぬかれたということは、一人を殺したということ

だがそれに気づいたものは少ない、それほどに自然に剣を振り、人を殺した

「『我々の契約は正に呪いだ、我々は時が来れば、再び人間を相手に争うのだ

ヤツはそのために、我々を救い、自らの配下においたのだ

呪いが効果を発揮すれば、我々にはどうすることもできない、ただ意思の無い人形として、戦い続けるしかなくなる

私は悔しい、ヤツの呪いをどうしようもできない自分が、ヤツの計

画にただ使われるだけの自分が

何より我々と種族の壁を超え、共に歩むと決めた人間と再び争うことが、私には悔しくて仕方が無い』」

目の前で死んだ仲間を見ながら、門番の男は日記の内容を口にする

「『願わくば、我々が人間の敵となる前に滅びを迎えることを祈る』
・・・日記にはそう書かれていました」

周囲に聞こえるように語りながら、門番の男はゆっくりと歩みだした
門の周囲にいる炎鬼族は、そちらに体を向け、炎と化した体で襲い
掛かってくる

「この日記を見た次代の族長が、さらにその次が、そして今の族長
になるまで、様々な対策をしてきました
そして現代にあつて、実を結んだのがたったの3つだけ
その一つが・・・」

門番は体を炎鬼化させず、人間と変わらぬ肉体に炎を纏わせる

「この奥技です」

襲い掛かってきた男の顔を片手で掴み、力を込めて握り締める
掴まれた男は声こそ出さなかったが、苦しそうに体をジタバタと動
かし、なんとか逃れようとする
その奮闘も虚しく、数秒もすると顔が焼け爛れ、ただの人間となっ
た男が現れた

門番は今にも泣き出しそんな顔をして、腕の力を抜き、襲い掛かっ
てきた男を地面に落とす

「燃やす、その力は形があるか無いかさえ無関係に効果を発揮します
呪いでさえも燃やすほどに、強力な奥技なんです」

だからこそ習得できるものは才あるものだけだった

習得し、発動した瞬間に呪いを燃やす

だからこそ、マキアや現族長、そして門番の彼が普通に行っている理由だった

それだけの惨状を生み出したというのに、周りにいた炎鬼族の者達は気にしている様子もない

再び別の人間が飛び上がり、門番へ攻撃をしようとして

「そしてもう一つが」

そして斬られた

体を炎と化すことで、あらゆる物理攻撃を無効化するはずの炎鬼族しかしその体を横に真っ二つにし、人間となんら変わらない死体を生み出したのは、バスカーの兄だった

見ればその手にはいつの間にか大きな剣が握られていた

青白い光を淡く発光するその剣は、明らかに魔力が込められた一品であることがわかる

「我々狼人族との契約だ」

剣についた血を振り払いながら、バスカーの兄はさらに続ける

「バスカーは伝える前に出ていったから知らんと思うがな
150年ほど前から我々はそういう契約を結んでいる

・・・炎鬼族にその時が来たら、彼らを全滅させよ、とな」

アリサとアレックスが二人の場所まで下がり、再び武器を構える

「ブハハ・・・」

バスカーは笑っていた

弱い笑い声だったが、確かにそれは聞こえた

「何でそんなことしたんだか、わかんねえな・・・
ライアンってのは一体何を企んでやがんだよ」

そう言いながら、バスカーは手に持った鎚を構える

その目には、迷いなど浮かんでいないが、別のものが浮かんでいた
薄っすらと、よく見なければわからないほどにほんの少しだけ

涙が浮かんでいた

「許さねえ！ライアンってヤツだけは！ぜってえ許さねえ！！！」

バスカーは手に持った武器で、炎鬼族の集落へと突撃していった

その脳裏に、昨日の出来事を思い浮かべながら・・・

狼人族の掟3（後書き）

本当ならバスカーの理由はマキアの炎鬼族の掟編で入れるべきだったんでしょが・・・内容的に短い文になりそうだったので、後回しにしました

ご都合主義的な展開というか後から考えて付け足したみたいな感じになってしまったのが悔やまれます

こんな感じですが今後ともソウケンをよろしくお願いします

狼人族の掟4（前書き）

注意

この話には残酷な描写が入ります、R18まで行くのかな？R15でいけるだろうか？意外と平気な感じかな？程度ですが入ります
そういった部分が苦手な方は、軽く読む程度にしてください

そういう方も、がつつり読んでやるぜ！な方も本編をどうぞ

狼人族の掟4

「おじちゃん大丈夫？」

開け放たれた窓からそんな声がした

活火山の麓にあるこの集落は暑い

暑さに弱いバスカーは客室用のテントの中で横になっていた

マキアの奥技伝授の儀式まで時間があるため、少しでも涼しい場所で休んでいたのだ

そんな時に、その少女は現れた

見れば赤い髪をした10歳にも満たないであろう少女がいた
マキアと同じ赤い髪を頭のとっぺんで纏め、炎のように真上に向かって
立っている

その髪が少女の顔の動きに合わせて左右に揺れているのが可愛らしい

「あゝ、ダメだ

おりゃあ暑さには弱くってよお・・・

あと俺はおじちゃんじゃねえ、まだ20・・・21歳になったばかりだ」

屈託の無い笑顔をバスカーに向けて、少女は歌うように話す

「21歳」

私はえーつといち、にい、さん、しい・・・8歳！

だからえつとゝいくつ離れてるのかな？」

少女は終始笑顔のままで話し、子供特有の無邪気さを全開にしている
将来は美人というより可愛いと言われそうな、少し丸みを帯びた顔
立ちだった

「13だろ

・・・っつか何のようだ？」

「えっとね！あのね！キラキラを集めてたの！
そしたらね！おじちゃんが見えたの！
みてみて！きれいでしょ？」

「おじちゃん言うな・・・気にしてんだよ」

「きゃー怖いとおー」

きゃっきゃっという擬音が聞こえてきそうな少女の態度

それがバスカーには不思議と心地よく感じられた

思えば子供と触れ合ったことなどどれだけあったんだろうかと思い出
そうとしてみる

そしてそんな記憶が全く無かったことを思い出し、軽く落ち込んで
しまった

つまり、どうすればいいかわからない

しかし少女はそんなことは知らないばかりに、全く物怖じせずに
バスカーに話しかけてくる

「・・・バスカーだ」

「うぬん？」

「俺の名前はバスカー
バスカー」ギルデンスだ・・・
うぬんってなんだよ」

「ばすかーさん！」

まだ日が昇りきっていない午前中
何気ないただの会話

バスカーが覚えている限り、人生で一番穏やかな時間だった・・・

「ぬうあああつしゃあああ！！！！」

巨大な鎚が振るわれ、一人の男を弾き飛ばす
魔法によって水を浴び、炎と化すことができなくなった男がそれを
くらう
骨が折れる嫌な音をたて、地面を転がる男が立ち上がることはな
かった

今の男で五人目

バスカーはすでにそれだけの人数を殺していた
戸惑いはある、躊躇もある、殺さないで済む方法があるなら今すぐ
に飛びつくだろう
だが冒険者として鍛え上げてきた己の肉体は、無関係に全力でその
鎚を振るっていく

語られた過去を思い出しながら、それでも手を止めることはしない

『ライアンはこの世を滅ぼそうとしている』

レディが水の魔法を放ち、広範囲にそれを撒き散らす

『そのためには人数が必要だ、それもとんでもない数だな』

一番近くにいた者に近づき、鎚を振るう

『特に炎鬼族のように強力な種族は、彼にとって好都合だったんだ』

鎚にぶつかった者が吹き飛び、地面を転がりながらぐったりとして動かなくなる

『きっと世界中の色々な種族が、同じようなことをされているはずだ』

「許さねえ・・・」

バスカーの殺気が膨れ上がる

それに惹かれるようにして、周囲の炎鬼族がバスカーに近づいていく

「ぜってえ許さっ!？」

振り返り、その鎚を振り下ろそうとした瞬間
目の前にいた人物を見て動きが止まった

そこに立っていたのは、一人の少女だった

他の者達と同じように、虚ろな目をしてふらふらと歩いている
頭のとっぺんで纏めていた髪はおろされている

だらしないと言えるほどに服は乱れ、ふらふらと歩く少女の姿はまるで浮浪児のように見える

「あ．．．あゝあ．．．？」

バスカーの口から声にならない音が漏れ、それが自分の口から出た音だとさえわからない

「あ．．．あああ．．．うあ．．．」

「バスカーっ！今たすけっ「待て」．．．止めるな 그레이！」

「アレックス、ダメ

．．．あの子はバスカーじゃないとダメ．．．」

動きの止まったバスカーを助けようとしたアレックス
しかしその動きは 그레이 に止められる
アレックスはそれでも向かおうとするが、アリサの言葉に止められ、
やっと動きを止める

「お．．．俺は．．．俺が．．．殺すのか．．．？」

お前は．．．俺が．．．俺が？なんで俺が殺すんだ？

俺は何を．．．何で．．．」

自分を見失いそうになるバスカーだが、それも一瞬だった
少女が口を動かしたからだ、ほんの少し、一瞬だけ、一言だけ．．．

「コ・ロ・シ・テ」

気がつけばバスカーは鎚を振るっていた

全力で振り下ろした一撃

少女の体では、到底耐えられない攻撃

鎚の能力によって、雷を纏い、クレーターを作り出すほどの強力な一撃

鎚の下にははみ出した手だけが彼女がそこにいた証をたてている

血が流れ、水溜りを作り、この鎚を持ち上げればそこには凄惨な死体が一つできているのだろう

「う……あ……ああ……あああゝあゝあゝ！！！！！！」

バスカーは泣いた

誰もそれを止めなかった

彼を守るように、この瞬間を邪魔されないように、ただ誰も近づかないようにするだけだった

「ありがとうおじちゃん」

きつとそれは幻聴

あるいは自分の罪を正当化させるための、バスカーの妄想

だがそれは、門番の女性がそうだったように

周りで倒れている死んだ者達のように

笑顔で死んでいった彼らのように

きつと今の彼女が言葉を出すことができたなら、きつと言ったはずの言葉

バスカーには、その言葉が届いた

「馬鹿野郎・・・だからガキは・・・どうすればいいかわかんねえんだよ・・・」

やがて涙は枯れ、瞳は別の輝きを放ち始める

白目は赤く染まり、目は夜の獣のように金色に見える

ざわざわという音と共に、体に体毛が生え、兄のように狼の姿へと変化していく

「ガルル・・・」

顔が狼の顔に変化し、その口からは獣の唸り声が聞こえてくる

やがて完全に狼人と化し、存在していなかった耳と尻尾が生えてくる

「ウオオオオオーーーーーン!!!!」

完全な狼人^{ウェアウルフ}と化したバスカーが立ち上がる

青い体毛が、パチパチと電気を纏い、それに呼応するようにして鎧が淡く発光しはじめる

「バスカー・・・？」

兄はそれを見て、思わず呻く
過去に起こったそれを思い出し、最悪の事態を想像してしまったために、声をかけずにはいられなかった

バスカーの兄の態度から、一番最初に察したのはグレイだった

「まさか・・・暴走ですか？」

「・・・前はそうだった」

言った瞬間

バスカーはギロリと二人のほうを睨み、殺気を二人にぶつけてくる
とっさに身構え、最悪殺す必要があるかとさえ考えたときだった

「暴走しちゃいねえ」

いつもどおりのバスカーの声だった
顔が変わったせいなのか、ただでさえ低い声がさらに低くなったような気はするが、それでもバスカーの声だった

バスカーはそう言つて、前方を見る

集落の祭壇があつた方向、つまり洞窟の奥

すうつと息を吸い込み、気合を込めて鎚を構える

気合の掛け声と共に鎧を振るい、技の名を言う

「おおおおおりゃあああああ……！ トオオ……ルハアアン
マアアア……！！！」

雷撃が体中から放たれ、それが鎚に吸い込まれていく

鎚は振り下ろされると同時に、その雷を一気に解き放ちバスカアの向く方に飛び出していく

まるで雷が落ちるように、一瞬で全てを焼き尽くしていく

縦ではなく横に落ちる雷

圧倒的なエネルギーが洞窟内を走り回り、全てを終わらせていく

「ブハハハハ！雷撃のバスター！炎鬼族の願い、この俺が受けてやる！」

青い体毛の狼人が一人、泣き顔を誤魔化すようにして高らかに笑っていた

「・・・マキア忘れてるでしょ」

「あゝ」

的確な突っ込みを入れたのは言うまでもなくアリサだった

狼人族の掟4（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます

バスカー覚醒のお話でした

唐突なお話で後付けっぽい内容なのですが、以前からやろうとは思っていたんです、ええそうなんです
思ったよりも炎鬼族の掟編が文字数多くなったので入れなかったんです、はい

文才が欲しい

若干グダグダになりはじめた（前からか？）こんな作者ですが、今後ともソウケンをよろしく願います

狼人族の掟5（前書き）

いつもお読みいただきありがとうございます

この話にてバ斯卡ー編は終わりです

マキア編なのかバスカー編なのかよくわかりませんが、終わりです

若干暗い感じの内容ですが、読んでいただければ幸いです

本編をどうぞ

狼人族の掟5

「よう、生きてたか」

炎鬼族の集落は、朝日と薄く薄い靄に包まれ、柔らかな空気に包まれている

マキアは一人、集落の真ん中に位置する場所、宴のときに大きな焚き火をしていた場所に立っていた
そこに声をかけたのはバスカーだった

「・・・バスカーか」

「・・・おう」

バスカーはマキアへと歩み寄っていき、近くにあった丸太を削って横にした長椅子に腰掛ける

「よっこらせつと・・・」

はあ、こういうところが親父くせーんだろうなあ」

声を出しながら椅子に腰掛けるその姿は、現代日本で言うなら中年親父そのものだろう

世界が変わっても、その動作に対する印象は変わらないようだ

マキアはバスカーの方を向かず、ひたすらに前を向いている
その方向には・・・

「・・・なあバスカー・・・」

「無理に言わんでもいいぞ、お前が一番つれえだろ」

そう言つてバスカーもマキアが見ている場所を見る

そこでは何かを積み上げたものが、音を立てて燃えていた

それはほんの1日前まで、確かに生きていた炎鬼族の亡骸だった

たった一晩で全てが変わってしまった

昨日の夜にはそこで燃えている人たちが、酒を飲み、笑いあい、馬鹿な話をしていた

生きていた、という事実を燃やすようにして、炎はその場で燃え上がっていた

マキアの頬に涙が流れる

視界は霞み、目の前の光景は涙で滲んでよく見えない

彼らが生きていたことさえも、彼には霞んで見えてしまっていたのかもしれない

「・・・俺は・・・知ってたんだ」

振り向かずに、マキアは語り始める

その言葉は重く、切ない

バスカーは無粋な言葉をかけず、ただ黙つて続きを聞く

「・・・俺は、いつかこうなるって知ってたんだ

俺だけじゃない、みんな知ってたんだっ！いつかこんな日が来るって！

ライアンが復活した以上・・・自分達の世代でこうなるって・・・知って・・・知ってた・・・のに・・・っ！」

マキアは膝から崩れ落ち、地面に頭をぶつけるようにして倒れこむ

「なんで！なんでみんな逃げなかったんだよっ！

人形みたいになっても死ぬわけじゃないのに！残ってれば、殺されるってわかってたのに！

俺たちが・・・っ！殺さなきゃいけないって・・・わかってたのに・・・」

地面を殴りつけ、涙ながらに語るマキアの後姿

悲しみと怒り、運命という歯車に抗うことのできなかった悔しさ
その背中では、言葉以上のことを感じさせる背中だった

「う・・・ぐう・・・うああ・・・うあああああああああ！！
」

マキアの涙は、止まることは無かった

「落ち着いたか？」

マキアはバスカーの隣に座り、涙の跡が残る顔で、いまだに燃えている亡骸の山を見つめていた

「少しは」

「俺はさ・・・」

何かを語ろうとするマキアに、バスカーは再び聞く姿勢になる

「俺は・・・こうなるのが嫌だったんだから冒険者になった

世界中を見て、どうにか呪いを解除できる方法を探そうと思ってたんだ

魔法学園もそのためにっていうか、せめて協力してもらえる仲間を見つけられればって思ってたさ・・・」

ははは、と弱く笑うマキア

「結局無駄だった・・・間に合わなかったよ・・・」

とうとう俯き、目の前の光景から目を逸らしてしまうもはや語るのも苦しい、という状態だった

バスカーはそんなマキアと違い、しっかりとした表情で目の前の光景を見続ける

そして今度は、バスカーが語り始めた

「おりゃあよ、ちよつと特殊な生まれでなあ」

集落から逃げるときに見せた、真剣な表情で言葉を語り始める

マキアはその表情を初めて見たせいで、少なからず強張ってしまった

「・・・狼人族ってのは何十年かに一度、俺みてえな特殊なヤツが生まれんだよな

普通は狼人の姿しかならねえんだけど、人間の姿と狼人の姿に自由に变化できるようなやつがな

ついでに何かしらの属性つつーか特殊な魔力みてーなのを持ってて

よ、俺は雷だったけど、過去には火とか水とかいたらしいぜ」

そう言いながらバスカーは腰に下げた道具袋の中に手をいれる
ごそごそと探り、中から一つの小石を取り出した

この集落で、一人の少女からもらった「きらきら」だった

「なんちゅーか・・・そういうのって忌み子らしくってなあ

俺の場合は兄貴が良くしてくれたんだけどもよ、他のやつら・・・
両親でさえ俺のこたひでえ扱いしてたよ

一族の汚点みてーな目で見られてたなあ」

バスカーは小石を目の前に持ち上げ、小石越しに炎の山を見つめた
小石は青色の宝石のような輝きをしている、透明度は高くないが、
僅かに向こう側が透けて見えた

「んなもんで、ガキのころはひでえ思いをしてたぜ

さつさと力つけて、村を飛び出すのもまあ自然の成り行きって感じ
だったわな」

さらに小石を持ち上げ、今度は炎の山ではなく、太陽に向けて同じ
ように透かして見る

「そんでまあ、ある時依頼で近くに寄ったもんだからよ、一応は生
まれ故郷だから遠くから覗いてみたんだけど・・・」

ふつと力を抜き、両手を膝の上に乗せて再び前を向く

「・・・村は・・・無くなってたよ」

その目は炎の山を見ていたが、意識はどこか遠く、ここではないど

こかを見ているようだった

「なんでそうなったかはわかんねえけどよ・・・
そんなときや俺は後悔したもんだ」

「後悔・・・？」

「おうよ、なんで俺は何もしなかったんだろうなってな
おめえみてえに何か目的があって飛び出したわけじゃねえ、俺はただ逃げ出したただけだ
逃げて、逃げて、何もしないで、ただ現実から目を逸らしてただけだった」

ふつと軽く笑ったバスカーは、マキアのほうを向きなおる

「おめえはそうじゃねえだろ？
自分にできることをやろうとした、ちゃんと現実と向き合ってた
知ってんだぜ、お前がこつそり呪い関係の本とか読み漁ってたのくれーよ」

マキアのはつきり言っただけが悪い
文字を完全に習得しているとはいえ、本を読むのは苦手な分野だ
その彼がこつそりと図書館に行っただけ、関係する本を読むというのは
大変な苦勞だった
それを知っていたというバスカーの言葉に、マキアは驚きと感動を
覚える

「そ・・・つか・・・バレてたか・・・」

「こつという理由だとは思わなかったけどなあ・・・」

無言で再び二人は前を見る
死んでいった炎鬼族の亡骸を・・・

「・・・きつと炎鬼族つてのは、誇り高い一族なんだろうな
お前の言う通り、逃げればよかったんだ、何もかも捨てて、逃げ出せば生きられた

それをしなかったのは、多分誇りなんだろうな」

「誇り・・・か」

「『共に歩むと決めた』その言葉通り、共に歩む事を選んだんだ
人間と争ってまで生きるよりも、人間のために死んで、命を持って人間を生かすことを選んだんだ
俺にはできねえよ」

「共に歩む・・・」

「お前のやったこと無駄じゃねえ、結果的に間に合わなかったとしても、それは無駄じゃねえ
だってよ、後ろ見てみる」

「後ろ？」

バスカーに言われ、マキアは後ろを振り返る
振り返った先には、彼が仲間と呼ぶ人物達がいた

「みんな・・・」

「俺たちやパーティーだ、おめえの事情も、悲しみも怒りも、全部

飲み込んでやる

仲間ができたってだけでもよ、おめえの行動は無駄じゃなかったんじゃないかね？」

仲間達が二人の下へと歩き始める
そしてそれぞれが口を開き始めた

「その通りですよマキア
我々との出会いを無駄だとは言わせませんよ」

グレイが最初に口を開く

「そうですわよ、大体あなたの頭は悪いのですから、もう少し頼っていただかないと困りますわ」

絶対に慰めていない言葉をかけるのはレディ

「マキア、行こう

俺たちには、やるべきことができたはずだ」

真面目な表情で語りかけるのはアレックス

そして最後に口を開くのは、やはりアリサだった

「マキア、あなたの口から聞かせて」

あと数歩という位置で全員が立ち止まり、全員がマキアを見つめる

「私たちがすべきことは、一体何？」

「俺たちがすることは・・・」

マキアは言葉を切り、立ち上がる

そして再び、目の前の現実へと体を向け、正面から見据える
炎鬼族の亡骸が燃える山へと

「俺は、ライアンを倒す」

マキアの目は、輝きを取り戻す

振り返り、仲間達を見返すその表情はいつものマキアだった
いや、いつものマキアよりもたくましい、強さを感じさせる表情だ
った

「だから、みんな手伝ってくれ」

隣にいたバスカーが勢いよく立ち上がり、背負っていた鎧を頭上に
掲げる

「ブハハハハ！当たり前だ馬鹿野郎！」

「ふっ」

「ふふふ」

「あはは」

「行こう、マキア」

「ああ・・・行こう！」

炎の山に背を向け、マキアは歩き出した

その歩みは力強く、確かな一歩だった

狼人族の掟5（後書き）

お読みいただきありがとうございます

マキア編じゃねこれ？って感じのバスカー編が終了でございます

バスカーのフラグ回収しきれませんでしたけど、まあなんとなく伝わったのではないのでしょうか？

もちろん学園に入学することになった経緯などは今後描いていきますので、ご安心ください

フラグを回収しきれない作者ですが、今後ともソウケンをよろしく願います

事実と協力（前書き）

いつもお読みいただきありがとうございます

今回のお話は説明回というか補足みたいな内容になっています

内容が薄いのであまり面白い内容ではありませんが、読んでいただければ幸いです

本編をどうぞ

事実と協力

魔法学園の一室

いつもの校長室には、いつも通りの偉い人が座りそうな椅子
その椅子にいつも通り座り、いつも通り偉そうな服を着ている人物
がいた

ファルケンこと、現学園長その人である

いつもと違うのは、その場にファルケン以外の人物がいたことであ
ろうか

もちろん教師ではないし、以前お茶を入れてくれたライラという名
の女性教師でもない

炎鬼族を束ねる族長、いや族長であつたというのが正しい人物であ
つた

「なるほどな、そんなことになっておつたとは」

「済まない、我々から話すことはできなかった事情を理解してもら
えと助かる」

「わかつておるとも、そんな呪いであるならば一族を人質に取られ
ているも同然じゃつたろうしのう」

「助かる」

二人は炎鬼族の集落で起こったことを話し合っていたようだった

アリサ達はあの後すぐに学園に戻った

もちろん族長達も一緒にだ

学園に戻ってすぐに学園長に今回の出来事を報告し、休むために解散している

今頃は自分たちの部屋で寝ていることだろう

今更だがこの学園は全寮制なので、全員が学園内にいるはずだ

族長だけが詳しく話しをしたいということで、こつやつて学園長と話をしている

「辛かったと思う、そしてそこまでの覚悟を持って人間に尽くしてくれたこと

ワシ一人では足らんだろうが、礼を言わせていただこうかの
ありがとう」

「・・・十分さ、いつかはこうなっていたんだ
それだけでも十分、我々は救われるよ」

しんみりとした空気が包む

しかしそれだけで会話を終わらせるために、わざわざ二人になったわけではなかった

「確認させていただくが、今生き残っている者達は平気なんじゃない？
」

「ああ、奥技を習得している者達は呪いに縛られていないから大丈夫だ

とはいえ炎鬼族も我々の集落にいたものが全てでは無い、どこか別

の場所に炎鬼族の集落があったかもしれないから、そこまで大丈夫かどうかはわからん」

「いや、それだけわかれば十分じゃろう

少なくともお主らに関しては学園が責任を持とう、安心してもらって大丈夫じゃ」

「すまない、助かる」

現在学園に來ている炎鬼族はマキアと族長を含めて五人

全員奥技を習得し、呪いの束縛を焼き尽くした者達ばかりだ

奥技を習得している人間は合計で六人いたのだが、一人が運悪く命を落としている

「それで確認したいことが他にもあるんじやが、いいかろう？」

「ああ、聞きたいことはわかってるつもりだ」

そうか、と返して学園長はお茶を一口飲む

少し間をおいてから、学園町はゆっくりと話し始めた

「去年の入学試験の時、この国が魔族に包囲されるという事件があったんじやが・・・知っておるじやろう？」

「・・・ああ、我々が手引きをしたからな」

少し考えれば、あの事件はおかしかった

学園を抱える国があるこの都市は、世界中で比較すれば大きい方ではない

とは言ってもただでさえ広大な面積の学園を内包する都市である以

上、その面積は決して狭くは無い

固体能力が高く、人間よりも明らかに少ない人数で包囲を可能とする魔族であったとしても、その数は十人や二十人で済むほど簡単ではないのだ

しかしそれなりの人数が動員されたにしては、あまりにも突然出現したようにしか感じられないほどに魔族は現れた

魔族であっても腹は減るし、睡眠をとる必要だってある、なんなら性欲だってある

そういった準備は多少はしてあったであろうが、それだけの人数を動かすためにはどうにかして調達する必要がある

しかし魔族という種族は忌み嫌われるものがほとんどであり、人間達が彼らに食料や休憩場所を提供するとは考えにくい

目立って何かをしたわけでも、長時間いたわけでも無いが、どこから最低でも食料は調達していないと不可能だと思える内容だったのだ

それを支援していたのが、炎鬼族だった

「魔族も呪いを受けている、ということか？」

「間違いないだろうな、炎鬼族に服従の命令を出せるくらいの権限は与えられていたようだ」

「・・・ふむ、厄介じゃのお、お主は大丈夫だったのか？」

「呪いを消せていることがバレるのはまずかったからな、目的もわかっていたから従順なフリはしたが、実際には何の影響もない」

「そうか、なら他の者も大丈夫そうじゃな」

うむ、と族長が答える

それに大して学園長はさらに質問を続けた

「もう一つ、魔族はどうやって移動したんじゃ？」

我々から見ると突然現れて、突然消えたようにしか見えんのじゃが」

「移動用の魔法陣があった、事が起こったときに最初に潰しておいたから今は使えんがな」

「なるほどのう・・・実用に耐えうるものが存在しておることのほ
うが驚きじゃな」

この世界において、移動魔法というのは学園長が言った言葉の通り、
ほとんど実用化されていない
というのも、この世界の魔法、厳密に言うなら魔力というものは、
ある種の物質であるとされている

魔力自体が何かに変化することはできても、魔力を使って別の場所
に瞬間移動ということは不可能だとされている

瞬間移動に見えるほどの高速移動や、一時的に自分の分身のような
ものを作り出すことはできるが、完全な瞬間移動というのは実用化
されていない

一応あることにはある、それが空間魔法「アーカイフ倉庫」に代表されるよう
な空間魔法だ

しかしこれは命あるものは入ることができないし、厳密に瞬間移動
という原理を使っているわけではない、使い手も少ないので研究も
進んでいない

例外中の例外として、以前にグラハルトが一度だけ使った魔法が、
まさにその瞬間移動の魔法だった

しかし現代において、その魔法はすでに失伝魔法となっており、グラハルト以外で使える人間は存在しない
ちなみにグラハルトはその事実を知らないが、使い方がめんどくさいと思っているので滅多に使わない

「最後に一つだけ聞かせてほしい、目的はなんじゃったんじゃ？」

魔族はあの時、まるで森に行けと言うように、その方向にだけ誰もいない配置をしていた

その方向に罠を張っている、というのなら納得もできるが、結果として何も無かったことが（あるにはあったが魔族との関係が薄い）学園長には腑に落ちなかった

「アリサさんだ、彼女を対象にするのが目的だったらしい」

「対象というのは？」

「ライオンが復活するためには、強力な力を持った存在に初代の遺産を持たせる必要があった

彼女がそれだけの力を持っている、ということがわかれば、遺産は自然とアリサさんの下へ来る

結果的には蒼犬というアリサさんより強力な存在が現れて、しかも墓石を通して蒼犬が選定されたのですぐに退いたようだがな

もし蒼犬が行っていなかったら、もし墓石にアリサさんが触れていなかったら、魔族が遺産を持って侵攻していただろう」

つまり結果だけを見れば、グラハルトがあの時魔族への牽制という意味であった門の警備という役割を無視して、森の中へ向かっていったのは正解だったということだ

もちろん学園と都市にとって、という意味であって、長期的な意味

では失敗だったのかもしれないが

彼が「正義が鎧を着ている」と呼ばれる理由がつくづくわかるような事の推移だったようだ

「・・・なぜあのタイミングだったんじゃない？」

「悪魔ほどではないが、魔族も万物の才能には干渉できない、できないというほどではないが、邪魔が入るんだ
もつと以前、それこそアリサさんと蒼犬が共に旅をしていたときは、完全にと言っていないほど干渉できなかっただろうな」

「ふむ？あのタイミングならそれが可能であつたと？」

「万物の才能に干渉できるのは、人間と、万物の才能に認められた存在だけだ

さらに言えばあの時なら多くの人間が集まる、悪魔ならともかく、そういう状況なら魔族としては干渉しやすくなるんだ
ついでに言えば、万物の才能など関係なく、単純に人間を殺したいというようなヤツらも多くいただろうな
万物の才能を直接の目的にしていなければ、その効果も限りなく低下する」

「なるほどのう・・・最初からアリサを狙っておったということか」

「アリサさんに限らず、歴代の万物の才能がそうだったさ
今回がたまたま都合だったただけだ」

ふむ、と一息つくようにして、学園長は再びお茶を飲む
お茶はもう冷めているようで、飲んだあとで少し残念そうな顔をし

ていた

「なるほどのう・・・

ということはこの学園もそろそろなのかのう・・・」

「我々がこうなった以上、遠からずライアンは本格的に動き出すはずだ

この学園がどういう事態に陥るかは、あなたのほうがわかっているでしょう？」

「うむ・・・」

学園長は椅子を回し、背後の壁にある窓から外を眺める

外はすでに赤く染まり、夕暮れ時のようだった

黄金色に輝く太陽と雲が流れる空は、どこか哀愁を感じさせた

「協力してもらえると助かるのう」

「恩もある、謝罪の意味もある、どんなことでもやらせてもらつた」

「そうか、よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしく頼む」

二人は窓の外に流れる雲を見つめ、黄昏の時を見つけた

事実と協力（後書き）

というわけで、入学試験時の不自然な部分の説明でした

地理的な描写がほとんど無いので、あまりイメージがわからないかと思いますがこんな理由があっただんですよという補足です

学園の伏線が少し出ましたが、ライアンが創立したものである以上無関係であるはずが無いのは読者の皆様ならわかっていただかたと思います

なので補足と確認程度の意味のお話でした

今後ともソウケンをよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0865w/>

ソウケンと呼ばれた親子

2011年10月30日00時37分発行